STEREO GENERATION ステレオ時代特別編集

NEKO MOOK 2646

カセットテープ
コンプリートブック
CASSETTE TAPE COMPLETE BOOK

僕らの青春はカセットテープとともにあった!



SONY walkman
179models

AIWA Cassette Boy
173models

National GO&Way&Jump
147models

カセットプレーヤー御三家
全499モデルを一挙紹介!!



国産メタルの元祖にして頂点
伝説のカセットTDK MA-Rの秘密



カセットテープ年鑑
1971~1993年
カセットが主役だった時代に登場した主要モデルのすべて



NEKO MOOK 2646

STEREO GENERATION ステレオ時代 特別編集

カセットテープ
コンプリートブック
CASSETTE TAPE COMPLETE BOOK

コンテンツには過去に発行した『ステレオ時代』の記事を
増補改訂あるいは再編集したものが含まれます。

CONTENTS

PART.1 カセットテープ編 ……009

カセットテープ年鑑 1971~1993 ……010

TDKブランドストーリー ……052
D/SD/AD/AD-S/DS/SA/AR/SF/SR
MA-Rはいかにして誕生したのか ……056
1979 TDK MA-R
TDKカセットテープ年表 ……062

SONYブランドストーリー ……064
AHF/BHF/CHF/HF-ES/HF-S/HF/DUAD/HF-PRO/
UX-PRO/METALLIC/METAL-XR
リーディングメーカーとしてのプライド ……068
1993 Super Metal Master
SONYカセットテープ年表 ……072

maxellブランドストーリー ……076
UD/UDⅡ
遅れてきたフラッグシップ ……080
1989 maxell Metal Vertex
maxellカセットテープ年表 ……082

FUJI/AXIAブランドストーリー ……084
HD-Master/SD-Master/XD-Master/GT-Ⅰ/GT-Ⅱ
青春という名のカセットテープ ……086
1985 AXIA PS-Ⅰ&PS-Ⅱ
FUJI/AXIAカセットテープ年表 ……090

COLUMBIA/DENONブランドストーリー ……092
RD/RD-Z/RD-X/HD/HD-S/HD-X
COLUMBIA/DENONカセットテープ年表 ……094

That'sブランドストーリー ……096
EVE series/OW series
マエストロの音 ……098
1985 That's SUONO

その他のブランド
Scotch/National/Victor/Konica

『懐かしのカセットテープ博物館』訪問記 ……104

PART.2 ヘッドフォンステレオ編 ……115

ヘッドフォンステレオ進化論 ……116
凝縮が産んだ銘機 1984 SONY WM-D6C ……118
ウォークマン伝説 1979~2003 ……124
カセットボーイ物語 1980~2003 ……154
ナショナル ヘッドフォンステレオ史 1981~2005 ……172

SPECIAL
『まえがき』に代えて——
特別対談:生島昇×牧野茂雄 ……004
生録に出かけよう!
カセットテープの実力、いまだ色褪せず ……108



発行所:株式会社ネコ・パブリッシング
〒153-8545
東京都目黒区下目黒2-23-18 目黒山手通ビル
Phone:04-2944-4071 [カスタマーセンター]
Phone:03-6685-7832 [編集部]
印刷:中央精版印刷株式会社
Printed in Japan
本誌記事の無断転載・複写(コピー)を禁じます。
乱丁、落丁がございましたら、
上記カスタマーセンターまで
ご連絡下さるようお願い致します。
©2017 NEKO PUBLISHING CO.,LTD.
ネコ・パブリッシング・ホームページ
URL http://www.neko.co.jp/



ナローレンジで何が悪い。
音楽は数字では語れない。

ディスクユニオン
Jazz TOKYO店長
生島 昇

×

『ステレオ時代』
スペシャルアドバイザー
牧野茂雄

カセットテープが消滅しないのはなぜか
高解像度デジタル音源全盛のこの時代なのに
かつてのオーディオマニアや音楽ファンだけでなく
若い世代にもカセット支持層が広がっている
この現象を、本誌論客（?）のふたりが語った

写真と構成・牧野茂雄





牧野：生島さんが店長をされているディスクユニオンJazz TOKYOではカセットのミュージックテープを販売されていますね。私も定期的に物色に行くのですが、ミュージックテープという存在自体がすでにもう過去のものであって、新品が販売されているということ自体が驚きなのですよ。

生島：アメリカに発注しているのですが、取引先のディーラーには「本当にカセットでいいのか」と尋ねられました。「カセットだぞ、テープだぞ」と。それが最近はカセットの注文が多いらしく卸値がずいぶん上がりました。その代わりジャズ、ロック、ポップス系の名盤が入荷します。きちんとしたミュージックテープです。

牧野：どんな方が買って行かれますか？　私のようなオッサン？

生島：いや、それがですね、けっこう若い方が多くなりました。新譜CDを発売するときにカセットも同時リリースというアーティストがいるくらいですからね。

牧野：ネットオークションでも近年はカセットデッキとラジカセと、昔のカセットの生テープが人気です。落札価格は超バブルと呼べるレベルで、本誌の澤村編集長は撮影用のカセットを買い集めるのにとても苦労しています。

生島：えッ？　買っているの？

牧野：私と澤村編集長が持っていないパッケージデザインのカセットは極力買い集めますよ。中には50本くらいのセットで20万円なんていう落札価格のときもあります。まあ、カセットの生テープを欲しがる人は世の中のほんの一部だと思うますが、以前『ステレオ時代』でオリジナルカセットを作って通販でだけ販売したことがありますが、8分で売り切れました。日立マクセルが昔のパッケージデザインでUDを限定発売したときも、6万本があっという間に売れたようです。

生島：一部には確実に需要があるのですよ。日本ではいまや、ノーマルポジション（タイプ1）のテープをマクセルが販売しているだけですから、ハイポジション（タイプ2）やメタルテープ（タイプ4）は市中在庫を漁るしかないです。それでもまあ、最近の高値は行き過ぎだなと思います。

牧野：私も生島さんも昔からカセットの音に慣れ親しんできた世代ですから、手持ちのテープが残っていてカセットデッキも稼働状態にあるわけですが、いまの時代にわざわざ再生機を手に入れて、カセットを始めようという方がいるというのは、理屈では説明できません。

生島：カセットの音はけっしてハイ



ファイではないのですが、何と言うかハイファイを超えたところにいると思います。たとえば、ジャズのSP盤は周波数特性で言うとせいぜい10kHzあたりまでしか入っていませんが、べつに高域が寂しいとは思わない。再生音は数値的な特性だけで決まるのではありません。

牧野：ラジカセはハイポジテープを使って高域はせいぜい13kHzです。10k以上はダラ下がりです。低域は80Hz。そんなナローレンジでも「ああ、いいなぁ」と思います。

生島：歪みだって、カセットにはたっぷり入っています（笑）。雑味がスパイスなのだと思いますね。

牧野：某大手オーディオメーカーで設計部門の責任者だった方がこう言っていました。「歪みを取り去って電気的特性を攻めて行くとだんだん音がつまらなくなる。外には絶対言わなかったけれど、イイ音とは結局、



歪みが適度に混ざった音だ」と。

生島：カセットは音の『揺れ』もなぜか心地良いのですよ。自宅に友人を呼んでレコードを聴き、ついでにラジカセでカセットテープをかけるのですが、こっちのほうがいいね、という音源とかシチュエーションが必ずあります。

牧野：ほぉ！　生島さんはＪＢＬのパラゴンを使ってますよね？　パラゴンよりラジカセのほうがいい！

生島：そういうときもあります。理屈じゃないんですよ。

牧野：同感です。カセットテープの音には、何か不思議な粉がまぶされているように思うのですよ。その粉をまぶして油でカラッと揚げると、体には悪いかもしれないけれど美味い味になるような……。

生島：昔の輸入レコード盤の、パックされたビニールを破ったときにフワッと感じる化学薬品の匂いみたいなもんですね（笑）。あの匂いで気分はもう海外の録音スタジオにトリップしてしまう。

牧野：ハイレゾを否定する気はないのですが、サンプリング周波数をどんどん上げて行って、高域限界が１００ｋＨｚになったところで、もうじき60歳の私には所詮聞こえませんしね（笑）。スピーカーからはかなり高い周波数の音が出ていて、それがあるとないのとではムードががらっと変わることは知っています。しかし、もともとが12～13ｋＨｚ止まりのカセットテープは、音楽の骨格部分だけ聴かせて、音は少々揺れていて雑味もたっぷりで、それがハイレゾ音源のドーピングエキスとは違った味にしてくれる（笑）。

生島：気持ちよければいいじゃないですか。しかし、カセットの限界性能は相当に高いこともたしかです。

牧野：生島さんはナカミチの銘機ドラゴンをお使いですね。私もナカミチやスチューダーといったハイエンドレコード再生を詰めに詰めてコンディションのいいときにコピーしたカセットテープを聞くと、ゾクッとするほど音がいい。

生島：とくにアナログ録音の音源がいいですね。デジタル／アナログの変換プロセスを経ていないレコード盤にはカセットがベストマッチ。

牧野：デジタルプロセスを経たアナログ盤には昔の盤とは違った驚きがあるのですが、カセットで録るとなぜか感動が薄れます。こういうところがオーディオの不思議なところです。だからやめられない。

生島：楽しいからやめない。カセットはその最右翼だと思います。









生島昇氏（右）と私・牧野（左）は衛星デジタルラジオ『ミュージックバード』で『あのころをプレイバック。温故知新オーディオ歴史館』という番組を担当中。本誌・澤村信編集長が歴史館理事長、牧野が歴史館館長、生島氏が首席学芸員という役柄です。ラジカセをスタジオに持ち込んで音を出したり、カセットの生録テープをオンエアしたり、古い機材が主役です。この対談もスタジオ内で収録の合間に行いました。まあ、いつもこんな話をしています。

カセットテープ

年鑑



1971~1993

1964年にフィリップスが発表した『コンパクトカセット』。当時オープンテープを手軽に使えるサイズとカタチにしようという動きは世界中の電機メーカーが取り組んでいたのだが、規格の無償公開という戦略もあって、『コンパクトカセット』いわゆるカセットテープがデファクトスタンダードとなっていった。しかし当初カセットは音声などメモ録を主用途としたものだった。それを音楽用途に耐えるいわゆる『ハイファイ』に進化させたのは日本の電機メーカーとテープメーカーの努力の賜物だった。ここでは日本で手に入ったカセットの歴史を1年毎に振り返って行きたいと思う。なお1971年から1993年に区切ったのは、カセットが音楽録音の主要メディアだった時代として、各オーディオ誌にも頻繁に取り上げられていた時期だったためで、もちろん1994年以後もカセットは使われ続けたが、こと日本では録音メディアの主役はMD（ミニディスク）に取って代わられていった。

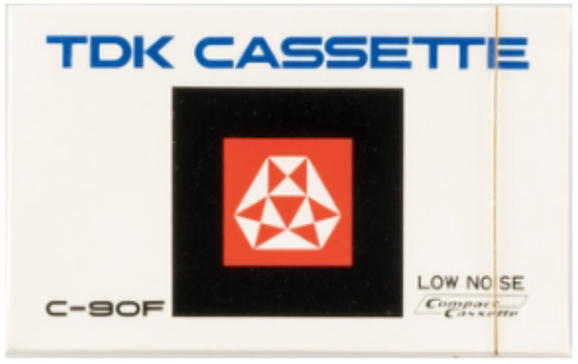
協力:『懐かしのカセットテープ博物館』館長・加藤邦裕
（http://compactcassettes.jp/）

1971 カセットが音楽録音に普通に使えるようになった時代

オープンリールの時代のマニアがもっとも困ったのは、演奏途中で聴くのを止めるのが面倒だということだったという。途中で止めたいときにはひとつのリールにテープを全部巻いてしまうまで片付けることもできない。ところがカートリッジ式であれば途中であってもデッキから取り出すのは容易だ。このように登場当初は簡便性のみがクローズアップされ、録音方式もモノラルが主流だったカセットテープ。そのカセットが音楽用のメディアと認められるようになったのは、ステレオデッキの登場と1968年に誕生した音楽専用テープTDK・SDの功績によるところが大きいだろう。1970年代になるとオーディオ各誌でもカセットテープを取り上げるようになり、1971年各社からクロム（ハイ）ポジションテープが発売されるに至り、音楽用メディアとしての地位を確立した。なお当時は『スタンダード』が基準、『ローノイズ』が高性能、その上位が『ハイファイ』あるいは『LH』とされた。



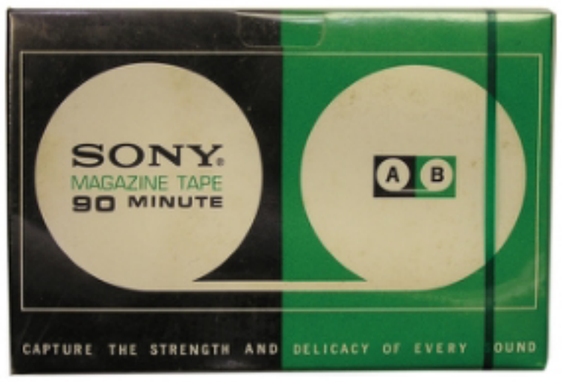
Scotch　271（紙ケース）
（1969年発売）



TDK　F
（1969年発売）



TDK　SD
（1971年発売）



ソニー　MAGAZINE TAPE
（1968年発売）



AGFA　HiFi LOW NOISE
（1970年発売）



BASF　LN（ラウンドパック）
（1970年発売）



PHILIPS　C
（1971年発売）



日立マクセル　C
（1967年発売）



日本コロムビア
TRK
（1969年発売）



ナショナル　RT-A
（1969年発売）



BASF
Chromdioxid
（1971年発売）



ソニー
CHROMI CASSETTE
（1971年発売）

1971年に販売されていたカセットテープ　（単位:円）

NORMAL		30分	60分	90分	120分
AGFA	C		720	1050	1420
	HiFi LOW NOISE		800	1160	1570
BASF	LN（ラウンドパック）		600	875	1200
	LN（スナップパック）		700	1000	1350
	LN（パーマパック）		720	1050	1420
PHILIPS	C		500	800	1200
アイワ	C		700	1000	
三洋電機	C		700	1000	
スタンダード	カセットテープ		700		
スコッチ	271（紙ケース）		500		
	271（プラケース）		650		
	HIGH ENERGY		750	1200	
ソニー	MAGAZINE TAPE		525	825	
	C	330	700	1000	
	Hi-Fi		700	1100	1400
TDK	F	300	500	800	
	LOW-NOISE		700	1000	1300
	SD		850		
日本コロムビア	TRK607		500		
	TRK301	330			
	TRK602		700		
日本ビクター	SH		550	850	
日立マクセル	C-C		500	800	
	C	330	700	1000	1300
富士写真フイルム	C（紙ケース）	330	500		
	C（プラケース）	350			
	FM（紙ケース）		500	800	1100
	FM（プラケース）		550	850	1200
ナショナル	RT-A		500	800	
	C		700	1000	
HIGH		30分	60分	90分	120分
BASF	Chromdioxid		900	1350	1700
ソニー	CHROMI CASSETTE		900	1350	
日立マクセル	CHROME DIOXIDE		900	1350	

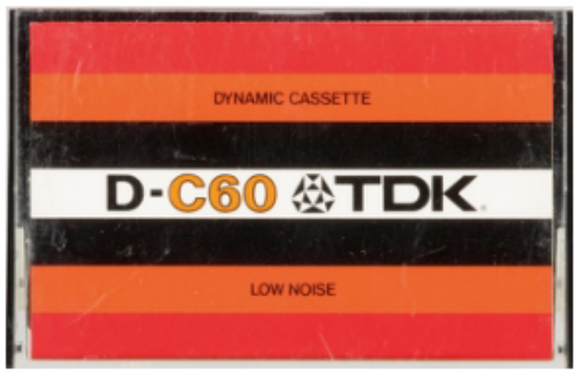
1972 その後のスタンダードとなるHF、D、UDが誕生



I ソニー　HF
（写真は初期モデルです）



I 日立マクセル　UD



I TDK　D



I TDK　SD

TDKはそれまで単に『カセットテープ』あるいは『ローノイズ』としていたスタンダードモデルを新たに『D』として製品化。その後の国産テープの基準となるモデルとなる。同時にストライプパターンのレーベル（兼パッケージ）をSD、KRなどと色違いで展開。TDKブランドのイメージ戦略をスタートさせる。

一方ライバルのソニーはHF（発売当初は『Hi-Fi』）を発売。音楽専用テープとしてSDにぶつける。さらに日立マクセルからはUD（Ultra Dynamic）が登場し、国産御三家の音楽専用テープが出揃ったカタチになった。

御三家に次ぐ富士フイルムもカセットテープに本腰を入れ始める。スタンダードなFLに加え、音楽専用のFMを投入し、パッケージも一新していった。

またこの年は国産メーカーから相次いでクロムテープが登場。TDKからKR、マクセルからCR、富士写真フイルムからはFCが発売され、日本ビクター（後述）、テクニクス（松下電器）からもクロムテープが発売されている。

一方、業務用テープの老舗の日本コロムビアはこれまでオープンリールのTRKをカセット化する商品展開だったが、『MASTER SONIC』シリーズを発売し、一般用にも注力するスタンスを強く打ち出した。

1968年からカセットを作っていた日本ビクターもラインナップを一新し、スタンダードテープとクロムテープを発売。オーディオ御三家の一角であるパイオニアもカセットに参入。アメリカの老舗メモレックスの日本総代理店として日本向けモデルを発売している。

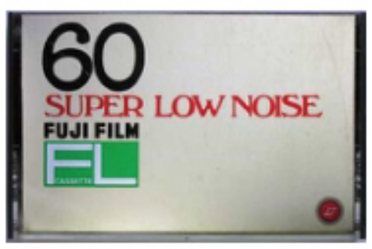
このように1972年その後の国産カセットの発展の礎となるような年であり、各メーカーが手探りながらカセットの開発に本腰を入れ始めた時期にあたるといえるだろう。もっともこの時期はまだ海外勢の力が強かったようで、商品展開も豊富だった。



I 日本コロムビア
MASTER SONIC



I 日立マクセル　LN



I 富士写真フイルム
FL



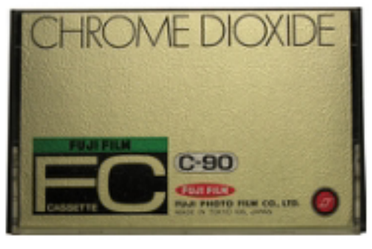
I 富士写真フイルム
FM（プラケース）



II TDK　KR



II 日立マクセル　CR



II 富士写真フイルム
FC



I 日本ビクター　S

1972年に発売されたカセットテープ　（単位:円）

NORMAL		30分	60分	90分	120分
MEMOREX	LH	420	730	1100	1450
アカイ	LN		700	1100	1400
三洋電機	FS		500	800	
ソニー	C（紙ケース）	250	350	600	850
	C（プラケース）	300	400	650	900
	HF		700	1100	1400
TDK	D	300	400	700	900
	SD		550	850	1200
東芝	H		850		
日本コロムビア	MS		700	1000	1300
日本ビクター	S	300	400	650	
日立マクセル	LN	300	400	650	900
	UD		550	850	1200
富士写真フイルム	FL	300	400	650	900
HIGH		30分	60分	90分	120分
MEMOREX	Chromium dioxide		950	1400	
TDK	KR		800	1250	1700
テクニクス	CHROME（RT-C）		900	1350	
日本ビクター	CHROME DIOXIDE		900		
日立マクセル	CR		900	1350	
富士写真フイルム	FC		900	1350	1700

1973 タイプⅢ、フェリクロームの『デュアド』が登場

新規参入のメーカーが相次いだ。アカイ、三洋、シャープ、ダイヤトーン（三菱）、東芝といった家電・オーディオメーカーが続々新製品を発表。OEMも多かったと思われるが、自社製のレコーダーを持つメーカーはカセットもラインナップした。

またソニーがパッケージデザインを一新。各モデルの統一デザインを進めるとともに、新しいポジション、フェリクロームの『デュアド』を発売。タイプⅢという最高性能ランクに先鞭をつけた。



Ⅰ ソニー　HF



Ⅲ ソニー　Duad



Ⅰ BASF　NORMAL
（Pパック）



Ⅰ BASF　LH・SM



Ⅰ AGFA　LOW-NOISE (K)



Ⅰ AGFA　SHD



Ⅰ 東芝　HE



Ⅰ Scotch
DYNARANGE
（プラケース）



Ⅰ Scotch
HIGH ENERGY



Ⅰ 東芝　F



Ⅰ 日本コロムビア　SP



Ⅰ 日立　LOW NOISE



Ⅰ ダイヤトーン　B



Ⅱ テクニクス
CHROMIUM DIOXIDE



Ⅱ 東芝　CR

その他の1973年に発売されたカセットテープ　（単位:円）

NORMAL		30分	40分	45分	46分	60分	90分	120分
AGFA	LOW-NOISE（紙ケース）					500	750	1000
	SHD					600	850	1100
AMPEX	350		360			400	650	950
BASF	NORMAL（Pパック）					400	650	900
	LH・SM					550	850	1200
CBS	C					450	700	950
	HF					700	1100	
MEMOREX	SP					400	650	900
	LH					730	1100	1450
アカイ	C	300				500	800	
三洋電機	FS					500	800	1100
	UD					700	1000	
シャープ	E	330				500	800	1300
	UD					700	1000	
スコッチ	LOW NOISE DYNARANGE					400	650	900
	LOW NOISE HIGH DENSITY					550	850	
	DYNARANGE（紙ケース）					350	600	850
	DYNARANGE（プラケース）					400	650	900
	HIGH ENERGY					750	1200	
ソニー	HF					600	900	1200
ダイヤトーン	B	300				400	650	900
	HS					550		
TDK	ED			550		800	1250	
テクニクス	SG					550	850	
東芝	F	300				400	650	900
	HE					550	850	1150
日本コロムビア	TRK901						650	
	TRK1201							900
	SP	300				400	650	900
日立	LOW NOISE	300				400	650	900
	UD					550	850	1200
富士電気化学	FERRO					400	650	900
	UD				550	850	1200	
富士電気化学	FERRO				400	650	900	
HIGH		**30分**	**40分**	**45分**	**46分**	**60分**	**90分**	**120分**
AMPEX						800	1250	
PHILIPS	Hi-Fi					900	1400	
アカイ	CHROME					900	1350	
ソニー	CR					800	1200	
テクニクス	CHROMIUM DIOXIDE					900	1350	
東芝	CR					800	1250	
日立	CX					900	1350	
日立	CX				900	1350		
FeCr		**30分**	**40分**	**45分**	**46分**	**60分**	**90分**	**120分**
ソニー	DUAD					900		

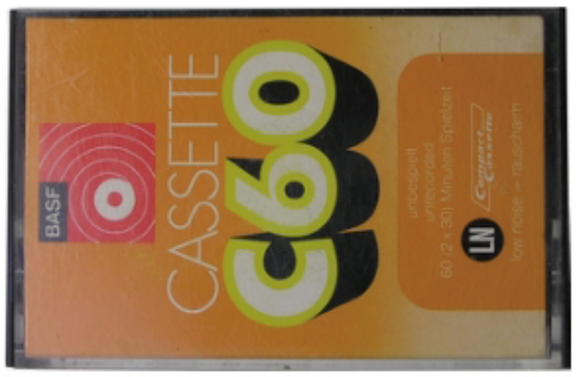
1974 国産テープの充実と輸入テープの淘汰

カセットテープが本格的なオーディオメディアとして認知されつつあった1970年前後には、海外向けのテープをそのまま販売していたスコッチ（住友3M）も、この前年くらいから日本向け専用のパッケージや製品をラインナップするようになっていた。またBASFもこの年にBASFジャパンとなって本国並のラインナップを展開している。

一方でカセット黎明期からカセットをラインナップしていたAGFA（日本アグファ・ゲバルト）は撤退こそしていないが、オーディオ雑誌への広告出稿などを見るとあきらかに力の入れようは落ちてきている。

国産テープではその前年、1973年から動きがあった。マクセル・ブランドをグループ傘下に収めている日立製作所は日立マクセルからのOEMでUDなどを発売、ソニーはCSブランドでHFなどを発売し、それぞれ販路を拡大していった。また富士フイルムは1974年に商品ラインナップの新展開をスタート。まずは中心的なモデル、FX（FMの後継モデル的位置づけ）を発売。パッケージデザインも高性能をイメージさせる黒を基調とし、写真フイルム同様のカラーリングだった従来製品とは一線を画した。

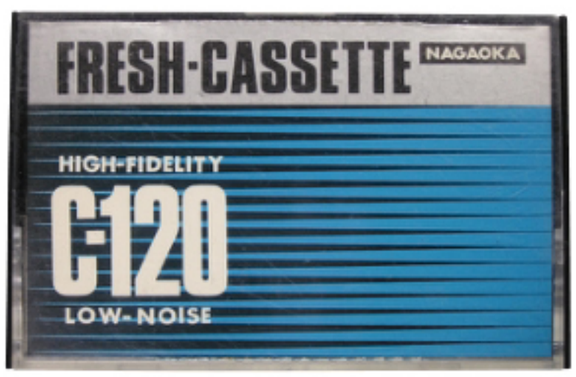
新規参入としてはこの年、レコード針で名が知られていたナガオカがカセットテープを発売。ナガオカはこの数年後『JEWELTONE』ブランドのカセットを発売するが、最初の製品であるFRESH-CASSETTEはナガオカ・ブランドだった。またアイワも新たに参入しているが、翌年にフェリクロームのテープを発売していることから、ソニーのOEMと思われるが確認は取れていない。



I BASF LN・S



III Scotch CLASSIC



I ナガオカ　FRESH-CASSETTE



I 富士写真フイルム　FX



I 日立　UD(※)



II BASF
Chomdioxid・SM(※)



I CBS　HF(※)



I Scotch　LOW NOISE DYNARANGE(※)

その後のスタンダードとなる46分テープの誕生



これまで30分、60分、90分、120分というラインナップが一般的だったカセットテープ。一部にLPに適した分数45分テープも販売されていたがごく少数だった。ところが日立マクセルはすでに販売されていたベストセラーモデルUDに46分をラインナップ。片道23分という絶妙な長さがLPにぴったりということもあり、その後のスタンダードとなっていく。

1974年に発売されたカセットテープ

（単位:円）

NORMAL		46分	60分	90分	120分
AGFA	LH (P)		400	650	900
BASF	LN・S		400	650	900
アイワ	LOW NOISE		400	650	
シャープ	LN		500	800	1300
ナガオカ	FRESH-CASSETTE F		350	600	850
	FRESH-CASSETTE		400	650	900
日立マクセル	UD-XL		650	850	1250
HIGH		46分	60分	90分	120分
ダイヤトーン	CHROME		800	1250	
日本コロムビア	CHROME DIOXIDE		900	1350	
FeCr		46分	60分	90分	120分
スコッチ	CLASSIC	850	1000	1400	

※1973年の発売です。

1975 新しいハイポジション、コバルト系の登場



II TDK SA
(Precision Cassette Half)



I Scotch Master



I ソニー C
（1972年発売）



I 日立マクセル UD-XL
（1974年発売）



I BASF LN



I BASF LH Super



III BASF FCR



I Scotch LH



I ソニー C
（紙パッケージ）（1972年発売）



I 富士写真フイルム
FX Duo



III アイワ FeCr

クロムテープはアメリカのデュポン社が開発した二酸化クロム（CrO2）を磁性体とするテープ。ハイポジション用テープとしては他にノーマルでも使われている酸化鉄にコバルトを添加して高抗磁力化する磁性体が考えられていたが、二酸化クロムの方が加圧、摩擦等による減磁が少なく高周波特性も優れていることから、二酸化クロムをほとんどのメーカーが採用していた。だが酸化鉄の酸化度によって減磁をコントロール出来るとこや、コバルトの分布によって抗磁力も変化できるなどの技術が開発され、ついにTDKが初のコバルト系ハイポジション、SA製品化にこぎつけた。コバルト系磁性体はデュポンへの特許使用料が必要で低価格化も可能だったのもメリットとなった。こうした経緯で、やがて日本ではハイポジションはコバルト系が主流となっていく。

富士フイルムは前年のFXの高性能モデルFX Duoを発売。FX同様のピュアフェリックス磁性体だがデザインを変えてきたが、この年両ブランドともシンプルなものに変更されている。

翌年1976年にはFXの下にFX Jrを発売し、ピュアフェリックスを使った3グレード展開となる。

また海外ブランドではスコッチとBASFがパッケージデザインを一新。おそらく本国版との兼ね合いだろうがいずれのブランドも頻繁にデザインを変えてきたが、この年両ブランドともシンプルなものに変更されている。

1975年に発売されたカセットテープ

（単位:円）

NORMAL		30分	45分	46分	60分	80分	90分	120分
BASF	LN			400	650	900	650	900
	LH super		550	700	1000	1400	1000	1400
三洋電機	LN		400	650	900		900	
スコッチ	LH		600	700	1000		650	900
	Master		700	850	1250		1000	
日本コロムビア	DH			600	900		1250	
日立	UDR		600	800	1200		600	850
富士写真フイルム	FX Duo		650	850	1250		650	900
日本コロムビア	DH				600		900	
日立	UDR			600	800		1200	
日立マクセル	UD-XL			650	850		1250	
富士写真フイルム	FX Duo			650	850		1250	
HIGH		30分	45分	46分	60分	80分	90分	120分
AGFA	STEREO CHROME			900	1250	1700	1250	1700
シャープ	CR			900	1350		1350	
ダイヤトーン	CHROME			800	1250			
TDK	SA（初代）			700				
	SA（Precision cassette Half版）	500		700	1000			
FeCr		30分	45分	46分	60分	80分	90分	120分
アイワ	FeCr		750	900			1400	

※発売は1972年ですが、価格は1975年当時のものです。

1976 コロムビアと富士フイルムがラインナップを拡充

日本コロムビアはラインナップを一新。ノーマルのベーシックを1H、上級グレードを3H、ハイポジションを1Kとスッキリとまとめ、パッケージデザインも大きくモデル名が印刷されたシンプルなものに変更された。3Hはデュアルコーティング、1Kは当時流行ったコバルト系ではなく、二酸化クロムの持ち味を改めて見直したクロムテープとして注目を集めた。

またFX Jrを発売してピュアフェリックス・シリーズを完成させた富士写真フイルムは、ベーシックモデルのFLもパッケージデザインを一新し、FXシリーズと統一感のあるものへと変更している。

1976年頃はカセットデッキが急速に進化しており、従来の平型タイプのデッキに加え、現在主流となっているタテ型デッキが出始めた頃。デッキの高性能化に合わせ、カセットテープの高性能化も求められていた。その一方で当時のオーディオ誌などを見ると、同じポジションであってもメーカー、モデルによって大きくキャラクターが変わる現状に注意を促す記述も見られ、1980年代のように、どんな曲にどんなテープを使ってもそれほど問題はない、という状況ではなかったようだ。さらにカセットというメディアに対する信頼感も確立されているとはいえず、耐久性に疑問を呈する記述も見られることから、『カセット懐疑派』の存在も伺わせる。

そんなユーザーに向けたものか、カセットの利便性とオープンの高音質を両立させたメディア、エルカセット（ELCASET）が誕生したのも1976年。当時のデッキのスペックを見るとフェリクロームでは2万7000Hzまで再生する高性能を謳っているが、文庫本とほぼ同じ大きさのカセットは中途半端感は否めない。

なおデッキメーカーのナカミチからカセットテープが発売されたがテープはTDKのOEM。パッケージは初期のナカミチのロゴ（Nを図式化したもの）をイメージさせるものだった。



Ⅱ テクニクス　XA



Ⅰ ナカミチ　EX



Ⅰ 日本コロムビア　1H



Ⅰ アイワ　LN
（プラケース）



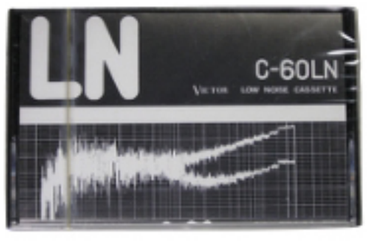
Ⅰ アイワ　LH



Ⅰ ナカミチ　EX-Ⅱ



Ⅰ 日本コロムビア
3H



Ⅰ 日本ビクター　LN



Ⅰ 日本ビクター　SF



Ⅰ 富士写真フイルム
FX Jr



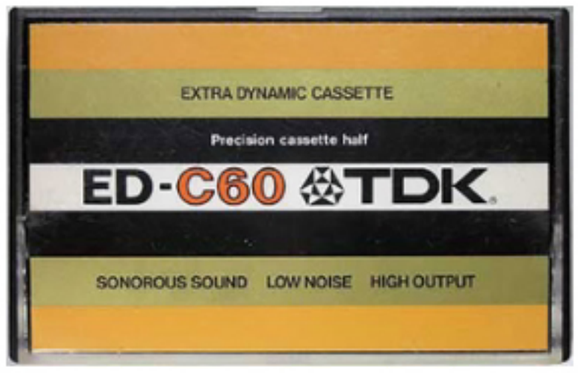
Ⅰ 富士写真フイルム
FL

1976年に発売されたカセットテープ

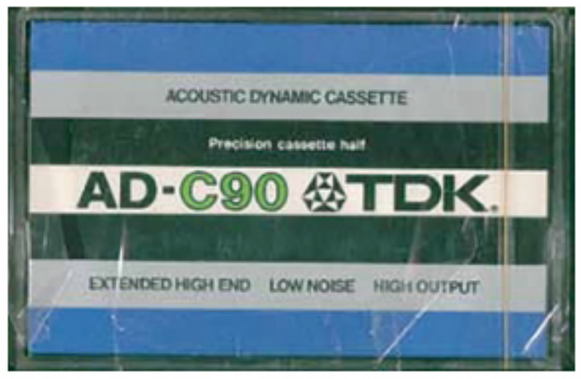
（単位:円）

NORMAL		30分	45分	46分	60分	90分	120分
アイワ	LN（プラケース）				400	650	
	LH			500	600	900	
クラリオン	LOW NOISE DYNAMIC	300			400	650	900
	CX			500	700	1000	
スコッチ	LD				400	650	900
ナカミチ	EX				700	1000	
	EX-Ⅱ				900	1350	
日本コロムビア	1H	300			400	650	900
	3H			450	550	850	
日本ビクター	LN				400	650	
	SF			500	650	950	
富士写真フイルム	FL	300			400	650	900
	FX Jr			450	550	850	900
HIGH		**30分**	**45分**	**46分**	**60分**	**90分**	**120分**
テクニクス	XA		500		700		
ナカミチ	SX				850	1250	
日本コロムビア	1K				900	1350	
FeCr		**30分**	**45分**	**46分**	**60分**	**90分**	**120分**
BASF	ferrochrom				1000	1400	

1977 大ヒットシリーズの初代『AD』が誕生



Ⅰ TDK ED
(Precision cassette half)



Ⅰ TDK AD



Ⅰ 日立マクセル UD-XLⅠ



Ⅱ 日立マクセル UD-XLⅡ

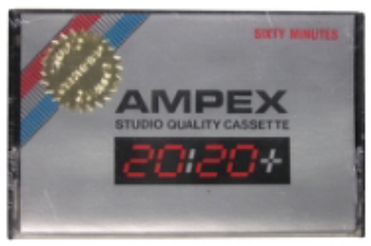
SDの後継モデル、ADが登場。ADはこのあと代を重ね、TDKの音楽用カセットとしては最後まで続くロングセラーとなる。ADは『Acoustic Dynamic』の略で、その名の通り高域特性が売りだった。

じつはそれまでカセットの主用途はエアチェックだと言われてきた。だがこの頃になるとレコードを録音し、ラジカセやカーステレオなどで聴くという用途が増えてきたことが当時の雑誌を読むと見てとれる。そうしたことに対応したモデルチェンジがブランドのカセットだが、早くもパッケージデザインを変更している。これはブランドロゴをそれまでの角ばった『N』マークから、半円を反転させて左右に配置しNの字に見せるロゴ（レイモンド・ローウィのデザインと言われている）に変更したためだと思われる。引き続き中身はTDKのOEM。なおポジションはナカミチのデッキセレクターに合わせ、『EX』『SX』『ZX』と表示されており、商品名も『EX（EX-IIもある）』『SX』『ZX』とされた。

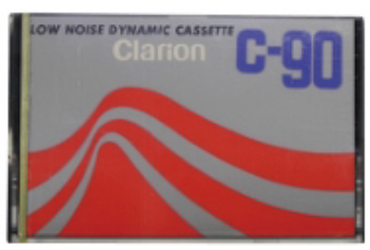
プロ用機材で有名なアンペックスが上陸したのもこの頃。



Ⅰ AMPEX PLUS



Ⅰ AMPEX 20/20+



Ⅰ クラリオン LOW NOISE DYNAMIC



Ⅰ Scotch CRYSTAL



Ⅰ ナカミチ EX



Ⅰ ナカミチ SX



Ⅰ 日立 UD



Ⅱ オーレックス AX

1977年に発売されたカセットテープ

（単位:円）

NORMAL		30分	45分	46分	60分	80分	90分	120分
AMPEX	PLUS	450		550		850	1200	
	20/20+		550		750		1050	
スコッチ	CRYSTAL			450	550		750	
	Master 120μsEQ			600	750		1000	
TDK	D							
	AD		450		550		850	1200
ナカミチ	EX				700		1000	
	EX-Ⅱ				900		1350	
日立	LOW NOISE	300		350	400		650	900
	UD			450	550		850	1200
	UD-E			550	750		1050	
日立マクセル	UD-XLⅠ			550	750		1050	
富士写真フイルム	Range-2			350	400		650	900
	Range-4			450	550	750	850	
	Range-6			650	850			
HIGH		30分	45分	46分	60分	80分	90分	120分
BASF	SCR			550	750		1050	
オーレックス	AX		500		700		1000	
スコッチ	Master 70μsEQ			600	800		1050	
ナカミチ	SX				850		1250	
日本ビクター	VX				850		1250	
日立	UD-EX			550	750		1050	
日立マクセル	UD-XLⅡ			550	750		1050	

1978

ソニーの新イメージ戦略発動

イメージ戦略に強いソニーの本領が発揮されたのがこの年。ＡＨＦ、ＢＨＦ、ＣＨＦというノーマルの３グレード展開で、従来のスタンダードがＣＨＦ、ＨＦがＢＨＦ、さらにその高性能版のＡＨＦというラインナップだ。さらにＣＲ（ハイポジション）はＪＨＦとなり、デュアドは名前こそ変わらないものの、パッケージは他のモデルと統一された。なおＪＨＦは銀、デュアドは金のイメージと思われる。

このパッケージとラインナップの一新に合わせ、ソニーは自社のテープすべてにＤＰメカを採用。これはハーフ内でのハブの保持に着目したもので、シートに筋を入れて適度なクッション性でハブの位置を決めるというもの。外観こそ従来のハーフと変わらないが、内部は進化していた。テープではなくハーフで性能を向上させる、という考えも新しかった。

また国産メーカーのブランド戦略が前面に出たのもこの年。東芝は１９７７年から自社のオーディオブランドであるオーレックスをカセットのブランドとして使っていたが、日立はこの年からカセットにローディ・ブランドを、日本コロムビアは、これまで放送局などプロ用の機材はデンオン・ブランド、一般向き機材はコロムビア・ブランドと使い分けていたが、デンオンの評価が上がるにつれ、また他の家電メーカーがつぎつぎとオーディオブランドを押し出してきたことにも対応し、一般向けの製品にもデンオン・ブランドを使い始めた。そのことに合わせカセットのラインナップも見直され、コロムビアは３Ｈはデンオン ＤＸ３として、またフェリクロームのＤＸ５を新たにラインナップするなど、新しい戦略を打ち出した。

日立マクセルはこの前年にＸＬシリーズをＵＤから独立させたが、この年にさらに改良を加え、ＵＬ、ＵＤもパッケージデザインを統一させている。

なおコラムでも触れるがこの年、世界初のメタルテープ、スコッチＭＥＴＡＦＩＮＥが登場している。

１９７０年代後半、磁気テープ各社は夢のテープと言われていたメタルテープの実用化に向けて、実用化の研究を加速させていた。そのような状況のなか、１９７７年にＥＩＡＪ（日本電子機械工業会）およびＭＴＡＪ（磁気テープ工業会）のメンバーにより、メタルテープ・ワーキンググループが設立された。メタルテープを市販化するのに不可欠な『メタルテープ規格』を策定するためだ。そこでは各社から提供されたサンプルテープの評価や交換が行われ、標準化が進められた。また同時に世界規格とするため、ワーキンググループはＩＥＣ（国際電気標準会議）へ働きかけを行いつつ、リファレンステープの決定なども行われたようだ。このワーキンググループの多方面への活動により、『メタルポジション』が標準化され、世界中のカセットデッキにメタルポジションが付けられるようになったのだ。

このように日本の磁気テープ工業会が主導して策定されたメタルテープ規格だが、メタルテープの第１号はスコッチが発売。それから遅れること約半年でＴＤＫとソニーが相次いでメタルテープを発売する。

なおカセットデッキのメタル対応１号機は、スコッチと共同開発したと言われている日本ビクターのＫＤ－Ａ６と言われている。

1978年に発売されたカセットテープ

（単位:円）

NORMAL		30分	45分	46分	60分	80分	90分	120分
AMPEX	Grand Master				800		1100	
BASF	Super LHI			450	550		800	1050
オーレックス	AD		450		550		850	
クラリオン	DX					650		
シャープ	S	300			400		650	900
	SD			450	550		850	
	SX-I			550	750		1050	
スコッチ	TARTAN				400		650	900
ソニー	CHF	300			400		650	900
	BHF			450	550		800	1100
	AHF			550	650		950	
テクニクス	LN	300			550		850	
	XD			450	550		850	
デンオン	DX3			450	550		800	
日本コロムビア	LX				400		650	900
日立マクセル	UL			350	400		650	900
	UD			450	550		850	1200
	XLⅠ			550	750		1050	
ローディ	DL			350	400		650	900
	UD			450	550		850	1200
	ER			550	750		1050	
HIGH		30分	45分	46分	60分	80分	90分	120分
オットー	CD					750		
シャープ	SX-Ⅱ			550	750		1050	
ソニー	JHF			600	700		1050	
ダイヤトーン	X				700			
	C						1250	
TDK	SA（Improved）		600		750		1050	
日立マクセル	XLⅡ			550	750		1050	
富士写真フイルム	Range-4X			550	700	900	1000	
ローディ	EX			550	750		1050	
FeCr		30分	45分	46分	60分	80分	90分	120分
BASF	FCR			700	900		1400	
ソニー	DUAD			650	800		1200	
デンオン	DX5			550	750		1050	
Metal		30分	45分	46分	60分	80分	90分	120分
スコッチ	METAFINE			1350				



I ソニー　AHF



I ソニー　BHF



I ソニー　CHF



I 日立マクセル　UD



I 日立マクセル　XLⅠ



I 日立マクセル　XLⅡ



II TDK　SA



II ソニー　JHF



III ソニー　DUAD



I オーレックス
AD



I シャープ　S



I Scotch
TARTAN



I テクニクス　LN



I テクニクス　XD



I デンオン　DX3



I Lo-D　DL



I Lo-D　UD



I Lo-D　ER



I 日立マクセル
UL



IV Scotch　METAFINE

世界初のメタルテープ

スコッチ METAFINEが登場

1978年の年末、ついにメタルテープが市販された。スコッチMETAFINEだ。メタルテープは非酸化金属が使われていて、保磁力、残留磁束ともクロムと比べても桁違いだが、フェライトヘッドでは扱えない難点もあった。そこで日本ビクターがセンアロイヘッドを採用するタイミングで共同開発したと言われている。



II Lo-D　EX



II 富士写真
フイルム
range 4x



III BASF　FCR



III デンオン　DX5

1979

一気に11モデル。国産メタルテープ元年

1978年12月に約5000巻のスコッチMETAFINEが首都圏で限定発売された。これがメタルテープの第1号とされているが、METAFINEは1979年1月に全国で本格的に発売されたため、この1979年がメタルテープ元年と見てもあながち間違いではないだろう。

1978年秋の全日本オーディオフェアでメタルテープが各社から一斉にプレゼンされ、オーディオ業界、オーディオマニアは一種熱狂ともいうべき興奮に包まれたようだ。またメタルテープに対するデマも流れた。その中でも有名なのが「メタルテープは錆びる」というもの。酸化していない磁性粉を使用しているためにこのようなことが言われたようだ。もっとも「錆びないように湿気の少ないところで保管した方が良い」という話しは、いずれにせよテープには好条件ではあったが。

また「磁性粉が落ちることによるドロップアウトが起きやすい」とも言われたが、約40年経った今となっては、ノーマルテープでもドロップアウトするテープはしているので、磁性粉ではなくテープ基材や接着剤の影響の方が大きかったのではないだろうか。

さらにメタルテープが高性能過ぎるゆえの危惧も多かった。例えばメタルテープ再生EQは性能からいえば50μS程度が最適なはずだが、これだと従来のデッキでは再生すらできないというもの。実際には若干高域MOLの良さをスポイルするカタチではあったが、ハイポジションと同じ70μSとされ、再生だけならハイポジションで可能だった。あるいは「メタルテープは保磁力が高すぎて完全に消去するのが難しい」という話しもあった。これは正しいが、さすがにメタル対応デッキではしっかり対策されていて、十分な磁束密度を出しても飽和も発熱もしない消去ヘッドが開発された。

期待と不安が入り混じったメタルテープだったが、1979年5月10日にTDK・MA-RとソニーMETALLICが同時に発売。1月に富士写真フイルムがメタルテープの技術発表を行ったことから、富士写真フイルムの方が発売が早いという噂もあったが、実際にはSuperRangeは7月にずれ込んだ。また7月には日立マクセルもMXを発売し、大手4社はすべてメタルテープをラインナップした。さらにオーレックス（東芝）、テクニクス（ナショナル）、ナカミチ、ラックスマン、ジュエルトーン（ナガオカ）、ローディ（日立）といったOEM組もメタルテープを発売していった。

ただメタル対応デッキの1号機を発売した日本ビクターからはなぜかメタルテープが発売されなかった。またデンオン（日本コロムビア）もこの時点では未発売だ。

このようにメタルテープ誕生に沸いた年ではあったが、それ以外のトピックとしてはTDKがDとADをモデルチェンジしている。それとともにストライプパターンを変更。従来ストライプの真ん中にモデル名があったが、ストライプを下に寄せ、その上にモデル名を配した。SAに上位モデルSA-Xが誕生したのもこの年のこと。こちらもロングセラーとなる。

1979年に発売されたカセットテープ

（単位:円）

NORMAL		30分	46分	50分	60分	90分	120分
PHILIPS	FERRO		–		400	–	
	SUPER FERROⅠ				550	–	
ジュエルトーン	LN		350		400	650	
	LH		450		550	800	
ダイヤトーン	X				700		
TDK	D	300	350		400	650	900
	AD		450		550	850	1200
	OD		500		650	950	
デンオン	DX1			350	400	650	900
HIGH		**30分**	**46分**	**50分**	**60分**	**90分**	**120分**
PHILIPS	CHROMIUM				750		
ジュエルトーン	CR		550		750	1000	
TDK	SA		550		750	1050	
	SA-X		650		850		
テクニクス	XAⅡ		550		750	1050	
デンオン	DX7		550		750	1050	
ラックスマン	XM-Ⅱ				1100	–	
FeCr		**30分**	**46分**	**50分**	**60分**	**90分**	**120分**
ジュエルトーン	FC		650		800	1200	
Metal		**30分**	**46分**	**50分**	**60分**	**90分**	**120分**
オーレックス	MX		–		1500		
ジュエルトーン	METAL MUSIC		250		1500		
ソニー	METALLIC		1250				
TDK	MA		1250		1500		
	MA-R		1750		2000		
テクニクス	MX		–		1500		
ナカミチ	ZX				1600		
日立マクセル	MX		1250		1500		
富士写真フイルム	Super Range		1250		1500		
ローディ	ME		1250				
ラックスマン	XM-Ⅳ		1450				1050



Ⅳ ソニー　METALLIC



Ⅳ TDK　MA



Ⅳ 日立マクセル　MX



Ⅳ 富士写真フイルムSuper Range



Ⅳ オーレックス　MX



Ⅳ テクニクス　MX



Ⅳ ナカミチ　ZX



Ⅳ ジュエルトーンMETAL MUSIC



Ⅳ Lo-D　ME



Ⅰ PHILIPS
FERRO



Ⅰ PHILIPS
SUPER FERRO1



Ⅰ ジュエルトーン
LN



Ⅰ TDK　D



Ⅰ TDK　AD



Ⅰ TDK　OD



Ⅰ デンオン　DX1



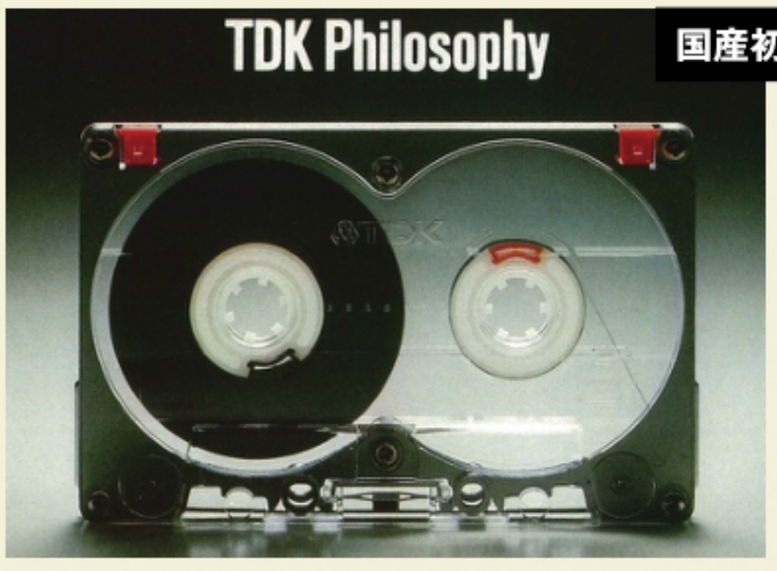
Ⅱ PHILIPS
CHROMIUM



Ⅱ ジュエルトーン
CR



Ⅱ TDK　SA



Ⅳ TDK MA-R

国産初のメタルテープにして頂点

伝説のカセット
TDK MA-R

別項にて紹介しているMA-R開発者インタビューで「従来TDKは21日に新製品を発表していたがMA-Rだけは10日だった」という証言があった。つまり発売時期を早めてMETALLICと同日にしたフシがあるのだ。MAならもっと早く発売できたのだろうがMA-Rに拘ったことこそTDKの矜持ということか。



Ⅱ TDK　SA-X



Ⅰ テクニクス　XA
Ⅱ



Ⅱ デンオン　DX7



Ⅲ ジュエルトーン
FC

1980 1979年の反動で落ち着いたカセット業界



Ⅰ 日立マクセル　XLⅠ-S



Ⅱ 日立マクセル　XLⅡ-S



Ⅳ パイオニア　M1



Ⅳ 富士写真フイルム　SR

前年のメタルテープブラッシュ疲れか、やや落ち着いた感のある1980年。日立マクセルのXLシリーズに上級バージョンのXLⅠ-S、XLⅡ-Sが誕生した。これは1991年までモデルチェンジを繰り返し作られるロングセラーとなった。また前年に発売されたメタルテープのMXもXL-Sシリーズに合わせモデルチェンジ。より高級感のあるスタイルに改められた。

また富士写真フイルムのメタルテープSuperRangeもラインナップの一新にともなってSRとして生まれ変わった。独自のメタリック磁性体をSDR法（スーパーディスパージョン・リダクション、超分散還元法）という、これも独自の製法で作ったメタルテープは前作SuperRange同様だった。

メモレックス以来カセットテープから離れていたパイオニアが、独自のカセットで帰ってきたのもこの年。ラインナップはノーマルテープ2種ハイポジション、メタルテープ各1種。性能曲線がデザインされた白いパッケージが印象的だった。

大手で唯一メタルテープをラインナップしていなかったデンオン（日本コロムビア）がついにメタルテープDXMを発売。これで大手国産カセットメーカーはすべてメタルテープを発売したことになった。

ところで1979年に発売されたソニー・ウォークマンが大ヒットしたのもこの頃のこと。これに触発され東芝はチューナーパック付きの初代ウォーキーを、アイワは録音機能付きの初代カセットボーイを発売。以降、カセットテープの役割はますます重要になって行く。



Ⅳ 日立マクセル　MX



Ⅲ PHILIPS　FERRO CHROMIUM



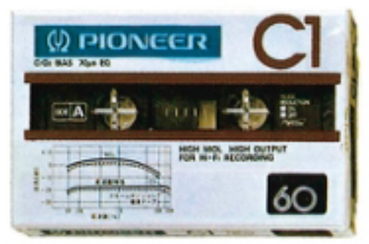
Ⅰ 富士写真フイルム　ER



Ⅱ 富士写真フイルム　UR



Ⅰ ラックスマン　XM-I



Ⅱ パイオニア　C1



Ⅰ パイオニア　N1



Ⅰ パイオニア　N2

1980年に発売されたカセットテープ

（単位:円）

NORMAL		46分	50分	60分	80分	90分	120分
パイオニア	N1			400		650	
	N2			550		850	
日立マクセル	XLⅠ-S	550		750		1050	
富士写真フイルム	DR	350		400		650	900
	ER	450		550	750	850	1200
ラックスマン	XM-I			900		—	
HIGH		46分	50分	60分	80分	90分	120分
パイオニア	C1			750		1050	
日立マクセル	XLⅡ-S	650		850		1200	
富士写真フイルム	UR	550		750	950	1050	
ローディ	SX	650		850		1200	
FeCr		46分	50分	60分	80分	90分	120分
PHILIPS	FERRO CHROMIUM			900		—	
Metal		46分	50分	60分	80分	90分	120分
デンオン	DXM		1050				
パイオニア	M1	950		1150			
日立マクセル	MX	950		1150		1600	
富士写真フイルム	SR	950		1150	1450	1600	

ウォークマンがもたらした変化

1966年に国産初のカセットテープが誕生して以来、カセットテープはどんどん高性能になっていった。思えば日本人（の技術者、あるいは日本のメーカー）はこうした枠組みがあると、自由に作るときよりも力を発揮するような気がする。そうした気質の日本人にとって、フィリップスの作った『コンパクトカセット』という規格はまさにちょうど良かったのだろう。

外寸やテープの幅、スピードといった大まかな縛りがあるものの、中身は自由、素材も自由。このくらいの枠が技術者のやる気を煽った、としか思えないほどカセットテープは進化した。初めての音楽専用テープ、二酸化クロムを使わないハイポジション、メタルテープの開発時に見せた各社独自の製法……。このまま突き進めばカセットテープはひたすら高性能を追求するメディアとなっただろう。だが、それはカセットがどこまでオープンテープに近づくか、という追求でしかなく、カセットならではの良さを活かすものではなかった。ところが、ウォークマンの登場によって、カセットは本来の持ち味を取り戻す。それが簡便な音楽メディアという側面だった。

演奏途中でも取り出せて、裸でカバンやポケットに放り込んでも大過ない。もともとポケットに入る大きさと決められたサイズだというから、外に持ち出すことこそカセットの真価であり本質だったのだ。それを世界中のユーザーに思い出させた井深大と盛田昭夫というふたりの偉人は、改めて言うまでもないことだが天才だった。

カセットを外に持ち出すための装置として、ウォークマンはとても良くできていた。聴く以外の機能をあえて排除し、「音楽を聴くためのもの」という目的を明確にした。またひとりで音楽を楽しむ、というスタイルが世間に定着するまでは他者とのコミュニケーションも確保しなくてはいけない、ということで外部の音が一時的に聴こえるようにできるホットラインボタン（なんとそのためだけに本体にマイクが内蔵されていた）、ふたつのヘッドフォンジャックが装備されていた（初期モデルではGUYとDOLLSだったのは有名な話。女性差別ということでAとBに改められた）。こうした工夫により『外』で『ひとり』で音楽を楽しむという文化は急速に定着していった。

こうなると今度はより小さく、より高性能に、という方向に血道を上げてしまうのは、これも日本人の気質のなせる技。カセットケースより小さいヘッドフォンステレオや100時間以上聞き続けられるモデルも登場するなど、その進化は滞ることがなかった。そんな驚愕のモデルの数々は別項に詳しいので、ぜひご覧いただきたい。



1979年発売直前のカタログに掲載された初代ウォークマン、TPS-L2。
このウォークマンのヒットで若者が常に音楽を聴く、というスタイルが始まる。

1981

性能だけじゃなく、キャラクターという売り方

前ページでも述べた通り、1979年に初代ウォークマンが登場して以来、カセットの役割はますます重要になっていった。通産省の機械統計によれば1976年に生産台数4000万台に達したテープレコーダーだったがその後1979年までは4000万台付近にとどまっていた。ところがウォークマンがヒットして各社が追随するようになった1980年には5400万台を超え、1981年には6000万台を突破した。磁気テープにしても同様で、こちらは残念ながらビデオテープとの合計値ではあるが、1976年に約2億4000万㎡の磁気テープが生産されたが、1980年には約4億1600万㎡、1981年に6億3000万㎡と大幅に生産量を増やしていった。なおヘッドフォンステレオ市場にはソニーに続いて東芝、アイワが参入していたが1981年はさらに増え、三洋やマランツ（ユニックス・ブランド）も新製品を投入。パーマロイ、センダストなどが実用化されたせいもあり、デッキそのものも高性能化。オーディオマニアもカセットをコンポの中心に据え始めた時期でもあった。

このようにカセットテープユーザーの幅が広がったこともあり、カセットテープのラインナップそのものを見直すメーカーも多かった。

海外の老舗BASFはラインナップ一新で、それまでのシリーズとはまったく違うPROシリーズを展開。PROI～IVにスタンダードのLH-Xを加えたすっきりした構成となった。同じ海外勢ではマグナックスが登場。これは小西六写真工業株式会社が前年1980年にアメリカのアンペックス社と資本・技術提携し、株式会社小西六マグネプロダクツを設立。1981年になってアンペックスから半製品の供給を受け、マグナックス・ブランドで発売した。

また前年にシリーズを一新した富士写真フイルムが早くもモデルチェンジ。YMOをキャラクターに起用し若者にアピールする。ソニーはUCX-Sで初めてメタリックパッケージを採用。翌年からメタリックのパッケージを全面に展開していく。

はじめてのリールタイプカセット

後にティアックが発売し、ナショナルや東芝などいくつかのメーカーが商品化。とくにティアックのSTUDIOシリーズや、カートリッジタイプのオー・カセなどは現在でも高い人気を保っているリールタイプのカセット。その第一号機は、資料で遡る限りこのトーレンスSuper LHのようだ。

トーレンスといえば言わずとしれたターンテーブルの老舗。創業は19世紀まで遡るが、むしろオーディオマニア的には1950年代以降のベルトドライブ式ターンテーブルであろう。EMTとも同じグループだ。

だが1981年頃といえばデジタル・オーディオ・ディスクの規格選定でオーディオ業界がざわついていた時期。アナログディスクの将来に不安を感じたトーレンスがカセットに色目を使った、というところか。いずれにせよけっして成功したといえず、トーレンスは以降カセットの歴史には登場しない。



I THORENS　Super LH

1981年に発売されたカセットテープ

（単位:円）

NORMAL		46分	50分	54分	60分	74分	80分	84分	90分	120分
BASF	LH-X	350			400				650	900
	PROI	450			550				800	
magnax	ML		350		400				650	900
	GM-I		450		550				850	
THORENS	Super LH				650					
スコッチ	MasterI				900					
ソニー	Pops			600				800		
	Classic			650		800				
TDK	D	–			400				–	–
	AD	–			550				–	–
	OD	–			650				–	
デンオン	DX1		350		400				650	900
			450		550				800	
日立マクセル	UD	450			550				850	1200
富士写真フイルム	DR	–			400				–	–
	ER	–			550				–	
	FR-I	500			650		850		950	
日立マクセル	UL			350	400		650	900		
	UD			450	550		850	1200		
HIGH		46分	50分	54分	60分	74分	80分	84分	90分	120分
BASF	PROII				750					
magnax	GM-II		550		750				1050	
スコッチ	MasterII				1000					
ソニー	Rock			700				950		
	UCX-S	650			850				1200	
TDK	SA	–			750				–	
	SA-X	–			850				–	
デンオン	DX7		550		750				1050	
富士写真フイルム	FR-II	550			750		950		1050	
FeCr		46分	50分	54分	60分	74分	80分	84分	90分	120分
BASF	PROIII	650			800				1200	
デンオン	DX5		550		950				1050	
Metal		46分	50分	54分	60分	74分	80分	84分	90分	120分
BASF	PROIV	750			950				1300	
magnax	METAL		750		950				1300	
TDK	MA	?			950					
	MA-R	?			1550					
デンオン	DXM		770		950				1300	
富士写真フイルム	FR METAL	750			950		1150		1300	



Ⅰ BASF　PROⅣ



Ⅰ デンオン　DX3



Ⅱ ソニー　UCX-S



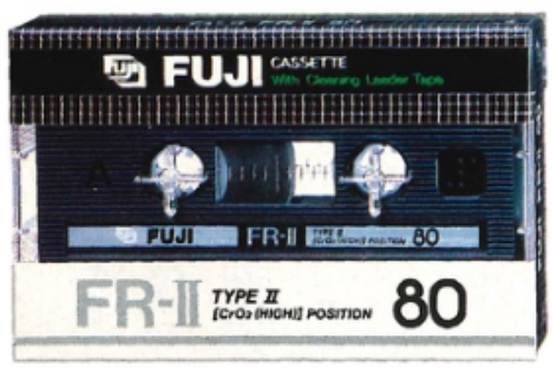
Ⅱ デンオン　DX7



Ⅰ デンオン　DX5



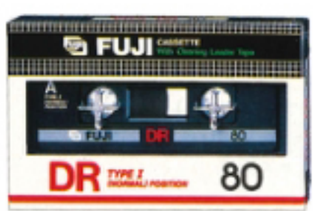
Ⅰ デンオン　DXM



Ⅱ 富士写真フイルム　FR-Ⅱ



Ⅳ 富士写真フイルム　FR METAL



Ⅰ 富士写真
フイルム　DR



Ⅰ 富士写真
フイルム　ER



Ⅰ magnax　ML



Ⅰ magnax
GM-Ⅰ



Ⅲ BASF　PROⅢ



Ⅰ BASF　LH-X



Ⅰ magnax
GM-Ⅱ



Ⅰ magnax
METAL



Ⅰ 日立マクセル
UD



Ⅰ TDK　D



Ⅰ TDK　AD



Ⅰ TDK　SA



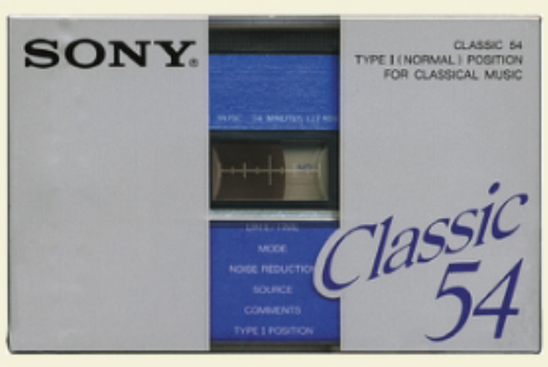
Ⅰ TDK　MA



Ⅰ TDK　MA-R



Ⅰ ソニー　Pops



Ⅰ ソニー　Classic



Ⅱ ソニー　Rock

ソニーが独自の戦略

性能ではなくキャラクターで ユーザーを狙い撃ち

１９６６年以降、ひたすら高性能化に邁進していた日本のカセット業界。真面目な日本の技術者の気質のせいか、加熱したカセット市場のせいか、メーカー各社の開発競争のおかげで、１９８０年頃には日本のカセットはすでに海外メーカーと性能面では勝負にならないほど突出していた。

ところがこれまではどのメーカーもオーディオマニアたちの耳を満足させるために性能を向上させてきたが、１９８０年代に入り、若者を中心としてウォークマンなどの功績でライフスタイルの隅々までカセットが入り込むと、性能一辺倒ではユーザーのニーズを満足させることができなくなってきた。

そこでソニーが提案したのが、曲のジャンルに合わせて選ぶカセット。その名もズバリＰｏｐｓ、Ｃｌａｓｓｉｃ、Ｒｏｃｋ。ＰｏｐｓとＣｌａｓｓｉｃはノーマル、Ｒｏｃｋはハイポジションだ。性能だけでなくキャラクターやデザインで訴求する新しいアプローチで、じつにソニーらしいカセットだった。

1982

過渡期的なラインナップ。参入メーカーも拡大

この前年、ウォークマン最大のヒットと言えるWM-2が発売された。前面の面積はカセットケースとほぼ同様。厚みはケースの約2倍と、これまでのヘッドフォンステレオとは比べ物にならないほどスタイリッシュでコンパクトだった。このウォークマンIIとオレンジのイヤーパッドが付いた針金のようなヘッドフォンは若者たちのステータス・シンボルとなった。また参入メーカーはさらに増え、ついにナショナルからもヘッドフォンステレオWayが登場。日立やビクター、シャープからも新製品が登場した。

カセットの世界でもこの頃異変が起きつつあった。これまでも述べてきたとおり、カセットの進化は性能向上という評価軸を中心に進んできたが、この頃からデザイン性、あるいはスタイリッシュであることが重要な価値としてとらえられるとようになってきたのだ。

これまで高性能をイメージさせる黒を基調としたり、プロ用基材っぽいパッケージデザインが流行だったが、どちらかというと若者に好かれるスポーティなイメージの白がパッケージに多く使われ始めたのだ。

ソニーやTDKに比べ通好みなイメージが強い富士写真フイルムは白基調のパッケージでラインナップを完成させた。またスコッチも白と黒の格子柄を地に引いて、パステル調のモデル名を配したパッケージに一新。パイオニアも一斉にモデルチェンジを実施したが白いパッケージは継承した。

その一方で以前からのイメージを引き継いだ新製品も多く、デンオン、日立マクセル、ケンウッド（トリオ）、アイワあたりはこう言っては語弊があるが旧態依然としたパッケージやハーフのデザインを用いていた。もちろん性能は向上していたが。

こうした流れと一線を画したのがソニーとヤマハだった。ソニーは前年のUCX-Sで始めたメタリックパッケージをUCXやノーマルのBHFまで拡大。高級感、高性能をアピールしつつ安っぽくないスタイリッシュさを実現していた。またヤマハはまったく独自の価値観を持っていて、金色に包まれたパッケージで、小さな覗き窓を付けただけ。まるで楽器回りのアクセサリーのような雰囲気は日本楽器ならではの販路も意識したものだろうか。おそらくこのパッケージも含めて、ヤマハのオーディオ機器全体のデザインを請け負ったGKデザインの手によるものだろう。

なおTDKはこの年、ほとんど動きはなかったが、この翌年から徐々にイメージチェンジを図っていく。

1982年はこのように新旧入り混じり、また各メーカーが次世代を見据えつつ模索していた時期といえよう。

1982年に発売されたカセットテープ

NORMAL		30分	42分	46分	50分	60分	80分	90分	120分
アイワ	LX（※）					1200		1950	
	DX			450		550		850	
クラリオン	LN					400			
ケンウッド	N			350		400		650	
	ND			450		550		850	
三洋	LNⅢ					400			
	LHⅢ					550			
スコッチ	BX					400		650	
	CX				550				
	XS-Ⅰ				600				
ソニー	BHF			450		550		800	1100
TDK	AD-X						750		
デンオン	DX4		460		510	650	850	950	
東芝	FS	300				400		650	
パイオニア	N2a			450		550		850	
	N3a			500		650		950	
日立マクセル	UL								
	XLⅠ			500			650	950	
ヤマハ	MUSIC			450		550		850	
	MUSIC：ex			500		650		950	
	MUSIC：ex			500		650		950	
HIGH		30分	42分	46分	50分	60分	80分	90分	120分
アイワ	SX			550		750		1050	
オーレックス	AD			450		550		850	
ケンウッド	CD			550		750		1050	
スコッチ	XS-Ⅱ				750				
ソニー	UCX			600		750		1050	
デンオン	DX7		510		550	750	950	1050	
パイオニア	C1a			550		750		1050	
日立マクセル	XLⅡ			550		750		1050	
ヤマハ	STUDIO：ex			650		850		1200	
ヤマハ	STUDIO：ex			650		850		1200	

※3本パックの価格（単位:円）

FeCr		30分	42分	46分	50分	60分	80分	90分	120分
オーレックス	AX			550		750		1050	
スコッチ	Master Ⅲ					1500			
Metal		30分	42分	46分	50分	60分	80分	90分	120分
アイワ	MX			950		1150		1600	
オーレックス	MX								
オットー	ME					950			
ケンウッド	MD			750		950		1300	
パイオニア	M1a			750		950			
ビクター	ME					1150			
	ME-pro					1350			
日立マクセル	MX			750		950		1300	
ヤマハ	METAL			750		950		1300	
ヤマハ	METAL			750		950		130	



Ⅰ アイワ　DX



Ⅱ デンオン　DX7



Ⅱ ソニー　UCX



Ⅰ Scotch　CX



Ⅰ ソニー　BHF



Ⅳ 日本ビクター　ME Pro



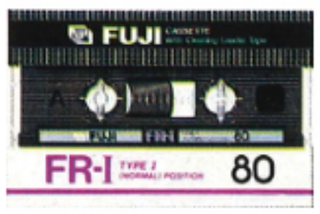
Ⅳ 日本ビクター　ME



Ⅰ アイワ　LX



Ⅳ ヤマハ　METAL



Ⅰ 富士写真フイルム　FR-Ⅰ
（1981年発売）



Ⅰ Scotch　Master Ⅰ
（1981年発売）



Ⅰ デンオン　DX4



Ⅰ ケンウッド　N



Ⅰ パイオニア　N2a



Ⅰ パイオニア　N3a



Ⅰ Scotch　XS-I



Ⅰ ヤマハ　MUSIC



Ⅰ TDK　AD-X



Ⅱ アイワ　SX



Ⅱ ケンウッド　CD



Ⅱ パイオニア　C1a



Ⅱ Scotch　XS-Ⅱ



Ⅱ 日立マクセル　XLⅡ



Ⅱ ヤマハ　STUDIO:ex



Ⅳ アイワ　MX



Ⅳ ケンウッド　MD



Ⅳ 日立マクセル　MX



Ⅳ パイオニア　M1a



Ⅰ ヤマハ　MUSIC:ex

1983

大ヒットモデルHFシリーズ、UDシリーズがモデルチェンジ

前出の通産省機械統計によるとこの年、初めて磁気テープの生産量が10億㎡を超えた。テープレコーダーの生産台数も7000万台に限りなく近づいている。

そうした状況の中、カセットのデザインは大きく変わってきた。1981年からメタリックパッケージを進めていたソニーはAHFのモデルチェンジを持って、それ以降のモデルから路線変更。CHFのリプレイスとしてHFを、BHFの後継にはHF-Sを誕生させた。HFは全面クリアのハーフを、HF-Sには広窓のハーフを採用した。広窓ハーフはBASFやデンオンなどがすでに採用していたがいずれもハブの周囲がクリアになっている程度。HF-Sの広窓はハブの全体がクリアで、左右も黒い部分を枠程度に残すもの。前面はほぼクリアな印象だった。

クリアハーフを世界で最初に作り上げたTDKはADのテープをクリアハーフに収めたAD-Sを投入。同時に白いパッケージを採用した。翌年にはADも白いパッケージになるのだが、それに先行したカタチだ。

また久々に大型の新規参入があった。電子パーツメーカーとして知られていた太陽誘電がザッツ（That's）ブランドでカセットテープを発売したのだ。これまでも参入しては撤退するメーカーが多かったが、いきなりメタルテープ、しかも自社開発、自社生産というところが並々ならぬ決意を感じさせた。ハイポジション並の価格で登場した2モデルだが、オーディオ誌での評価は上々。その後スーパーアロイという新しい磁性体を採用したハイポジションテープEMも追加し、3モデルのラインナップを揃えた。余談だがザッツはその後CD-RやDVD-Rで高い評価を得、書き込み光ディスク分野ではトップブランドに上り詰めるが、記録メディアメーカーとしての歴史はここからスタートしたものだ。

日立マクセルのUDがモデルチェンジ。UDはノーマルのUDIになり、それとは別にハイポジションのUDIIが誕生した。

カセットはアウトドアへ



I ソニー　WALKMAN

ウォークマンのヒットのせいでカセットを外に持ち出す機会が増えたが、そうなるとカセットがかさばるのが気になってくる。いくらコンパクトなカセットとはいえ、何本も持ち歩くとなかなかの大きさになる。カセットを裸で持ち歩けば省スペースだが、ヘッドフォンステレオは早送りや巻き戻しが遅いうえに電池を消耗させるのが嫌で、テープの途中で取り出してしまうことも多く、そのままカバンに入れるのは気が引けた。そこで考えられたのがテープがむき出しになるヘッド用の窓とハブの穴をカバーするだけのケース。カセット本体とほぼ大きさは変わらず、持ち歩きに最適だった。

またこのカセットはラベルの色違いで3色が用意されていたが、全く同じカセットを多色展開したのはこのモデルが初めて。もっともハーフはすべて黒だった。

1983年に発売されたカセットテープ

（単位:円）

NORMAL		30分	42分	46分	50分	54分	60分	80分	90分	120分
ソニー	HF						400		950	
	WALKMAN					500				
	HF-S			450		500	550		800	1150
	AHF			550		650			–	
TDK	AD-S						600		–	–
デンオン	DX1				–		400		–	
	DX3		410		450		550	750	800	
ナショナル	EN	300		350			400		650	
	ED			450			550		850	
ビクター	DA1			350			400		650	900
	DA3			450		500	550		800	
ローディ	UD	370		450		500	550			1200
	ER			–			650		850	1200
日立マクセル	UDI	370		450		500	550		850	1200
富士写真フイルム	GT-I			480			630	830	930	
HIGH		30分	42分	46分	50分	54分	60分	80分	90分	120分
BASF	CR-X			450			550		850	1200
ザッツ	EM			500			650		950	
TDK	HX						950			
デンオン	DX8						850			
ナショナル	EX			550			750		1050	
	ÅNGROM DU			650						
ビクター	DA7			550			750		1050	
日立マクセル	UDII			480		550	600		900	
	XLII-S						850			
富士写真フイルム	GT-II			–			–	–	–	
Metal		30分	42分	46分	50分	54分	60分	80分	90分	120分
ザッツ	MG			600			750		1050	
	MR			700			850		1200	
ソニー	Metal-ES						1050			
ティアック	STUDIO S			950						
TDK	MA			–			950			
	MA-R			–			1550			
ナショナル	EM			750			950		1300	
ビクター	ME-PROII			750			950		1300	



I ソニー　HF



I ソニー　HF-S



I 日本ビクター　DA3



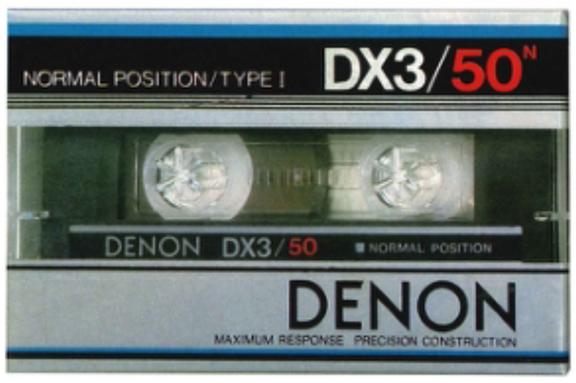
I ナショナル　EN



Ⅳ ソニー　Metal-ES



I 日立マクセル　UDI



I デンオン　DX3



Ⅳ ザッツ　MR



I ソニー　AHF



I ザッツ　EM



Ⅳ ザッツ　MG



Ⅱ デンオン　DX8



Ⅳ ティアック
STUDIO S



I TDK　AD-S



Ⅱ TDK　HX



Ⅳ TDK　MA



Ⅳ TDK　MA-R

低価格ハイポジションの時代



Ⅱ 日立マクセル　UDⅡ

UDがモデルチェンジして、ノーマルのUDⅠとハイポジションのUDⅡに分かれたが、このUDⅡが新しいジャンル、アンダー500円（46分）のハイポジションを作り出した。カセットのデザインはどちらかといえば古い。だが金のラベルは安っぽさがなく、なにより性能（音）が良かった。安くて音が良いハイポジションは、ウォークマンなどを使う若者に受け、レンタルレコードで借りたレコードをハイポジションテープに録音する、というスタイルがとくに学生を中心にスタンダードとなっていった。このUDⅡのヒットによって各社からフォロワー登場するのは1985年のこと。つまりしばらくはUDⅡの独壇場が続くのだ。

またモデルチェンジサイクルが短いカセットテープ業界にあってこのモデルは1987年に2代目が登場するまでなんと4年も売れ続けた傑作ロングセラーカセットだった。

1984

1980年代らしいカラフルなカセットが続々登場

2代目AD-SとDSに代表されるようにクリアハーフのモデルが全盛となった1984年。樹脂の品質が上がり、安価なプラスチックでも高い透明度が確保できるようになったのと、着色技術も向上したためと思われる。また現在でも人気の高いティアックのリールタイプのテープがラインナップを完成。メタル、ハイポジション、ノーマルとラインナップし、変わり種のMIRROR BOWLも登場した。なおデザインコンシャスなリールタイプだけに色違いモデルもラインナップされ、メタルのSTUDIOは金と銀の2色、ハイポジションのCOBALTは金、銀、ブラックの3色、ノーマルのSOUNDは金、銀、ブラックに加えピンク、ブルー、グリーンの6色展開だった。テープそのものは日立マクセル製だが、おそらくその関係で日立ブランドでSOUND BREAKといったHFで始めたパッケージデザインにばかりの新型AHFもHF-ESに置き換えられた。UCX、UCX-Sもデザインを一新された。また、ザッツからはEM-Xが登場。その後長らく続く三角窓のハーフが誕生した。

1984年に発売されたカセットテープ

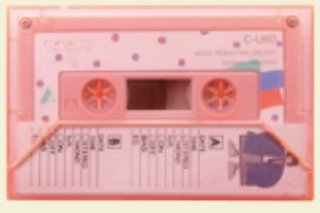
（単位:円）

NORMAL		10分	30分	42分	45分	46分	50分	52分	54分	60分	74分	80分	84分	90分	92分	120分
ケンウッド	ND					470			780					890		
	ND-X					570			680					1100		
三洋電機	U					350										
	HF-ES					520				680				990		
ダイヤトーン	BF	270					360							650		900
	DF						460							850		
	XF						560			700						
ティアック	SOUND							750								
	MIRROR BOWL															
TDK	D		320			370				420				680		940
	DS					370				420				680		
	AD				470			520	570			890	1250			
	AD-S							600				'	'			
	AR					500				630				940		
デンオン	DX3			430			470			570				840		
	HANDY POCKET						500							850		
	DX4									650						
ナショナル	R							730								
	NC					470										
	NS		370			420		470							730	
	FS		440			520			630						940	
日本ビクター	MUSIC PALETTE					370										
ローディ	SOUND BREAK							780								
	DYNAMIC LOW NOISE					370				420				680		940
	UDR					470				570				890		1250
HIGH		10分	30分	42分	45分	46分	50分	52分	54分	60分	74分	80分	84分	90分	92分	120分
ビデオエイコー	ET					480			550	600				900		
	EX					750			850							
ケンウッド	CD					570								1100		
ザッツ	EM-X					600				750				1050		
ソニー	UCX					570				'				1100		
ソニー	UCX-S					680				890				1250		
ティアック	COBALT							850								
TDK	SA						570			680	780					1100
ローディ	UDX					630				630				940		
	EX					570				780				1100		
	SX					680				890				1250		
Metal		10分	30分	42分	45分	46分	50分	52分	54分	60分	74分	80分	84分	90分	92分	120分
ダイヤトーン	MF						760			950						
ティアック	STUDIO G					950		1100		1250						

'80年代はパステルに染まる



I 三洋電機　U（レーベル面）



I 三洋電機　U（カセット面）

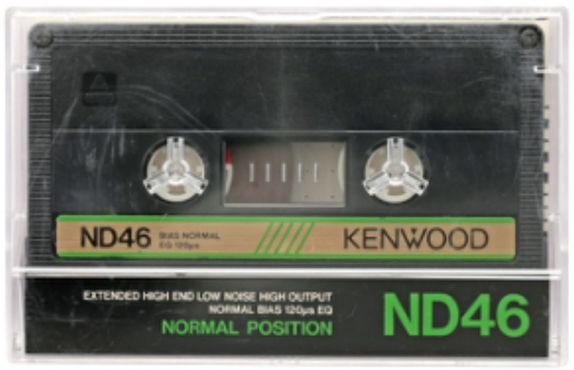


I ナショナル　NS



I デンオン　HANDY POCKET

ピンクやグリーンのハーフ、可愛いイラストが入っていたり、色違いのハーフが選べたり……。原宿文化が始まった1980年代らしく、オーディオまわりにもパステルカラーが溢れた。おそらく以前から質の低いお遊びテープはあっただろう。だが80年代のカラフルテープは性能も良かった。とくに家電メーカーから多く販売されていたようだ。



I ケンウッド　ND



I ナショナル　ED



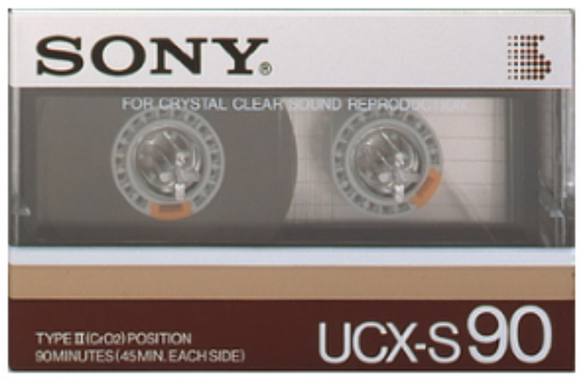
I 日立　UD-R



I ソニー　HF-ES



II ソニー　UCX



II ソニー　UCX-S



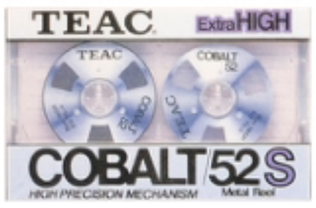
I TDK　AD-S



I TDK　DS



I ティアック　SOUND



II ティアック
COBALT



IV ティアック
STUDIO　G



I ティアック
MIRROR BOWL



I デンオン　DX4



I デンオン　DX3



II ザッツ　EM-X



I TDK　AD



I TDK　A-R

カセットにオープンリールのテイストを盛り込んだ『オー・カセ』





従来のカセットのハーフに当たる部分は骨組み（リールホルダーという）だけ。テープ本体はオープンリールをそのまま小さくしたようなリールに収められている。それがティアックのオー・カセ。テープはノーマル、ハイポジション、メタルの3種類があり、リールホルダーと50分のリール5巻がセットになって、ノーマルが3800円、ハイポジが4550円、メタルが5300円だった。リールは1巻ずつでも販売され、カラフルな5色セットや、2巻+ホルダーのセットなどもあった。さらにリール8巻が収まるキャリーバッグやリールスタンドも用意された。

I II IV ティアック　OPEN CASSETTE

1985

そしてカセットは熟成したマーケットに

この年もっとも大きなトピックは新ブランド、アクシア（AXIA）の登場だろう。TDK、ソニー、日立マクセルに続く歴史を持ちながら、もっとも低迷していた1984年にはなんと2・5%のシェアしかなかったという富士写真フイルム。そのため1969年のカセットテープ1号機以来使われ続けた『FUJI』を捨て、新ブランドとして生まれ変わった。ターゲットは15歳男子。メインボリュームの高校生〜大学生よりも下を狙ったのだ。イメージキャラクターは当時中学生に人気のあった斉藤由貴を起用。

この戦略は当たり富士写真フイルムのカセットテープ事業部は息を吹き替えした。またアクシアの1号モデルでもあったPSシリーズは21世紀まで続くロングセラー・ブランドとなった。

この頃になるとテープ技術も頂点に近づきつつあって、これまでのように「良い音で録るならハイポジかメタル」という常識は覆されつつあった。例えば先に述べたアクシアPS-Iはノーマルながらコバルトを添加したハイレスポンスベリドックス磁性体を採用していたし、ザッツRXも超微粒子ファイン・クリスタル・コバルト磁性体を用いていた。デンオンDX4も高感度ノンポアコバルト被着酸化鉄を採用。コバルト系は従来ハイポジションテープに使われていた磁性体だが、それをノーマルに用いたのだ。コバルト系の元祖TDKもAR-Xでコバルト系アビリン磁性体を超微粒子化しより高充填とすることで高効率化に成功。

テープだけでなくソニーはテープのガイド部分にセラミックコンポジットブロックを採用することでテープの性能を存分に引き出すことに成功。日立マクセルのXLII-SはMXやXLII-Sと同じ重量級の樹脂をハーフに使いSS・PAメカによりこれまでにない滑らかな走行性能を得たことで、テープの性能をスポイルする要因を排除した。このようにテープ（磁性体など）とハーフ両面の進化によって、ノーマルであってもかつてのハイポジ、メタル並の性能を発揮するテープが珍しくなくなった。

1985年に発売されたカセットテープ

（単位:円）

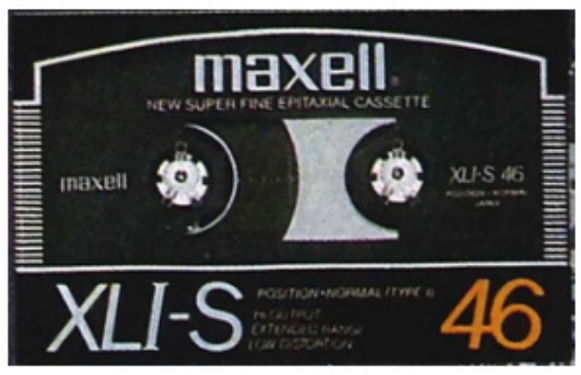
NORMAL		42分	46分	50分	52分	54分	60分	80分	90分	120分
アクシア	JP		370				420		680	940
	JC		オープン							
	PS-I		470			520	570		840	
	GT-I		500				660	870	970	
コニカ	JJ			370			420		680	940
	SS			470			570		890	
	XX			520			680		990	
ザッツ	RX		450				570		880	
	EVEI		470				590		890	
	FX		480				600		900	
ソニー	Gokkigen46		400							
	what's up?		470							
	HF-PRO		600				800		1150	
TDK	AR		500				630		940	
	AR-X		580			680	780		1000	
デンオン	DX1 PASTELLIVE			370			420		680	940
	DX-3F			470						
	DX4									
ビクター	ROOT√				750					
日立マクセル	UR		370				420		680	940
	UR-F		390				450			
	UDI-R						-			
	XLI		520			600	680		990	
	XLI-S		570				780		1100	
HIGH		**42分**	**46分**	**50分**	**52分**	**54分**	**60分**	**80分**	**90分**	**120分**
BASF	CR-X		450				550		850	1200
アクシア	PS-II		500			570	630		900	
	GT-II		600			680	810	1020	1130	
コニカ	EE			570			780		1100	
ザッツ	EVEII		520				680		990	
シチズン	MS		500				650		950	
	MS2		600				750		1050	
ソニー	Do		500				630		940	
	UX		500			550	600	800	900	
	UX-PRO		700				900	900	1250	
TDK	SF		500			570	630		940	
	SA-X		680				890		1250	
デンオン	HD6	460		500			630	840	940	
	HD-S	660		700			890	1100	1250	
日立マクセル	UDII-U		550						1100	
	XLII		570			680	780		1100	
	XLII-S		680				890		1250	
Metal		**42分**	**46分**	**50分**	**52分**	**54分**	**60分**	**80分**	**90分**	**120分**
ケンウッド	MD						780			
コニカ	MM			780			990		1350	
ザッツ	EVEIV		680				830		1180	
	MG▶X		650				800		1150	
TDK	MA-X		780				990		1350	1350
	MA-XG		1400				1600		1950	1950
デンオン	MD			800			990		1350	
ビクター	ME-PRO		780				890		1350	
日立マクセル	MX		780				890		1350	



Ⅳ 日立マクセル　MX



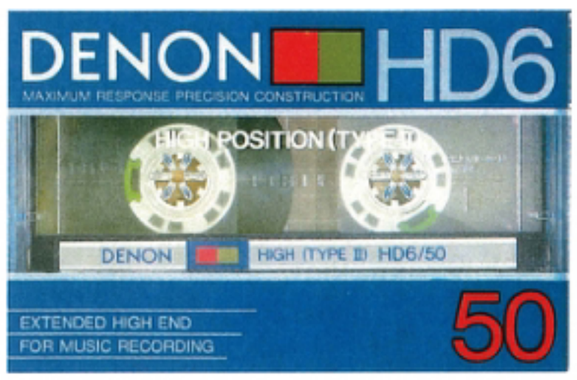
Ⅱ 日立マクセル　XLⅡ-S



Ⅰ 日立マクセル　XLⅠ-S



Ⅰ アクシア　PS-I



Ⅱ デンオン　HD6



Ⅰ アクシア　JC



Ⅰ アクシア　JC



Ⅰ アクシア　JP



Ⅰ アクシア　GT-I



Ⅱ アクシア　GT-Ⅱ



Ⅰ 日立マクセル
UR

カラフルなハーフの実力派たち

これまでカラフルなカセットは家電メーカーのものが多かった。これは必ずしもオーディオマニアのための店ではない系列家電小売店やスーパーなど一般ユーザー向けの製品だったためだと思われる。しかしこの頃になるとソニーや日立マクセルなどのカセットのトップブランドもカラーハーフのテープを多くラインナップしてきた。

日立マクセルのUR-Fはニュー・ピュアクリスタル・ガンマ酸化鉄を採用。尖った性能ではないものの低音から高音までそつのないサウンドを実現している。ソニーGokkigen46！！とwhat's up?は、実質的にはそれぞれHFとHF-Sのハーフのカラー違いと実力は折り紙付きだ。デンオンのPASTEL LIVEもピンクやイエローといった5色のパステルカラーのハーフが特徴だが、中身はDX1とこちらも音は安定の性能。

ザッツのRXの場合は、ファイン・クリスタル・コバルト磁性体の採用でノイズレベルを低減。残留磁束密度は1600ガウス、保磁力は380エルステッドとこれまでのノーマルのレベルを超える性能を持ちながら、白いハーフというのが斬新な組合せだった。下の写真はじつはRXの発売記念として限定販売されたもので、ブルー、ピンク、グリーンのケースに収められた3巻のパステル・セットという商品。本体はいずれも白だがケースの色を変えてカラー・バリエーションを展開したのが新しかった。



Ⅰ 日立マクセル　UR-F



Ⅰ ソニー　Gokkigen46!!



Ⅰ ザッツ　RX





Ⅰ ソニー　what's up?

そしてカセットは
熟成したマーケットに

1985



Ⅳ TDK　MA-XG



Ⅱ ソニー　UX-PRO



Ⅰ ザッツ　EVE



Ⅱ ザッツ　EVEⅡ



Ⅳ ザッツ　EVEⅣ



Ⅰ デンオン　DX4



Ⅰ デンオン
PASTEL LIVE
（レーベル面）



Ⅰ デンオン
PASTEL LIVE
（カセット面）



Ⅰ 日立マクセル
UDⅠ-R



Ⅱ 日立マクセル
UDⅡ-U



Ⅰ 日立マクセル
XLⅠ



Ⅱ 日立マクセル
XLⅡ



Ⅰ ソニー　HF-
PRO



Ⅰ ソニー　UX



Ⅰ ザッツ　FX



Ⅰ ザッツ　MG▶X



Ⅰ TDK　AR



Ⅳ TDK　MA-X





Ⅱ アクシア　PS-
Ⅱ



Ⅱ ソニー　Do



Ⅱ TDK　SF



Ⅱ ザッツ　Q

ハイポジション&ハイコストパフォーマンス
UDⅡを狙い撃ち!!

低価格ハイポジションという新しい属性を生み出した日立マクセルのUDⅡ。中低域に適したガンマ酸化鉄と高域に優れたコバルトフェライトを複合結晶化する技術を独自に開発。この磁性体を社内で生産することによって優れたコストパフォーマンスを実現していた。高性能かつ低価格なUDⅡはヒットモデルとなった。

そうなると他社も黙って見ているわけにはいかない。UDⅡの対抗モデルを開発し、1985年に相次いで投入してきた。TDKからはSAの下位モデルとしてSFが誕生。伝家の宝刀、アビリン磁性体を超微粒子にして採用。パステルというよりはややブルーグレーに近い独特なカラーのハーフで気軽に使える感じを演出。ちなみにハーフはSP-Xメカで走行も安定。またソニーからはDoが登場した。新磁性体ユニアクシャル（Uniaxial）を採用し、UCX比でMOL1.0dBアップ。ハイポジションならではの高域に加え、力強い中低域再生も実現した。

さらにアクシアからはクリアハーフのPS-Ⅱが登場。ハーフは通常のポリスチレンではなくスーパークリスタルハイポリマー樹脂を採用し、美しい外観と耐寒マイナス40度、耐熱110度というタフネスさを発揮。さらに超微粒子磁性体を高密度かつ均一に、さらに向きまで揃えて塗布している。

SF、Do、PS-Ⅱまではすべて1985年に登場。すべて46分500円という価格設定だ。その翌年1986年には高性能なカセットを廉価で出すことに長けたザッツからQが登場する。やはり超微粒子の新磁性体を均一に分散充填するバインダーシステムを開発。高性能ながら46分で480円という価格で発売。低価格ハイポジ戦争は激化していった。


Walk
Pen Pen
WalkPenPen
Walk Pen Pen
normal position normal bias
CHF 90
VOL
REW
play
FF
stop
REC
SONY
Walkman
SONY

1986

ニューブランド『AXIA』の躍進と蒸着テープの増殖

この前年に誕生したばかりのアクシアは、主力のPS-Ⅰ、PS-Ⅱの他はベーシックなJP、カーステレオ専用テープのGT-Ⅰ、GT-Ⅱというミニマムなラインナップだった。ラインナップの拡充が急がれたなか誕生したのがMasterシリーズだった。磁性体にはPSシリーズでおなじみのベリドックス磁性体を進化させたベリドックス・マスターという磁性体を各ポジションに合わせ新開発していたが、一番の注目点はハーフだった。世界初となるサーマル・トランスファー4LCハーフで、保護層（表層）、合金蒸着箔層、接着層、ラテックスコンパウンド樹脂層の4層からなるハーフだ。この凝ったハーフが微細な振動まで吸収。変調ノイズの大幅な低減に寄与している。このアクシアのフラッグシップともいえるMasterシリーズは、ノーマルのHD-Masterが700円（60分）、ハイポジションのSD-Masterが750円（同）、メタルのXD-Masterが850円（同）と低価格でラインナップされた。

また、ナショナルは独自の蒸着テープを幅広く展開する。蒸着テープは従来型の塗布層の上にコバルトイオン層を蒸着させることで2層構造としたテープ。蒸着層は柱状の磁性体がテープ面に対し垂直に、しかも隙間なく並べられるため、充填率はほぼ100%になる。さらに表面を鏡面処理するため、まるで金属のように輝くテープとなっている。このかつてない充填率を誇る蒸着層は、美しい高域を受け持ち、かつ塗布層の乱れた磁力線を整える役目も持っているという。ナショナルは通常のテープは他社からのOEMも多かったというが、蒸着テープに関してはすべて自社で生産していたようだ。

この年はほかにも、TDKがライナップを一新し、AD、AR、SFはすべてH型の広窓を持つ独特のハーフに共通化。またDは姿を消し、代わりにAEが登場した。デンオンは若干わかりにくかった商品展開を整理。ノーマルはRDを軸に、ハイポジションはHDを軸としたラインナップに一新。HDは46分で480円とハイポジ最低価格帯となった。



Ⅰ ヤマハ
MUSIC-R



Ⅰ ヤマハ
MUSIC-RX



Ⅱ ヤマハ
STUDIO-R



Ⅳ ヤマハ
METAL-R

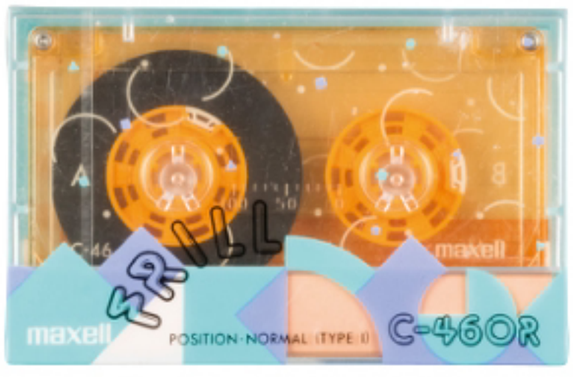
1986年に発売されたカセットテープ

（単位:円）

NORMAL		10分	16分	30分	40分	42分	46分	50分	54分	60分	80分	90分	92分	120分
アクシア	JP-F						390			440		700		940
	HD-Master						550			700		1000		
ザッツ	FX						500			620		920		
	CD						500		570			920		
三洋	W						400							
ソニー	A・la?						300							
	HF	320					370			420		680		940
ダイヤトーン	BH	270						360		400		650		900
TDK	AE	290	300		320		370			420		680		940
	AD						470	500		570	780	890		1250
	AR						500	530		600	800	900		
デンオン	RD					430	450	470		550	750	800		1150
	RD-X					460		500		630	840	940		
ナショナル	G ÅNGROM DU													
	X ÅNGROM DU						570		680				1100	
ビクター	AF			350			400			450		710		970
ローディ	SR						570			980		1000		
日立マクセル	FRILL													
	UD Ⅰ-S						480			580		900		940
ヤマハ	MUSIC-R						470			570		890		
	MUSIC-RX						500			630		940		
HIGH		10分	16分	30分	40分	42分	46分	50分	54分	60分	80分	90分	92分	120分
アクシア	SD-Master						600			750		1050		
ザッツ	Q						480		550			920		
	CDⅡ						600		680			1050		
TDK	SF						500		570	630		940		
デンオン	HD					460	480	500		630	840	940		
ナショナル	HG ÅNGROM DU						680		800				1350	
ビクター	UF						570		680	780		1100		
日立マクセル	UDⅡ-S						510			640		950		
ヤマハ	STUDIO-RX						680			890		1250		940
Metal		10分	16分	30分	40分	42分	46分	50分	54分	60分	80分	90分	92分	120分
アクシア	XD-Master						700			850		1150		
	MR▶X						750			920		1250		
ソニー	Metal-S						780			990		1350		
ナショナル	MX ÅNGROM DU						1400							
ヤマハ	METAL-R						780			990		1350		



I ソニー　HF



I 日立マクセル　FRILL



I 日立マクセル　FRILL



IV ナショナル　MX ÅNGROM DU



I ナショナル　X ÅNGROM DU



I ナショナル　G ÅNGROM DU



I デンオン　RD



I ザッツ　CD



II デンオン　HD



I アクシア　HD-Master



II アクシア　SD-Master



IV アクシア　XD-Master



I アクシア　JP-F



I 日立マクセル
UDI-S



II 日立マクセル
UDII-S



II ザッツ　CDII



IV ソニー
Metal-S



I ソニー　A·la?



I ソニー　A·la?



I ソニー　A·la?



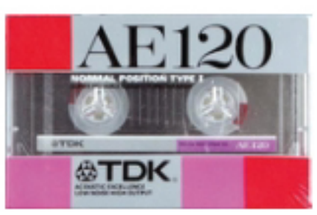
I ソニー　A·la?



I ソニー　A·la?



I デンオン　RD-X



I TDK　AE



I TDK　AD



I TDK　AR



II TDK　SF

1987

ハイポジ、メタルの低価格化が進む



デンオン　RE



TDK　AR-X



ソニー　HF-X

やもた０

日立マクセルのＵＤⅡが46分５０円という低価格で業界を震撼させたのも今や昔。５００円を切る製品も珍しくなくなってしまった。もはや６００円を超えると高級ハイポジという位置づけだ。この流れはメタルテープにも言え、46分７００円という線が普及モデルの線引となってしまった。

そのうえＣＤが普及したため、カセットテープの音源はＣＤが一般的になり、ますます高性能化が求められた。そんななかＭＡ-Ｒ以来の高級テープとしてソニーのＭａｓｔｅｒシリーズが誕生した。

1987年に発売されたカセットテープ

（単位:円）

NORMAL		30分	40分	42分	46分	50分	54分	60分	70分	74分	80分	90分	100分	108分	120分
アクシア	PS-IS				470		520	570				840			
	PS-IX				500		550	600				890			960
	GT-IX				530		590	650				940			
ケンウッド	ND				470			560				850			
	ND-X				500			600				900			
ザッツ	PHI				470		540		650			830		1000	
	EVEI				470		540	590				890			
	FX-XP				570			750				980			
ソニー	HF-S				400		450	500				700			1000
	HF-X				450		500	550			700	890			1150
TDK	AR-X				580		680	780				1000			
デンオン	RE				370			420				680			940
	RD-Z				400	430		500			650	700			900
	RD-F				470										
	RD			430	450	470		550			750	800			1150
	RD-X			460	480	500		630			840	940			
ナショナル	NA	320			370			420				680			940
	GA				470			570				890			
ビクター	AF I	350			400			450				710			970
	GF I				470		500	570				890			
日立マクセル	Cassette Cologne		350			400		500				700			
	UD I -N				400	430		500			650	700			900
	XL I				500		570	630				940			
HIGH		30分	40分	42分	46分	50分	54分	60分	70分	74分	80分	90分	100分	108分	120分
アクシア	PS-IIS				500		570	630				900			
	PS-IIX				530		600	660				950			
	GT-IIX				530		590	650				940			
ケンウッド	CD				550			660				990			
ザッツ	PHII				520		610		700			920			
	EVEII				520		610	680				990			
	EM▶X				600			750				1050			
	EM-XP				670			860				1170	1350		
ソニー	UX-S				550		600	650			800	850			
	UX-Master				800			1000				1400			
TDK	SA				570		680	780				1100			
	SA-X				680			890				1250			
デンオン	HD				450	470		550		650		750			
	HD-X			510	530	550		750			950	1050			
	HD-XS				680	700		890				1250			
ナショナル	HA				500			630				940			
ビクター	UFII				570		680	780				1100			
日立マクセル	UDII				500		570	630				940			
	XL II				570		680	780				110			
Metal		30分	40分	42分	46分	50分	54分	60分	70分	74分	80分	90分	100分	108分	120分
ケンウッド	MD														
ザッツ	PHIV				680		770		950			1180			
	EVEIV				680		770	830				1180			
	CDIV				750		850		1030			1250			
	MR-XP				780			990				1350			
ソニー	Metal Master				1400			1600				1900			
ビクター	XFIV				780			990				1350			



Ⅳ ザッツ　PHⅣ



Ⅱ ザッツ　PHⅡ



Ⅰ ザッツ　PHⅠ



Ⅰ デンオン　RD



Ⅰ デンオン　RD-F



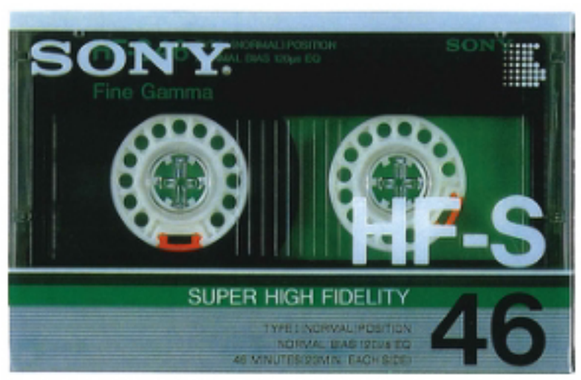
Ⅰ デンオン　RD-F



Ⅳ ザッツ　EVEⅣ



Ⅰ ザッツ　EVEⅠ



Ⅰ ソニー　HF-S



Ⅰ アクシア
PS-Is



Ⅰ アクシア
PS-Ix



Ⅰ アクシア
GT-Ix



Ⅱ アクシア
PS-IIs



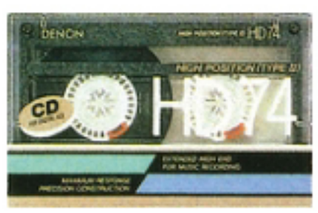
Ⅱ アクシア
PS-IIx



Ⅰ デンオン
RD-Z



Ⅰ デンオン
RD-X



Ⅱ デンオン　HD



Ⅱ デンオン
HD-X



Ⅱ デンオン
HD-XS



Ⅰ 日立マクセル
Casesette
Cologne



Ⅰ 日立マクセル
UDI-N



Ⅰ 日立マクセル
XLI



Ⅱ 日立マクセル
UDⅡ



Ⅱ 日立マクセル
XLⅡ



Ⅰ ザッツ　FX・XP



Ⅱ ザッツ　EM・XP



Ⅳ ザッツ
MR・XP



Ⅱ ソニー
UX Master



Ⅳ ソニー
Metal Master

1988

CD録音に特化した細かい分数設定が進む

様々なカセットが誕生した。性能重視のカセットはCD録音が多くなるとしてCD録音とLPとは違い「好きなだけを入れる」、「ミニアルバムを入れる」、「長時間のCDを入れる」など様々な分数バリエーションが必要となってきた。例えば日立マクセルのUDIは30分から120分で8つものバリエーションが用意された。またカセットは持ち出すためだけにうニーズも増え、低廉ノーマルが増えてきた。

カセットのラインナップはますます細分化し、性能を追求する王道カセットテープに対し、ファッション性を重視するカセット群、さらにカラオケやデモテープ用に特化したカセットなど

CD完全対応カセットの誕生



I ソニー　CDiX

CDは74分まで自由に録音できるうえにA面B面もない。アーティストの作品を作る自由度は増し、これまでのように「AB面合わせて46分」という基準がなくなった。そのため多様な分数バリエーションが求められ、それに対応するため、作られたのがCD専用テープだった。

1988年に発売されたカセットテープ

（単位:円）

NORMAL		10分	16分	20分	22分	30分	40分	42分	46分	50分	54分	60分	64分	70分	74分	80分	84分	90分	100分	110分	120分
アクシア	UP								370			420						680			940
	PS-IS								470		520	570						840			
ザッツ	Fm								370		400	420						680			
	Si								400		450			600				700			
	FX-XP								570			750						980			
ソニー	Hip・Pop								300												
	HF					300			350			400						650			900
	CDiX			300			350			400				550							
	カラオケヴォーカル		300																		
	HF-S								400		450	500						700			1000
	EXIST								450												
	HF-ES								500		550	600				750		800			
	HF-Pro								600		650	700				850		900			
TDK	AE					320			370			420						680			940
	if								OP							OP					
	AD								470	500		570				780		890			1250
	AD-X								450		500	550				700		750			950
	AR								500	530		600				800		900			
デンオン	RE-X								390	400		450						700			960
	The AUDITION	330	340	350		370															
	RD-Z								400	420	450		520						750		900
	RD-X								450	480	500		600		650			750			
	RD-R（Zippy-Ⅰ）								450		500		600		650						
ナショナル	GA-X								570			780						1000			
ビクター	AFⅠ					320			370			420						680			940
	J.CLUB								390									700			
日立マクセル	ポシェット								350												
	UDⅠ					390			470		520	570					890		1250		900
	XLⅠ-S								570			780						1000			
HIGH		10分	16分	20分	22分	30分	40分	42分	46分	50分	54分	60分	64分	70分	74分	80分	84分	90分	100分	110分	120分
アクシア	PS-ⅡS								500		570	630						900			
ソニー	UX								450		500	550				700		750			
	UX-S								550		600	650				800		850			
	UX-Pro								700		800	900						1100			
TDK	CUE								OP			OP						OP			
	SR				400				450	480	500	550		600				750			
デンオン	Zippy-Ⅱ								450		500		600		650						
ナショナル	HA-X								680			890						1250			
日立マクセル	CAPSULE COLOGNEⅡ						450			500		570						850			
	XLⅡ-S								680			890						1250			
Metal		10分	16分	20分	22分	30分	40分	42分	46分	50分	54分	60分	64分	70分	74分	80分	84分	90分	100分	110分	120分
ソニー	Metal-S								700		750	800						1000			
	Metal-ES								900		950	1000						1200			
TDK	MA							580	600		700	800				900		1000		1200	
	MA-X								800			1000						1300			
デンオン	MD								780	800					1100				1400		
ナショナル	MA-DU								1400												



I 日立マクセル　UDI



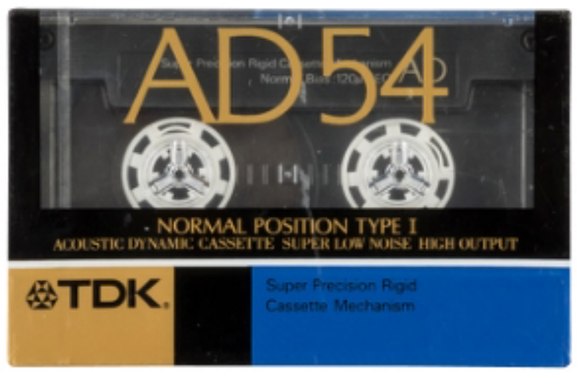
IV ソニー　Metal-S



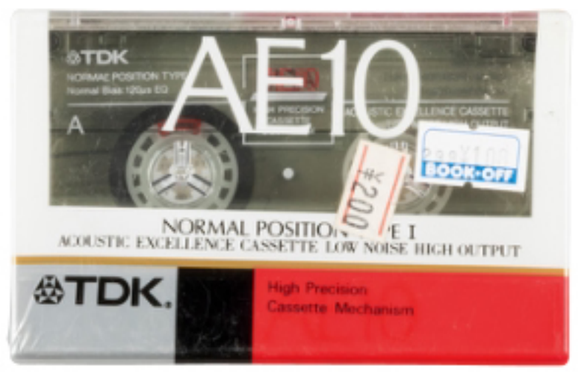
II ソニー　UX



I ソニー　HF-ES



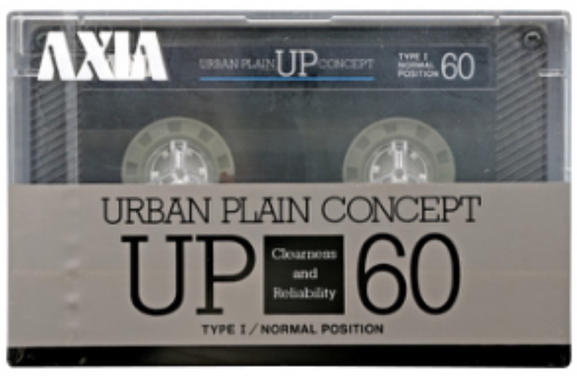
I TDK　AD



I TDK　AE



I アクシア　PS-Is



I アクシア　UP



I ザッツ　Fm



I デンオン
THE AUDITION



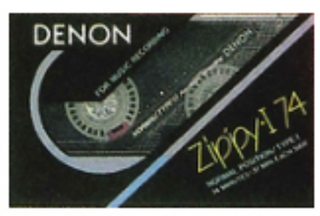
I デンオン　RE-X



IV デンオン　MD



II デンオン
Zippy-II



I デンオン
Zippy-I



II アクシア
PS-IIs



II マクセル
XLII-S



I マクセル
XLI-S



II 日立マクセル
CAPSULE
COLOGNEII



II ソニー　UX-Pro



I ソニー　HF-Pro



I ソニー　EXIST



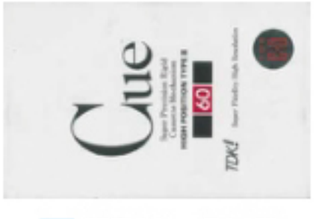
I ソニー　HF-S



I ソニー
Hip・Pop



I ソニー
カラオケヴォーカル



II TDK　CUE



II TDK　CUE



II TDK　CUE



I TDK　if



I TDK　if

1989

カセットの生産本数、技術開発がピークに

カセットの生産本数がこの頃ピークに達し、新製品の数も増えた。分数バリエーションも細分化し、デンオンはRD-Zになんと12種類もの分数を用意していた。バブル前夜でもあり、なんでも作れば売れたという雰囲気だ。



Ⅳ ザッツ　SUONO



Ⅳ 日立マクセル
Metal Vertex



Ⅱ ザッツ　CD-IIS

1989年に発売されたカセットテープ

（単位:円）

NORMAL		10分	12分	20分	30分	40分	42分	46分	50分	54分	55分	60分	64分	65分	70分	74分	75分	80分	84分	90分	92分	100分	110分	120分
アクシア	UP	250			290			340		360		380								550				700
	PS-IS SLIM（※）							1170		1320					1590					1890				
	PS-IX							430	450	480		530				620				720				
	GT-IX							450	470	500		550				650				750				
A&D	HG	270							370			420								680				940
オーレックス	AD							470				570								890				
ザッツ	Fm																							
	OW-1					350		390	410	430		480	500		530					630				
	phI							400	430	450		500			570	600				650				
	Si							400		450					600					700				
	CD-IS							500		570			660		720					920				
ソニー	HF-ES							480	500	530		580				670				770				800
TDK	AD							390	410	430		480			530					630				870
	AD-X					410		430	460	480			550			620							840	
デンオン	RD-Z		280	300	320			390	400	430			500		530	550			600			720		870
	RD-X						420	430	460	480			580		610	630			680	720				
	ZIPPY-I								400				530		550	580			600					
	RD-XS					550			620	650			750			800						1000		
ビクター	RZ I （新）					370		390	410	440		490			540					630				
	RZ I （旧）							400		450		500								650				
	GF							470		500		570								890				
日立	HE-N							350				400								600				800
	UD-N							400		450		450								700				900
	CD-R							570				890								1000				
日立マクセル	CD capsule			290				390		430			500		530								720	
	XL I							450		500		550				650				750		850		
HIGH		10分	12分	20分	30分	40分	42分	46分	50分	54分	55分	60分	64分	65分	70分	74分	75分	80分	84分	90分	92分	100分	110分	120分
アクシア	Hi（※）					1140		1230	1290	1380		1530	1590		1680					2040				
	PS-IIS SLIM（※）							1320		1440					1740					2190				
	PS-IIX							480	500	530		580				670				770				
	GT-IIX							500	520	550		600				700				800				
オーレックス	AX							570				780								1100				
ザッツ	OW-2					400		430	460	480		530	550		580					720				
	phII							520		610			650		700					920				
	CD-IIS							600		680			780		850					1050				
ソニー	CDiXII			350		400		430	450		490	530		560	590		630	660						
	UX							430	450	480		530				620				720		780		
	UX-S							530	550	580		630				720				820				
TDK	SR-X					460		480	510	530			600			670				770				
デンオン	HG							390	400	430		460	490			550						720		
	HD					420			450	480			560		580	630						770		
	ZIPPY-II								450				580		600	630			650					
	HD-X						510	530	550			750						950		1050				
	HD-XS					550		590	620				730		780	810						1000		
ビクター	RZII					400		430	460	480		530			580					730				
日立	UD-X							500				630								940				
	CD-X							680				890								1250				
日立マクセル	XLII							530		600		650	680			750				850		950		
Metal		10分	12分	20分	30分	40分	42分	46分	50分	54分	55分	60分	64分	65分	70分	74分	75分	80分	84分	90分	92分	100分	110分	120分
アクシア	PS-Ⅳ X							500	520	550		600				690				790				
オーレックス	MX							780				990								1350				
ザッツ	OW-4					550		580		680		770	780		820									
	phⅣ							600		700		800				900								
	CD-ⅣS							750		850			920		1030					1250				
	SUONO							1400				1600								1950				
デンオン	MD							500	520			600	630		660	690						850		
日立	MT-X							780				990								1350				
日立マクセル	METAL Capsule							580		680		770			820					960		1060		
	MX							780				990								1350				
	Metal Vertex							1500				1700								2000				



Ⅱ ソニー　UX-S



Ⅱ ソニー　UX



Ⅰ ソニー　HF-ES



Ⅱ ザッツ　ph Ⅱ



Ⅱ ザッツ　OW-2



Ⅰ ザッツ　OW-1



Ⅱ デンオン　HD-XS



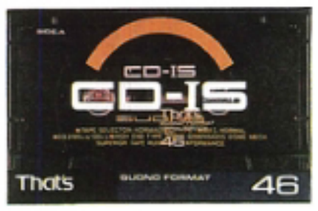
Ⅳ デンオン　MD



Ⅰ デンオン　RD-Z



Ⅰ ザッツ　Fm



Ⅰ ザッツ　CD-ⅠS



Ⅳ ザッツ　CD-ⅣS



Ⅳ ザッツ　OW-4



Ⅱ ソニー　CDixⅡ



Ⅰ アクシア　UP



Ⅰ アクシア
PS-Ⅰx



Ⅱ アクシア
PS-Ⅱx



Ⅳ アクシア
PS-Ⅳx



Ⅰ 日立　UD-N



Ⅰ 日立マクセル
CD Capsule



Ⅳ 日立マクセル
METAL Capsule



Ⅳ 日立マクセル
MX



Ⅱ 日立マクセル
XLⅡ



Ⅰ 日立マクセル
XLⅠ



Ⅰ デンオン
ZIPPY-I



Ⅰ デンオン
RD-XS



Ⅱ デンオン　HG



Ⅱ デンオン　HD



Ⅱ デンオン
HD-X

1990

ついにダイキャストフレーム MA-XGが終了

この前年にザッツSUONO（60分1600円）、日立マクセルMetal-Vertex（60分1700円）という超高級カセットが誕生したが、その一方でこの年、ダイキャストフレームのMA-XGが終了した。MA-XGの後継モデルはMA-XG Fermo（60分2200円）。ハーフは5ピースと凝ったものではあったが樹脂製となり、MA-XGほどのインパクトはない。

一方でソニーは接着ハーフのMETAL-XRを発売。ついに46分50円という超低価格を実現した。デンオンのCD／JACK Ⅳも46分で3巻セットで1500円、TDKはCDing-Ⅳが46分3巻で1380円という低価格メタルを発売。二極化が進んだ。



Ⅱ TDK　SR



Ⅱ TDK　SA



Ⅱ TDK　SA-X



Ⅳ TDK　MA



Ⅳ TDK　MA-X



Ⅳ TDK
CDing-Ⅳ

1990年に発売されたカセットテープ

（単位:円）

NORMAL		10分	20分	30分	40分	42分	46分	50分	54分	60分	64分	70分	74分	80分	90分	100分	110分	120分
アクシア	PS-Is Slim				370		390	410	430	480	500	530	550		630	680		
	AU-I		320				410	430	450	500	520	550			650			
	AU-IX						490	520	550	600	630	660			810			
ザッツ	CD/IF				450		480	510	550	590	640	700	790		890			
ソニー	HF	250	270	290			340			380					550			700
	HF-S						390		430	480			550		630			870
	ES・I						410	430	450	500	520		570		650	710		
	HF-Pro						580		630	680			770		880			
TDK	CDingⅠ（※）				930		1020	1110	1200	1290	1380	1470	1560					
TDK	AD	330		370			430	450	470	530		580			690			960
	AD-X				450		470	510	530		610		680				920	
	AR						530	560	580	640		690		790	850	960		
	AR-X				510		530	560	580	630	650		720		820			
デンオン	CD▶PAL・I						390		430	360		450			510			
	RG-X						530	560	590	640		700			850			
パナソニック	GX						300		330	370			430		480			
日立マクセル	UD I			310			390	410	430	480	500	530	550		630			870
HIGH		10分	20分	30分	40分	42分	46分	50分	54分	60分	64分	70分	74分	80分	90分	100分	110分	120分
アクシア	PS-IIs Slim				410		430	450	480	530	550	580	620		720	780		
	AU-II	320					450	470	500	550	570		640		740			
	AU-IIX						550	570	600	660	680		760		870			
ザッツ	H2						480	500	530	580	600	630			730			
	CD/IIF				550		580	610	650	690	750	820	910		1010			
ソニー	ES・II						430	450	480	530	550		620		720	780		
	UX-Pro				690				750	820			920		1030			
TDK	CDingⅡ（※）				1020		1110	1200	1290	1380	1470	1560	1650					
	CV-II																	
	SR		430	450			470	510	530	580		640			790			
	SR-X				510		530	560	580		660		740		850			
	SA				510		530	560	580	630		680		770	820	920		
	SA-X					660	670			870					1160			
デンオン	CD／PALII						430		470	520		580			700			
	HG-S	370					430	450	480	520	550	580			740			
	HG-X			530			560	590	630	670		740			880			
パナソニック	HX						330		370	460	490		550			720		
日立マクセル	UDII						430	450	480	530	550	580	620		720			950
Metal		10分	20分	30分	40分	42分	46分	50分	54分	60分	64分	70分	74分	80分	90分	100分	110分	120分
ザッツ	CD/IVF				690		720		790	840	890	960			1150			
ソニー	CDixIV		400		470		510	540	570	610	640	670	700	740				
	METAL XR						500	520	550	600			690		790	850		
TDK	CDing-Ⅳ（※）				1290		1380	1470	1560	1650	1740	1830	1920					
	MA				560		580	620	640	690		750		850	900		1030	
	MA-X						910		970		1050		1120		1230			
	MA-XG Fermo						1980			2200					2530			
デンオン	CD/JACK Ⅳ（※）						1500	1560	1650	1800	1890	1980			2370			



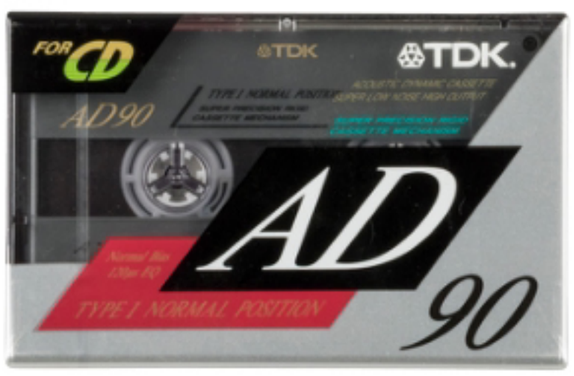
Ⅳ TDK　MA-XG Fermo



Ⅳ デンオン　CD/JACKⅣ



Ⅱ TDK　SR-X



Ⅰ TDK　AD



Ⅰ ザッツ　CD/IF



Ⅰ パナソニック　GX



Ⅱ パナソニック　HX



Ⅰ 日立マクセル　UDⅠ



Ⅱ 日立マクセル　UDⅡ



Ⅰ アクシア
AU-ⅠX



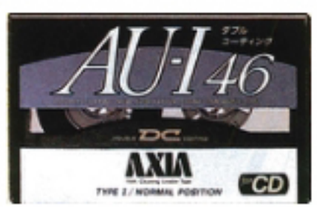
Ⅱ アクシア
AU-ⅡX



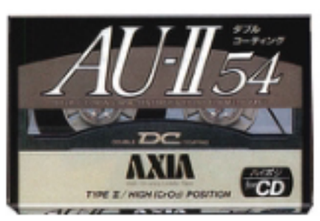
Ⅰ ソニー　HF-S



Ⅰ ソニー　HF-Pro



Ⅰ アクシア　AU-Ⅰ



Ⅱ アクシア
AU-Ⅱ



Ⅰ アクシア
PS-Ⅰs Slim



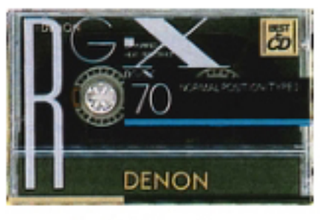
Ⅱ アクシア
PS-Ⅱs Slim



Ⅰ デンオン
CD▶PAL・Ⅰ



Ⅱ デンオン
CD/PALⅡ



Ⅰ デンオン
RG・X



Ⅱ デンオン
HG-S



Ⅱ デンオン
HG・X



Ⅰ ソニー　ES・Ⅰ



Ⅱ ソニー　ES・Ⅱ



Ⅱ ソニー　UX-Pro



Ⅱ ザッツ　H2



Ⅰ TDK　AD-X



Ⅰ TDK　AR



Ⅰ TDK　AR-X

1991

カセットが主役だった最後の世代

デジタルコピーが可能なDATデッキが10万円を切り始めたこの頃。折しもこの1991年に次世代の録音メディアとしてミニディスクやdccが発表され、カセットテープの行く末も徐々に先が見えてきた。ただ未だにカセットテープはユーザーにもっとも身近なメディアだったので、相変わらず需要は高かった。そのため新製品は出るものの製品サイクルは極端に短くなり、とくにCD対応カセットについては、ソニーはCDiXシリーズ、TDKがCDingシリーズを展開していたが、両社ほぼ毎年のようにモデルチェンジしていった。また日立マクセルのUDシリーズやアクシアのPSシリーズもほぼ毎年モデルチェンジを繰り返していった。

このように短いスパンでモデルチェンジを繰り返しつつ、隙間をうめるように新製品を投入。需要がなければすぐに廃版ということを繰り返しながら売れ筋の商品を探していく……そんな印象が強い。カセットテープはもはや良いものを作れば定番商品となって長く売れ続ける、というものではなくなっていたのだ。

そんな中、これまで高級モデルをラインナップしていなかったデンオンが60分で1540円という超高級モデルを発売した。MG-Xだ。真っ白でV字型に切られたスリットを持つハーフがユニークだが、通常のプラスチックに対し約2・4倍の比重を持つコンポジット樹脂で作られている。しっとりとした手触りでズシリと重い。この素材は優れた粘弾性を持ち、振動はハーフで食い止める、というポリシーの元で開発されたという。このハーフを使ったハイポジションHG-Mも同時に発売されていて、こちらも60分で1050円と超高級モデルと言って良いだろう。

だがこのMG-X、HG-X以外のモデルは日立マクセルのXLI・S、XLII・Sを除けば、この年に登場した新モデルはほとんどが低価格モデル。モデル数こそ多いものの傑作が生まれる素地はほとんど潰えたと言っていいだろう。

1991年に発売されたカセットテープ

（単位:円）

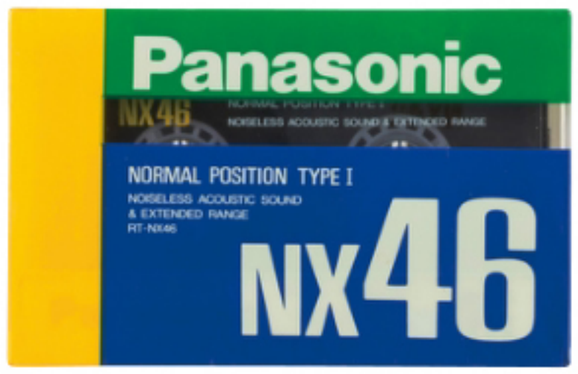
NORMAL		10分	20分	30分	40分	46分	50分	54分	60分	64分	70分	74分	80分	90分	100分	110分	120分
アクシア	A1 Slim	280				370			420								680
	PS-I				410	430	450	470	530	550	580		640		750		
	PS-IX					470	500	530	580	610		680		770			
ザッツ	CD/IF				420	450	470	500	550	580	620	650		750			
ソニー	HF	280	300	320		370			420					610			770
	CDix I	300	320		370	400	430	460	500	530	580			550		800	
	X・I					430	450	470	530	550		610		690			960
TDK	CDingI（※）				1020	1110	1230	1320	1410	1530	1620	1710					
	AR					530	560	580	640		690		790	850	960		
デンオン	RG-S					470	500	530	580		640			790			
パナソニック	NX			220		260			300					450			600
日立マクセル	US I					410	440	470	500		560			680			860
	XL I ・S					570		630	660			750		840	900		
HIGH		10分	20分	30分	40分	46分	50分	54分	60分	64分	70分	74分	80分	90分	100分	110分	120分
アクシア	PS-Ⅱ				450	470	500	530	610		640		720	790	860		
	PS-ⅡX					530	550	580	640			740		850			
ソニー	CDix Ⅱ		350		410	440	460	510	550	580	620	660	690				
	UX turbo					430		480	530					720	780		
	X・Ⅱ					450	470	500	550	580		650		750	820		
ザッツ	CD/ⅡF				500	530	570	600	650	680	720	750	800	850			
TDK	WALKER CDingⅡ					550	580	610	650		710			850			1050
	CDingⅡ				—	—	—	—	—	—	—	—					
	SR-Limited					OP		OP	OP					OP			
	SA				560	580	620	640	690		750		850	900	1010		
デンオン	GX-Ⅱ					OP	OP	OP	OP					OP			
	HG-M					830			1050					1490		1670	
日立マクセル	USⅡ					470	500	530	560		620			740			920
	GPXⅡ					610			700					880			
	XLⅡ・S					660		720	750			840		930	990		
Metal		10分	20分	30分	40分	46分	50分	54分	60分	64分	70分	74分	80分	90分	100分	110分	120分
アクシア	METAL		430			510	540	570	610		670				870		
	PS-Ⅳ				470	510	540	570	610		670		740	800			
	AU-ⅣX					580	600	630	690	710		790		900			
ソニー	CDiXⅣ		400		470	510	540	570	610	640	670	700	740				
	ES・Ⅳ					600	630	670	740	770		870		1000	1090		
TDK	CDingⅣ				470	510	540	570	610	640	670	700					
	MA					580	620	640	690		750		850	900		1030	
デンオン	MG-X					1320			1540					1750	1820		
日立マクセル	METAL UD					510	540	570	610		670	700		800		940	
	METAL GPX					710			800					980			
	METAL XS					800		860	890			980		1070	1130		



Ⅱ ザッツ　CD/ⅡF



Ⅰ ザッツ　CD/ⅠF



Ⅰ パナソニック　NX



Ⅳ デンオン　MG-X



Ⅳ 日立マクセル　METAL UD



Ⅳ 日立マクセル　METAL GPX



Ⅱ 日立マクセル　XLⅡ・S



Ⅱ 日立マクセル　USⅡ



Ⅱ TDK　SR Limited



Ⅰ アクシア
A1 SLIM



Ⅰ アクシア
PS-Ⅰx



Ⅱ アクシア
PS-Ⅱx



Ⅳ アクシア
METAL



Ⅳ アクシア
PS-Ⅳ



Ⅰ デンオン　RG-S



Ⅰ 日立マクセル
USⅠ



Ⅰ 日立マクセル
XLⅠ・S



Ⅱ 日立マクセル
GPXⅡ



Ⅳ 日立マクセル
METAL XS



Ⅳ ソニー　ES・Ⅳ



Ⅱ ソニー　CDixⅡ



Ⅰ ソニー　CDixⅠ



Ⅱ ソニー
UX turbo



Ⅰ ソニー　X・Ⅰ



Ⅱ ソニー　X・Ⅱ



Ⅰ TDK　CDing-Ⅰ



Ⅱ TDK
CDing-Ⅱ



Ⅳ TDK
CDing-Ⅳ



Ⅱ WALKER
CDingⅡ

1992

CD対応カセットの増殖と次世代メディアの予感

ｄｃｃ（Digital Compact Cassette）規格がコンパクトカセットを開発したフィリップスと松下電器の共同開発によって発表された。

カセットにとっては生みの親に見放されたカタチではあるが、ＤＡＴが回転ヘッド前提でありコンパクト化に向かないことや、小型化に適したソニーのＮＴが32ｋＨｚ／12ｂｉｔとあえてＤＡＴよりもロースペックで作られたことなどから、次世代のデジタル録音メディアが求められていたのは確かだった。

数年前からその傾向にはあったが、ＣＤ専用（分数バリエーションが豊富）、お手軽カセット（実用、カラオケなど）、そして従来からの性能重視のカセットに分かれた。日立マクセルのＵＤシリーズ、ＸＬ-Ｓシリーズ、アクシアのＰＳシリーズのほか、ＴＤＫのＡＤ、ＡＲ、ＳＲ、ＳＡなどの定番モデルも相変わらずラインナップされており、まだオーディオマニアの要求にも十分応えられる実力派が多く残っていた。またソニーは定番シリーズに代わるＥＳシリーズをモデルチェンジしてライバルメーカーに対抗していた。

CD専用カセット揃い踏み



Ⅰ 日立マクセル CD's Ⅰ



Ⅱ 日立マクセル CD's Ⅱ



Ⅳ 日立マクセル Metal CD's

TDK、ソニー、日立マクセルのカセット御三家で唯一ＣＤ専用モデルをラインナップしていなかった日立マクセル。TDKのCDing、ソニーのCDiXに対し、UDの分数バリエーションを刻むなどで対抗したり、カプセルシリーズでCD対応の分数を用意しつつもあえて名前に『CD』をつけていなかった。

だがこの年、ついに『CD』をネーミングでアピールするCD'sシリーズを発売。TDK、ソニーに対抗するモデルをラインナップした。ちなみにアクシアは1995年に同様のコンセプトのBOXシリーズを発売する。

1992年に発売されたカセットテープ

（単位:円）

NORMAL		10分	20分	30分	40分	46分	50分	54分	60分	64分	70分	74分	80分	90分	100分	110分	120分
アクシア	PS-Ⅰ				410	430	450	470	530	550	580		640	690	750		
ザッツ	OW-1				390	430	450	470	530	-	580			690			
ソニー	X・Ⅰ					430	450	470	530	550		610		690			880
	ES・Ⅰ					530	560	580	640	670		730		840	920		
TDK	CDingⅠ（※1）				1020	1110	1230	1320	1410	1430	1620	1710					
	AD			400		430	450	480	520	550	580	610		690	750	810	870
	SUPER CDingⅠ					430	470	500	530	570	600	630					
	AD-X					470		530	570	600				780			
	AR					530	560	580	640		690		790	850	960		
デンオン	RS	280	300	320		370			420		510			640			850
	GR-Ⅰ							440	480					630			810
	GR-Ⅰs					470		530	580		640		710	790			
日立マクセル	CD'sⅠ		300			370	400	430	460	490	520	550	580				
	UDⅠ			350		430	460	490	530	560	590	620		720			920
HIGH		**10分**	**20分**	**30分**	**40分**	**46分**	**50分**	**54分**	**60分**	**64分**	**70分**	**74分**	**80分**	**90分**	**100分**	**110分**	**120分**
アクシア	PS-Ⅱ				450	470	500	530	580	610	640		720	790			860
	BLACK SLIMⅡ					600		650	710		770						
ザッツ	OW-2				400	430	460	480	530	550	580			720			
ソニー	X・Ⅱ					450	470	500	550	580		650		750	820		
	ES・Ⅱ					580	610	630	690	720		780		890	970		
TDK	CDingⅡ				370	410	440	470	510	540	570	610	640	700			880
	SUPER CDingⅡ（※2）					940	1000	1060	1140	1200	1260	1340					
	SR		430		450	470	500	530	560	590	620	650	690	760			960
	SR-X					530		590	630	660				840			
	SA					580	620	640	690		750		850	900	1010		
デンオン	GR-Ⅱ					460		470	510					690	750		
日立マクセル	CD'sⅡ		330			420	450	480	510	540	570	600	630				
	UDⅡ					470	500	530	570	600	630	660		760			960
Metal		**10分**	**20分**	**30分**	**40分**	**46分**	**50分**	**54分**	**60分**	**64分**	**70分**	**74分**	**80分**	**90分**	**100分**	**110分**	**120分**
ザッツ	OW-4				550	580		680	770	780	820						
ソニー	X・Ⅳ					550	570	600	630	660		720		810	880		
	ES・Ⅳ					710	680	700	760	790		850		960	1040		
TDK	CDingⅣ（※1）				1410	1530	1620	1710	1830	1920	2010	2100					
カセット	SUPER CDingⅣ					570	600	630	670	700	730	760					
	MA					580	620	640	690		750		850	900		1030	
日立マクセル	METAL CD's		410			500	530	560	590	620	650	680	710				
	METAL UD					540	570	600	630		690	720		810		930	

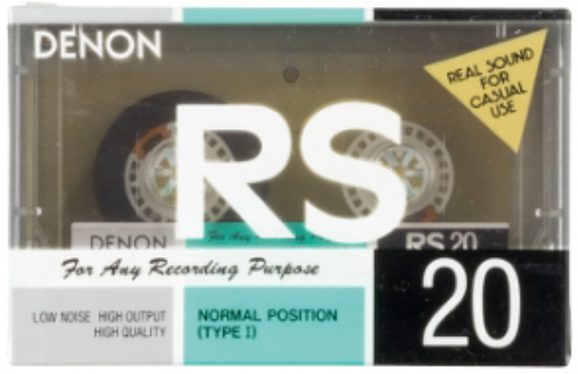
※1…3本パックの価格、※2…2本パックの価格



Ⅱ ザッツ　OW-2



Ⅳ ソニー　XⅣ



Ⅰ デンオン　RS



Ⅳ 日立マクセル　METAL UD



Ⅱ 日立マクセル　UDⅡ



Ⅰ 日立マクセル　UDⅠ



Ⅱ デンオン　GR-Ⅱ



Ⅰ デンオン　GR-Ⅰ



Ⅱ アクシア　PS-Ⅱ



Ⅰ デンオン
GR-Is



Ⅱ アクシア
BLACK SLIMⅡ



Ⅰ アクシア　PS-I



Ⅱ デンオン　HG-M
（1991年発売）



Ⅰ ソニー　ES・I



Ⅱ ソニー　ES・Ⅱ



Ⅳ ソニー　ES・Ⅳ



Ⅰ ソニー　XⅠ



Ⅱ ソニー　XⅡ



Ⅰ TDK　AD-X



Ⅰ TDK　AR



Ⅱ TDK　SR



Ⅱ TDK　SR-X



Ⅱ TDK　SA



Ⅳ TDK　MA



Ⅰ TDK　CDing-Ⅰ



Ⅱ TDK
CDing-Ⅱ



Ⅳ TDK
CDing-METAL



Ⅰ TDK
SUPER CDing Ⅰ



Ⅳ TDK
SUPER CDing Ⅳ

1993

録音メディアの主役は徐々にMDにスイッチ

1983年にカセットテープに参入し、メタルテープを身近な存在にした立役者ザッツ（太陽誘電）がこの年カセットテープ事業から撤退した。1988年にCD-Rを発売したこともあり今後は記録メディアの軸足をディスクに置くことになる。また日本市場から姿を消していたスコッチが996Xシリーズで再参入したが、その後の動きとしてはミニディスクに注力するソニーはあきらかにカセットテープからは力が削がれてきていたが、カセットのウォークマンを作る責任からか2002年頃までは新製品を出し続けた。TDKは定番商品を1995年にAE、AD1（AD後継）、AD2（SR後継）、MA（後にMA-EX）の4モデルに絞り1999〜2000年まで継続するが、その後はAEのみとし、2007年に撤退、アメリカのイメーションに事業ごと譲渡してた。アクシアは2002年頃までPSシリーズ、J'zシリーズ、Aシリーズを継続して新製品を出し続けたが2006年に正式に撤退を表明。こうして大手は日立マクセルを除きカセットテープから撤退していった。

歴史上最後の高級カセットテープ



Ⅳ ソニー　Super Metal Master

ミニディスクに本腰を入れ始めた1993年、ソニーはカセットテープ史上最高にして最後の超高級カセット、スーパー・メタルマスターを発売した。メタルマスターですら超弩級の高級、高性能だったのだが、すべての面でこれを凌駕した。

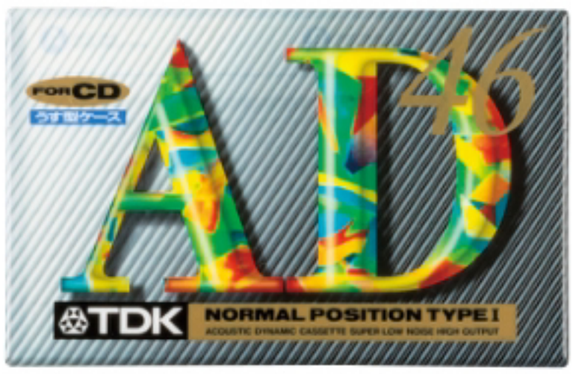
テープはベース、接着層、中低域磁性体、高域磁性体にバックコーティングを加えた5層構造。ハーフは硬軟2種類のセラミックコンポジット材を積層化した2層成形となっていた。ケースはアルミの蓋を持つ高級感あふれるものだったが、60分で2300円という価格設定から見ても、たくさん販売して儲けよう、というものとは別次元のモデルだということが分かる。

カセットテープ文化を支えてきたソニーというメーカーの、一種記念碑的なモデルだったと言えよう。

1993年に発売されたカセットテープ

（単位:円）

NORMAL		10分	12分	20分	30分	40分	42分	46分	50分	54分	60分	64分	70分	74分	80分	84分	90分	100分	120分	150分
アクシア	J'z1		300	330				410	440	470	500	530	560		620	650	680		850	
	PS-I				360	410		430	450	470	530	550	580		640		690		870	
	K1	340						470	500	530	560	590	620	650	680		740			
スコッチ	996X・I							410		470	500	530		590			650			
ソニー	CDixI	300		320		370		400	430	460	500		580		630				850	
	XI							430	450	470	530	550		610			690		880	
TDK	SUPER CDingI							450	490	520	550	590	620	650						
	AD				380		430		450	480	520	550	580	610	650		690		870	980
デンオン	K-RI									410	450		520				620		750	
	GR-I							410		470	500			590	620		680		880	
日立マクセル	UDI	310			330			410	440	470	500	530	560	590			680		880	
	CD・XLI							470	500	530	560	590	620	650	680		740			
HIGH		**10分**	**12分**	**20分**	**30分**	**40分**	**42分**	**46分**	**50分**	**54分**	**60分**	**64分**	**70分**	**74分**	**80分**	**84分**	**90分**	**100分**	**120分**	**150分**
アクシア	J'z2		330	360				450	480	510	540	570	600	630	660	690	720		920	
	PS-Ⅱ				400	450		470	500	530	580	610	640		720		790		940	
	K2	390						520	550	580	610	640	670		730		790		940	
スコッチ	996X・Ⅱ							450		510	540	570		630			720			
ソニー	CDiXⅡ			350		410		440	460	490	540	570	620	640	690					
	XⅡ							450	470	500	550	580		650			750	820		
TDK	SR					460		480	510	540	570	600	630	660	700		760		940	
	SUPER CDingⅡ							490	520	530	590	620	650	690						
デンオン	GR-Ⅱ							470		500	560			650	680		740	800		
	GR-Ⅱs							470		530	580		640		720		810			
日立マクセル	UDⅡ				380	430		410	440	470	500	530	560	590			680		880	
	CD・XLⅡ							530	560	590	620	650	680	710	740		800			
Metal		**10分**	**12分**	**20分**	**30分**	**40分**	**42分**	**46分**	**50分**	**54分**	**60分**	**64分**	**70分**	**74分**	**80分**	**84分**	**90分**	**100分**	**120分**	**150分**
アクシア	J'z METAL							490	520	550	580	610	640	670	700		760			
	PS METAL					470		510	540	570	610	640	670		740		800			
ソニー	CDiXⅣ							510	540	570	610	640	670	700	740					
	Super Metal Master							2000			2300						2600			
日立マクセル	METAL UD							540	570	600	630		690	720			810			
日立マクセル	METAL CD's		410			500	530	560	590	620	650	680	710							
	METAL UD					540	570	600	630		690	720		810		930				



I TDK　AD



II ソニー　XII



I 日立マクセル　UDI



II デンオン　GR-IIs



IV アクシア　J'z METAL



II アクシア　J'z 2



I アクシア　J'z 1



II 日立マクセル　CD・XLII



I 日立マクセル　CD・XLI

そしてカセットは終焉へ



I 日立マクセル　UR

日立マクセルは1994年、URをモデルチェンジ。パッケージには「音楽、会議、英会話に」と記されていたが、ピュアクリスタル磁性体を採用し、高域感度はノーマルのIECリファレンステープに対しプラス2dB、高域MOLもプラス16dBと音楽専用テープに匹敵する実力を持っていた。その後他のテープが次々と生産を終了するなかこのURだけは、1997年に一度モデルチェンジしたがほとんど姿を変えず、現在まで作られ続けている。カセットマニア最後の砦となっているのだ。（写真は現行モデル）



I アクシア　K1



II アクシア　K2



I アクシア　PS-I



II アクシア　PS-II



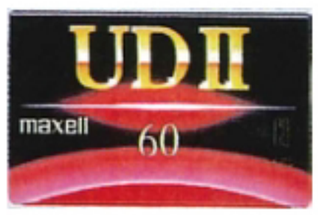
IV アクシア
PS METAL



I デンオン
GR-I



II デンオン
GR-II



II 日立マクセル
UDII



IV 日立マクセル
METAL UD



I ソニー　CDix I



II TDK　SR



I TDK
SUPER CDing I

BRAND STORY
ブランド・ストーリー

TDK

東京工業大学電気化学部長だった加藤与五郎博士と武井武博士によって発明された『フェライト』。両博士の「日本人の頭脳からなる新しい工業を起こす」という理念を受け継ぎ、『フェライト』の工業化のために1935年に設立されたのが東京電気化学工業株式会社、後のTDKだ。フェライトに始まる磁性材料の研究から発展し、1952年には磁気テープの生産に着手。1966年9月にはカセットテープ（シンクロテープ）の生産を始めている。

その後も1968年10月に音楽専用テープ『SD』を発売し、カセットテープを音楽メディアにまで引き上げた功績は大きい。また1973年にビデオテープ用の磁性体として開発したアビリンをカセットテープにも応用し、クロムを使用しないハイポジション『SA』を発売する（1975年）などカセットテープの発展をリードしてきたものの2007年には記録メディア事業をTDKブランドとともに3Mから分離したイメーション社に譲渡。TDKは自らが育てたカセットテープから完全に撤退した。



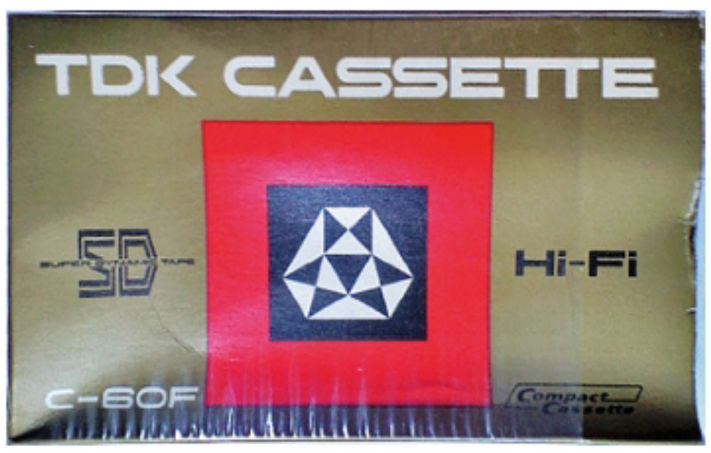
1966年の雑誌広告より。1953年に発売されたシンクロテープのカセット版として誕生。1968年まで『シンクロ』の名前で販売された。

D/SD



1972　D

シンクロカセットの直系、FがTDKのスタンダードだったが、その後ローノイズが加わったTDKのベーシックラインは、1972年にこのDに集約された。



1968　SD

1969年のアポロ11号にも積まれたことで知られるSD。すべての音楽専用カセットはここから始まった。カセットの可能性を世界に知らしめた1本。

もともとレコーダーの付属品、サプライ品という扱いだったカセットテープ。TDKも家電メーカーへのOEMで業績を伸ばしたメーカーだった。しかしカセットへの参入メーカーが増えたり、レコーダーのメーカー自身がカセットを生産するケースが増えるにつけ、自社でカセットテープを生産するレコーダーメーカーも出てきた。そこで自社ブランドのカセットを大々的に打ち出すにあたり、アピールポイントとしたのが『音楽専用』という謳い文句だった。

それまで会話録音程度とされていたカセットの性能を飛躍的に高めたのは、独自に開発した高密度に塗布できる針状磁性体だった。磁性体の開発サンプルに付けられていた『SD（Single Domain）』をスーパー・ダイナミックと読み替え、1968年のCES（北米の家電展示会）で発表。アメリカで先行販売された。SDは圧倒的な高性能でマニアにも受け入れられていった。

その後もカセット市場は拡大し続け、ライバルも増えていった。とくに独自の販路を持つ家電大手各社に対し、TDKがコンシューマーに直接訴える策として取り入れたのが『ストライプパターン』によるC-I戦略だった。D、SD、KRと共通で展開していった。

AD



1979　#02



1977　#01



1981　#03

SDからブルーのストライプパターンを継承した初代ADは1977年の登場。ADとはAcoustic Dynamicの略で、その名称どおり高域の美しさを売りにしていた。磁性体はスタンダードなガンマヘマタイトを改良したリニアフェリックを採用し、ノーマルテープの弱点と言われていた高域特性を改善したという。

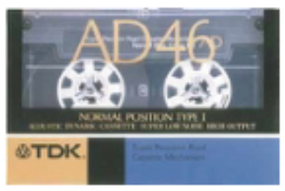
またSDから継承したパッケージもSAのイメージを取り入れたシルバーを混ぜ、高級感と高性能をアピールしていた。このADはコストパフォーマンスに優れたカセットとして大ヒット。音楽専用テープとしては最後期まで続くシリーズとなった。



1984　#04



1986　#05



1988　#06



1989　#07



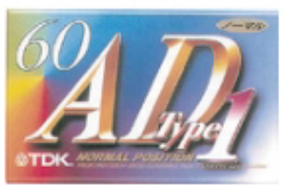
1990　#08



1992　#09



1993　#10



1995　#11



1996　#12



1997　#13

TDK

BRAND STORY
ブランド・ストーリー

AD-S/DS





1984　AD-S (#02)



1984　DS

前身は1983年に登場したAD-Sだ1984年、TDKはDをモデル低共振を目指して作られたSP-チェンジ。さらに黒い重厚な樹脂CメカニズムをCメカニズムを採用。またハーフハーフのDに加え、透明ハーフのDS特殊プラスチックで作られ、剛性(D Spirit)をラインナップ。新設計ップと走行精度の向上が図られ、の透明シート、精度を高めたパーツらにハーフ共振も低減。そのため、の採用など、透明ハーフのために開Dと同一のテープを使いながら、A発されたRC-IIメカニズムでスよりもワンランク上のカセットムーズな走行を実現していた。そのテープとして認識されていた。

SA



1975　#01



1978　#0



1979　#03



1981　#04

二酸化クロムを使ったクロムプはアメリカのデュポンが1966年に開発した磁性体。日本でニーが独占使用契約を結んでいめ、使用にはソニーとサブライス契約が必要だった。そこでTでは二酸化クロムに匹敵する磁を開発しハイポジションテープり上げた。その磁性体が『アビ（AVILYN）』だった。アビはノーマルに使われている酸化鉄にコバルトを化学メッキで被着させた磁性体。二酸化クロムに匹敵する保磁力を実現した。このコバルト系磁性体は国産ハイポジションテープの代名詞ともなり、TDKのみならず国産ハイポジションはほぼすべてコバルト系の磁性体を採用していった。



1984　#05



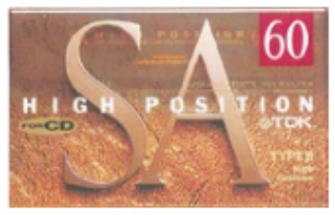
1987　#06



1990　#07



1991　#08

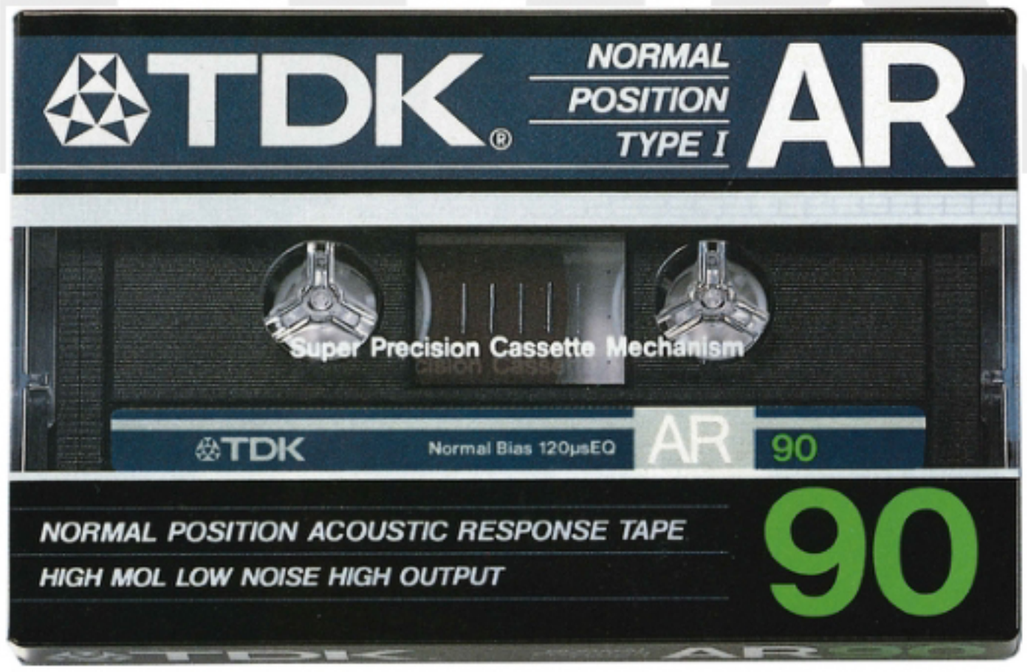


1992　#09



1994　#10

AR



1984　#01

1984年に登場した初代AR。ADの上位モデルとして低ノイズと厚みのある音を売りとして人気に。以降8世代まで続くロングセラーとなった。



1986　#03

2代目ARは1986年、AE、AD、AR、SFとパッケージデザインとハーフを共通化（AEのみ全面クリアハーフ）してモデルチェンジをしている。



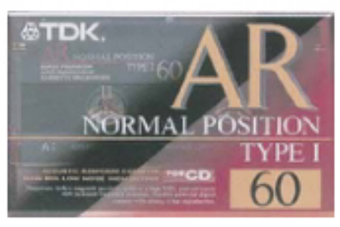
1985　#02



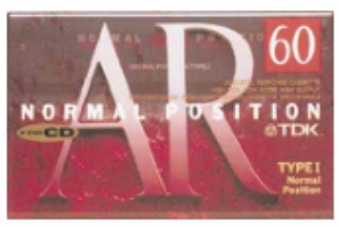
1988　#04



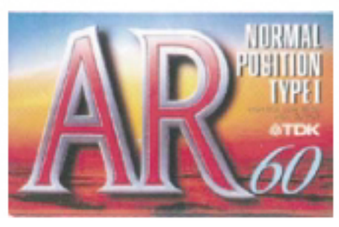
1990　#05



1991　#06



1992　#07



1994　#08

SF/SR



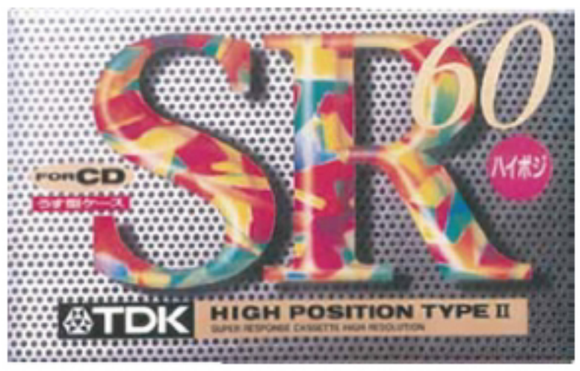
1985　SF (#01)



1991　SR Limited (#01)



1986　SF (#02)



1993　SR (#04)

珍しいグレーがかったブルーのハーフを持つ初代SF。UDⅡ対抗として46分500円のハイポジ群（DoやPS-Ⅱと一緒）に誕生した。

SRは1988年からSFの後継として登場。写真のSRリミテッドは2代目SRのスペシャルバージョンとして登場した。タテ開きのケースを採用していた。

ＡＲ（Acoustic Responce）はそれまでＴＤＫのノーマルテープのトップだったＯＤ（Optimum Dynamic）に代わる高級ノーマルテープとして誕生した。テープに塗布された磁性体の空孔（ポア）をなくしたノンポア・フェリックを採用。１７００ガウスの磁束密度とＡＤに対し、全域でプラス１・０dBとなる高感度を実現している。一方ＳＦ（Super Fidelity）は、ＵＤⅡに始まった低価格ハイポジションブームに対応するために、ＳＡの下位モデルとして誕生したアビリン採用のハイポジション。低価格ながら上位モデル同様のＳＰ－Ｘメカを採用していた。ＳＲ（Super Responce）はＳＦの後継として登場した低価格ハイポジ。



MA-Rはいかにして誕生したのか

通常カセットテープはテープを巻いたハブ（リール）と巻取り側のハブをプラスチックのハーフ（筐体）に収めている。だが国産初のメタルテープにして最高峰として知られるTDK MA-Rはご覧の通りダイキャストのフレームを2枚のアクリル板で挟み込んだ構造を持つ、世界でただひとつのカセットテープだ。特殊な構造と生産効率を考慮してサウスポーの女子工員だけで編成されたチームによる手作りだったという伝説のカセットはいかにして誕生したのだろうか。

写真・山田芳朗
文・澤村　信
取材協力・TDK株式会社



佐藤孝輝

1969年に入社。同年12月に新設された磁気テープ専用の千曲川工場に配属。磁気テープ事業部技術部で開発担当となる。MA-Rではテープ本体以外のほとんどを設計。

■金属製ハーフを製品に

「この構造を考えたのは、TDKデザイン（TDKの100%子会社）のデザイナーさんだったんです」

当時TDKの磁気テープ事業部技術部の開発者だった佐藤孝輝氏はそう振り返った。もっともカセットのハーフに金属を使うというアイデアそのものは技術部からの提案だったようだ。というのも、カセットテープの解析用に佐藤氏らが『神様カセット』と呼んでいた実験用のハーフが存在していた。この『神様カセット』はアルミの削りだしでガイドピンの角度が精密に変更できるものだった。純粋にテープの性能だけを解析・評価するための特注品で、一本数百万円とも言われていた。

「テープの持つ性能を引き出すのがハーフの仕事なんです。この神様テープなら100%は無理としても、テープの性能を限りなく100%近く引き出すことができるのです。そんなことから、ハーフを金属で作る、というアイデアは漠然と生まれたのです」

もちろん1本数百万のカセットをそのまま製品化することは不可能。だがそれを実現可能なカタチとして提案してきたのが前述のデザイナー氏だった。

「ある日、植村さんというデザイナーがモックアップを持ってきたんです」。佐藤氏の記憶によれば、MA-Rの開発には2年半ほどかかったというから、逆算すると1977年の終わり頃か1978年の初めだろう。ちなみにメタルテープの規格策定のためのワーキンググループが磁気テープ工業会の中で作られたのが1978年なので、まだメタルテープが生まれる前のことだった。

そもそもなぜ金属製のハーフが最良の選択なのか。佐藤氏によれば「金属は樹脂に比べると摩擦を低くできます。そのうえ経年変化も小さいので高性能を長時間維持できる」という。

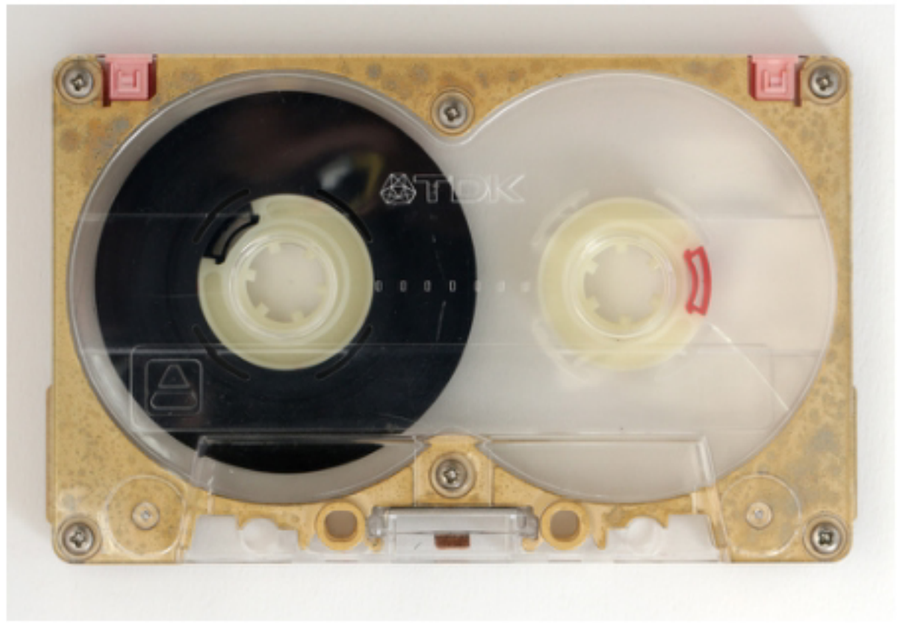
『摩擦』と聞くと素人考えで回転するハブの摩擦かと思ったが、佐藤氏に確認すると「そうではなく、むしろテープガイドの摩擦が重要なんです」と教えてくれた。

テープのガイドピンは、ハブに巻かれたテープがヘッド用の孔を通過し巻取り側のハブに巻かれる間にまっすぐ走行するように、通過するテープをハーフの内部数カ所で保持しているパーツだ。

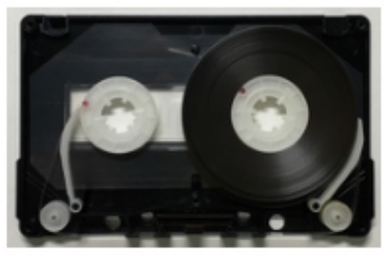
カセット以前のオープンテープの場合、テープそのもの以外のパーツはリールを除けばすべてデッキ側に備わっている。つまりデッキの精度を高めればテープの性能が引き出せるというわけだ。しかしカセットの場合ハーフとの分離はなく、テープガイドやハブの保持等テープ走行にまつわる重要なファクターはハーフに依存しているのだ。なかでもテープガイドは重要な要素なのだが樹脂製のハーフの一部として一体成型されている。「プラスティックというのは溶かして固めます。その際、溶かしたときには体積が増え、比重が下がります。それを金型に流し込み固化するときに縮んで比重が戻ります。一般的に『シュリンク』といいますが、その時にガイドピンが傾いたり歪んだりすることがあります。もちろんガイドピンの傾きや摩擦を小さくするか、そのあたりが各メーカーのノウハウ、技術力なのです」と佐藤氏。そこで金属であればピンの精度を上げたり摩擦を小さくすることも容易なのではと考えたそうだ。「だけどそれは浅はかな考えでした。金属には金属の難しさがあったのです」。

アクリル板でダイキャストを挟む

「テープがハーフの中を走行する時、







佐藤氏が保管されていたMA-Rの試作品。当初ダイキャストパーツを金メッキすることも検討された。またB面側の上部左右に2本ずつ小さな突起があるのが確認できるが、これはBASFのSM（Spezial Mechanik）のようなガイドアームを付けることが検討された跡だという。ただしBASF（上の写真）とは逆位置にあたるためテープを外側からガイドするカタチだったようだ。初期モデルではこのまま市販化された。

6箇所のガイドを通過します。このピンが傾いているとテープはまっすぐ走らず、ヘッドに対し左右にズレることもあります。そうすると左右の位相がズレたり、ひどい場合はトラックズレを起こし、左右の音量バランスが崩れたりします」

だが佐藤氏によれば、逆にガイドの精度を上げればテープの性能を引き出すこともできるのだそうだ。そこで『神様カセット』のように削りだしは無理としてもダイキャストであれば金属製ハーフは実現できるのでは、と考えた。そんなディスカッションがあってデザイナー氏はモックアップを提案してきたのだ。

だがモックアップを見て佐藤氏は内心「困ったな」と思ったという。

カセットテープというからには、当然フィリップスのコンパクトカセット規格に合わせなくてはいけない。長さ100・4㎜、幅63・8㎜、厚みは本体部分で8・7㎜。ここにすべて収めなくてはならない。ダイキャストのフレームをアクリル板で挟んだサンドイッチ構造の場合、この厚みが問題となるのは、ダイキャストパーツに携わったことのない佐藤氏であっても容易に想像ができた。

「この部分」と佐藤氏はMA-Rのヘッド用窓の前後にあるガイドローラーとガイドピンの付近を指差した。「ここは従来プラスチックのハーフの厚さにアクリルとダイキャストが重なっているのです。その部分はアクリルもダイキャストも極端に薄くなる。そんな成形が本当に可能なのだろうか、と思いました」。またフレームの左右両端はわずか1㎜強と極端に薄くなっていて、細かい部分が多いのも心配だった。そしてその心配は的中した。

カセット本体の厚みは先述したとおり8・7㎜。内寸については規格上の制約はないが、TDKの場合は通常5・1㎜だった。つまりハーフの片側の壁厚は1・8㎜になる。アクリルとダイキャストが重なる部分は、壁厚を半分に分けたとしても0・9㎜ずつ。果たして0・9㎜厚の成形がダイキャストに可能なのか、というのが佐藤氏の懸念だった。「結論から言ってしまうと厚みに関してはアクリルの方が問題だったのです。アクリルは硬いけど脆いんです。MA-RをB面側から見ていただくとわかりますが、ガイドローラー部分が丸く抉ってあります。これはアクリルを少しでも厚くするための試行錯誤の跡なのです」。

ちなみに通常のカセットの場合ハーフはPS（ポリスチレン）でできている。PSは安価で軽量。丈夫で成形も楽だが汎用樹脂として雑貨用プラスティックのイメージが強かった。「PSは質感が低くて、当時はキレイな透明のものがなかったのです」と佐藤氏。60分で2000円もするMA-Rにはふさわしくない、というところからアクリルを採用したのだが、その分苦労も多かった。だが本当の苦労はやはりダイキャストだった。

ダイキャストの難しさとは

「ときどき本などでMA-Rについて『アルミダイキャスト』と書いているものがありますよね。あれは間違いなんです」と佐藤氏。じつはMA-Rのフレームに使われているのは亜鉛ダイキャストなのだ。その理由は精密パーツにはアルミダイキャストよりも亜鉛ダイキャストのほうが適しているため。アルミの溶融温度（正しくは注湯温度）は660度以上になる。その温度で金型に流し込むが固化が始まるのも早いため細かい部分まで成形できない可能性がある。そのため精密部品には溶融温度が420度強と比較的低

TDK

MA-Rはいかにして誕生したのか



い亜鉛ダイキャストの方が向いているそうだ。

「当時はもう家庭用ビデオデッキが出ていましたが、その部品は亜鉛ダイキャストが多かったです。ただビデオデッキのパーツは精密さは要求されても、見栄えはそれほど気にしませんでもMA-Rの場合は精密さと美しさの両方が必要になる。ここが難しかったのです」

金型に溶かした亜鉛合金を流し込む。実際は全体に行き渡るようにいくつもの通り道（ランナー）が作られているため成形直後は組み立て前のプラモデルのようにいくつもの通り道がそのまま亜鉛の棒としてのこっている。それをプレスで落として内側が8の字になったフレームを作る。ただし「この段階では内側には何箇所も『湯口』というへその緒みたいなものがたくさん残っているのです。またコールドスラッグという溶けた亜鉛合金の最初の部分は不純物を含んでいるので押し流して、美味しいところ、いわゆる『トロ』で成形しているのですが、その押し流して捨てるオーバーフローというのがフレーム外側に出たまま固まってます」。もちろんそのオーバーフローもカットされるのだが、フレームにはバリというプレスで取りきれなかった凹凸がいくつも残ってしまう。



この写真はⅢ型のもの。フレームの形状はずいぶんと変わっている。佐藤氏によれば「ダイキャストを作っているところを見せてもらったんですけど、凄い男らしいんです（笑）。バシャって、ピストルのように溶けた亜鉛を型に射出するんです。10秒くらいして固まったところで型を開けるんです。とそこにノズルが出てきて水というか冷却水をかける。凄い水蒸気がもうもうと立ち込めて、とても精密部品を作っているように見えない荒々しさなんです」とのこと。型の寿命は10〜20万ショットで、通常の樹脂ハーフの金型に比べ桁違いに短かったという。

そこでバレル処理という工程でバリをキレイに取っていくのだが、「これはメディアというパチンコ玉を小さくしたようなセラミックの玉を、細かいので砂利みたいなものですが、たくさん入れた中にフレームと石鹸水みたいな潤滑剤を入れて振動させるんです。そうすると擦れあってバリが取れて行きます。ところがそれをやりすぎるとピンが曲がっちゃう。曲がらないように加減して処理していくのですが、これが大変でした」。実際に佐藤氏は開発している途中で「これはダメなんじゃないか」と何度も思ったという。ダイキャストメーカーからも精密さと美しさの両方が高度に要求される困難さから「途中で止めさせてくれと言われまして。それを購買部の偉い人がなんとか口説き落として完成までこぎつけたのです（笑）」。

透明なスリップシート

だが、そもそも性能のためにダイキャストフレームを使うの

MA-Rシリーズの変遷

もっとも多い時で月販10万本、平均でも月販3万本といわれるMA-RはMA-XGを含めて10年以上作られたロングセラーでもある。ここでは後継モデルMA-XG Fermoに至る変遷を見ていこう。



1979 MA-R（Ⅰ型）

透明度の高いシートを使うも不具合のため途中で改良版シートに変更される。このⅠ型ではメタルテープの検出孔はなかった。C60は2000円。



1981　MA-R（Ⅱ型）

金型の交換と同時に形状も再検討。またシートはさらに透明度は低くなったが走行性能は安定。C60で1550円と価格は引き下げられた。



1983　MA-R（Ⅲ型）

MA-Rとしては最終モデルとなる。シートはⅠ型に近い透明度の高いものに変更された。おそらく生産台数はこのⅢ型がピーク。C60で1600円。



1985　MA-XG（Ⅳ型）

テープガイド部分は樹脂に変更され、ダイキャストフレームの生産性は向上。ガイドピンには金属を用い精度を確保した。C60は1600円。



1990　MA-XG Fermo

樹脂製だが5ピースからなる複雑なハーフを持ち、組み立てはMA-R同様ハンドメイド。C60で2000円発売当時もっとも高価なカセットだった。

であれば、見せる必要はない。もし不透明な樹脂板で挟めばダイキャストの仕上げにもそれほど気を使わずに済み、もっと簡単に開発できたはず。その疑問を佐藤氏にぶつけたところ「そこがデザイナー氏のこだわりですよね。それどころかダイキャストのフレームなんて『A面とB面を同じデザインにして欲しい』って言われたのですが、さすがに構造的に無理でした（笑）」。ガイドローラーをどう組み込むかなど組み立ての問題と、A面とB面の肉厚が変わってしまうなど構造の問題もあったためだ。だが透明にすることでもっと大変なことがあった。スリップシートである。

ハーフの内側、ハブに巻かれたテープが直接ハーフに接触しないように挟み込まれているシートは、地味な存在だが大事な役割があった。「シートの厚さは約0・1㎜。寸法的にはあってないようなものなのですが、シートを取り去ってテープを回転させるとどうなるかというと、カラカラ音が出るうえにテープの巻が乱れて、エッジが折れることもあります。走行を安定させるには巻を整えるというのも大切なのです」

またハブを中心に保持する役割はシートが担う。「初期の高級カセット（SAなど）に使われていたシートはグラファイト・テフロンが主流でした。これは置くと自然にカールする特性があります。そのカールを利用してハブをA面側とB面側からはさんでサスペンションのような役割を持たせていたのです」。つまり横型のデッキであればテープの走行が下にズレないよう、タテ型のデッキであれば左右に暴れないよう、適度なクッション性を持たせてハブをセンターに保持していたのだ。

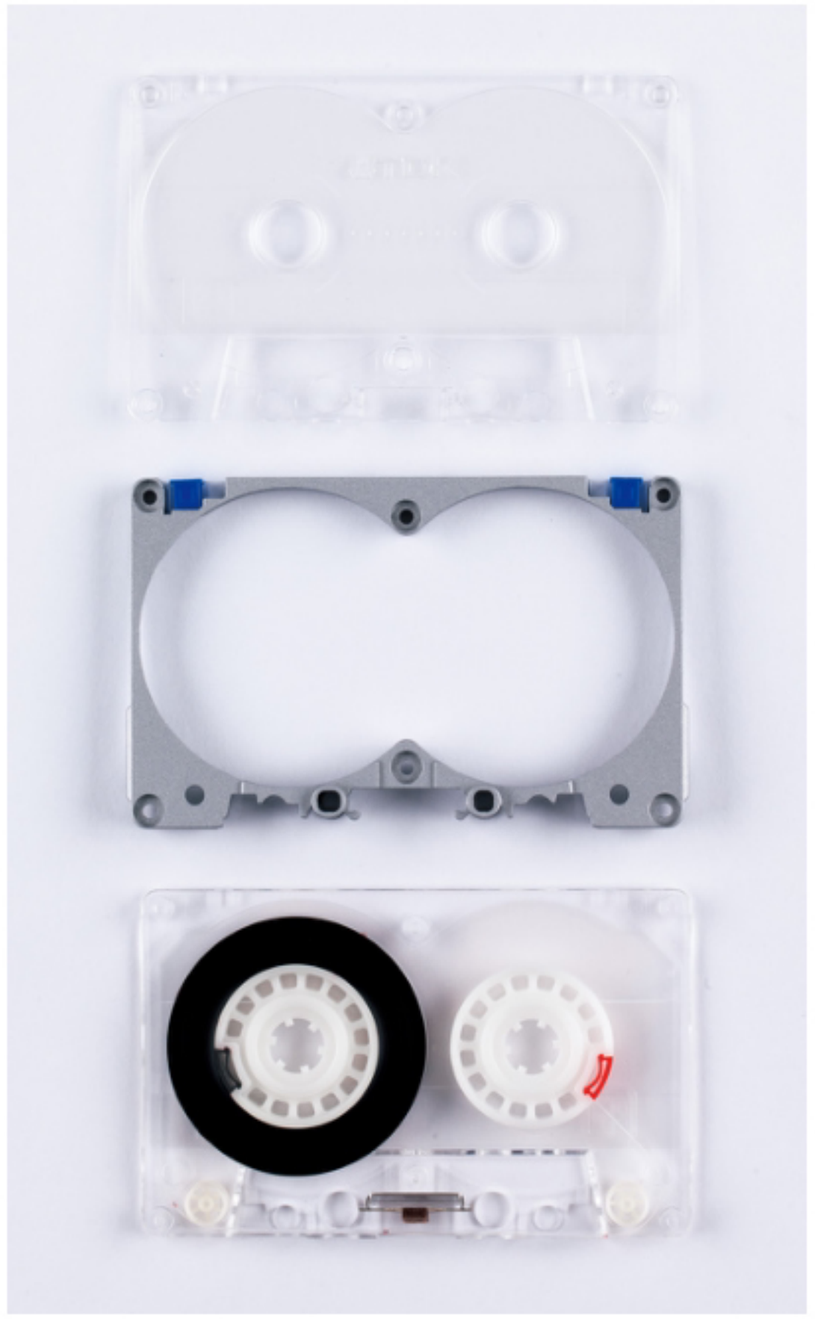
TDKではこのほか、紙にシリコンをコーティングしたシート（DADなど）、超高分子量ポリエチレンカーボンを練り込んだシート（Aなど）が使われていたが、いずれも不透明なものだった。そこで透明なシートを開発することになったのだが、まったくの手探り状態だったという。

佐藤氏によれば、「様々な素材を試作しました。最終的にポリエステルになったのですが、ポリプロピレンであったりセロファンだったり。コート剤もさまざまな界面活性剤をテストして最終的にポリエステルにシリコンの皮膜をつけたものが良さそうだ、ということになったのですが、こでも見栄えが問題になりました」。

あまりに透明シートの開発が難航したため「もう黒いシートを8の字にカットして使おうか、と開発から提案したこともありました。フレームが見えれば良いだろう、と。デザイナーは『冗談じゃない！そんなものは商品と言えない』って怒ってましたが（笑）」。

透明度の高いポリエステルを使うとハブの回転によってシートにキズがついてしまう。さらにシートが削れた粉がテープ面に付着し、信号のドロップを招いてしまう。そこでシリコンを塗布し焼き固めることで数Åという極薄い被膜をつくるとキズを防ぐことができた。だがポリエステルも透明度の高いものは回転が悪く、わずかに表面に凹凸を付け接触面積を減らしたもののほうが透明度は低くなってしまうが上手く回転した。

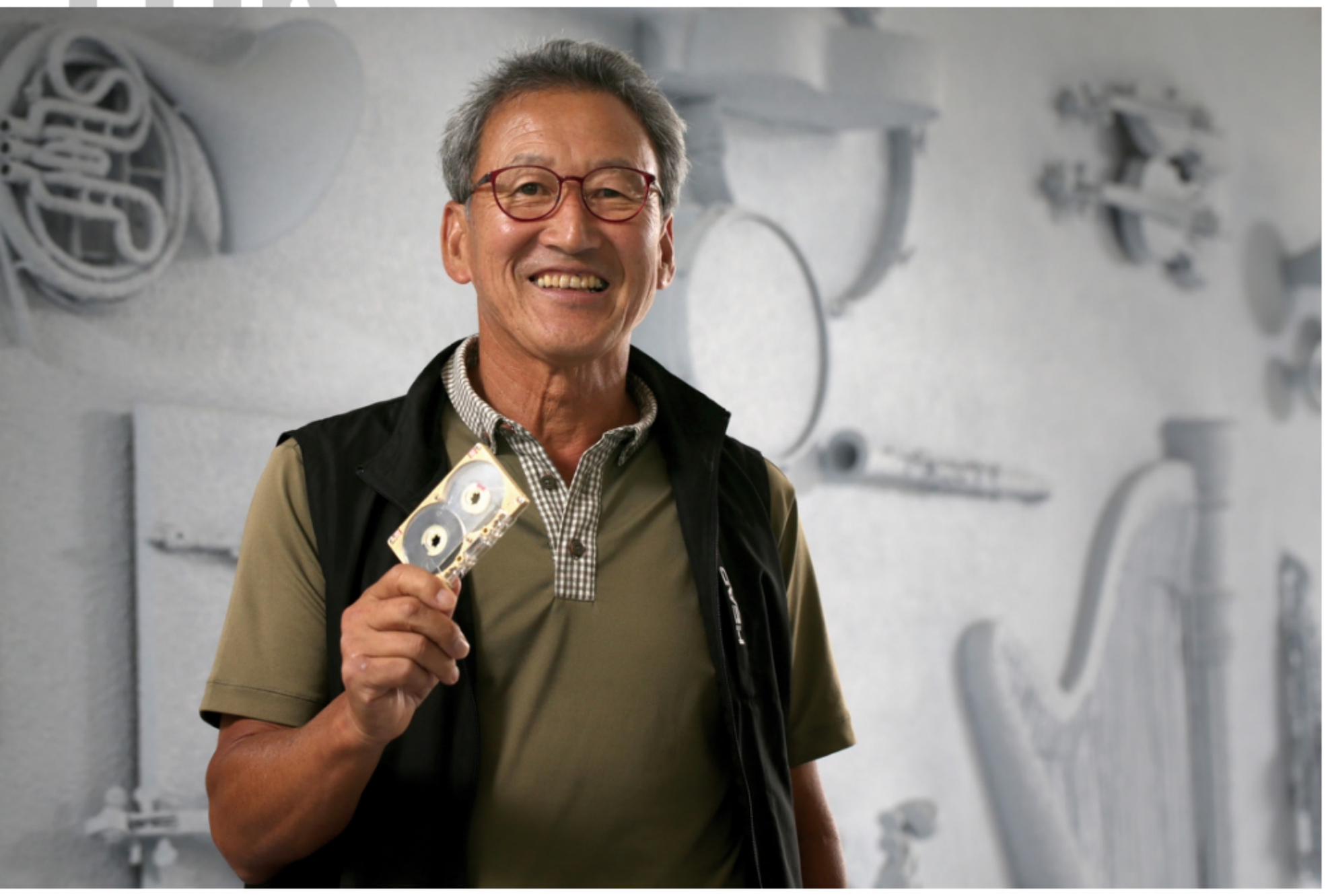
またシート形状も非透明のハーフであればエンボス加工を施し、いくつも凹凸を作ることでハブやテープとの接触面積を減らしつつ、サスペンション効果を持たせることもできたのだが、「透明だとエンボスが非常に見栄えが良くないのです。しかもポリエステルは引っ張っても伸びないのでエンボス加工そのものが難しいのです」。結局ハブに当たる部



こうして分解してみるとダイキャストパーツの美しさに目を見張る。このⅢ型のあとⅣ型のMA-XGではテープガイド部分が樹脂製になるが、これは主にダイキャストメーカーからの依頼によるもののようだ。ヘッド孔付近の細かい形状から歩留まりの悪さに音を上げたというところか。佐藤氏いわく「部品点数が増えたのでむしろ生産コストは上がっていたかもしれない」というが、その証言どおりMA-XGになっても価格は下げられなかった。なおプラグ（ツメに当たる部分）は分数によって色が違う。「アクリルパーツでツメを作る案も検討したが、高価なカセットなので『ツメを折る』のが忍びなかった」（佐藤氏）という理由からプラグ式になったそうだ。

TDK

MA-Rはいかにして誕生したのか



分、上下2箇所に折り目を入れることで解決した。

国産初のメタルテープとして

ところでこのMA-Rの開発がスタートしたのがメタルテープ登場前だったというのは先に述べたとおりだが、開発は途中までSAテープを使って行われていた。だが開発中にメタルテープの規格が策定され、このダイキャストフレームのハーフはメタルテープに使われることになった。ところがこれが透明シートの完成を早めた。

「SAのテープでは電気抵抗が大きくて、回転しているうちに摩擦による静電気でピタって止まってしまうのです。ところがメタルテープだと静電気の帯び方が違うらしく上手く回るようになったのです」

こうしてようやく製品として成り立つハーフが完成した。試行錯誤を繰り返した透明シートも、最終的に製品版に組み込まれたのは試作47番。46回もの失敗の末に完成したものだった。

さていよいよ発売にこぎつけることになったMA-Rだが、ちょっと不思議なことがある。発売日である。佐藤氏によれば「TDKはそれまで新製品は何月21日発売というのが通例だったのです。ところがMA-Rはなぜか1979年5月10日でした」という。

1978年に日本の磁気テープ工業会が中心となって策定されたメタルテープ規格。だがメタルテープそのものはそれ以前から各社で研究が進められていた。ただカセットデッキに標準的に用いられていたフェライトヘッドでは最適な録音ができなかったため、センダストヘッドの実用化が待たれていたという側面があった。そしていよいよセンダストヘッドが実用化され、ビクターからメタル対応デッキKD-A6（センアロイヘッド採用）が発売された時に登場したのがメタルテープ1号機であるスコッチMETAFINEだった。日本での発売は1978年12月頃だったようだ。

なおこのことから『メタルテープはビクターとスコッチの共同開発』という話しを聞くこともあるが、KD-A6とMETAFINEが共同開発だった可能性はあるものの、メタルテープそのものについては各社独自に開発を進めつつ、磁気テープ工業会のワーキンググループによって規格化されたもの、というのが正しい。

一方国産メタルテープは、ソニーのMETALLICとTDKのMA-Rがいずれも1979年5月10日の発売と、まったく同時だった。ここからは推測になるが、TDKがこのMA-Rに限って10日発売としたのは『国産初』の称号を得るためだったのではないだろうか。今となっては、当時の開発競争の熾烈さを想像するしかないのだが。いずれにせよMA-Rは国産初にして最高峰のメタルテープとして現在でも語り継がれている事実を曲げるものではない。

TDK
CHRONOLOGICAL TABLE

HIGH

KR

KR

ED

SA

SA

SA-X

SA

SA-X

HX

SA (119)

SA-X

SF

SA-X

SR

SA

SA-X

SR

SA

SA-X

SR Limited

SR

SR

SR

SA

AD2

CUE

CUE

CV-II

CDing-II

CV-II

CV-II

DISC JACK 2

Metal

MA

MA-R

MA

MA-R

MA

MA-R

MA-X

MA-XG

MA

MA-X

MA

MA-X

MA-XG Fermo

CDing-IV

SUPER CDing-IV

MA

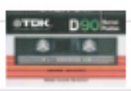
MA

CDing METAL

CDing METAL

MA-EX

1966
1967
1968
1969
1970
1971
1972
1973
1974
1975
1976
1977
1978
1979
1980
1981
1982
1983
1984
1985
1986
1987
1988
1989
1990
1991
1992
1993
1994
1995
1996
1997
1998
1999
2000
2001
2002
2003
2004

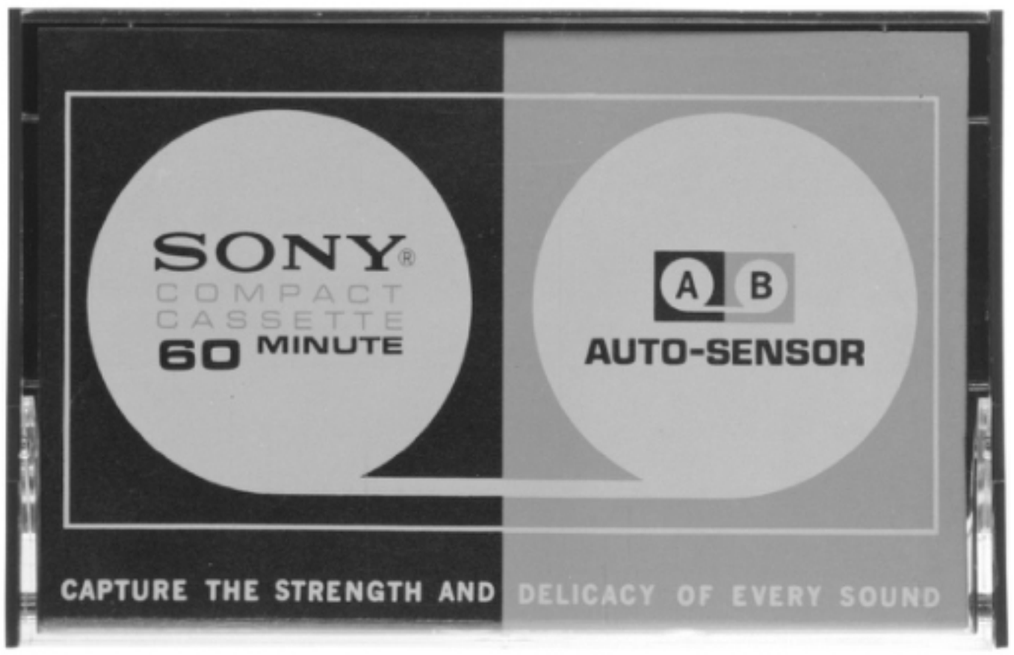
1966	 Synclo Cassette Tape			NORMAL						
1967					 SD					
1968	 TDK CASSETTE TAPE									
1969										
1970										
1971					 SD					
1972										
1973										
1974										
1975				 HELLO KITTY						
1976										
1977										
1978									 OD	
1979										
1980										
1981							 AD-X		 OD	
1982						 AD-S				
1983		 DS			 AD				 AR	
1984			 HELLO KITTY			AD-S				 AR-X
1985	 MUSICる	 AE								
1986			 if							 AR-X
1987		 AE								
1988	 Dela						 AD-X			
1989									 AR	 AR-X
1990										
1991				SUPER CDingI						
1992							AD-X			
1993		AE		SUPER CDingI						
1994									AR	
1995		AE			BEAM1	AD Type1				
1996						AD1				
1997		AE			BEAM1					
1998										
1999					NANA					
2000				DISC JACK 1						
2001				録						
2002										
2003										
2004		AE								

BRAND STORY
ブランド・ストーリー

SONY

1946年5月、井深大と盛田昭夫の両氏により設立された東京通信工業株式会社（1958年、社名をソニー株式会社に変更）。1949年には日本で初めて磁気テープの開発に成功している。翌1950年7月には国産初の磁気テープSoni-Tape KAシリーズを発売。この時にテープは紙ベースだった。1960年代に入り、カセット式のテープの開発競争が勃発すると、1966年11月カセットコーダー用マガジンテープを発売。ついにカセット時代に突入する。また1968年にライバルのTDKから音楽専用テープSDが発売されると、翌1969年3月にはソニーが音楽専用カセット『HF』を発売。さらに1973年にハイポジションを超えるタイプⅢ、フェリクロームポジションのカセットテープ『デュアド』が登場するなど、開発を加速させていく。また1976年にはマイクロカセットとエルカセットを発売するなど新しいメディアにも柔軟に対応していったのもソニーの特徴だった。だが1991年にミニディスクを登場させるなど、ポスト『カセットテープ』にも熱心で、結果としてカセット時代の終焉を早めたのもソニーだった。





1966年11月にマガジンテープ（コンパクトカセットと互換性あり）を発売。写真はその後期モデル（初期は『MAGAZINE TAPE』の記載がある）

AHF/BHF/CHF



1978　AHF (#01) /1978　BHF (#01) /1978　CHF

一足先に登場したAHFとその下のBHF（HFの後継モデル）、CHFは従来のスタンダードモデルと同格だった。いまでもソニーのカセットいうとこの3兄弟を思い出す人も多いはず。

ソニーは1978年に、それまで単に『CR』と呼んでいたクロームテープを『JHF』としてモデルチェンジ。同時にフェリクロームの『DUAD』を『JHF』と同じデザインの色違いで登場させた。その後新型ノーマルテープ『AHF』もやはり『DUAD』『JHF』と色違いのデザインで発売し、ゴールド（茶色）、シルバー（グレー）、そしてブルーとそれぞれのポジションにひとつずつのモデルをラインナップした。続いてソニーは新しいノーマルテープ『BHF』と『CHF』を発売。ノーマルテープを3グレードに分ける。磁性体は一般のノーマルテープに使われているガンマヘマタイト、つまり酸化鉄。AHFに関しては超微粒子化と高密度化、BHFについては超微粒子化と均一化がポイントだった。またハーフは『DPメカ』という機構を採用。『段差ハブ』という一部が円周状に盛り上がったハブと『スジ付きシート』という上下に2本の盛り上がったスジが入ったスリップシート（ハブを滑りやすくするためにハーフとハブの間に挟んであるシート）で構成されている。従来ハブとシートは面で接していたが、『DPメカ』では線の接触となり走行が安定するというわけだ。



1983　AHF (#02) /1982　BHF (#02) /1978　CHF



1982年にBHFがモデルチェンジ。性能向上とともにパッケージを一新。メタリックに輝く高級感あふれるものとなった。1983にはAHFもチェンジするが、すぐにBHFの後継モデルHF-Sが登場しラインナップ刷新が始まる。結果新型AHFは非常に短命なモデルとなった。

HF-ES/HF-S/HF



1984　HF-ES (#01)



1983　HF-S (#01)



1983　HF (#01)

ＡＨＦ／ＢＨＦ／ＣＨＦに代わるシリーズとして誕生したのがＨＦ－ＥＳ／ＨＦ－Ｓ／ＨＦ。まず１９８３年にＨＦ、ＨＦ－Ｓが誕生。とくにＨＦ－Ｓは高精度広窓ハーフを採用。磁性体には超微粒子磁性体スーパークリスタルガンマを採用し、新型ＢＨＦ比でバイアスノイズを１・５ｄＢ低減。さらに高域ＭＯＬは１・０ｄＢアップしていた。

翌１９８４年にはＡＨＦの後継としてＨＦ－ＥＳが登場。ＨＦ－Ｓ同様のハーフとシングルクリスタルガンマ磁性体を採用。さらに新開発のハイポリマー・バインダーシステムで磁性体充填率は大幅に向上。最大残留磁束密度は１７５０ガウスとなった。新型ＡＨＦ比でＭＯＬは全域で０・５ｄＢ向上。高域感度も０・５ｄＢ向上している。その後ＨＦ－ＰＲＯが登場し、ＨＦシリーズとして４モデルが揃うことになった。



1990　HF-S (#04)

DUAD





1973　Duad (#01)



1978　DUAD (#02)

１９７３年11月１日、ソニーがまったく新しいカセットテープ、デュアドを発売。ノーマル、ハイポジションに続く第３のポジション、フェリクローム（Ｆｅ－Ｃｒ）のテープだ。とはいえこのデュアド発売当初、タイプ３のテープセレクターを備えたデッキはソニーのごく一部のデッキに限られていた。そのためソニーは「デュアドはノーマルポジションでも使用できる」としていた。

デュアド（２つのものからなる１組のものという意味）という言葉が表すように、２種類の磁性体がベースフィルムに塗布されていた。12μのベースフィルムの上に５μのガンマヘマタイト層（ノーマルテープの磁性体）、そしてその上に１μの二酸化クロム。つまりノーマルテープの上に薄くクロムテープの磁性体が塗布された構造だったのだ。

もっとも周波数特性を見ると、ノーマルポジションで録音再生を行うと10ｋＨｚあたりから急激に持ち上がっていて、相当不自然な特性になっているのが分かる。当然デュアドの持ち味を活かすにはフェリクローム・ポジションを備えたデッキが必要だったのだ。

HF-PRO/UX-PRO



1984　HF-PRO (#01)

HF-ESの上位に位置するモデルがHF-PRO。カセットテープの厚くなっている部分、テープとヘッドが接触するもっとも大切なパートにセラミックブロックが使われていた。

ハーフの振動に起因すると言われている変調ノイズをくいとめるためにテープ走行系をハーフから独立させ、振動の影響を受けないようにした。いわばショックアブソーバーとしての役目を負ったガイドブロックは、セラミックに特殊樹脂を配合したファイン・セラミック・コンポジット材。高い弾性率、低い摩擦係数と優れた吸音性を持ち、とくに低い周波数での振動を減衰させることに成功した。また磁性体はHF-ES同様のシングルクリスタルガンマ、バインダー（テープ基材）には磁性体充填率の高いハイポリマー・バインダー・システムを採用していた。

このセラミックガイド付きハーフは、ハイポジにも展開された。UX-PROである。こちらは前年に誕生したハイポジ最高性能といわれたUCX-Sの持つ残留磁束密度1800ガウスを凌駕する2000ガウス。高域MOLは1・0dB、低域1・5dBアップとテープ本体も高性能化していた。



1985　UX-PRO (#01)



高い精度と低い摩擦力が要求されるテープガイド部分をファインセラミックコンポジット製にした。セラミックは弾性率や吸音性にも優れているため、ハーフの素材に適しているのだ。

METALLIC/METAL-XR



1989　METAL-XR



1979　METALLIC

1979年、実質メタルテープ元年となった年。国産メタルテープ1号の称号を得るための開発競争があった。国産第一号と目されていた富士写真フィルムは1月に技術発表を行い、3月発売予定とアナウンスしていたがなぜか延期。続いて市販化に近いとされたのはTDKとソニー。結論から言うと、TDKのMA-RとソニーMETALLICはいずれも5月10日と同日に発売された。

ダイキャストフレームのMA-Rに対しインパクトこそ薄くなってしまうが、最大残留磁束は3500ガウス、保磁力1050エルステッドと当時最高性能を示したメタルテープだった。

それから10年。時代は移り変わりCD全盛時代。カセットテープの低価格化が進み、1985年頃にはハイポジションが46分500円でも『ハイコストパフォーマンス』と言われていたが、ソニーの新メタルテープMETAL-XRはついに46分500円という驚異の低価格を実現してしまった。コストダウンの最大の秘策は、ネジを一本も使わない接着方式のハーフ。生産効率を向上させてコストダウンを実現させると同時に、ハーフ構造の見直しにより高剛性も両立させることに成功した。この時期ソニーはMETAL-XRに加えMetal-S、Metal-ES、さらにセラミックハーフを持つMetal Masterと充実のラインナップだった。

1993 SONY

Super Metal Master





リーディングメーカーとしての矜持（プライド）

ソニーが自らのカセットテープの歴史に終止符を打つがごとく、
高性能カセットとしては最後発にして、最高峰のモデルがこのスーパーメタルマスターだ。
もはや多くを語る必要のない、圧倒的な存在感である。

写真・横澤靖宏　文・澤村 信

※この特集は『ステレオ時代 Vol.5』の『カセットテープ名鑑』を再編集したものです。



Super Metal Master



内側はこうなっている。紺色のパーツはスリップシートではなく、ハーフの構造体。上の写真を見ていただけばわかるとおり、デザイン上のアクセントにもなっている。

CDの普及によって1989〜90年をピークに、カセットテープの需要は徐々に下がり、1990年代の後半にミニディスクの登場とともに、その座を譲り急激に存在価値を失っていく。

そんなカセットが完全に力を失う直前、崖っぷちの1993年に登場したのが『スーパーメタルマスター』だった。だがそのテープを語るには、別のテープの説明が必要になる。

1986年10月、ひとつのカセットテープが業界を驚かせた。ソニーがMA-XG Fermoとなり、MA-Rに対抗するカタチで登場させたメタルテープの最高峰、『メタルマスター』だ。ダイキャストのフレームを透明な樹脂パネルで挟んだMA-R以上のインパクトと洗練さを併せ持つ、セラミック・コンポジットの白いハーフ。そのデザインを強調するために、中央の窓は極細だった。

そして46分で1600円という価格設定は、MA-R（すでにMA-XGにチェンジしていたが）を超えて、最高額カセットとして頂点に君臨した。

もちろん高精度のハーフと、二種類の磁性体を二層に分けて塗布したテープで、性能的にも他のテープを圧倒した。

だがこのメタルマスターに関しては、そんな御託は不要だ。もはやラベルを貼られることさえ拒否する、サラッとしてひんやりする、ズシリと重いカセットは、解説など不要、あるいは受け付けないだろう。

マニアの間で『最高のカセットは何か』というのは、好んで話のネタにされるが、メタルマスターはすでにカセットという範疇を超え、もはや別のメディアと判断すべきものかもしれない。

ところが、先に述べたように1990年頃をピークにカセットテープ市場がシュリンクしていくと、ライバルが姿を消して行く。

1990年TDK MA-XGは早々に姿を消す。当のソニーもMA-XG Fermoとなり、ちょっと凝った普通のカセットになってしまった。1989年に登場した、シリアルナンバー入りカセットの白いハーフ、マクセル・メタルバーテックスは、記録にはないが1990年代に入り早々に姿を消す。当のソニーも1989年に発売したメタルXRなど低価格メタルテープにシフトしていくかに見えた。

しかし、そこに登場したのがスーパーメタルマスターだったのだ。だがテープには従来モデル（メタルマスター）では2層の磁性体を塗布していたところを、なんと5層。セラミックも2種類のセラミックを使コンポジットとした。バリエーションで、未開封なら1本1万円オーバーで取引されているほど、希少なモデルになってしまった。

発売から20年以上が経った今、このスーパーメタルマスターという存在を考えてみると、このカセットテープはソニーの、カセットテープとカセットデッキという文化を牽引してきたメーカーの矜持だったのではないだろうか。

こうしてスーパーメタルマスターは世界最後の高級カセットとなった。





なんとケースはアルミと樹脂のコンポジット。まるで高級なチュコレートのような缶入りだ。一応インデックスカードは封入されている。また銀色のラベルシールはハーフに貼るものではなく、アルミの外ケースに貼るもの。本体は、やはり封入されているインレタで直に転写する。







SONY
CHRONOLOGICAL TABLE

HIGH

FeCr

Metal

CHROMI CASSETTE

CR

DUAD

JH

Rock

UCX

UCX-S

Do

UCX

UCX-S

UX-PRO

UX

UX-S

UX-Master

UX-S

UX-Pro

CDixII

UX

UX

ES･II

UX-Pro

CDixII

X･II

UX turbo

ES･II

CDixII

X･II

XSII

CDixII

XII

CDixII

X･II

GIG-2

ES･II

DUAD

METALLIC

Metal-ES

Metal-S

Metal-S

Metal-ES

CDixIV

METAL-XR

CDixIV

CDixIV

XRS

Metal-ES

Metal-ES

Metal Master

ES･IV

ES･IV

Super Metal Master

1966
1967
1968
1969
1970
1971
1972
1972
1973
1974
1975
1976
1977
1978
1979
1980
1981
1982
1983
1984
1985
1986
1987
1988
1989
1990
1991
1992
1993
1994
1995
1996
1997

1966				NORMAL	 C					
1967										
1968										
1969										
1970										
1971										
1972										
1972					C	HF				
1973					C	HF				
1974										
1975										
1976										
1977										
1978										
1979					CHF	BHF		AHF		
1980										
1981		Classics	Pops							
1982						BHF				
1983					HF	HF-S		AHF		
1984								HF-ES		
1985			Gokkigen	What's up?					HF-PRO	
1986					HF	HF-S				
1987							HF-S	HF-X		
1988		A·la?	EXIST	HIP.POP	CDix	HF	HF-S	HF-X	HF-ES	HF-Pro
1989										
1990						HF	HF-S		ES·I	HF-Pro
1991					CDix I			X·I		
1992									ES·I	
1993					CDix			XI		
1994				XSI	CDix I					
1995								X·I	ESI	
1996			G-UP	CDix						
1997	贈るカセット	GIG-1			HF		Purestyle X			

BRAND STORY
ブランド・ストーリー

maxell

国産初のカセットテープはどこが作ったのか。じつはTDK、ソニー、マクセルのカセットテープ御三家はいずれも1966年にカセットテープを発売しているが、時期は微妙にずれていて、TDKが9月、ソニーは11月、そしてマクセルは7月に発売している。つまりどこが先かと言われれば「マクセルが一番早い」ということになる。

マクセルは1961年2月、日東電気工業株式会社から乾電池および磁気テープ専門メーカーとして分離独立した。当初はマクセル電気工業株式会社であったが、1964年に日立製作所の傘下となり、日立マクセル株式会社と改められた。なお『マクセル』はもともと乾電池のブランドだったが、磁気テープにもそのまま使われた。

もともとオープン時代に国内で初めて超薄型長時間録音テープを発売した（1965年）こともあり、カセットでも1968年に初の120分テープを発売。また1973年には後のスタンダードとなる初の46分テープ（UD）を発売した。ちなみに現在では同社のUR（インドネシア製）が国内で安定的に手に入るほぼ唯一のカセットである。





1966年に発売された初めての国産カセットテープ。翌年は国産初の90分テープ、翌々年は同じく国産初の120分テープとバリエーションを広げる。

UD





1970　UD (#01)



1972　UD (#02)



1978　UD (#03)



1981　UD (#04)



1983　UDI (#05)



1988　UDI (#06)



1990　UDI (#07)



1992　UDI (#08)



1993　UDI (#09)



1996　UDI (#10)



1985　UDI-R



1986　UDI-S



1974　UD-XL

日立マクセルがカセットテープの生産を開始したのは1966年。コンパクトなケースに収納されセッティングが簡単。ゴミの付着や静電気、雑音、磁界転写を防止する機構・対策を備え、適切なヘッドタッチを実現する、今日的に見ても十分なスペックを備えていた。ただし音質は「音楽に適さない」と評されるもの。カセット自体が音楽向きとは見られていなかったのだ。

ところが1968年にTDKがSDを発売すると風向きは一気に変わり、カセットの音楽需要が一気に盛り上がった。これに対応するため各社音楽専用カセットをラインナップし始める。マクセルも1970年6月に音楽専用カセットUD（UltraDynamic）を発売する。UDはこれまでのスタンダードテープ同様に酸化鉄の単層塗布だがその性能と品質に定評があり人気を得た。さらに2年後には2代目UDが発売される。磁性粉には新開発磁性体PXガンマヘマタイトを採用。ハーフは高性能をイメージさせるブラックとされた。さらに翌1973年6月には世界初の46分テープをラインナップ。その後の標準分数として支持されていく。

この2代目UDは定番商品としてロングライフモデル（もちろん改良は繰り返されたが）として1978年に新型登場するまで生産され続けた。その途中1974年にはUDの派生モデルとして磁性体をグレードアップさせたUD-XLが誕生する。

1981年にはUDの累計生産本数が2億を超え、この年3代目にスイッチするが、このモデルそのものは短命に終わり1983年UDの歴史上最大のモデルチェンジを迎えることになる。UDはUD-IとなりノーマルのままグレードアップUD-IIが誕生したのだ。

UD-Iはシルバーとブルーを基調にしたパッケージとラベルが与えられた。もちろん外見だけでなく無細孔（ポアレス）磁性体を採用し、クラスを超えた性能を実現していた。このUD-Iは大ヒット。1988年に次世代にスイッチするまで売れ続けた。その間にUD-I-R、UD-I-S、UD-I-Nというスペシャルモデルも登場。長い間マクセルの屋台骨を支えるシリーズとなった。

2016年にはUD復刻版が登場



近年のカセットテープ人気の盛り上がりに加え、日立マクセルがカセットを発売して50年ということもあり、なんと1972年に登場した2代目UDの復刻モデルが、限定6万本で販売された。ただしテープは現行URのものだった。

maxell

BRAND STORY
ブランド・ストーリー

UD II



1983　UDⅡ (#01)





1983年に登場したUDⅡはハイポジションにもかかわらず、従来の上級ノーマルより安い価格で登場。若者に強くアピールした。当時のイメージキャラクターは人気絶頂のワム!だった。

1983年にUDがノーマルのUDⅠとハイポジションのUDⅡに分かれて誕生したマクセルUDⅡ。そのテープに採用された磁性体はわずか0・35μでしかも粒の大きさが均一な、ファイン・エピタキシャル磁性体を使った当時最新のものだった。

エピタキシャル磁性体とはノーマルテープでも使われている酸化鉄系の磁性体の表面にコバルトフェライトを複合結晶させたものだ。これを超微粒子化したものが、つまりファイン・エピタキシャル磁性体だ。

磁性体は小さければ小さいほどノイズが小さくなるという特性がある。ところが磁性体を小さくして重量あたりの表面積が増えると、ベースに塗るための接着剤の量が多くなる。そうすると今度は出力が小さくなってしまうのだ。それを防ぐには磁性体の密度を高くしかも均一にしなくてはならない。

もっともUDⅡが大ヒットし、1988年にモデルチェンジするまで4年も売れ続けた大きな理由はコストパフォーマンスの高さにある。

ファイン・エピタキシャル磁性体は自社で開発され自社で生産することでコストを大幅に押さえた。46分で500円という価格は実売では300円代前半。高校生でも大きな負担にならず使うことができたのだ。

もちろん安かろう悪かろうでないことは先の磁性体の話しからもわかるし、UDⅡのメカニズムには、XLⅡやXLⅡ-Sのために開発されたPA（フェイズアキュラシー）カセットメカニズムが使われていることも性能に貢献している。このPAメカニズムは各パーツの精度を上げ、それにより位相特性や音像定位を向上させようという技術だ。たとえばハーフはミクロン単位で平行水平を管理。しかも耐変形強度をあげるためにスタビライザーや背面リブを設けている。ガイドローラーは段差を無くした真円度の高い形状を採用し、しかもハーフとの隙間をそれまでの半分のレベルまで狭めた。ハブは、これも真円度を高めたうえ、ハブ一体型のクランプでテープを保持する。

さらにセパレート（スリップ）シートはテープの走行方向に沿って、3つのアーチを設けたTAシートを採用し、滑らかな走行のために、抵抗を最小限に抑えている。

こうした真面目な開発と思い切ったマーケティングによりUDⅡはカセット史に残る傑作となり、TDK・SFやソニーDo、デンオンHDなど数々の傑作低価格ハイポジを生み出すことになった。



1988　UDⅡ（#02）



1990　UDⅡ（#03）



1992　UDⅡ（#04）



1993　UDⅡ（#05）



1995　UDⅡ（#06）



1996　UDⅡ（#07）



1998　UDⅡ（#08）



1989 maxell

Metal Vertex

遅れてきたフラッグシップ

TDKにMA-R、ソニーにはMetal Masterというフラッグシップがあるが、なぜか御三家の一角、マクセルには長らく高級モデルがなかった。だがカセット産業が絶頂に差し掛かった1989年、とうとう山が動く。ライバルとは違うアプローチで誕生した高級メタル。それがMetal Vertexだ。



Metal Masterは60分で1550円、MA-Rの後継、MA-XGが1540円に対し、Metal Vertexは60分で1700円。当時の最高価格テープだった。



制振効果もあるメタルプレートがハーフの中央に取り付けられているが、そこにはひとつひとつユニークのシリアルナンバーが刻印されている。下で説明している『戦略物資等該当品』のため、という説もあるが、当時は高級感の演出という意見が多かった。



パッケージ裏面の下部に『戦略物資等該当品』の文字。まだソ連が存在していた時代で、対共産圏輸出統制委員会の規制対象だった。強力なバックコーティングや3ピース構造のハーフなどによって、超底変調ノイズのためと思われる。つまり高性能過ぎた、ということか。

１９８９年、世間はバブル前夜の好景気に湧き、オーディオ業界も「なんでも作れば売れた」と言われるほどの状況だった。もっともカセットテープ市場に限っていえば、そのニーズの変化に対応するために商品構成も徐々に変わりつつあった。

以前のようにカセットはライブラリを作るためのものではなく、ウォークマンやカーステレオで音楽を聴くために外に持ち出すためのものになっていたのだ。つまり尖った性能より、手軽さや耐久性、あるいはファッション性が重視された。そんな中登場したのが日立マクセルのフラッグシップ、Ｍｅｔａｌ Ｖｅｒｔｅｘだった。重量級３ピース構造のハーフを持ち、その中央には防振効果もあるメタルプレートが埋め込まれた。磁性体にはスーパー・エナジー・ピュアメタルが用いられ、マルチオリエンテーション技術によって、均一に塗布された。さらにオーディオテープには珍しいバックコーティング（ＴＳバックコート）が施され、これまでにないほどの低歪率と優れた磁気特性を実現していた。

このあまりの高性能振りを示すエピソードとして、このカセットがココム協定（対共産圏輸出統制委員会協定）の規制品指定されたという事実がある。戦略物資並に高性能だったという証左だ。

maxell
CHRONOLOGICAL TABLE

取材協力・日立マクセル

HIGH

Metal

1966
1967
1968
1969
1970
1971
1972
1973
1974
1975
1976
1977
1978
1979
1980
1981
1982
1983
1984
1985
1986
1987
1988
1989
1990
1991
1992
1993
1994
1995
1996
1997
1998
1999

CROME DIOXIDE

CR

UD-XL Ⅱ

XL Ⅱ

XL Ⅱ-S

UD Ⅱ

UD Ⅱ-U

UD Ⅱ-S

カプセル
コロンⅡ

GPX Ⅱ

UD Ⅱ

CD-XL Ⅱ

CD's Ⅱ

MY 2

WE 2

MX

メタルカプセル

Metal Vertex

METAL GPX

METAL UD

Metal XS

METAL CD's

1966
1967
1968
1969
1970
1971
1972
1973
1974
1975
1976
1977
1978
1979
1980
1981
1982
1983
1984
1985
1986
1987
1988
1989
1990
1991
1992
1993
1994
1995
1996
1997
1998
1999

NORMAL

C

UD

UD-XL

UD-XL I

LN

UL

XL I

XL I-S

UD I

UR

UR-F

UDI-R

UD I-S

FRILL

カセット
コロン

ポシェット

UD I-N

CDカプセル

US I

CD's I

CD-XL I

MY 1

WE 1

BRAND STORY
ブランド・ストーリー

FUJI / AXIA

1934年1月に大日本セルロイド株式会社（現・株式会社ダイセル）からフイルム事業が独立して誕生したのが富士写真フイルム株式会社だ。戦前から写真用フイルムやレントゲンフイルムの国産化を進め、戦後はGHQの指導の元、各種のフイルムを通じて文化や娯楽、医療分野での発展に貢献してきた。そんな富士写真フイルムが磁性体の研究を始めたのは1954年のこと。1958年には、後にカセットテープの生産も担う小田原工場内に磁気テープのパイロットプラントを建設。翌1959年にはNHK技研との共同開発で初めて国産ビデオテープへの録画に成功している。

このように映像分野での磁気テープが先行した富士写真フイルムだが、1965年に録音用オープンリールテープ、1967年には音楽専用オープンテープを発売し、1969年4月にはカセットテープに参入を果たしている。1970年には小田原工場内に第2期磁気テープ量産工場を完成させた。

1985年には若年層をターゲットにした『AXIA』ブランドを立ち上げ一気にシェアを拡大した。



1971年の広告より。この翌年にクロームテープFC、ノーマルテープの新FLを発売し、『FUJI』のカセットはどんどんと数を増やしていくことになる。

HD-Master/SD-Master/XD-Master



1987 HD-Master



1987 SD-Master



1987 XD-Maste

ラン　1985年に誕生したアクシアブランド。カセットテープ黎明期から富士写真フイルムはカセットを作り続けていたが、シェアの低迷が長く続いていた。そこで思い切って若者にターゲットを切り替えたのがアクシア・ブランドだった。1985年にはスタンダードのJPとJC、そして主力となるPS-I、PS-II。それに加え富士写真フイルム時代から作るGT-IとGT-IIをアクシア・ブランドに変更し、全部で6モデルをラインナップした。しかしTDK、ソニー、日立マクセルに次ぐメーカーとしては商品展開が少ないのは明らかで、とくに上級モデルの追加は急務だった。そこに登場したのがこのMasterシリーズだった。

イポ　ノーマルのHD-Master、ハイポジションのSD-Master、メタルのXD-Masterで、PSシリーズでもおなじみのベリドックス・磁性体を進化させたベリドックス・マスターを採用。世界初となるサーマル・トランスファー4LCハーフで、保護層（表層）、合金蒸着箔層、接着層、ラテックスコンパウンド層、樹脂層の4層構造を採用していた。またノイズリダクションの使用を前提に設計されているのも新しく、ドルビーなどを使っても音質が変化しないという謳い文句だった。

GT- I/GT-II



ヘビーデューティ仕様をアピールするために、世界一過酷なラリーと言われていた『パリ-ダカールラリー』の参加チームをスポンサード。GT-Iを実際に載せて走り、その耐久性を証明した。



1983　GT-I



1983　GT-II



1985　GT-I



1985　GT-II

『GT』というネーミングが示すとおり、カーステレオにターゲットを絞って開発されたカセットテープだ。

1983年頃になるとクルマにカセットプレーヤーが備わっているのが当たり前になってきた。また国産車でも実質的に世界標準となったドイツの工業規格、DINサイズを採用するモデルも現れカーオーディオの隆盛を予感させた。だがカセットテープの大敵は高温。日本でも真夏の車内は場所によっては100度近くになり、カセットテープにとって車内は過酷な環境だった。ポリスチレンで作られたハーフは約70度で変形した。テープの基材バインダーも高熱で縮み磁性体は剥がれた。

そこで富士写真フイルムの開発陣は、世界中で車内温度のデータを取り、もっとも過酷だったサハラ砂漠（なんと104度にも達した）でも使えるカセットを作り上げた。開発には約1年が費やされ、ついにプラス110度からマイナス40度まで耐えるカセットが完成したのだった。このタフで頑丈なハーフは音の良さに貢献していたことも見逃せないポイントだった。

なおこの耐熱耐寒のスペックはアクシアになってから誕生したPSシリーズにも受け継がれ、「アクシアのカセットはタフ」という評判が定着した。



1985 AXIA PS-I (#01)



1987 AXIA PS-Is (#02)



1985 AXIA PS-I

PS-I Gallery



1988 AXIA PS-Is (#03)



1990 AXIA PS-Is (#04)



1991 AXIA PS-I (#05)



1993 AXIA PS-I (#06)



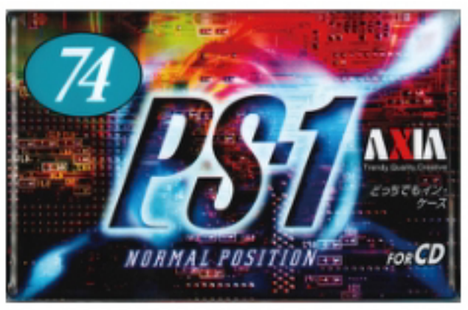
1994 AXIA PS1 (#07)



1995 AXIA PS1 (#08)



1997 AXIA PS-1 (#09)



1998 AXIA PS1 (#10)



1999 AXIA PS1 (#11)



2000 AXIA PS1 (#12)



2001 AXIA PS1 (#13)



2002 AXIA PS1 (#14)

綿密なマーケティングで背水の陣

1980年代に入り、それまでグレーゾーンだったレンタルレコードが合法化された。そのためカセットテープの需要は伸びていった。しかし、それに伴い競争は激化、カセットテープの価格はどんどんと下がっていき、もはや『美味い商売』ではなくなっていた。

そのうえ3強と言われたTDK、ソニー、マクセルが市場の9割近くを抑え、その他のメーカーにとって存続すら難しい状況だった。中でもカセットテープ業界では最古参の1社でありながら、長い低迷期から抜け出せなかった富士写真フイルムは、事業撤退も視野に入れた検討が行われた。



斉藤由貴とアクシアは予想以上の相乗効果を生み、『斉藤由貴=アクシア』の等式は、中学生男子のハートに深く刻まれた。またアクシアはCMの起用だけでなく、コンサートのスポンサーやはてはファーストアルバムの名前まで『AXIA』にしてしまう（いまで言うネーミングライツか）ほど積極的に彼女のイメージに乗った。ちなみにアルバムの1曲目は大ヒットした『卒業』だ。

そこで外部のコンサルタントも入れて、存続を賭けたプロジェクトがスタートした。

まず決められたのはターゲットだった。それまでカセットは広く売るためにターゲットは漠然と設定されていたのだが、ヘッドフォンステレオやラジカセが若年層にも普及してきたこと、またカセット自体が低廉化したため、これまでターゲットとされてこなかった女性、若年層、幼年層までがユーザーとして見込めることから、とくに今後の需要を支えてくれることになる若年層とりわけ中学生にターゲットを絞ったのだ。

この中学生向けカセットのプロジェクトは『606作戦』と名付けられ、すなわち昭和60年6月に新しいカセットを出すことを目標としていた。

またブランド名も『FUJI』を捨て、新しくすることが決められ、選定に入った。候補は富士写真フイルムが商標として抑えていた『MARINE』『WINDY』『ASTY』などから最終的にギリシア語で『価値あるもの』を意味する『AXIA（アクシア）』が選ばれた。またイメージキャラクターは所ジョージやリック・スプリングフィールドといった候補を抑え、『15歳男子にもっとも人気がある』ということと『今後の可能性』を買われミス・マガジンの斉藤由貴が選ばれた。

イメージだけでなく本物の高性能

売れるための仕掛け、イメージ戦略がうまくいったとしても肝心のテープの性能が悪かったらシェア回復は望め無い。中でも中学生をターゲットにしたことで、もっとも重視したのはアウトドア性能だった。アクティブな若者たちが、音楽をアウトドアに持ち出すことを見込んでいたのだ。

これまでの富士写真フイルムの野暮ったいデザインから一新された透明なハーフも、じつはハイポリマー技術によりマイナス40℃の耐寒性能と110℃の耐熱性能が与えられた『スーパークリスタルハイポリマーハーフ』が採用されていた。これはアクシア・ブランドで継続販売されるGTシリーズで培った技術だ。

またCDの普及により、ユーザーの高音質志向が高まっていることに対応し、磁性体も見直された。

配向性（均一に隙間なく並べること）に優れた高針状比を持つ超微粒子サイズのハイレスポンスベリドックス磁性体（PS-I）にはハイポジションに使われるコバルトが添加されていた。さらにその磁性体を規則正しく並べて塗布する技術SMIO（Super Micro Integrated Orientation）も開発された。角形比（録音感度の目安のひとつ。1に近づくほど理想的）は0・9以上をマークした。

こうして高音質とタフネス性能を兼ね備え、さらにファッショナブルなデザインは若者に強くアピールした。とりわけ可憐で爽やかな斉藤由貴のキャラクターが、富士写真フイルムの思惑通り、中学生男子の心を鷲掴みにした。

このPSシリーズのヒットがきっかけとなり、富士写真フイルムはシェアを大きく伸ばし、1987年には14%を占めるまでになった。こうして第4のメーカーは華麗な復活を遂げたのだった。

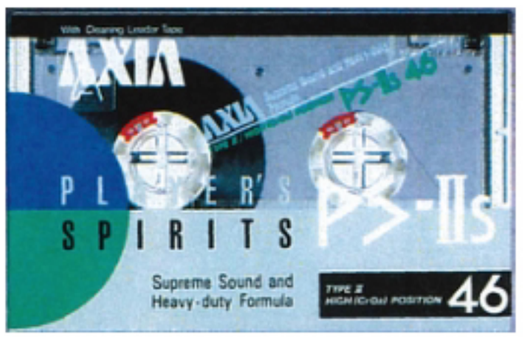
FUJI / AXIA



1985 AXIA PS-Ⅱ



1985 AXIA PS-Ⅱ (#01)



1987 AXIA PS-Ⅱs (#02)

PS-II Gallery



1988 AXIA PS-Ⅱs (#03)



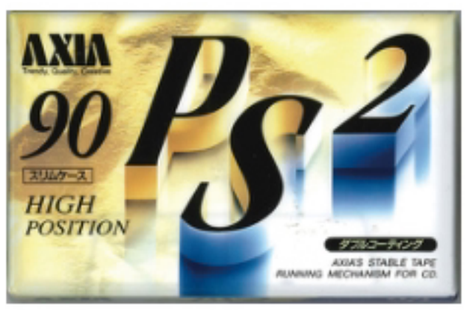
1990 AXIA PS-Ⅱs (#04)



1991 AXIA PS-Ⅱ (#05)



1993 AXIA PS-Ⅱ (#06)



1994 AXIA PS2 (#07)



1995 AXIA PS2 (#08)



1997 AXIA PS-2 (#09)



1998 AXIA PS2 (#10)



1999 AXIA PS2 (#11)



2000 AXIA PS2 (#12)



2001 AXIA PS2 (#13)



2002 AXIA PS2 (#14)

FUJI/AXIA

CHRONOLOGICAL TABLE

HIGH



FC



Range-4X



UR



FR-Ⅱ



PS-Ⅱ





PS-Ⅱx





PS-Ⅱx



PS-Ⅱs Slim



PS-Ⅱx



PS-Ⅱ



Hi



J'z2



Be2



A2

HELLO KITTY











J'z2 COLOR























AU-Ⅱ

AU-ⅡX

K2

AU-ⅡX

K2

K2

Z 2

GT-Ⅱ



SD-Master

BLACK SLIM Ⅱ

Metal

Super Range

FR METAL

XD-Master

PS-Ⅳx

METAL

AU-Ⅳx

J'Z METAL

PS METAL

K METAL

1969		カセットテープ			NORMAL					
1970										
1971										
1972		FL		FM						
1973										
1974						FX				
1975									FX Duo	
1976		FL		FX Jr						
1977										
1978									Range-6	
1979										
1980		DR		ER						
1981										
1982						FR-I				
1983					GT-I					
1984										
1985	JC	JP				PS-I			HD-Master	
1986			JP-F							
1987						PS-Is	PS-Ix			
1988		UP				PS-Is				
1989							PS-Ix			
1990						PS-Is Slim		AU-I	AU-IX	
1991							PS-Ix			
1992										
1993				J'z1				K1	AU-IX	
1994		A1 SLIM						K1	Z 1	
1995	BOX 1									BOX 2
1996			Be1							
1997										
1998	BOX1	A1						K1		BOX2
1999				J'z1 COLOR						
2000										
2001										
2002										

BRAND STORY

ブランド・ストーリー

COLUMBIA / DENON

日本コロムビア株式会社の磁気テープ事業は、それまで系列の日本電気音響株式会社で研究していた磁気テープを、日本コロムビアの川崎工場で生産開始したことに始まる。

1962年4月に日本放送協会BTS規格に合格したデンオンのテープがNHKに正式採用されると、デンオンのテープの評判は一気に高まっていった。

またカセットテープに関しては老舗レコードレーベルの日本コロムビアらしく、ブランクテープよりも先にミュージックテープが発売された。ブランクテープは1967年11月に生産ラインを栃木県真岡市にあったコロムビア機器株式会社の工場に移し、生産能力を増強してからのことになる。

当初、家庭用は『コロムビア』ブランド、業務用は『デンオン』ブランドとしていたが、徐々に民生用も『デンオン』に統一された。

1975年には日本コロムビア社内にあった磁気テープ研究部門もコロムビア機器株の真岡工場に移管。さらに1981年にテープ部門が独立し、コロムビア・マグネ・プロダクツ株式会社となり磁気テープの専門メーカーとなった。



1969年の広告。カセットテープにはこの年の4月に90分テープが追加された。だがまだオープンリールが主流な時代だった。

RD/RD-X/RD-Z



1986　RD (#01)



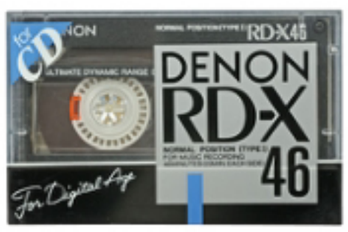
1987　RD (#02)



1986　RD-X (#01)



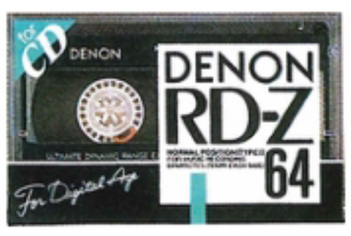
1987　RD-X (#02)



1988　RD-X (#03)



1987　RD-Z (#01)



1988　RD-Z (#02)



1990　RD-Z (#03)

日本コロムビアは1978年、それまでコロムビア・ブランドで販売されていたカセットを、プロ用ブランドの『DENON』で販売する方針に変更。それ以降はすべてDXシリーズとして統一された。すなわちノーマルのDX1、3、4、フェリクロームのDX5、ハイポジションはDX7、8、メタルのDXMだ。

だが1985年、デンオン・ブランドになって以降、主力ラインで初めてDX以外の型番を持つHD-Sが登場。DXシリーズはここから終息に向かう。新しいデンオンのラインナップは、ノーマルはRDシリーズ、ハイポジションはHDシリーズ、メタルはMDシリーズとなり、明確に別シリーズとなったのだ。

新しいノーマルシリーズとなったRDの登場は1986年。1985年頃から登場し始めた充填密度の高いノンポア技術を使った、ノンポアコバルト被着酸化鉄、つまりハイポジと同じ磁性体を採用した意欲作だった。その翌年にモデルチェンジを行い、同時にRDの下にRD-Zが登場。RDの前に出ていたRD-Xと合わせ、デンオンのノーマルシリーズはRD-Z、RD、RD-Xをベースに展開されることになった。

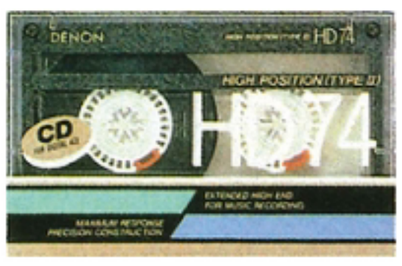
HD/HD-S/HD-X



1986　HD (#01)



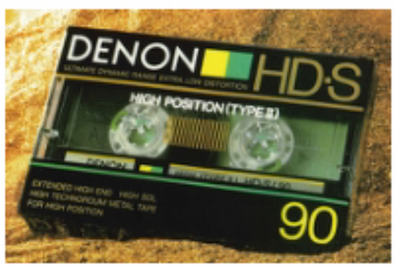
1985　HD6



1987　HD (#02)



1989　HD (#03)



1985　HD-S



1987　HD-X (#01)



1989　HD-X (#02)

1980年代の中頃になると、セットの性能競争は激化。ノーマルはハイポジションの磁性体を、ハイポジはメタルの磁性体を使うことで流行した。1985年に登場したDI-Sは、1983年にハイポジピュアメタルを用いたことで話題となったDX8の後継モデル。このDX8に用いられていたハイテクローム磁性体を進化させたコバルトフェライト複合メタル、ニューハイクノローム磁性体を採用した高性能ハイポジだ。このモデルからデンオンのハイポジションはHDシリーズとなる。同年UDIIに代表される価格ハイポジのクラスにHD6を投入。通常のコバルト被着酸化鉄を超微粒子化した磁性体を採用していた。1986年には内容はほぼそのままでHDにスイッチ。さらに翌1987年にはラベル貼り付け部分も窓にした独特なハーフ（Wスルー高精度ハーフ）を採用した2代目HD（HD6からは3代目）にスイッチ。このタイミングで上位モデルHD・Xと最上位HD・XSも誕生しハイポジションシリーズはほぼ完成した。

DENON
CHRONOLOGICAL TABLE

1969
1971
1972
1973
1974
1975
1976
1977
1978
1979
1980
1981
1982
1983
1984
1985
1986
1987
1988
1989
1990
1991
1992
1993

CrO2



CHROME DIOXIDE



1K



DX7







DX8



HD6



HD-S



HD



HD



HG





HG-S



HD-X



HG-X



HG-S



HD-XS



HD-XS



ZippyⅡ



ZippyⅡ



CD／PAL Ⅱ



HG-M



GR-Ⅱ



GR-Ⅱ



GR-Ⅱs

Metal

DX5





DX5

DXM



DXM



DXM



MD



MD





CD/JACK Ⅳ



MG-X

1969	 TRK				NORMAL						
1971											
1972	 SP				 MS						
1973											
1974											
1975	 1H				 3H						
1976											
1977											
1978	 LX	 DX1			 DX3						
1979											
1980					 DX3 (19)						
1981		 DX1			 DX3						
1982											
1983		 DX1					 DX4				
1984				 HANDY POCKET	 DX3		 DX4				
1985	 DX1 PASTELLIVE				 DX3		 DX4				
1986					 RD		 RD-X				
1987		  RD-F			 RD	 RD-Z	 RD-X				
1988	 RE	 RE-X	 RD-R (Zippy)	 The AUDITION							
1989			 ZippyI	 CD▶PAL·I		 RD-Z	 RD-X	 RD-XS	 RG-S	 RG-X	
1990						 RD-Z					
1991											
1992								 RD-XS	 RG-S	GR-I	
1993	RS	K-R I								GR-I	GR-Is

BRAND STORY
ブランド・ストーリー

That's

戦前から磁器（セラミック）素材の研究をしていた佐藤彦八氏が酸化チタンセラミックコンデンサを開発。その量産のために1950年3月に設立したのが太陽誘電株式会社。その後トランジスタラジオ用小型中間周波トランスを開発中に、フェライトに着目。トランス用パーツとしてニッケル・亜鉛系フェライトで小型フェライトコア開発し『フェリットコア』として商品化した（1954年）。このようにパーツメーカーとして着実に業績を延ばしていった太陽誘電だが、1983年に初の『ザッツ（That's）』ブランドのカセットテープ、MGとMRを発売する。いずれも当時まだ新しいポジションだったメタルテープだが、上位モデルのMRでも60分で850円と当時の上級ハイポジション（SA-XやUCX-Sなど）と同価格、下位モデルのMGに至ってはXLⅡやSAと同価格というロープライス&高性能が売りだった。

1985年に登場した第二世代モデルEM-XやMG-Xなどに使われた三角窓を採用、SUONOなどではジウジアーロデザインを取り入れるなど、独特なハーフデザインも特徴。



記念すべきThat'sブランドの1号機（メタルテープ2モデル）。当時のオーディオ誌の紹介文では必ずといっていいほど「コンデンサやICで有名な太陽誘電から…」という枕詞がついていたから、やはりカセット参入は意外だったようだ。

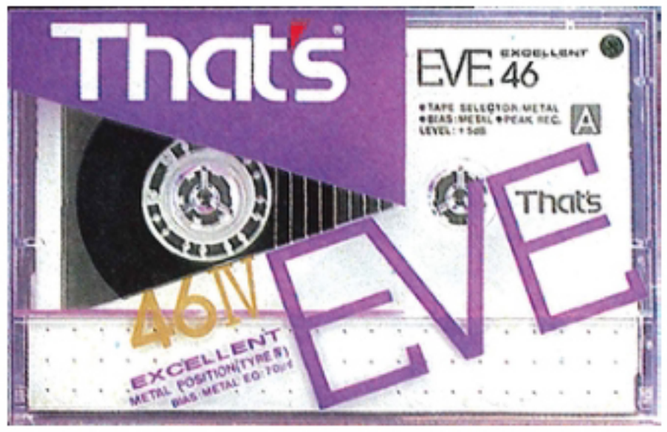
EVE



1985　EVE (#01)



1985　EVEⅡ (#01)



1985　EVEⅣ (#01)



1985　FX



1987　EVEⅠ (#02)



1987　EVEⅣ (#02)

一度見たら忘れないインパクトを持つ大型三角窓を持つハーフ。いまだにザッツといえばこのハーフを思い出すという人も多いだろう。この三角窓のルーツは1985年のこと。ザッツとしては第2世代モデルにあたるMG-X、EM-X、FXの3モデルに採用されたのが最初だ。当初ザッツはひとクラス下の価格で実現するというブランドだったが、同年むしろハーフのデザインとカラーのハーフを売りにしたRXシリーズを発売。さらにその路線をハイポジ、メタルまで広げたEVEシリーズを展開した。

1983年誕生の新しいブランドらしく勢いのあるザッツは、1985年の三角窓ハーフの登場以降ほんどのモデルをこのデザインで押していたが、1988年に突然、イダストリアルデザインの巨匠、ジルジェット・ジウジアーロを起用したカセットを発売する。それが次ページから紹介しているSUONOの新・球面体理論と名付けられたハーフの形状で振動を防止するという思想のものだった。ただし一般的なカセットとあまりに異なる造形のため、カーステレオなどで不具合が発生するケースがあった。

翌1989年にザッツはふたたびジウジアーロを起用。今度はカセット規格を守りつつ、氷河とボヘミアングラスをイメージしたという美しいハーフを実現。写真で見るより実物はずっと質感が高く、もちろん不具合も発生しなかった。

テープそのものはザッツらしく、ひとクラス上の実力機。ただし低音再生能力と倍速ダビング特性を重視したというキャラクターで、感度が高すぎることなどからノイズリダクションに対する相性があまり良くないという評価も見られた。

1992年には2代目も登場した。

OW



1989　OW-1 (#01)



1989　OW-2 (#01)



まるで氷か宝石のような冷たい輝きのある、透明度の高いハーフを採用。SUONOシリーズのような規格を無視した造形ではなく、あくまで表面上のグラフィックをデザインしている。

マエストロの音

That's SUONO

『SUONO』はイタリア語の『SOUND（音）』。
イタリア語のネーミングが与えられたのには訳がある。
3大カロッツェリアのひとつ、
イタルデザインを主宰するジョルジェット・ジウジアーロがハーフをデザインしたためだ。

写真・横澤靖宏　文・澤村 信

『カー・デザイナー・オブ・ザ・センチュリー』に選ばれた20世紀最高のカーデザイナーとして知られるジョルジェット・ジウジアーロ。日本ではニコンの一眼レフやセイコーの腕時計など、インダストリアルデザイナーとしても知られている。もっともイタリアではされに幅広く活躍しており、バルサミコ酢の瓶やパスタのデザインも手がけるほど多才なデザイナーである。そのジウジアーロがデザインしたカセットテープがこの『SUONO』だ。

主観的なものではあるが、ジウジアーロがデザインするクルマが、抜けてずば抜けて美しいわけではない。良く引き合いに出されるマルチェロ・ガンディーニのデザインと比べると、機能性が高いところに大きな差がある。例えば運転席に座って、自然に手を伸ばしたところに使用頻度の高いスイッチがあるとか、生産工程が数工程省けるデザインだとか、単に美しさだけでない機能性がある。クルマだけではない。前述のパスタ、MARILLE（VOIELLO社）など、ソースの絡み具合まで計算したというから恐れ入る。

そのジウジアーロがデザインしたというのだから、このSUONO、ただのカセットではない。

カセットテープは利便性（オープンリールと比べてだが）と引き換えに音質を犠牲にしたメディアだ。そのハンディをカセットテープ本体とデッキの改良によって克服、高音質化を果たしている。そのカセットテープ本体側のハンディのひとつにハーフの振動という問題があった。

デッキの回転系が発生する振動、スピーカーが出す音など、ハーフの微震動、共振を招く原因はいくつかあるが、これらによって揺れ動くハーフはそのままテープの振動となり、音楽成分以外の周波数成分が発生し、再生あるいは録音の信号を変調してしまうというのだ。これが変調ノイズである。

じつは1980年代前半まで、こうした変調ノイズはあまり問題になっていなかったのだが、CDの普及がカセットテープへの要求性能を引き上げた。ダイナミックレンジの広いCDにおいて、ポイントはやはり微小レベルの音楽信号をいかに正確に記録し再生するか、ということになるのだ。そこに至りハーフの振動は無視できない問題となってきた。

TDKはダイキャストのフレームを考えた。ソニーはオールファインセラミック、マクセルは重量系プラスチックでハーフを作った。各社様々な工夫を凝らすなか、後発のザッツ（太陽誘電）の、つまりジウジアーロ

※この特集は『ステレオ時代 Vol.2』の『カセットテープ名鑑』を追補改定のうえ再編集したものです。

BRAND STORY

ブランド・ストーリー







もともとフィリップスのコンパクトカセット規格の無償特許公開の条件は互換性の厳守だったためハーフはラベルのデザインやカラーはバリエーションがあっても外形まで変えることはほとんどなかった。厳密にいえば『規格外』のこのSUONOは『ご注意:本商品は、特殊形状のため一部のカー・オーディオの着脱機構に適合しない場合があります。』の但し書きが添えられていた。C46が1400円、C60が1600円、C90が1950円だった（1988年当時）。

の出した答えがこの新・球面体理論を応用したハーフの形状だった。

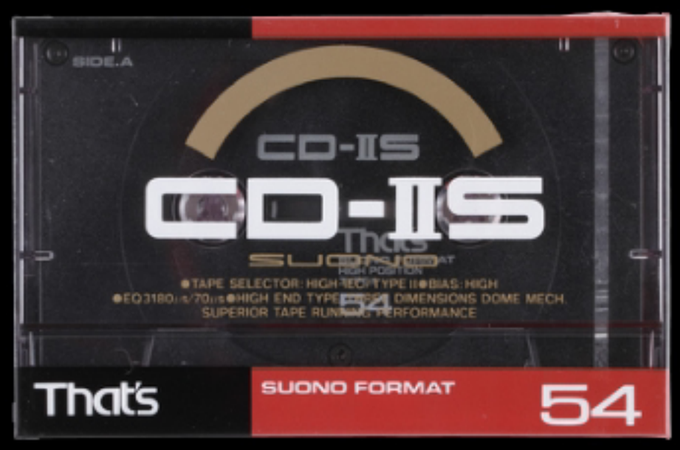
もともと球体の剛性が高いのは周知の事実。その球体の一部を切り取ったような面をハーフの両面に設けた。その球体部から周縁の平面に繋がる法面はリブの役目を果たし、全体として高剛性なハーフを構成している。また球面であるため、横から見た時のハーフの厚みは連続的に変化し、共振を起こしにくい構造になっていたのだ。

一方、ハーフの材質も配慮されており、ポリマー樹脂と特殊ゴムを主成分とするAVPR（Anti Vibration Polymercontains Rubber）という複合樹脂を開発、採用していた。これは従来の樹脂に対し2倍の防振性、2・8倍の制振性を持ち、変調ノイズの低減に寄与していた。

このSUONO、デザイン性の高さ、高音質でなかなか人気があったと記憶しているが、一方で問題も発生していた。この特殊な形状のハーフゆえ、スロットローディングの機器、とくにカーステレオでテープが排出されないというトラブルが頻発したのだ。もともと重いハーフとスロットローディングの機器は相性があまり良くないのだが、このユニークなデザインのハーフはさらに機器に負担をかけたのだろう。

That's





1989　CD-IIS

SUONOの廉価版であるCD-Sシリーズは、ノーマルのCD-IS、ハイポジションのCD-IIS、メタルのCD-IVSがあった。CD-IISはC46（600円）～C90（1050円）（1988年当時）。ちなみにCD-IVSの46分は750円なのでSUONOよりだいぶ安い。





1991　CD/IIF (#02)

CD-Sの進化版となるCD/Fシリーズはハーフの形状を規格に近づけたもので、ハーフのヘッドが入る部分の台形も、中心部の円に削られていない。そのためスロットローディング機器でもほとんど問題は起きなくなった。写真は1991年モデル。



ジョルジェット・ジウジアーロ
GIORGETTO GIUGIARO

1938年生まれのイタリアのカーデザイナー。フォルクスワーゲン・ゴルフ（初代）やフィアット・パンダ（初代）などのデザインで知られるが、工業デザインも幅広く手がけている。このSUONOは1981年に設立されたインダストリアルデザイン専門のジウジアーロ・デザイン社名義での作品である。

このオリジナルのSUONOは1988年のグッドデザイン賞を受賞しているが、同時に廉価タイプの『CD-S』シリーズも発売。こちらはSUONOと違い軽量ハーフ（総重量は約70%）となっていたが、形状はSUONOと同じために、やはりカーステレオなどでトラブルは起きていた。その手当てとして、ハーフ形状をノーマルのカセットに近づけ『CD／F』シリーズが1990年に登場。ケースをスリム化したマイナーチェンジ版も後に登場した。

Scotch



1973　Scotch HIGH ENERGY



1975　Scotch CLASSIC

戦後間もない1947年、世界初の録音テープの開発に成功したのがアメリカのスリーエム（3M）社だった。1948年にはアセテートベースの録音テープ#111を発売。1950年代には日本にも輸入され始めていた。

スリーエムはその後もコンピューター用テープ、ビデオテープなど磁気メディアを次々と発売。こうした製品を日本でも本格的に展開するため、1960年にアメリカ・スリーエムの日本法人として日本ミネソタスリーエム株式会社を設立。翌1961年12月に住友電気工業株式会社と日本電気株式会社とスリーエムの3社出資により住友ミネソタ株式会社が設立。1962年に住友ミネソタが日本ミネソタスリーエムを吸収合併するカタチで住友スリーエムが設立された。さらにその翌年、1963年には#111を始めとする録音テープの国内生産が開始されている。

さらに1970年には磁気製品専門の相模原工場を設立、1971年には工場にはカセットテープの組込み工程を持つ山形スリーエム株式会社・東根工場が完成し増産体制を整えた。だがその後は磁気テープは徐々にビデオテープをメインにシフト。日本ではカセットは数度の撤退、再開の後フェードアウトしている。

National Panasonic



1971　National RT-A

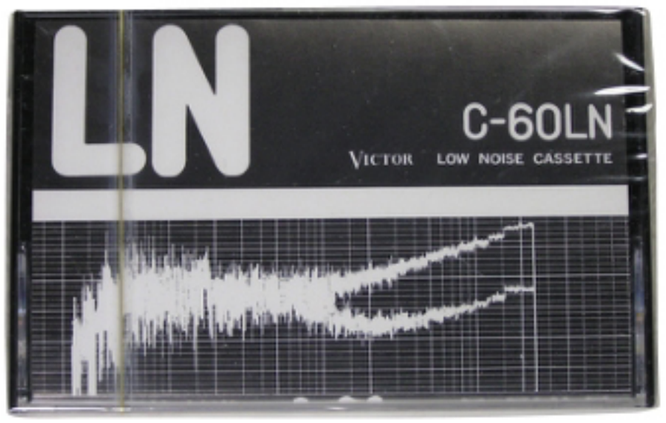


1983　National ÅNGROM DU

ナショナル・ブランドのカセットテープはもともとはOEMからスタートしている。当初はレコーダーの付属品やサプライとしての扱いだったと思われるが、1969年頃にはRT-Aが発売され、その後オーディオブランドのテクニクスを設立に伴いカセットをラインナップする必要が出て来ていた。

ナショナルが本格的にカセットのラインナップに力を入れ始めたのは1978年頃。テクニクス・ブランドのカセットで、パッケージを揃え、ラインナップを一新。LNからMXまで4種類が登場した。

ただしこれはTDKからのOEM。LNがTDKのD、XDが同AD、XAが同SAと同等品だが、XDはTDK・MAとは違うものだったようだ。このようにしばらくはナショナルのカセットはTDKからのOEMだったが方針が代わるのはビデオテープの影響だったようだ。1976年に松下電器産業株式会社から独立した松下電子部品株式会社がビデオテープを自社で開発生産し始めている。カセットテープでも1983年に登場したオングローム・シリーズ、つまり蒸着2層式のカセットだけは自社生産だったのは、おそらくこうしたビデオテープで培った技術が応用されたものと思われる。



1976　Victor LN



1982　Victor ME

Victor

日本ビクターとカセットテープの関係は１９６７年に国内で初めてミュージックテープを発売したことに始まる。さらにその翌年、１９６８年にはブランクテープも発売。これからカセットテープ事業はスタートすることになる。１９７１年３月、戸工場が竣工した。

このようにカセットでも長い歴史を持つメーカーだがビクターといえばメタルテープが思い浮かぶ人も多いはず。日本で初めてメタル対応カセットデッキを発売したのがビクターだったのだ。しかしこのデッキは本格的な生産体制を整えるため、ビクターのメタルテープが発売されるのはずっと後のこと。

じつはこの頃のテープ事業部・水戸工場は音楽テープを主に生産する工場だったのだ。ビクター・ブランドのブランクテープ開発生産が本格的になるのは１９７９年９月に日本ビクターのテープ部門が独立したビクターマグネテープ株式会社が発足してから。この時に水戸工場に隣接した土地に磁気テープの一貫生産ができる工場を新設している。

その後はビデオテープが隆盛を極めたこともあり、ビクターマグネテープは順調に伸びていった。



1985　Konica XX



1983　magnax GM-Ⅱ

Konica
AMPEX/Magnax

もともと放送局やスタジオ用機材のメーカーだったアンペックス社。アンペックス・ブランドのカセットテープは１９７７年頃にはすでに輸入されていた。その後１９７９年に『コニカ』で知られる小西六写真工業株式会社とアンペックスは資本および技術提携を結び、１９８０年に小西六マグネプロダクツが小西六写真工業の１００％子会社として発足。

こうして１９８１年４月に小西六マグネプロダクツは、アンペックスから半製品の供給を受けるカタチでマグナックス・ブランドのテープの販売を開始。さらに５月には小西六マグネプロダクツを母体にアンペックスが50％出資し株式会社小西六アンペックスが設立された。また11月には本格的な生産体制を整えるため、甲府工場を設立。マグナックス・ブランドは本格的に稼働した。なおこの甲府工場ではコニカ・ブランドのビデオテープなども製造されていた。

ところが１９８３年、アンペックス本社はコンシューマー向けの磁気テープ事業から撤退することが決定。小西六アンペックスはアンペックスとの合弁契約を解消し、再び小西六写真工業の１００％子会社となり、名称も株式会社コニカマグネティックスと変更。これ以降はカセットテープもコニカ・ブランドとなった。



『懐かしのカセットテープ博物館』訪問記

カセットテープの記事を作る時に調べるのはまず古いオーディオ誌。あるいはカタログ。だが1980年代の半ばころまでは記事にしてもカタログにしても、扱いは意外とおざなりだ。そんな時に頼りになるホームページがある。『懐かしのカセットテープ博物館』。収蔵品の数もさることながら、特に1970年代のカセットについては、どこよりも詳しい解説とデータが添えられているのだ。

写真・山田芳朗
文・澤村　信

『懐かしのカセットテープ博物館』（以下『カセット博物館』）というホームページがある。これまでも『ステレオ時代』本誌を作る時に何度となくお世話になったページだ。カセットテープの写真をただ並べたり、思い出話に終止するページは他にもあるが『カセット博物館』は詳細なデータ……価格や発売時期まで……が記されていて、とてもありがたい。パッケージ変更の変遷など、年代毎に考察されていたりして、こうして商業誌としてカセットのネタを書かせていただくのがおこがましく思えるほどだ。「いったいどんな人がこのページを作っているのだろう」。その思いは募り、とうとう取材を申し込んでしまった。

「うっかり『博物館』なんて名乗ってしまったものだからいい加減なことが書けなくなってしまったんですよ」

大荷物（カメラ機材は意外と大掛かりなのだ）でご自宅に押しかけた私たちに、嫌な顔ひとつせず、にこやかに応対してくださったのは『カセット博物館』館長の加藤邦裕氏だ。

このホームページ、ご覧になっていただけば分かると思うが、ものすごい情報量だ。すべて加藤館長ご自身で作られているという。聞けば今年（2017年）でちょうど20年になるそうだ。

「まだ個人でホームページを作るというのが今ほど一般的ではなかった

◆

『懐かしのカセットテープ博物館』とは

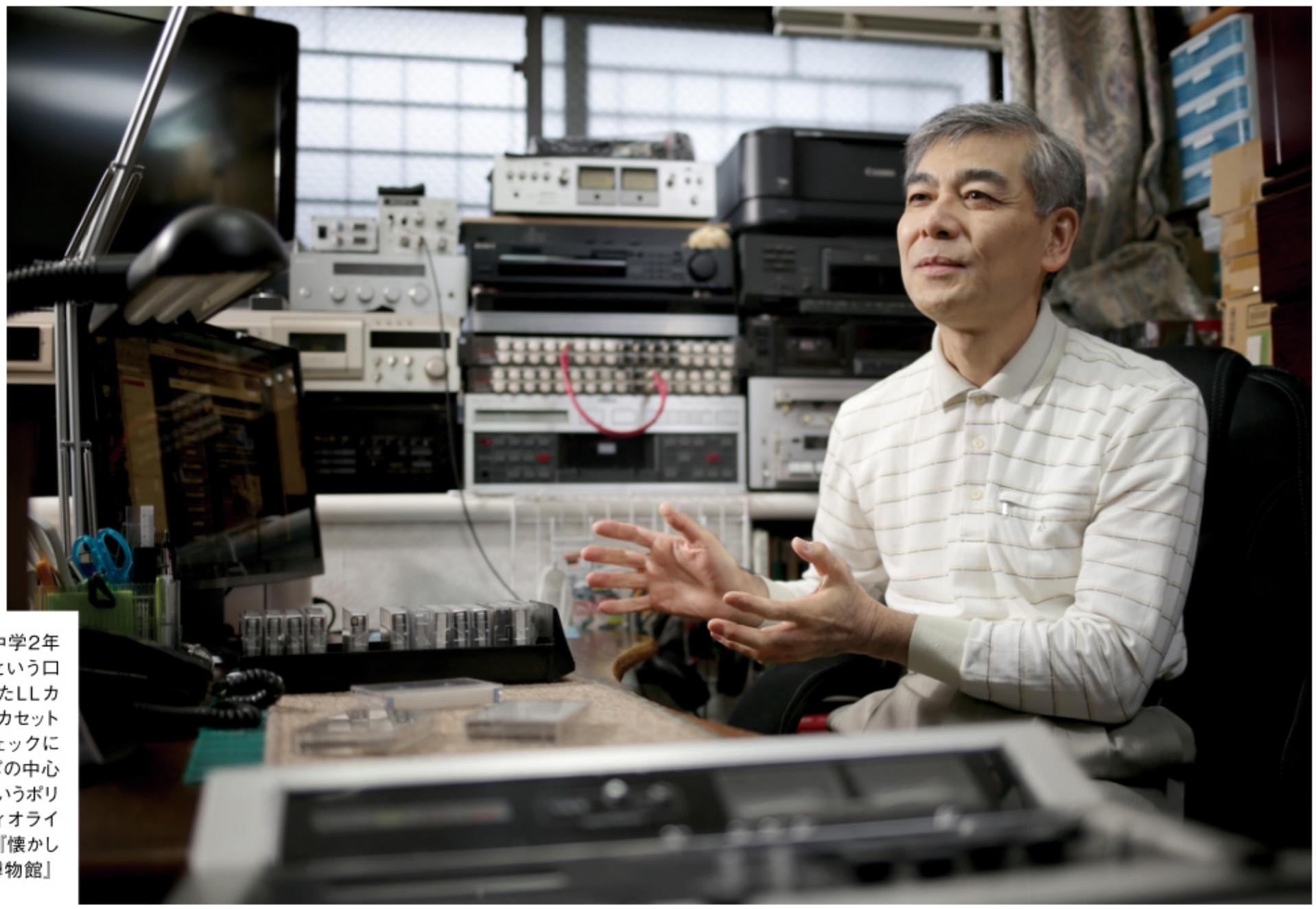


紹介されているカセットテープは加藤館長が少年時代からお世話になっていた1970年代のモデルが中心。メーカー別、ポジション別に並べられたインデックスの中身は解説、データ、パッケージや本体の写真など。解説はとにかく詳しく正確で、博物館の膨大な資料によってきちんと調査されている。今回、本誌でも年鑑のページを始め、大変お世話になった。1980年代以降は写真のみを掲載というカタチ。ほとんどが館長のコレクション。

http://compactcassettes.jp/

館　長

加藤邦裕



1956年生まれ。中学2年の時に英語学習という口実で買ってもらったLLカセットレコーダーでカセットデビュー。エアチェックにはまり、以来コンポの中心はカセットデッキというポリシーのもとオーディオライフを送る。1997年『懐かしのカセットテープ博物館』館長に就任。

魅惑の収蔵品

カセットテープの収蔵品のほとんどはホームページに紹介されているが、ここではホームページで見ることの出来ない収蔵品の一部（本当にごく一部）を紹介しよう。



フィリップスEL3312Aは世界初のステレオデッキEL3312の改良版と思われる。ドイツの製品のように無駄がまったくないデザイン。ツマミ類は文字ではなくグラフィックで機能が示されている。詳しくはホームページで。



日本では販売されなかったHX-S。HXは1984年に発売された、メタル磁性粉を採用したハイポジションカセット。その上級版と思われる。

伝説の銘機ティアックC-1。ティアック初の高級機。その下、ややぞんざいに扱われているのはナカミチのノイズリダクションユニット。





BASFのキャンペーンでもらえたキーホルダー。ハブを回すのによく鉛筆を使ったが、その代わりになる6角柱。1985年頃のものと思われる。

『懐かしのカセットテープ博物館』



懐かしいティアック製のカセット専用キャビネットに並ぶコレクションの一部。実物は初めて見るようなカセットが並んでいる。箱買いされたものも多く、DATはまだしもdccまで箱買いだ。

中央は言わずと知れたナカミチ・ドラゴン。下は1000ZXLだ。加藤館長いわく「どちらも素晴らしい音ですが、音質面ではドラゴンの方が優れていると思います」とのこと。





上から2個目はナカミチ・ドラゴンに触発されて開発されたターンバーグの高級カセットデッキ3014A。海外では『ドラゴン・キラー』とか『ドラゴン・スレイヤー』と呼ばれているそう。ぜひ聴いてみたい！



右列上から2個目がフィリップスのdccデッキDCC-900。左列はソニーのノイズリダクションやdbx、セレクターなどの下にルボックス（スチューダーの民生ブランド）B215が。カッコいい！



もらうためのメジャーな口実だったそうだ。1971年のことだった。

「レコーダーもソニーだったからテープもソニーを使いたかったんですけど、ソニーは安売りしなかった。それで大きなスーパーなら安く買うことができたTDKのDを使うことが多かったですね」。ちなみに「スコッチは国産と比べると品質が安定していなかった印象があります。BASFやAGFAは売っているところさえほとんど見なかったですよ」という。

やがて高校生になって初めてコンポを買う時にも、まずカセットデッキを買ったが使い過ぎてすぐにヘッドがすり減ってしまったそうだ。

「次に買ったのはソニーのTC-43

のですが、何かホームページを作ってみたい、というのが先にありまして……」。何のページにしようかと考え、昔から集めていたカセットテープのページを作ろうと思い至ったのだという。

加藤館長とカセットの出会いは、中学2年生の頃だった。「その頃はエアチェックが流行り始めで、ラジカセを持っている子供もいましたが、遊び道具になることが見え見えだったせいかウチでは買ってもらえませんでした。それでも『語学学習に必要だから』と何とかソニーのカセットコーダーを買ってもらいました。結局ラジオをつないで録音していましたが（笑）」。『語学学習』は当時子供がカセットレコーダーを買って

00SDでした。アイワのAD-7600と悩んだんです。アイワは多少安く買えたので（笑）」。予算のほとんどをデッキとチューナーに注ぎ込んで「アンプとスピーカーは音が出ればよかった」という偏ったシステムを使っていた。デッキとチューナーは基本直結。カセットライブラリーを増やすことに夢中だった。そんな加藤館長だからカセットのホームページを作り始めたのは当然の成り行きだったのだろう。

ただ20年前にホームページを作ったばかりの頃は1日に数件のアクセスしかなかったという。

「ホームページを作った当時はまだカセットが現役だったのです。世間のカセットへの関心が一番薄くなっていた時期だったのでしょう」。別に商売にしているわけでもないのでマイペースで内容を充実させていった加藤館長だが、ある時急にアクセスが激増した。「7年くらい前に『カセットウォークマンが販売終了』というニュースあったのですが、そのネットニュースに『カセット博物館』のリンクが紹介されたのです」。『カセット博物館』はその後も加藤館長の並々ならぬこだわりの元、マイペースで内容を充実させていっている。

ところで、ホームページにも紹介されているが、この『カセット博物館』学芸部（加藤館長のご自室）はものすごいコレクションだ。カセットはほとんどがダンボールに収蔵されているようだが、デッキのコレクションにも目を見張る。

ナカミチ1000ZXLやドラゴンといった定番高級モデルに加え、ルボックスやターンバーグなど海外製品、フィリップスのdccといった変わり種もある。それに対し、アンプやスピーカーはあきらかに釣り合いが取れていない。このあたりは高校生の頃から変わっていないようだ。

「最近はブームのせいでネットオークションでもカセットテープが高価で取引されるようになってしまったので、コレクションしづらくなってしまいましたが、これからもマイペースでやっていきますよ」。加藤館長の活躍はまだまだ続く。



加藤館長が「もっともカッコいいパッケージ」だと言うB&Oのカセットテープ。1980年代の中頃くらいの製品らしいが詳細は不明。中身はBASF製のハイポジションテープ。ハーフは広窓のシンプルなもの。ヤマギワあたりで売ってそう。



ナマロク

生録に出かけよう！

カセットテープの実力、いまだ色褪せず

何本ものマイクをミキシングコンソールで操作し
トラックダウン～マスタリングを行い、音楽ソフトは作られる。
一方ナマロクはカセットデッキにマイク直差し。
レコードで言えばダイレクトカッティングである。
このシンプルさが録音クォリティの良さにつながる。

写真と文・牧野茂雄





ギタリスト・田辺光邦（たなべみつくに）氏はニューヨークで数多くのミュージシャンとセッションを重ねたベテラン。最近は八代亜紀のジャズアルバムでギターを担当している。上の写真で弾いているのは名器中の名器、オリジナルのディアンジェリコ。セミアコースティックなのでアンプを通した音と生音が重なる。

ヴィンテージギターの音を日本とドイツのデッキで録る

SONY TC-D5M / SHURE SM57
UHER CR240 / AIWA CM-1017P

生島氏はSONY最後のカセットデンスケTC-D5Mにシュアーの定番ダイナミックマイクSM57。私・牧野はウーヘルのポータブルデッキCR240にアイワのコンデンサーペアマイクCM-1017P。使うテープは生島氏がメタルで牧野はノーマル。それぞれまったく違う機材でマイクのセッティングも違う。

私・牧野とディスクユニオンＪａｚｚＴＯＫＹＯ店長・生島昇氏は、機材を抱えて夕暮れどきの街をせわしなく歩く。都内某所でジャズギタリスト・田辺充邦氏がソロライヴをやる。その本番前に、特別に録音の時間を我われに用意してくれるというのだ。生島氏が言う。

「ギターはオリジナルのディアンジェリコですよ。滅多に聴けません。おそらく1本数百万円だな……」

セミアコースティックギターの音は、ピックアップで拾ってアンプを通した音とギターの胴鳴りの音とが両方出てくる。弾き手がピックアップのボリュームをどれくらいにするかでも音が変わる。

録音会場に到着した我われは、



変則ジャズトリオ トロンボーン×2を録る

SONY TC-D5M / SHURE SM57 UHER CR210 / audio-technica AT9943

生島氏は前ページと同じ機材。牧野は同じウーヘルでもさらに小型のオートリバース機CR-210にオーディオテクニカのワンポイントステレオマイク。ミュージシャンは新進気鋭のトロンボーンデュオ、ボン・ボーンズ（上杉優さん・駒野逸美さん）とピアノの佐久間優子さん。センスが試される録音だった。

さっそくマイクのセッティング。生島氏も私も電池駆動のレコーダーなのでAC電源は使わない。マイクは録音機に直入力できる数だけ使いミキサーは通さない。マイクと録音機は直結で、その音はそのままカセットテープに入る。世界一シンプルな録音機材である。だから音の鮮度が抜群に高い。「サー」というテープヒスノイズが多少入ろうが、後処理なしのダイレクト録音テープは、CDやレコード盤にはない音を出す。

いよいよ録音。生島氏は斜め上60cm付近からギターの直接音をねらう位置にマイクを立てた。左右マイクをやや内側に振るLR配置だ。牧野は部屋の残響とアンプの音も拾える位置、1・6mくらいの高さにマイクを置き、左右マイクを90度交差させたX-Y配置で録る。あとで聴き比べて分かったことは、マイクアレンジによって収録音がまったく違うものになるということだが、1曲終わるごとにマイク位置を少しずつ変えてみると、1本のテープのなかでも音がどんどん変わる。録音の楽しさであり難しさでもある。

最終的に生島氏は、思い切りギターにマイクを近づけた。ダイナミックマイクの良さそのものの音圧の高い音が拾えた。私・牧野はマイクを少しずつ高くしていき2mちょいで落ち着いた。部屋の響きとアンプからの音がうまく混ざってくれた。そしてこの日、我われはかつてハマった『ナマロク』の面白さを完全に思い出してしまった。

いろいろな音を録ってみたいと思うようになると、とにかく録音機とマイクを毎日持ち歩くことになる。そんなときに便利なのがウォークマン・プロフェッショナルWM-D6Cだ。リニアPCMレコーダーは「音を録る」には最適だが、カセット独特の演出が何とも言えず、毎日D6Cを持って歩いた。

行き付けのジャズバーでピアノ弾き語りを録らせてもらう。当然、お店の許可をいただく。古川琴子さんの優しい声にいつも癒される新宿の

生録（ナマロク）に出かけよう！



バーだ（残念ながら閉店）。声はＰＡから、ピアノはナマ音という演奏は録音が難しい。ピアノの低音が薄れないよう、左手方向に近い場所でＰＡスピーカーよりも低くマイクを構えた。営業中なのでマイクスタンドは使わず手持ちだ。

インナーイヤー型のイヤホンを耳道に思い切り押し込み、外の音を遮断しでモニターしていると、そこはビル・エバンス『ワルツ・フォー・デイビー』の世界だ。おしゃべりするお客さんの声、グラスのなかを泳ぐ氷の音、フォークとお皿が触れる音など、マイクが得意とする帯域を中心に取捨選択された音がテープに吸い込まれてゆく。

しかし、どうも気に入らない。思い切ってピアニストの左側、肉声を拾える位置まで近付いた。琴子さんが笑っている。すみません、弾きにくいでしょう。いえいえ……という感じで琴子さんに寄り添って録った音がいちばんだった。やはりＰＡより肉声だ。この音源も番組で使いました。ありがとうございます。

この日のマイクはオーディオテクニカの旧製品、ＡＴ８２２だった。後継機ＡＴ９９４３にはない、ちょっとカマボコ型の特性が気に入っている。テープはソニーのＵＣＸ。これも古いテープだが、当時の日本製品は「いきなり録音」に使っても大丈夫だ。こういうところはスコッチやＢＡＳＦよりも優れている。

次の収録は生島店長のお店、ＪａｚｚＴＯＫＹＯでのインストアライヴだった。トロンボーンのデュオという



真剣にモニタリングする生島氏。マイクリミッターは使いたくない。飽和しないぎりぎりの録音レベルを探る。こういうとき高域MOLに余裕があるメタルテープはいい。



牧野はウーヘル用にソニーのノーマルポジションテープを選んだ。ドルビーOFFでノイズフロアの高さより音の鮮度を優先した。ヒスノイズが目立つが耳障りではない。



収録したあらゆる音源をミュージックバードのスタジオに持ち込み、本誌コラボの番組『あのころをプレイバック、温故知新オーディオ歴史館』でオンエアした。

たいへん珍しいペアとピアノによるトリオ演奏は私自身が初体験である。我われの番組でオンエアすることを条件に、所属事務所の方に録音を承諾していただいた。

「インストアライヴはかなりハードルが高いのですよ。照明はまったくフツーの蛍光灯だから日中の明るさだし、天井が低いから音がこもり気味になります。しかもPA無し。アーティストの度胸試しみたいな部分があります。それなのに音を録らせてくれるというのは、自信がないとできません」

生島氏がこう言った。なるほどたしかにそのとおり。で、演奏を聞いて「やるなぁ」と思った。上手い。しかし音を録るのは難しい。ピアノはエレクトリックなのでスピーカーから音が出ている。エレピと2本のトロンボーンのバランスを考えるとやや低い位置にマイクを置きたいところだが、そうすすとトロンボーンの音がストレートに入ってこない。しかも2本のトロンボーンは掛け合いをやりながらハモるという高度なテクニックを駆使する。

できれば2本のトロンボーンの中間に、少し高い位置でマイクを置きたい。しかし、そうするとエレピの音が小さくなりすぎる。ああ……悩ましい。

この日の音録りは私・牧野も生島氏も苦労した。そして私が思ったことは「ダイナミックマイクは侮り難し」だった。ワンポイントステレオ方式でX-Y配置ができるオーディオテクニカのAT9943は、ナマ音を

ピアノ弾き語りを最小サイズの機材で録る

SONY WM-D6C / audio-technica AT822

ウォークマン・プロフェッショナルの異名を持つWM-D6Cは、プロ用途に耐えられる最小サイズのステレオ録音機。ほぼ同じ年代のワンポイントステレオマイクを組み合わせたが、ピアノと肉声を程よいバランスで拾うためのマイクポジションは難しく試行錯誤が続いた。





古川琴子さんはCMソングの作曲などを手がけてきたミュージシャン。ジャズバーでのスタンダードナンバーの弾き語りは「疲れた体と心」にとても優しい。

すべて拾う。一方、シュアーの定番SM57は、長年にわたって音楽現場で研鑽を積んだだけあって、じつに勘所をわきまえている。周波数特性はAT9943に劣るが、聴かせどころがわかっている。「やられた」という感じだった。

いろいろと収録したカセットテープと録音に使ったカセットデッキをミュージックバードのスタジオに持ち込み、番組で使う部分を選んだ。これも不思議なのだが、録音した機材とはべつのデッキでプレイバックすると音色が変わる。個人的な感想では、ソニーのTC-D5／D5Mのスッキリまとまった音は、オンエアにちょうどいい。ウーヘルは音ががっちりしているが、中低域がかなり膨らむ。コクが出すぎてキレがやや弱い。カセットテープとの相性もあるが、この時代のソニーはいいとつくずく思う。

番外編的に、取材で使うICレコーダーで録った野鳥の鳴き声もオンエアで使ってみた。内蔵マイクでのお手軽録音なのだが、思いのほかイイ雰囲気で録れていた。よく見るとレコーダーに『SRS』と書いてあった。これはヒューズ・エアクラフト社のエンジニアだったアーノルド・クレイマン氏が発明した音声明瞭化技術、SRS＝サウンド・レトリーバル・システムだ。クレイマン氏は1993年に独立しSRSラボを設立した。

いまではカーオーディオから家電製品まで、SRSラボのデジタルエフェクト技術はあちこちで使われている。人間の脳内での信号処理の仕組みを利用した技術を使うと、たとえば50Hzの低音を再生するときは100Hzと150Hzを同時に鳴らすと脳内では100＋150＝250Hzと150-100＝50Hzに認識されるそうだ。昔のカセットデッキにはできない芸当である。

そういう便利な技術を使った安価なICレコーダーは、取材には欠かせない。しかし、自分で何か目的を持って音を録るときはカセットテープがいい。なぜでしょうねぇ……。

生活のなかの音を2トラックモノラルで録る

SONY TCM-5000EV / audio-technica AT9943

TCM-5000EVはラジオ局などでも使われたカセットレコーダー。モノラルだがマイク入力は2系統あり、ワンポイントステレオマイクの左右chをそのまま使える。このカフェではエスプレッソマシーンの音を録った。シューと吹き出す蒸気の音をそれらしく録るのも、簡単なようでなかなか難しい。





PART.2

ヘッドフォンステレオ編

**1979年に世界中のリスニングスタイルを一新する商品が誕生した。
ここでは世界中を席巻したソニー・ウォークマンと
そのライバルたちの歴史を紹介しよう。**

※本誌でヘッドフォンステレオの発売年についてはほとんどの場合当時の雑誌記事や雑誌広告、カタログ等の発行年から編集部が独自に推定したものです。そのため実際の発売年と前後1年程度の誤差がある場合があります。また表記されている価格につきましても同様の調査方法で独自に調べたものです。モデルによっては途中で価格改定が行われている場合があります。ご注意ください。

ヘッドフォンステレオ進化論

1979年にソニーTPS-L2で始まったヘッドフォンステレオ。絶対王者ソニーに対して他の家電メーカー、オーディオメーカーも趣向を凝らしたモデルを投入していく……。こうして世界を席巻した日本製ヘッドフォンステレオ。ここではエポックだったモデルを取り上げつつ、どのように進化していったか振り返ってみよう。

1979年にウォークマンが誕生してからというもの、人々と音楽との付き合い方が一変したといっていいだろう。それまでリビングか自室で腰を据えて、左右のスピーカーを底辺とした三角形の頂点に陣取って「いざ」という感じで聴いていた音楽が、通勤・通学の途中だろうが、旅行中だろうが、いつでもどこでも気軽に楽しめるようになってしまったのだから。

それにしても、誕生から十数年でコレだけ進化したアイテムも少ないのではないだろうか。パソコンだってココまで劇的な進化はなかった。大

1979

すべてはここから始まった

井深大氏が出張時にデンスケと密閉型ヘッドフォンで音楽を聴くのが大変だからと、プレスマンをベースにステレオ再生機を作らせた……という伝説がまことしやかに伝えられる。だが本当に凄いのはそれが売り物になる、と見抜いた盛田昭夫氏だろう。伝説に彩られた銘機だ。



1979
SONY TPS-L2

1982

登場が早すぎた銘機（迷機?）

初代ウォークマンがヒットしたためソニー開発陣が持てる技術を注ぎ込んだ。オートリバース、フルロジックコントロール、リモコン…。先取りし過ぎた感が否めない銘機だ。





1982 SONY WM-7

オートリバースを身近にした立役者

1981年にソニーのWM-2が大ヒットを飛ばす。それに触発され小型化競争が起きたのだが、アイワHS-P2はその大きさにオートリバース機構を詰め込んだ。アイワはライバルのソニーやナショナルに比して小さな企業だった。パーツはライバルと違いサプライヤー頼み。だからこそ小型化は非常に大変だった。その内部はまるで迷路のようにベルトが通り、メカの隙間に電気回路が押し込まれた。その甲斐あってHS-P2は稀に見るヒット作となった。



1982 AIWA HS-P2

ソニーらしい超高性能機

とにかくデッキ並の性能をこのサイズに押し込んだ。もはやウォークマンと呼ぶのが憚られる。



1982 SONY WM-D6

1983

画期的な駆動方式ディスクドライブを採用

WM-2とほぼ同じサイズながらワウフラ0.08%の高性能を実現した。秘密はモーターがフライホイールを直接駆動するディスクドライブ（DD）。未だに人気の銘機。



1983 SONY WM-DD



1990 SONY WM-DD9

カセットケースサイズを実現

カセットケースサイズを実現。超薄型モーターと使う時に引き出すヘッド部分がポイント。

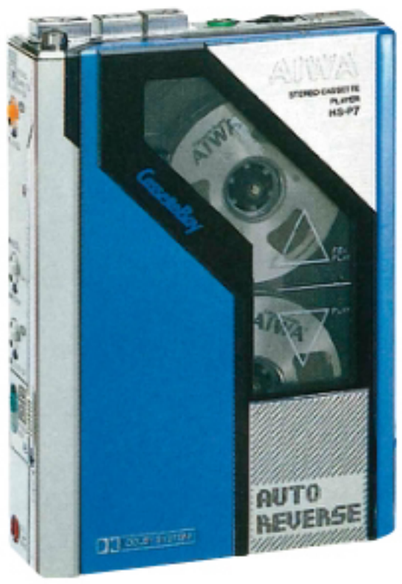


1983 SONY WM-20

1984

ミュージックセンサーを搭載した銘機

この時期アイワの社長を務めていたのはCDの父、中島平太郎氏だった。とにかく性能にうるさく、小型化などよりも品質が求められたという。そのためこの時期のカセットボーイは未だに人気が高い。またこのHS-P7はバック・トゥ・ザ・フューチャーでダースベイダー（に扮したマーティ）が使ったことでも知られる。



1984 AIWA HS-P7

先見の明に溢れた傑作

世界最小・最軽量を前面に出したナショナルのウェイ。ヘッドフォンコードの途中にあるスイッチでプレイ・ストップがコントロール可能。早送り・巻き戻しはカセット蓋に組み込まれたスイッチで行える。同じ性能でデザイン違いの3モデル展開も新しかった。

1982 National World Way Series



RQ-SJ1　RQ-WJ1　RQ-KJ1

きさも性能も機能も、別のメディアなのではと思うほどの変化だ。まったく日本人というのは、どうしてここまで真面目に改良を繰り返せる民族なのだろう。カセットといい、ヘッドフォンステレオといい、日本人の気質に合っていたとしか言いようがない。

サイズに対する執念もものすごい。1984年には最初のカセットケースサイズ、WM-20が誕生しているが、これは使用する際にはヘッド部（乾電池も入っている）をスライドさせて使うもので、本当のカセットサイズはガム型電池が開発された1985年のWM-101になるだろう。このサイズ競争はパナソニックも相当なこだわりを見せ、コンマ何ミリを競う開発競争が続けられた。その後頑丈さを競う開発競争が激化した時期もあったが、むしろ頑丈さは基本機能としてほとんどのモデルが備えるようになり、代わりに持ち上がったのが電池の持続時間競争だ。

電池の性能はもちろん、メカを見直してどこまで省電力で動かせるかという開発競争だった。もちろん基本機能は犠牲にしないのが前提なので、この開発は相当困難だったと聞く。最終的に2008年に最後のウォークマンが出荷されるまでその歩みは止まらなかった。

『頑丈』という付加価値を提案

地味なモデルだったが、これが耐久性に着目したセンターロックの1号機。「迷ったら丈夫なヤツを買いなさい」というコピーを覚えている人もいるのでは？



1989 AIWA HS-PL50

なんとこのサイズで『ラテカセ』

ソニー、ナショナル、アイワに対抗するには相当な飛び道具が必要、ということで、なんとテレビを内蔵したモデルも登場した。よく見るとスマホっぽい？



1988 Victor CX-V9



1989 SHARP JC-TV10

このサイズにWデッキを押し込む

ラジカセでは普通になりつつあったWデッキをこのサイズに押し込んだのがソニーのWM-W800。翌年対抗モデルをナショナルも作った。しかもこちらはリバース機。



1986 National RX-HD10



1985 SONY WM-W800

1992 ≋ 1989 ≋ 1986 1985

シングルキャプスタンの『スタミナ』

オートリバース機の場合ヘッドを挟んでふたつのキャプスタンが常に（逆方向に）回転していて、走行方向によってどちらかのキャプスタンにピンチローラーが押し付けられる仕組みだった。つまり片方のキャプスタンは常に空転しているわけで、これが電池を消費していた。そこでキャプスタンを一本にしてその左右に小型化したヘッドを配置。さらにピンチローラーを押し付ける力や、内部のギアの歯の形状まで見直し、電池持ちを大幅に改善した。



1992 SONY WM-EX909

充電池はここから始まった

HS-P2でも述べたがアイワはパーツはサプライヤー頼みだった。もちろん電池も。そこで汎用の単四型ニッカド電池で充電池対応とした。一方ナショナルははじめから専用のバッテリーパックを採用。グループに電池メーカーを持つ強みを発揮した。



1986 National RX-JA100



1986 AIWA HS-P9

ダイレクトドライブで高音質&コンパクト

ソニーがディスクドライブのDDならナショナルはダイレクトドライブのDDを開発。しかもWM-20ふうのヘッド引き出しタイプでカセットケースサイズを実現。さらにこちらは2バンドチューナーも内蔵していた。インナーイヤーヘッドフォンを付属したRX-S40Aや防水ケース付きのRX-S45も登場。

1984 National RX-S40

ついにカセットケース以下に

サイズ競争の極みがこのカセットケース以下になった東芝ウォーキー、KT-AS10だろう。使うときにはなんとカセットがはみ出してしまうスタイル。厚みは28.3mmもあったので、いまひとつコンパクトと言い難い……。

1985 TOSHIBA KT-AS10



SONY WM-D6C

It's a small world very 凝縮が産んだ銘機

かつてソニーは数多くの録音機を商品に持っていた。そのほとんどがオープンリールからマイクロカセットに至るまでの磁気テープを使う録音機だった。そのなかには当然、プロフェッショナルユースに耐える商品もラインナップされていた。カセットテープ再生機だったウォークマンにも、録音機能を備えたプロ仕様があった。それがWM-D6/WM-D6Cである。

写真・宮越孝政
文・牧野茂雄
取材協力・ソニー

※この特集は『ステレオ時代 Vol.4』の同名の特集を再編集したものです。

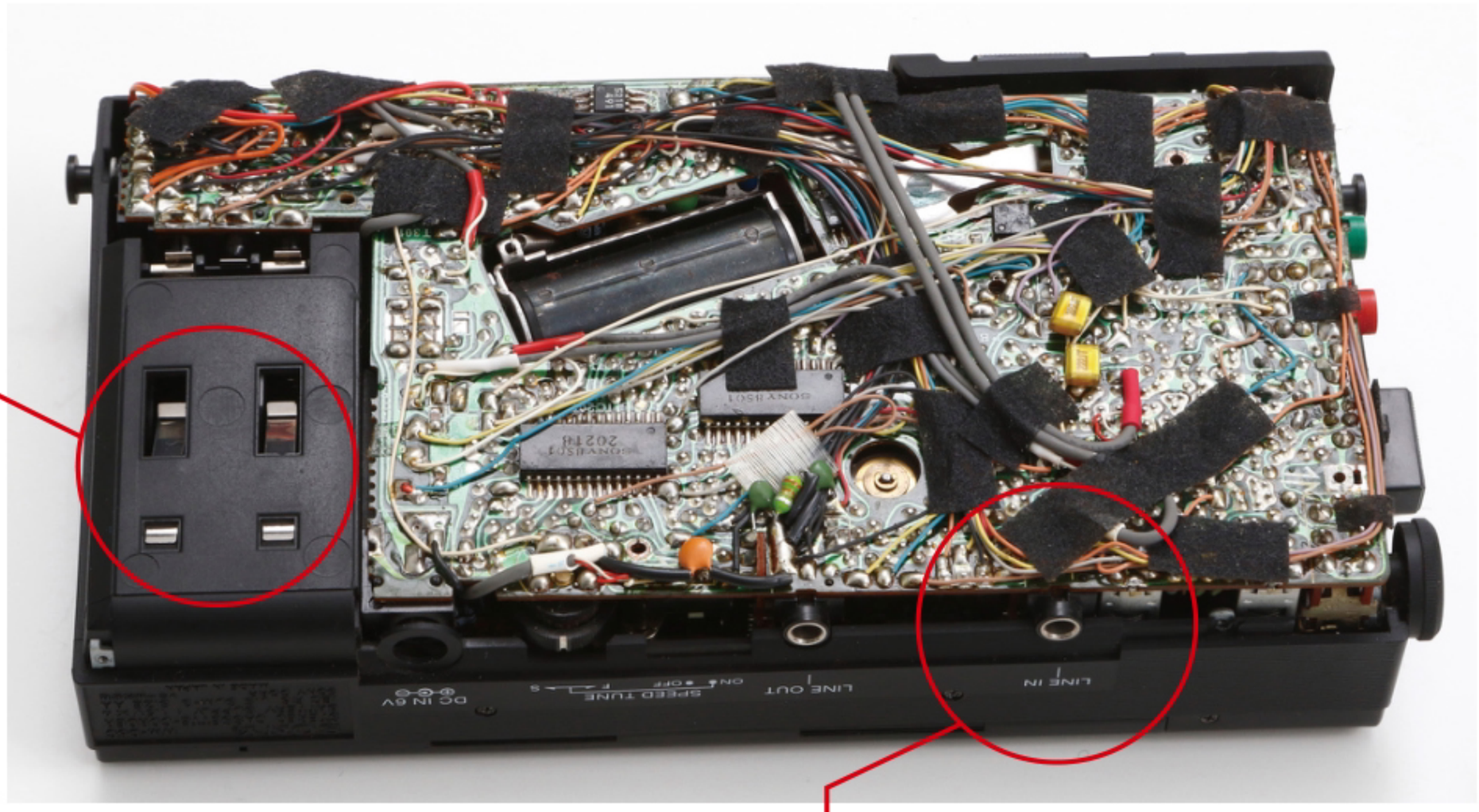
WM-D6C
設計担当

島津裕隆

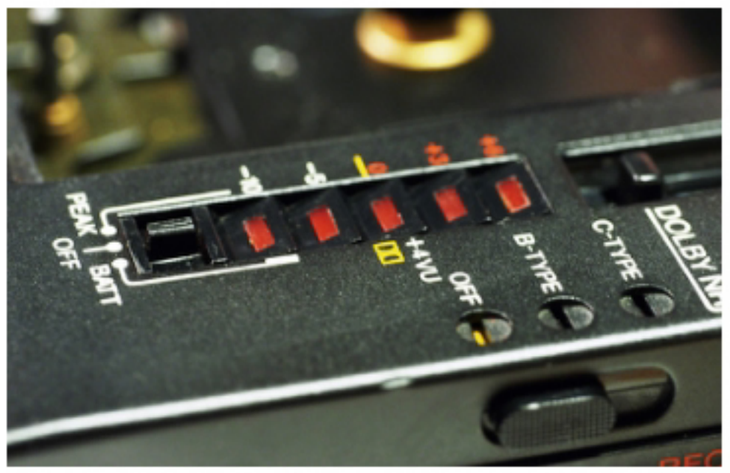
ビデオ&サウンド事業本部
V&S事業部　サウンド1部商品設計2課シニアエンジニア



ここが電池ボックス。単三4本だから電圧は6Vだが、テープ走行系は最低3.8V（ボルト）まで電圧降下してもPLLロックが外れないようになっている。DC-DCコンバーターを内蔵し11Vに昇圧しているためだ。



D6にはなかったライン入力を装備した。左で解説した録音再生切り替えスイッチは、このステレオミニプラグ入力端子のすぐ奥にある。その代わりD6ではふたつあったヘッドフォンジャックがひとつになる。



赤色LEDが5つ並んだ録音レベルメーター（ピーク式）には、バッテリーチェック機能とともにインジケーターOFFのポジションがD6Cで追加された。その隣にドルビーのOFF/Type B/Type C切り替えスイッチがある。



PROFESSIONALにふさわしく、メタリックの化粧箱に収められており、キャリングケースやベルトも同梱されていた。3.5mmミニプラグの接続コードも付属。ただしヘッドフォンは別売りだった。

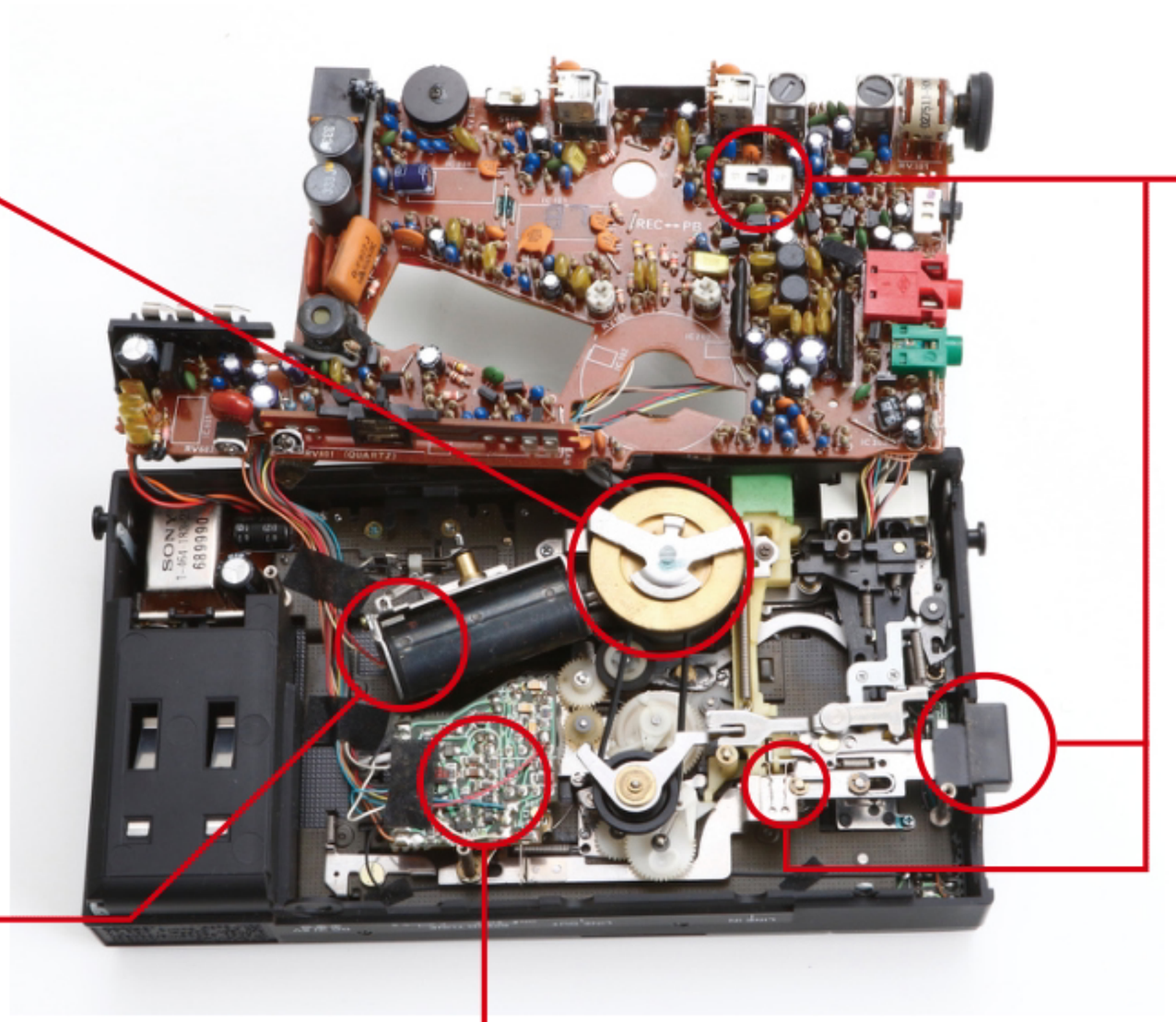
今回、WM-D6Cの開発を担当した島津裕隆氏に、当時のお話を伺うことができた。たっぷりとお時間をいただき、かなり詳細な部分までを伺った。何と言っても、このインタビューは私・牧野茂雄がぜひとも実現させたかったのだ。個人的にD6とD6Cはそれぞれ2台ずつを購入した。いまでもD6Cは現役である。そして、私が何よりも驚いたことはD6とD6Cの『中身』の違いだった。外観はほとんど変わらないのだが、中身はけっこう違う。いや、別物と言っていいくらい違う。自腹でD6とD6Cを購入し、すぐさま分解して確認したことだ。

同じ筐体を流用しながらも。なぜそこまで中身が違ったのだろうか。その理由を、設計者ご本人にぜひとも伺いたかったのだ。そして念願の日がやってきた。

「D6Cは、その型番のとおりD6にドルビーCを追加した製品です。開発のテーマはドルビーCを入れることでした。それと細かな改良です。ラインとマイクの入力を独立させること。録音レベルインジケーターの赤いLEDをオフにできるようにすること。この2点は必須でした。入力を独立させるため、仕方なく2つあったヘッドフォンジャックはひとつを諦めました。スペースがなかったのです。おっしゃるように、じつはD6とD6Cの中身はまったく別物です」

やはりそうだったか。何といってもドルビー用のICが違うんだ。D6のドルビーICは大きかった。

「そうです。D6では据え置き型カセットデッキで使用するドルビーI



Cを使っていました。ICの足がまっすぐ下に出ているディップタイプです。面実装用に足が横に出ているタイプのドルビーICがなかったからです。

「ドルビーCの回路は、基本的にはドルビーBのICをふたつつなげればできるのですが、ということは左右チャンネだと4つのICが必要になるわけです。いくらなんでも無理です。D6の基板にはそんな余裕はありません。そこでポータブル機器用の小さなドルビーCのICを開発することになりました」

自社開発します……などとサラッと言ってしまうのがソニーだ。社内に半導体事業部がある。

「テープ走行系のサーボ回路ICもD6用は大きかったので、これもついでに新しく作ってしまおうということになりました」

これは開発費の無駄遣いに非ず。当時のソニーにはサーボ回路を必要とする製品がたくさんあった。定期的に性能をジャンプさせ、同時に小型化させないと、将来のポータブル機開発で苦労する。苦労することがわかっているなら、先回りして苦労しよう。これがソニーのモノ造りだった—私はそう解釈している。

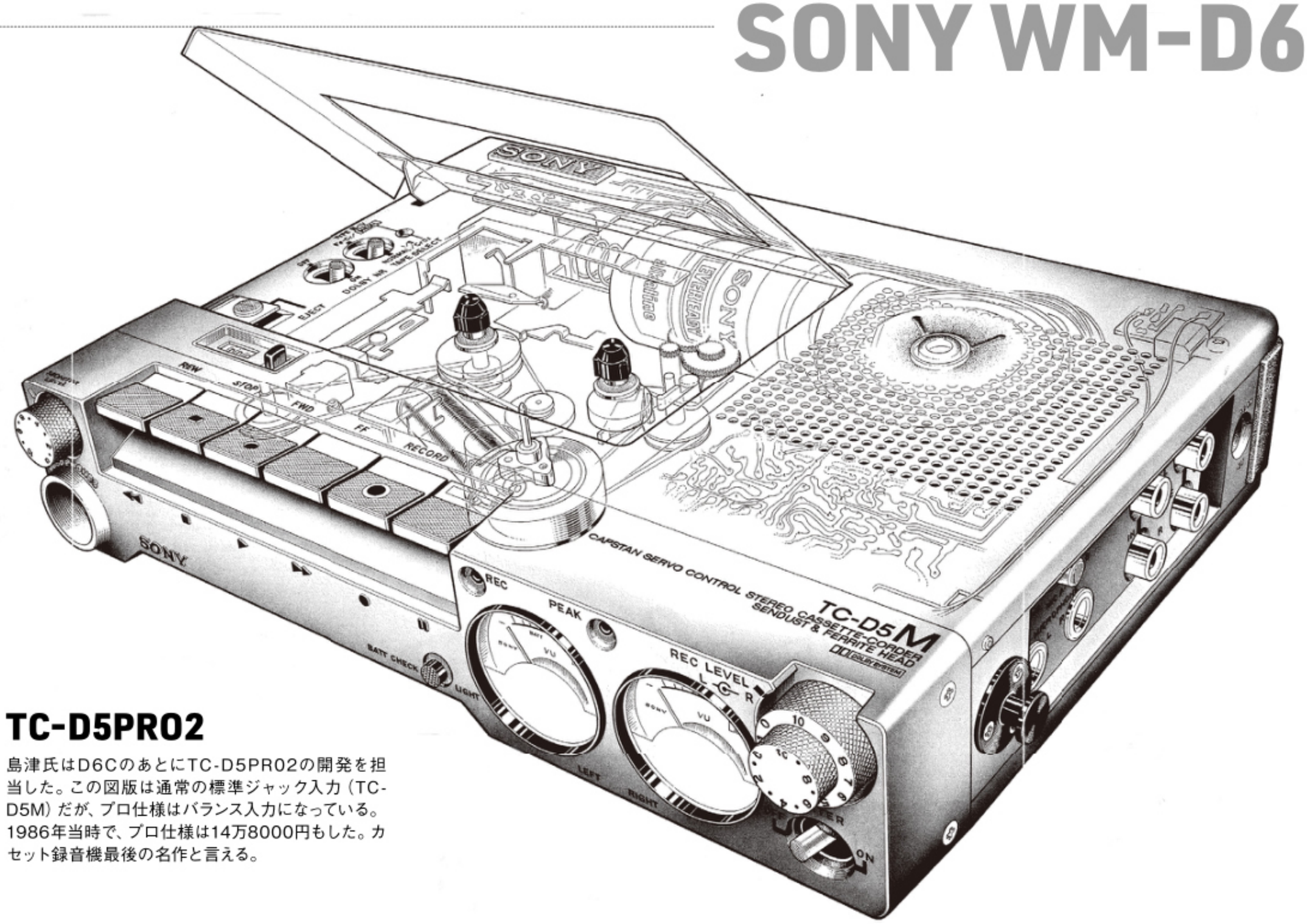
それにしても、D6の機能をアップデートするとは言っても、外観はビタ1ミリたりとも変わらない。プラットフォームは共通なのだ。その中に部品を押し込まなければならない。

「いや、本当に部品点数は物凄く多くて、単純に考えて収まりきらないのです。D6用のドルビーICは、中にラインアンプの回路を内蔵していましたが、新しいICではそれを外に出すことになりました。また、D6の再生用とマイク用のプリアンプはディスクリート構成だったので、D6CもディスクリートをD踏襲しなければならないのです。トランジスタのディスクリートです」

どうやって詰め込んだのか—訊けば、島津さんの奥の手は、あらゆる部品の製造公差を下限値で割り切ったことだった。

「基板の図面を描くとき、普通は部品の製造公差を見ていちばん大きくできてしまったものを収容できるように、少し余裕を持たせて描きます。D6Cのころは面実装の部品ではなく、抵抗もコンデンサもリード線が付いている部品でしたから、公差中の最大外径を限界まで攻めて実寸の図面を描きました。これをすると怒られるのですが、この部品を取り付けるときにはリード線を少し曲げてもらおうとか、抵抗を立てて取り付けるときには『こっち側に曲げても

SONY WM-D6C



TC-D5PRO2

島津氏はD6CのあとにTC-D5PR02の開発を担当した。この図版は通常の標準ジャック入力（TC-D5M）だが、プロ仕様はバランス入力になっている。1986年当時で、プロ仕様は14万8000円もした。カセット録音機最後の名作と言える。

らおう』とか、実物の部品を見ながら隣り合った部品同士が少々窮屈でも収まるように描いたのです」

その様子は、実際の写真を見ていただければご理解いただけるだろう。ちょっと右に傾いた抵抗とか、縦長の部品の隣には少し背の低い部品を並べるとか、まるで完璧収納術のように見事な基板である。当然、生産技術部門とのやりとりはあったはずだ。

「D6Cは再生専用機DC2と同日発売だったのですが、DC2はチップ部品を使っていました。D6Cは音質を重視しリード線の部品にこだわりました。たとえば抵抗は、チップ部品だと金属皮膜抵抗なのですが、D6Cではカーボン抵抗などを使っています。その背景にはD6の存在がありました。D6はリード線部品だったので、D6Cでチップ部品を使うとD6とは違った音になってしまうのです」

そこがプロ機たる所以だ。どの世界でもプロフェッショナルユースの機材はめったやたらにスペックを変えられない。プロ機を持つということは、普遍性と信頼性を提供することだ。

それにしても、D6Cが設計された時代にはCAD（コンピューター・エイデッド・デザイン）などというものはなかった。そんな時代に、これほどの密度のある回路を組んだのだ。

「とは言え、ちょっと恥ずかしいことがありまして……」

島津さんはこう語った。

「回路図を描いて最初に部品を並べてみたら、とにかく部品は入りました。ところが配線できないのですよ」

ああ、なるほど……それでこういうふうに細い電線がところどころをつないでいるのか。

「本来、配線は基板内の回路と外部とをつなぐためにあるのですが、基板内では配線も完結できなかったのです。最初はリード線が80本くらいありました。製造部門からは『こんなものは作れない』と言われました。当然ですよ」

そこから基板の再検討が始まる。紙と鉛筆で、だ。いまの世の中なら優秀なCADを使ってコンピューター画面上で作業し、部品同士が干渉するとコンピューターが教えてくれる。「それはダメです」と。しかし、当時は鉛筆と消しゴムと、設計者のイマジネーションがすべてだった。

「何とか40本ぐらいにまで配線を減らしましたが、それ以上は無理でした。そしてある時期に、さすがにもうこういう製品は作れないということになって、全面的に基板を書き換



え、チップ部品を使うようになりました。回路は同じで製品名もD6Cなのですが、シリアルナンバーで2700000番台からは部品が変わりました」

ああ、それがマニアの間で言われている前期型と後期型なんだ

他にも気になるところがある。基板の中にスライドスイッチが付いているのだ。何のスイッチだろう。

「それは録音ボタンに連動して切り替わるスイッチです。回路内の録音と再生の機能を使い分けるのです。このスイッチは、単なるON／OFFでないので、微小信号が扱える様な特殊な仕様を要求しました」

もうひとつ、日本の家電史として記しておきたい質問を。設計者にとってカセットウォークマンとは、どんなものだったのか―

「とにかく世話がやける製品です。作ってからが大変でした。カセットテープは年々進化します。テープが変われば当然、ハード側も特性を合わせ込む必要があります、D6Cはドルビーを採用しましたから、そのためのテープ特性とのマッチングをやります。f特（周波数特性）がフラットでないとドルビーCをONにしたとき、その部分だけが強調されてしまいます。製品にドルビーマークを入れるためには、f特の暴れを抑えるようテープとの合わせ込みを行い、製品とともにドルビー研究所に提出して承認を得なければなりません。D6Cはノーマル／ハイポジ／メタルと3タイプのテープに対応しているのでテープが変わるたびに定数検討していました」

そうか、当時はテープのモデルチェンジサイクルは短かった。ソニーは自社でテープも製造していたが、膨大な機種数のウォークマンとテープのマッチングは、作業量としても膨大だっただろう。

「ドルビーOFFの状態を極力フラットなf特にするのですが、ドルビーCの場合はf特グラフ上の小さな上下がドルビーBの2倍の上下になります。再生専用機はラクなのですが、録音機は年に3回もこの検討をやった記憶があります」

D6Cを設計したのち、島津さんはTC-D5PRO2というプロ用のステレオ録音機を担当した。キャノンプラグ入力のカセット録音機である。カセット機器からIC録音機への世代交代の時代には、ソニー初のリニアPCMレコーダーであるPCM-D1の開発を担当した。録音機一筋のエンジニアであり、しかもプロ機を数多く手がけた。そんな島津さんは、録音機についてこう語った。

「フラットなf特はわりと簡単に作れます。しかし、音が良いか悪いかは、音を録って再生して見極めるしかないのです。屋外に持ち出す生録機は、実際にマイクをつないで録る音の空気感に気を遣いました。空間の広がり、背景に聞こえる小さな音の描写、その音を録った場所の雰囲気などが大事でした。当然、試作機を持って生録に出かけます。いまのICレコーダーも同じです。楽器の音や、自然の中の音を録って音を詰めます。いまでは簡単に音と動画を記録することができますが、カセットの時代は録ってきた音だけを頼りに頭の中でそのときのシーンを思い浮かべることが、開発の段階でも楽しみでした。この楽しみを一度覚えると、映像はかえって邪魔になります。D6Cは、そういう時代の製品なのです」



筆者・牧野茂雄と島津氏は同世代であり、オーディオ機器の経験がほとんど重なっている。第1次生録音ブームは蒸気機関車の引退という社会的イベントがあり、その音を記録しておきたいという人たちが作った。我われより少しだけ年輩の方々である。



1979年のウォークマン®1号機の主に広告宣伝で使用したロゴ。

became a legend

ウォークマン伝説

「3万台売れなかったら社長を辞任する」

当時、井深大会長は出張先で音楽を聴くためにカセット・デンスケ、
TC-D5とヘッドフォンを持ち歩いていたという。
だが音楽を聴くためだけに持ち歩くには、大きく、余計な機能も満載だった。
なにしろ電池を入れると1.7kgもあったのだ。
そこでプレイバックに特化した、コンパクトなカセットプレイヤーが欲しい、
そう考えた井深が開発チームに作らせた試作機、これがウォークマンの原型だった。
盛田昭夫社長はその試作機に商機を見た。
だが当時、録音機能やスピーカーを持たないカセットプレイヤーは存在せず、
社内でも製品化に疑問の声が上がったという。
そこで盛田が放った言葉が冒頭のセリフだったという(※)。
いまでは当たり前となっている、
『音楽を持ち歩く』という文化は、こうして生まれた。
ここでは私たちのライフスタイルを一変させた
カセット・ウォークマンの歴史を紐解いてみよう。

(※) この盛田氏のセリフはあくまで噂。ただ、そのくらい井深、盛田両氏がウォークマンに入れ込んでいたのは間違いないようだ。

写真・澤田和久/近藤浩之/宮越孝政
文・澤村　信
取材協力・ソニー
『GOLDEN LEAF』(http://www.asahi-net.or.jp/~an4t-tkns/taro/)

この特集は『ステレオ時代 Vol.4』の同タイトルの記事に加筆修正し、再編集したものです。

1979 TPS-L2

すべてはここから始まった

当時、ヘッドフォンをつけたまま外を歩く文化はなかった。人と会話をしたり、周囲の音を聞く必要があっても、ヘッドフォンをしていては聞こえない。そうしたことから本体上部の一番目立つ場所につけられたのが、オレンジ色の『HOT LINE』スイッチだった。このボタンを押すことで、本体のマイクで拾った周囲の音がヘッドフォンから聞こえるようになる。この初代ウォークマンの原型は『プレスマン』TCM-100だと言われているが、じつはTCM-100にステレオヘッドを取り付け、片チャンネルにキュー信号が記録できるようにされたBM-12というビジネス用テレコが原型となっている。また付属されるヘッドフォンは『Zero-Fit』思想のもと先行開発されていた装着していることを感じさせないほど軽い開放型ヘッドフォン、H・AIR。このヘッドフォンなくしてウォークマンは誕生しなかった。

新品時価格:3万3000円 / 本体サイズ:88×133.5×29mm / 重量:390g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:8時間（アルカリ電池使用）





1981 WM-2

メタル再生

ウォークマンの方向性を決めた名機

いまだに『ウォークマン』といえばこのモデルを思い出す人が多い銘機中の銘機。このデザインはTPS-L2より1年も前にソニー・デザイン室の社外コンペに出されたデザインコンセプトが原型となっている。もともとはメモ録用のテレコとして提案されたもので、プリント基板にコイルパターンを配線する超薄型モーターで小型化を実現するなど、技術的な現実性に薄いものであった。このデザインを元にエンジニアが設計。デザインコンセプトのポイントとなっていたカセットケースサイズ（電池分厚くなったイメージ）や独特のボタン配置はそのままだった。発売は1981年2月。250万台以上販売され、単一モデルとしては最高のヒットを記録している。

新品時価格:3万2000円 / 本体サイズ:80×109×29.5mm / 重量:280g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:9時間（アルカリ電池使用）









1982 WM-7

初のオートリバース対応機

メタル再生　再生オートリバース　DOLBY B　リモコン

初代ウォークマンの根強い人気に応えるため、デザインはカラーリングを変えたのみで、メタルテープ対応とした、通称『ウォークマン・デラックス』。化粧箱に入った特別仕様の『ウォークマン・エクセレント』も登場。





新品時価格:3万6000円 / 本体サイズ:88×133.5×29mm / 重量:390g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:8時間（アルカリ電池使用）

1981 WM-3 / WM-3EX

初代ウォークマンをメタル対応に

メタル再生

初代ウォークマンの根強い人気に応えるため、デザインはカラーリングを変えたのみで、メタルテープ対応とした、通称『ウォークマン・デラックス』。化粧箱に入った特別仕様の『ウォークマン・エクセレント』も登場。





新品時価格:3万6000円 / 本体サイズ:88×133.5×29mm / 重量:390g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:8時間（アルカリ電池使用）

1982 WM-D6

初代プロフェッショナル誕生

メタル録再　録音　DOLBY B

『PROFESSIONAL（プロフェッショナル）』を冠した初めてのウォークマン。小型のデンスケ、あるいはカセットデッキといった性能で、クォーツロックキャプスタンサーボD.D.によってワウフラッターはわずか0.04%、ヘッドはセンダスト合金の持つ飽和磁束密度とフェライトの高域特性を併せ持つS&Fヘッドを採用していた。

新品時価格:6万円 / 本体サイズ:170×38×93mm / 重量:640g / 電源:単三乾電池×4本 / 電池持続時間:5時間（アルカリ電池使用）



1982 WM-F2

FMチューナーを内蔵した録再モデル

メタル再生　録音　FM/AM

録再ウォークマンだがコンデンサーマイクの代わりにFMチューナーを内蔵。どこでもエアチェックができる仕様となっている。録音に欠かせないテープカウンターも装備。メタルテープは再生時のみの対応となっている。

新品時価格:4万2000円 / 本体サイズ:79.2×139×31.4mm / 重量:370g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:4時間（アルカリ電池使用）



1982 WM-DD

ディスクドライブで音揺れを低減

メタル再生

ライバル各社が多機能を持って対抗してくるのに対し、音質を追求したウォークマン。モータープーリーで直接フライホイールを駆動するD.D.（ディスクドライブ）はメタルデンスケとして人気だったTC-D5と同じ駆動方式だった。キャプスタンサーボを採用し、ワウフラッターは0.08%。しかも外部からの振動の影響を受けにくく、ポータブルプレーヤーであるウォークマンには最適な方式だった。

新品時価格:2万8000円 / 本体サイズ:79×109.2×29mm / 重量:290g / 電源:単三乾電池×4本 / 電池持続時間:9時間（アルカリ電池使用）





1982 WM-R2

ふたつのコンデンサーマイクでステレオ録音

メタル再生　録音

2つの高感度エレクトレットコンデンサーマイクを内蔵。本体のみでステレオ録音を可能にした『レコーディング・ウォークマン』。録音中にヘッドフォンのボリュームを変えてもレベルに影響ないバリアブルモニターを採用している。

新品時価格:3万7000円 / 本体サイズ:78.6×136.5×31mm / 重量:380g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:7時間（アルカリ電池使用）



1983 WM-F5

海や雪山に連れ出すためのウォークマン

メタル再生　FM/AM

防水を実現した初めてのウォークマン。あまり知られていないことだが、このスポーツウォークマンにもキャプスタンサーボのディスクドライブが採用されている。これはスキー等の運動中にも聴けるようにという思想から。ヘッドフォンはイヤーレシーバーの『NUDE』MDR-E255が付属され、こちらも防水使用。写真右の赤いモデルはハワイ限定モデルだったが、国内でも台数限定で販売された。

新品時価格:3万3000円 / 本体サイズ:91.8×120×35.3mm / 重量:370g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:9時間（アルカリ電池使用）



1983 WM-20

革新ギミックでカセットケースサイズを実現

メタル再生　DOLBY B

「カセットケースサイズのウォークマン」という夢を実現したモデル。スライド・インという方式で、電池を収めたヘッド部分を引き出してカセットを装着する。とはいえ、めかに残されたのはカセットと筐体の間わずか6ミリの隙間。小型化のため単三1本、つまり1.5Vで駆動するICを新設計。厚さわずか5ミリの超扁平モーターなど数多くの新技術が詰め込まれた傑作だった。

新品時価格:2万7000円 / 本体サイズ:109.5×69.5×17.6mm / 重量:180g / 電源:単三乾電池×1本 / 電池持続時間:5時間（アルカリ電池使用）



1984 WM-17

オートリバースを身近にしたウォークマンを内蔵

メタル再生　再生オートリバース　DOLBY B

WM-7以来、久々のオートリバース機。ややボディは大きめだが、カジュアルなスタイルとリーズナブルな価格が特徴だった。他社が続々とオートリバースモデルを充実させてくるのに対抗。背面に回転フックがあり、ストラップを取り付けられた。



新品時価格:2万1000円 / 本体サイズ:139×87×34mm / 重量:320g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:5時間（アルカリ電池使用）

1983 M-F20

WM-20にFMチューナー

メタル再生　FM/AM　DOLBY B

WM-20の大きさはほぼそのまま、FMチューナーを内蔵。カセットテープのハーフの凹凸により生じるリッド部の隙間にチューナー回路を詰め込んだ。ヘッドフォンコードがアンテナになる。ソニーの小型化への執念が結実したモデルだ。

新品時価格:3万4000円 / 本体サイズ:110.8×70×21.3mm / 重量:200g / 電源:単三乾電池×1本 / 電池持続時間:4時間（アルカリ電池使用）



1984 WM-D6C

もはや持ち歩けるカセットデッキ

メタル録再　録音　DOLBY B/C

基本的にはWM-D6のスペックを継承しつつドルビーNR・Cに対応。またヘッドは高い飽和磁束密度を持ち、歪特性、耐摩耗性に優れたアモルファスヘッドを採用した。駆動はWM-D6と同様クォーツロックキャプスタンサーボD.D.で0.04%の低ワウフラッターを実現していた。デッキ代わりに使うこともできるこのモデルは驚異的なロングセラーとなり2002年頃まで作られ続けた。

新品時価格:6万4000円 / 本体サイズ:181×40×95mm / 重量:640g / 電源:単三乾電池×4本 / 電池持続時間:5時間（アルカリ電池使用）



1984 WM-F15

FM/AMを内蔵した小型軽量モデル

メタル再生　FM/AM　DOLBY B



2バンドチューナーを内蔵した再生専用機。ヘッドホンをつなぐとすべての動作が可能になる誤動作防止機構『ヘッドホンジャックスイッチ』を採用している。ドルビーBやメタル再生にも対応するなど基本機能も充実している。

新品時価格:3万5000円 / 本体サイズ:79×109×29mm / 重量:305g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:7時間（アルカリ電池使用）

1984 WM-30

スライド・インを継承。WM-20の進化版

メタル再生　DOLBY B



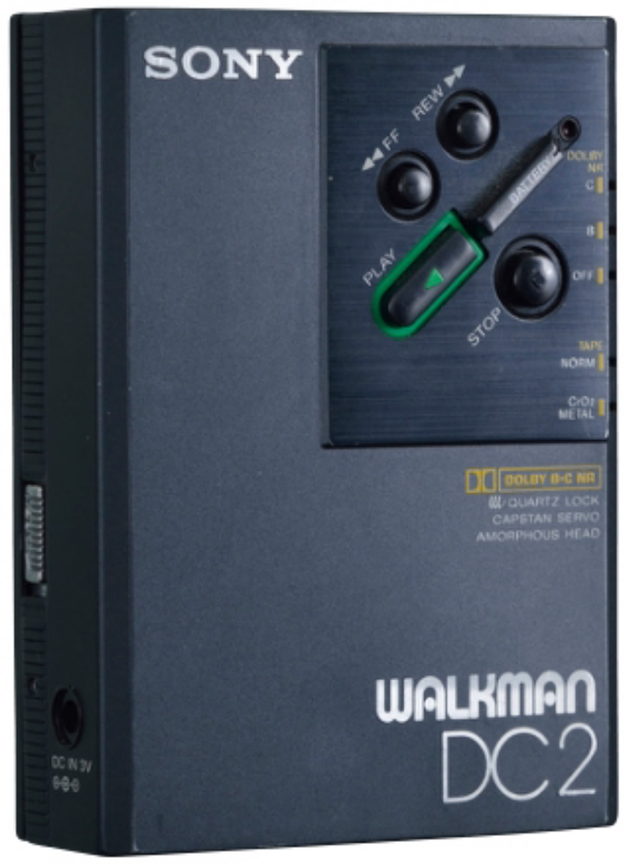
ライド・イン方式のWM-20を進化させたWM-30。といっても、性能はほぼ変わらず、脆弱だったWM-20の強化版だと思われる。ボディは6色のワイドバリエーション。ヘッドフォンはインナーイヤータイプとなった。

新品時価格:2万4000円 / 本体サイズ:86×111.4×22.4mm（テープ使用時） / 重量:190g / 電源:単三乾電池×1本 / 電池持続時間:5時間（アルカリ電池使用）

1984 WM-DC2

再生専用のプロフェッショナル

メタル再生　DOLBY B/C



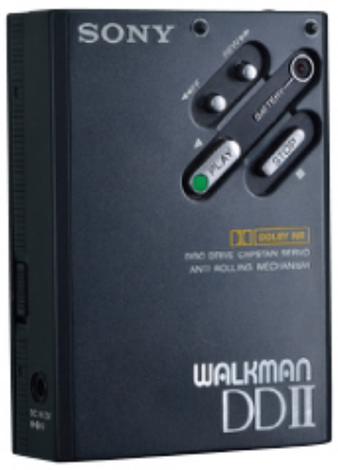
再生専用のウォークマン・プロフェッショナル。ドルビーNR・B/Cを内蔵。ヘッドはアモルファス合金、クォーツロック・キャプスタンサーボD.D.など、WM-D6Cから受け継いだものは非常に多い。もちろんアンチローリング性にも優れ、ワウフラッターはWM-DDを凌ぐ0.07%を達成。ラインアウトも備え、送り出し用カセットデッキという用途も想定されていた。

新品時価格:3万5000円 / 本体サイズ:79×109×29mm / 重量:305g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:7時間（アルカリ電池使用）

1984 WM-DD II

プロフェッショナルの廉価モデル

メタル再生　DOLBY B



ウォークマンDDの進化版、DDⅡは、ワンウェイの大型ボディモデルのため、『ウォークマン・プロフェッショナル』として扱われた。DDとの違いはドルビーNR・Bに対応したことと、ヘッドフォンが付属しないこと。価格は3000円引き下げ。

新品時価格:2万4000円 / 最大本体サイズ:79.7×110×31.1mm / 重量:290g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:9時間（アルカリ電池使用）

1984 WM-40

カセットケース・サイズでオートリバース

メタル再生　再生オートリバース　DOLBY B



他社に遅れを取っていたオートリバースモデルが、スライド・イン・モデルで登場。当時のオートリバース機では最薄の23.5mmを実現。また別売りのチューナーパック（CTP-1A）をカセットの代わりに装着することでラジオも聴けた。

新品時価格:2万9000円 / 本体サイズ:86.5×114.5×26mm（テープ使用時） / 重量:260g / 電源:単三乾電池×1本 / 電池持続時間:4時間（アルカリ電池使用）

1984 WM-R15

バイノーラル録音ができるレコーディング機

メタル再生　再生オートリバース　録音　DOLBY B



最新型の『レコーディング・ウォークマン』はヘッドフォンの左右ドライバー部に内蔵されたコンデンサーマイクでバイノーラル録音が可能だった。再生時にはオートリバースやドルビーNR・Bにも対応。チューナーパックにも対応していた。

新品時価格:3万2000円 / 最大本体サイズ:113×90.1×34.2mm / 重量:290g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:9時間（アルカリ電池使用）

1984 WM-F30

3バンドチューナー内蔵のスライド・イン

メタル再生　FM/AM TV　DOLBY B



WM-30のチューナー内蔵モデル。WM-F20ではFMチューナーのみの搭載だったが、WM-F30ではFM、AMに加え、1〜12chのTVサウンド（もちろん地上アナログ放送）も受信可能になった。WM-30同様イヤーレシーバー『ヌード・ターボ』が付属。

新品時価格:3万5000円 / 最大本体サイズ:111.5×110×31.1mm / 重量:200g / 電源:単三乾電池×1本 / 電池持続時間:4時間（アルカリ電池使用）

1985 WM-F65

2バンドチューナー＋付属マイクで生録

メタル再生 / FM/AM / 録音 / DOLBY B



2バンドチューナーを内蔵したワンウェイモデル。ワンポイントステレオマイクが付属され生録も標準で可能。もちろん内蔵チューナーからのエアチェックもできるが、テープセレクタとドルビーNR・Bは再生時のみ有効となる。

新品時価格:3万3000円 / 最大本体サイズ:110.3×88×32mm / 重量:260g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:12時間（アルカリ電池使用

1985 WM-55

リーズナブルな価格と充実機能

メタル再生 / 再生オートリバース / DOLBY B



オートリバースで233gの軽量モデル。ボディ色とコーディネートしたイヤー・レシーバーを付属した。愛称は『ウォークマン・ラビット』。ドルビーNR・B搭載で、メタルテープにも対応。チューナーパックにも対応し、2万1000円の価格も魅力。

新品時価格:2万1000円 / 最大本体サイズ:111.3×88.6×29.4mm / 重量:233g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:11時間（アルカリ電池使用）

1985 WM-W800

名機？ 迷機？ Wカセット・ウォークマン

メタル録再 / 録音 / DOLBY B





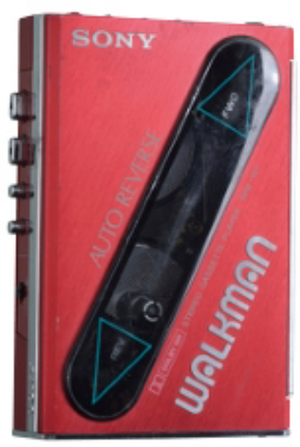
ヘッドフォンステレオとしては世界初となるダブルデッキ・モデル。ほぼカセットケース2個分のサイズ、重さ360g。Aデッキは再生専用で別売りのチューナーパックにも対応していた。その際はBデッキで録音するエアチェックも可能。ABデッキともワンウェイだが、片方の演奏終了でもう片方の再生が始まる連携再生も可能だった。ダビングや付属のワンポイントステレオマイクで生録も可能。

新品時価格:4万2000円 / 最大本体サイズ:116×88.7×38.2mm / 重量:350g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:12時間（アルカリ電池使用）

1985 WM-101

聴いているときもカセットケース・サイズ

メタル再生 / 再生オートリバース / 録音 / DOLBY B



ウォークマンの目標だった『カセットケース・サイズ』を実現するためにネックとなっていた電池をボディの外に出し、薄型のガム型充電池を開発し、再生時でもほぼカセットケースサイズとすることに成功した。



新品時価格:2万6000円 / 最大本体サイズ:74.6×112.1×22.2mm / 重量:190g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:2時間（ガム型充電池使用）

1985 WM-F85

3バンドチューナーとマイク付属の録再機

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM TV / 録音 / DOLBY B



エアチェックと生録が可能な『レコーディング・ウォークマン』。WM-F65同様ステレオマイクを付属。チューナーは3バンドにグレードアップ。再生時はオートリバース、テープセレクタ、ドルビーNR・Bまで有効になる。

新品時価格:3万9000円 / 最大本体サイズ:116.5×89.6×36.7mm / 重量:320g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:6.5時間（アルカリ電池使用）

1985 WM-75

高い防水性能を誇るオートリバース機

メタル再生 / 再生オートリバース / DOLBY B



『スポーツ・ウォークマン』の進化版。JIS防浸型に高められた防水性能を備え、カセットプレーヤーとしてもオートリバース機構やトルビーNR・Bを搭載し、充実。初代『スポーツ』WM-F5に比べ80gも軽量化されているのも特徴。

新品時価格:2万7000円 / 最大本体サイズ:96.5×116×35.8mm / 重量:290g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:10時間（アルカリ電池使用）

1985 WM-50

シンプルな機能とかわいいボディ

メタル再生



ワンウェイ機ながら、薄さ24.9mm、200gと小型軽量モデル。ボディ色に合わせたヌード・ターボが付属して、価格は1万8000円と2万円を切る低価格を実現した。メタルテープに対応した2ポジションセレクターも搭載。単三1本の省電力設計。

新品時価格:1万8000円 / 最大本体サイズ:113×87.1×24.9mm / 重量:200g / 電源:単三乾電池×1本 / 電池持続時間:5時間（アルカリ電池使用）

1985 WM-D3

コンパクトな録再プロフェッショナル

メタル再生 / 録音 / DOLBY B

WM-2系のサイズのプロフェッショナルにはWM-DC2があったが、DC2は再生専用機だった。このD3は録再機。ドルビーNR・Bでの録音も可能だがメタルテープでの録音には対応していなかった（2段セレクター）。ヘッドはDC2同様にアモルファスヘッドを採用。駆動もキャプスタンサーボD.D.でワウフラッターは0.08%。録音時は5連LEDピークレベルメーターでマニュアルレベルコントロールも可能だった。

新品時価格:3万9000円 / 最大本体サイズ:125.4×82.3×37.3mm / 重量:370g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:7時間（アルカリ電池使用）



1985 WM-F55

3バンドチューナー＋オートリバース

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM TV / DOLBY B

『ウォークマン・ラビット』WM-55に3バンドチューナーを内蔵したモデル。ヌード・ターボが付属するが、WM-55と違いこちらはカラーは黒一色だった。オートリバース、ドルビーNR・B、テープセレクタと基本性能は充実。



新品時価格:3万円 / 最大本体サイズ:112.9×87.9×31.1mm / 重量:260g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:8時間（アルカリ電池使用）

1985 WM-F101

カセットケース・サイズにチューナー内蔵

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM TV / DOLBY B

リアル・カセットケースサイズ、WM-101のリッド部分に3バンドのチューナー・ユニットを内蔵した再生専用オートリバース機。外付け電池ケースでガム型充電池に対応。WM-101同様、単三電池用の電池ケースも付属している。

新品時価格:3万5000円 / 最大本体サイズ:74.6×112.1×23.9mm / 重量:200g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:2時間（ガム型充電池使用）



1985 WM-R55

録再リバースとモニタースピーカーを搭載

メタル再生 / 録再オートリバース / 録音 / DOLBY B

録再リバースを搭載した『レコーディング・ウォークマン』。ステレオワンポイントマイクを付属し、長時間生録にも対応している。テープカウンターと3.6cmのモニタースピーカーを内蔵している。チューナーパックにも対応。



新品時価格:3万2000円 / 最大本体サイズ:111.8×88.8×33.2mm / 重量:280g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:12時間（アルカリ電池使用）

1985 WM-F75

WM-75に2バンドチューナーを内蔵

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / DOLBY B

『スポーツ・ウォークマン』WM-75に2バンドチューナーを内蔵したモデル。この頃ソニーはラジカセなども含めたアウトドア・モデルを展開していて、その総称が『ギグ・スポーツ』とされ、WM-75とWM-F75はそのーラインナップだった。

新品時価格:3万2000円 / 最大本体サイズ:97.7×117.1×37.6mm / 重量:320g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:8時間（アルカリ電池使用）



1986 WM-F202

カセットケース・サイズでエアチェック

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM TV / 録音 / DOLBY B

ガム型電池採用のカセットケースサイズでありながら3バンドチューナーを内蔵した録再リバースモデル。ドルビーNR・Bとテープセレクタは再生時のみながら、誤録音を防ぐインジケーター付きのディレクションメモリーも搭載。

新品時価格:3万9000円 / 最大本体サイズ:76.1×121.4×25.4mm / 重量:230g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:2時間（ガム型充電池使用）



1986 WM-F107

太陽電池採用の防水ウォークマン

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM TV / DOLBY B

ソーラーバッテリーシステムを搭載。快晴時だと約4時間充電すると約2時間の再生が可能だった。またJIS防浸型の防水性能を誇り、ベルトホルダー一体型の電池ケースを使うと単三電池での使用も可能だった。3バンドチューナーも内蔵。

新品時価格:3万9000円 / 最大本体サイズ:91.5×113.8×34mm / 重量:280g / 電源:内蔵充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:4時間（アルカリ電池使用）



1986 WM-104

カセットケース・サイズに5連グライコ

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / DOLBY B

WM-101で実現したカセットケースサイズのモデルを多方面に展開。WM-104ではこのサイズで5連のグフィックイコライザーを搭載していた。もちろんガム型充電池対応で、オートリバースも搭載し、ヌード・ツインターボを付属。

新品時価格:2万7000円 / 最大本体サイズ:74.6×112.6×23.8mm / 重量:200g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:2時間（ガム型充電池使用）



1986 DD-100"武道館"

ライブ・シミュレーションの特別モデル

メタル再生 / 重低音 / DOLBY B

当時『武道館ボディシステム』としてクッション型のウーファー、ヘッドフォン、アンプのセットがあったが、その迫力サウンドをウォークマンでも、というコンセプト。低音増強のD・O・L回路を採用。密閉型のヘッドフォンが付属されていた。

新品時価格:3万8000円 / 最大本体サイズ:79.7×110×33.2mm / 重量:300g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:9時間（アルカリ電池使用）



1986 WM-60

5連グライコで自分好みの音が作れる

メタル再生 / 再生オートリバース / DOLBY B

5連グラフィックイコライザーを内蔵した再生専用のリバース機。ドルビーNR・Bとテープセレクタを搭載と基本性能は充実しつつ、リーズナブルな価格に抑えたベーシックモデルだった。電源は単三電池2本。ヘッドフォン端子はふたつ。

新品時価格:4万2000円 / 最大本体サイズ:89.9×111.5×35.7mm / 重量:270g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:4時間（アルカリ電池使用）



1986 WM-109

リモコン付きレシーバーが標準装備

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / DOLBY B / リモコン

本体のスイッチをフェザータッチスイッチとすることでリモコンに対応。その後標準的となる、ヘッドフォンコードの途中にリモコンがあるスタイルを作り上げた。洗練されたデザインで、大人の女性ユースも意識した初めてのモデル。

新品時価格:2万9000円 / 最大本体サイズ:72.5×113.6×22.8mm / 重量:200g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:2時間（ガム型充電池使用）



1986 WM-F60

5連グライコ+3バンドチューナー内蔵

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM TV / DOLBY B

5連グラフィックイコライザーを搭載した『グライコ・ウォークマン』WM-60のチューナー内蔵モデル。3バンドチューナー内蔵で、TV放送も音声多重放送が受信可能。MTVがステレオで聴ける、ということを売りにしていた。

新品時価格:3万2000円 / 最大本体サイズ:114×85.5×36.6mm / 重量:300g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:7時間（アルカリ電池使用）



1986 WM-F57

薄型スピーカー内蔵でみんなで楽しめる

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / DOLBY B

薄型ながら250mWの出力を誇るスピーカーをリッド部分に内蔵した『スピーカー・ウォークマン』。2バンドチューナーを内蔵し、オートリバース機構も搭載。テープセレクタとドルビーNR・Bも搭載していた。ボディ色は4色。

新品時価格:2万5000円 / 最大本体サイズ:114×85.5×36.4mm / 重量:300g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:8時間（アルカリ電池使用）



1987 WM-51

イヤーレシーバーが巻き取れる

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応

イヤーレシーバーが本体背面に組み込まれたリールに巻き取れるコード収納機構を採用。白いキャリングポーチやパステルトーンのボディカラーバリエーション（レッド、ピンク、グレイ、ホワイト、グリーンの5色）など、女性ユーザーを強く意識したモデルでもあった。愛称はウォークマン『ヒップ』。単三電池とガム型充電池が兼用できる電池ボックスは本体収納型だった。

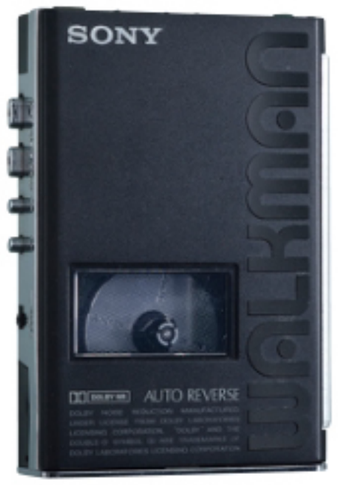
新品時価格:1万9000円 / 最大本体サイズ:91.5×108×31.5mm / 重量:220g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:2.5時間（ガム型充電池使用）



1987 WM-103

シックなデザインのベーシックモデル

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / DOLBY B



すでに行き着いてしまった感のある小型化がひと段落し、ベーシックモデルにもキャラクターが求められるように。シックなデザインを採用したガム型電池対応のリバース機で、当時のキャッチコピーは『ハンサムウォークマン』だった。

新品時価格:2万2000円 / 最大本体サイズ:69.8×110.8×19.8mm / 重量:190g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:4時間（ガム型充電池使用）

1987 WM-F109

WM-109に3バンドチューナーを内蔵

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM TV / DOLBY B / リモコン



WM-109のテレビ音声に対応した3バンドチューナー内蔵モデル。ヘッドフォンコードに取り付けられたリモコンでカセットの操作はもちろん、ラジオとカセットの切り替えも可能。ただしチューニングはリモコンでは不可だった。

新品時価格:2万6000円 / 最大本体サイズ:76×109.2×24.3mm / 重量:200g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:4時間（ガム型充電池使用）

1987 WM-503

スウェード調の手触りが斬新

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B



ブラック、グレー、ホワイトの3色展開のうち、ブラックとグレーはさらっとした手触りのスウェード感覚の新素材ボディを採用。また充電池を本体に装着したまま充電スタンドに本体をセットすることで充電できるようになった。

新品時価格:2万6000円 / 最大本体サイズ:76×109.2×24.3mm / 重量:200g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:4時間（ガム型充電池使用）

1987 WM-501

サルのCMで有名になったウォークマン

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B



ガム型電池を本体に収納することで、外付け電池ボックスが不要になった。そのため、なんとカセットケースに本体がすっぽり隠れてしまうサイズを実現。重低音D.D.B.（ダイナミック・ベース・ブースト）も搭載した新時代ベーシック。

新品時価格:1万9000円 / 最大本体サイズ:107.5×74.7×21mm / 重量:190g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:4時間（ガム型充電池使用）

1987 WM-F501

3バンドチューナーも重低音で楽しむ

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM TV / DOLBY B



WM-501の3バンドチューナー搭載モデル。WM-501同様、大容量ガム型充電池に対応していて約1時間でフル充電となり約4時間のテープ再生が可能だった。付属のイヤーレシーバーは重低音D.B.B.を活かす16mmの大口径ヌードターボ・ハイファイ。

新品時価格:3万3000円 / 最大本体サイズ:107.5×74.7×23.9mm / 重量:210g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:4時間（ガム型充電池使用）

1987 WM-504

カセットの数だけフェイスが変わる

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B



徐々にウォークマンにもファッションが取り入れられたこの頃、当初は主に女性ユーザーにも受け入れてもらうためのものが多かったが、だんだんと男性ユーザーも視野に入れたデザインが取り入れられてきた。たとえばWM-503はスウェード調のマット塗装が施された筐体を採用していた。そのある種究極のカタチがWM-504が採用したシースルータイプ。リッドの全面を完全透明としたもので、素材は傷つきにくい高硬度エスアロイ樹脂を採用。ちょうどカセット本体もファッション性を取り入れてきた時期でもあり、カセットテープをデザインで選ぶというユーザーには強くアピールした。また本体をスタンドにセットするだけで充電できる『簡単充電スタンド』も付属。1990年代に標準となるスタイルを先取りしていた。

新品時価格:2万6000円 / 最大本体サイズ:76×109.2×24.3mm / 重量:200g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:4時間（ガム型充電池使用）

1987 WM-F502

TVの音声多重チューナー内蔵モデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B



WM-F501のチューナーをグレードアップしたモデル。テレビ音声は音声多重対応のUHF/VHFに対応した4バンドチューナーで、当時流行っていたテレビの音楽番組もステレオで聴くことができた。その他の性能・機能はWM-F501と同じ。

新品時価格:3万8000円 / 最大本体サイズ:107.5×74.7×24.6mm / 重量:210g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:4時間（ガム型充電池使用）

1988 WM-52

イヤーレシーバーの巻き取りがスマートに

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / DOLBY B

イヤーレシーバーのコードを巻き取る機構を搭載したウォークマン『ヒップ』が進化した。イヤーレシーバ本体を収納する部分にフタが付きすっきりした収納が可能。本体の電池ボックスはガム型電池と単三電池の兼用なのはWM-51譲り。



新品時価格:1万9000円 / 最大本体サイズ:110.6×78.3×34.4mm / 重量:250g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:4時間（ガム型充電池使用）

1988 WM-509

リモコン機能付きイヤーレシーバーと重低音

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B

WM-109の進化モデル。ヘッドフォンコードに取り付けられたリモコンでボリュームのほかカセットの操作も可能。ヘッドはEXアモルファス・ヘッドとなり、重低音D.B.B.も搭載。きれいな音とスタイルの『音美人』がキャッチコピーだった。



新品時価格:2万7000円 / 最大本体サイズ:72.5×113.6×22.8mm / 重量:200g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:2時間（ガム型充電池使用）

1988 WM-505

初のワイヤレス・ウォークマン

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B

ソニーではウォークマンのワイヤレス化を1983年頃から研究していたようだ。じつはFMトランスミッターを内蔵したワイヤレスモデルはすでに他社から発売されていた。ただソニーではFM送信での音質や実用到達距離といった問題を重くとらえ、不完全な状態での製品化は見送っていたのだという。それをクリアしたのがFM2波によるツイン・モノ方式だった。本来FM電波であればFMラジオと同様にステレオ送信が可能となるが、電波法の規制範囲の出力では到達距離が実用に耐えなかった。そこでふたつの周波数を使い、LとRの信号をモノラルで別々に送信することで1.5mの到達距離を実現したのだ。また懸案だった音質もワイヤレスでの再生周波数で30〜15000Hzと通常のウォークマンと遜色のないものだった。WM-505は発売後にたちまちヒットモデルとなった。



新品時価格:3万2000円 / 最大本体サイズ:76.2×109.2×25.8mm / 重量:210g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3.5時間（ガム型充電池使用）

1988 WM-550C

ドルビーCに対応した高音質モデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B/C

ドルビーNR・Cを搭載した高音質モデル。EXアモルファス・ヘッド、重低音D.B.B.、16mmの大口径ヌードターボ・ハイファイといった音へのこだわりが詰まっている。充電スタンドにも対応。WM-701CとWM-150の中間的な立ち位置だった。



新品時価格:2万5000円 / 最大本体サイズ:108×74.4×22.6mm / 重量:185g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3時間（ガム型充電池使用）

1988 WM-150

アモルファス・ヘッドを採用し高音質化

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B

新しいベーシックモデルは音にこだわっていた。ヘッドはEXアモルファス・ヘッドで20Hz〜18000Hzの再生周波数を誇った。重低音D.B.B.を搭載。イヤーレシーバーは16mmの大口径ヌードターボ・ハイファイを付属。エッジの効いたデザインも斬新。



新品時価格:2万2000円 / 最大本体サイズ:108×74.4×22.1mm / 重量:185g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:4時間（ガム型充電池使用）

1988 WM-701C

無駄のないボディにフルリモコン

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B/C / リモコン

カセットケースサイズを目標に開発されてきたウォークマンもWM-101でクリアし、次なる目標はカセットハーフにどこまで近づくかというものになった。WM-701Cではカセットハーフの形状に合わせて筐体を立体成形するほどの小ささ。もちろんメカや電気回路は新設計で、ドルビーNR・Cにも対応、アウトプットコンデンサーレスの回路など音質も重視されていた。





新品時価格:2万9000円 / 最大本体サイズ:105.6×74.2×19.8mm / 重量:150g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:2.5時間（ガム型充電池使用）

1988 WM-F550C

高音質モデル550Cにチューナーを内蔵

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B/C

ドルビーNR・Cを搭載した高音質モデル550Cに3バンドチューナーを内蔵。もちろんEXアモルファスヘッド、D.B.B.、16mmの大口径ヌードターボ・ハイファイ付属といった高音質対策はそのまま。なおTVチューナーは音声多重対応。



新品時価格:3万500円 / 最大本体サイズ:108×74.4×25.7mm / 重量:205g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3時間（ガム型充電池使用）

1988 WM-F404

3バンドチューナーと録再リバース

メタル再生 / 録再オートリバース / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B

録再オートリバース搭載モデルで、長時間録音と長時間再生が売りだった。ガム型充電池と単三電池を併用することで録音は10時間、再生は13.5時間のロングプレイが可能だった。3バンドチューナーでエアチェックもOK。マイクも付属。



新品時価格:3万5000円 / 最大本体サイズ:105.6×74.2×19.8mm / 重量:150g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:2.5時間（ガム型充電池使用）

1989 WM-170

新しいベーシックスタイル

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B

新しい『ベーシック・ウォークマン』はカラーによってデザインと型番が違っていた。170はオーソドックスなブラック。ベーシックモデルながらオートリバース、メタル再生対応、ドルビーNR・Bなど基本機能は充実。ただしリモコンは非対応



新品時価格:1万8500円 / 最大本体サイズ:109×77.7×23.8mm / 重量:205g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:4時間（ガム型充電池使用）

1988 WM-F701C

701Cにシンセチューナーを搭載

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B/C / リモコン

『アドバンスド・ウォークマン』の3バンドチューナー内蔵モデル。液晶表示のシンセサイザーチューナーでプリセットも可能だった。またついにリモコンからチューナーの操作が可能に。バンド切り替えのほか、チューニングも手元でできた。



新品時価格:2万9000円 / 最大本体サイズ:105.6×74.2×19.8mm / 重量:150g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:2.5時間（ガム型充電池使用）

1989 WM-172

先進素材だったチタンカラーを採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B

新しい『ベーシック・ウォークマン』170シリーズ。リモコンには非対応ながらメタル再生対応、ドルビーNR・Bなど基本機能は充実。172は新世代のトラッドを目指しシンプルながら先進的なイメージが強かったチタンカラーを採用している。



新品時価格:1万8500円 / 最大本体サイズ:109×77.7×23.8mm / 重量:205g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:4時間（ガム型充電池使用）

1989 WM-171

質感の高いパールホワイト塗装

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B

新しい『ベーシック・ウォークマン』170シリーズ。リモコンには非対応ながらメタル再生対応、ドルビーNR・Bなど基本機能は充実。シンプルなブラックモデル、170に対し、171は高級感の高いパールホワイトの塗装が施されている。



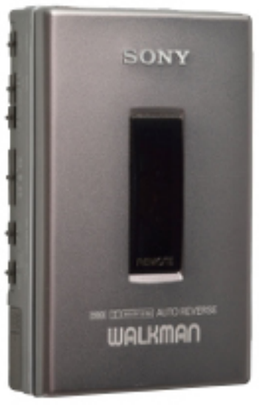
新品時価格:1万8500円 / 最大本体サイズ:109×77.7×23.8mm / 重量:205g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:4時間（ガム型充電池使用）

1989 WM-607

リモコン対応のベーシックモデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

イヤーレシーバー一体タイプのリモコンを採用したベーシックモデル。ガム型充電池と充電器むが進化して、10分間急速充電が可能になった。10分で約2時間、フル充電は30分で約4時間の長時間再生が可能。重低音D.B.B.は3段階の切替え式。



新品時価格:2万2000円 / 最大本体サイズ:72.9×110×25.3mm / 重量:190g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:4時間（ガム型充電池使用）

1989 WM-506

ホットラインが付いたワイヤレス

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B

本体にマイクを内蔵し、イヤーレシーバーを外さなくても会話ができたり、周囲の音をモニターできるホットライン機能が搭載された。また重低音D.B.B.回路はレシーバー側に搭載されているので手元でオン・オフが可能となっている。



新品時価格:2万6800円 / 最大本体サイズ:77.7×108.4×30.5mm / 重量:205g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3.5時間（ガム型充電池使用）

1989 WM-F180

FM開局ラッシュに合わせチューナー内蔵

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B

1988年にFMジャパン（J-WAVEに改称）が開局してからのFM開局ラッシュ、FMブームに対応し、ベーシック・モデルにもチューナーを内蔵。EXアモルファス・ヘッド、重低音D.B.B.、16mm大口径ヌードターボ・ハイファイの高音質3点セットも装備。



新品時価格:2万7000円 / 最大本体サイズ:109×77.7×26.7mm / 重量235g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:4時間（ガム型充電池使用）

1989 WM-609

スタイルが特徴の"音美人"ウォークマン

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

WM-509『音美人』ウォークマンの進化版、あるいはWM-607のデザイン・オリエンテッドという立ち位置。機能的にはほぼ同等で、最大出力がWM-607が5mW+5mWに対し4.5mW+4.5mWと若干小さくなっている。なおヘッドフォンはボディ同色。



新品時価格:2万3100円 / 最大本体サイズ:72.9×110×24.1mm / 重量:190g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:4時間（ガム型充電池使用）

1990 WM-702

光と音で確認できるリモコンを採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

WM-701Cの後継モデルだが、使用頻度の低かったドルビーNR・Cは省かれた。代わりにイヤーレシーバー一体のリモコンはさらに進化を遂げ、LEDランプとヘッドフォンからの信号音で動作状況をアナウンス。本体を見なくても操作が楽に。



新品時価格:2万5000円 / 最大本体サイズ:106.4×74.6×10.7mm / 重量:150g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3時間（ガム型充電池使用）

1989 WM-F606

ワイヤレスレシーバーをFM対応に

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM / 重低音 / DOLBY B

WM-506と本体の仕様はまったく同じ『ワイヤレスウォークマン』。ただしワイヤレスレシーバーは周波数固定ではなく、チューニングできる、コンパクトなFMラジオ。レシーバー単体でFM放送が楽しめるFM多局時代対応モデルとなった。





新品時価格:3万2000円 / 最大本体サイズ:77.7×108.4×30.5mm / 重量205g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3.5時間（ガム型充電池使用）

1990 WM-DD9

オートリバースでワウフラ0.07%を実現

メタル再生 / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B/C



すでに数々の高性能モデルに搭載されてきたD.D.（ディスクドライブ）。通常のベルトドライブよりもスペースを必要とする方法でもあり、これまでオートリバース化が難しいとされてきたが、オートリバースに必要なふたつのキャプスタンそれぞれにD.D.機構を持たせることでオートリバース化を実現。しかもクォーツロックキャプスタンサーボを採用し、ふたつのキャプスタンの回転を監視しモーターを制御するため、常にテープ走行は安定。オートリバース機最高となるワウフラッター0.07%を達成した。さらに純度99.997%の単結晶素材を巻線に使用したダブルガーターファインギャップEXアモルファスヘッド、アウトプットコンデンサーレス回路など、音質の追求に妥協はない。また最大板厚2ミリの頑丈なボディも特徴だった。

新品時価格:4万3000円 / 最大本体サイズ:77.7×109.2×33.1mm / 重量:330g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:2.5時間（ガム型充電池使用）

1990 WM-703C

ドルビーC対応のフルリモコン・モデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B/C / リモコン

『アドバンスド・ウォークマン』WM-701Cと実質的にはほぼ同じモデル。違いはガム型充電池の充電器で、完全放電時には10分充電で1.5時間、30分充電で2.5時間の再生が可能となった。そのほかの機能・性能はWM-701Cとまったく同じ。



新品時価格:2万7000円 / 最大本体サイズ:105.6×74.2×19.8mm / 重量:150g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:2.5時間（ガム型充電池使用）

1989 WM-506

ホットラインが付いたワイヤレス

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B

本体にマイクを内蔵し、イヤーレシーバーを外さなくても会話ができたり、周囲の音をモニターできるホットライン機能が搭載された。また重低音D.B.B.回路はレシーバー側に搭載されているので手元でオン・オフが可能となっている。



新品時価格:2万6800円 / 最大本体サイズ:77.7×108.4×30.5mm / 重量:205g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3.5時間（ガム型充電池使用）

1990 WM-F707

リモコン録音&ワールドワイドチューナー

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ワールドワイドチューナーからのエアチェックはもちろん、付属のワンポイント・ステレオマイクによる生録にも対応している。なおチューナの操作も録音機能もリモコンから操作可能だが、リモコンは旧世代のフルリモコンとなる。

新品時価格:4万3000円 / 最大本体サイズ:106.2×75.1×28.1mm / 重量:190g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:2.5時間（ガム型充電池使用）



1990 WM-F702

親切リモコンとワールドワイドチューナー

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

WM-702にワールドワイド対応の3バンドシンセサイザーチューナーを内蔵したモデル。各バンド毎に7局のプリセットが可能で、プリセットされた局の呼び出しは、光と信号音で知らせる『親切フル機能リモコン』で操作可能となっている。

新品時価格:3万2000円 / 最大本体サイズ:106.4×74.6×25.4mm / 重量:190g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3時間（ガム型充電池使用）



1990 WM-190

音漏れに向き合った新世代モデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B

ウォークマンが若者の標準装備となったときに社会問題となったのが、電車など密閉空間での音漏れ、いわゆる『シャカシャカ音』だった。WM-190はベーシックモデルながら、耳への密閉性をアップして音漏れを軽減したヘッドフォンを採用。

新品時価格:1万6500円 / 最大本体サイズ:109×74.4×23.9mm / 重量:205g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3.5時間（ガム型充電池使用）



1990 WM-R707

再生も録音もリモコンから操作可能

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

WM-F707のワールドワイドチューナーを省略したモデル。やはりフルリモコンからの操作でワンタッチ録音まで対応し、マイクスタンド付のワンポイントのステレオマイクも付属される。707系も10分急速充電に対応している。

新品時価格:3万2000円 / 最大本体サイズ:106.2×75.1×23.2mm / 重量:165g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:2.5時間（ガム型充電池使用）



1990 WM-600

ジョイフルリモコンとA/B面検出が斬新

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

本体のスイッチと同じ操作系で大型円形スイッチの上下左右に機能を持たせたジョイフルリモコンを装備。またカセットのハーフにあるビス穴の有無でA/B面を検出する機構を採用。本体のデザインは両面がデザインされたリバーシブル。

新品時価格:2万2000円 / 最大本体サイズ:106.9×73.9×25.1mm / 重量:170g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:2.5時間（ガム型充電池使用）



1990 WM-507

コンパクトなワイヤレスレシーバー

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B

『ワイヤレス・ウォークマン』の進化モデル。ポイントはワイヤレスレシーバーの小型化。新開発の小型充電池をワイヤレスレシーバーに採用したことで、ワイヤレスレシーバー本体は約19mmの小型化に成功。ワイヤレスの利便性をアップした。

新品時価格:2万5000円 / 最大本体サイズ:78.3×108.1×29.1mm / 重量:205g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3時間（ガム型充電池使用）



1990 WM-805

ワイヤレスレシーバーにリモコンを搭載

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

液晶ワイヤレスリモコンを採用したワイヤレス・ウォークマン。レシーバー兼リモコンで本体の操作が可能だが、電車などでWM-805同士が接近した際にも誤動作が起きにくいよう、本体とリモコンは16（2の4乗）通りのセキュリティコードでペアリングしていた。動作状況やカセットのA/B面はリモコンの液晶にも表示された。EXアモルファスヘッド、EX D.B.B.回路など音質面も重視。

新品時価格:3万6000円 / 最大本体サイズ:78.3×108.1×29.1mm / 重量:185g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:2時間（ガム型充電池使用）



1990 WM-EX60

ジョイフルリモコンのベーシックモデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

1991年になるとベーシック・ウォークマンはリモコンのタイプによって2種類ラインナップされた。ひとつはこのWM-EX60で、大型ワンボタンのジョイフルリモコンモデル。ベーシックとはいえ、オートテープセレクターまで装備して機能は充実。



新品時価格:1万9500円 / 最大本体サイズ:108.8×76.5×22.9mm / 重量:175g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3.5時間(ガム型充電池使用)

1990 WM-F507

FM対応ワイヤレスレシーバーを採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM / 重低音 / DOLBY B

WM-507のワイヤレスレシーバーにFMワイドチューナーを搭載したモデル。ワイヤレスレシーバーはFM選局が可能ながら小型充電池NC-4WMの採用によりコンパクトなサイズにまとめられている。ワイヤレスリモコンは非搭載。



新品時価格:3万円 / 最大本体サイズ:78.3×108.1×29.1mm / 重量:205g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3時間(ガム型充電池使用)

1991 WM-EX80

時計まで内蔵した液晶リモコン採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

リモコンに液晶ディスプレイが搭載され、画面上の『WALKMAN』のロゴの文字が、テープの走行状態にあわせて点滅する遊び心も。リモコンに電池を内蔵し、日付や時間も表示できた。ただし『アラカルトヘッドフォン』は非対応。



新品時価格:2万2000円 / 最大本体サイズ:106.4×74.6×21.7mm / 重量:150g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:2.5時間(ガム型充電池使用)

1991 WM-EX70

フルボタンリモコンのベーシックモデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

WM-EX60と同時にデビューしたWM-EX70は手探りでも使いやすいフルボタンリモコンを装備。その他の機能はWM-EX60と同じだ。また両モデルともヘッドフォンがリモコンと分離、交換できる『アラカルトヘッドフォン』を採用していた。



新品時価格:1万9500円 / 最大本体サイズ:108.8×76.5×22.9mm / 重量:175g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3.5時間(ガム型充電池使用)

1991 WM-FX70

リーズナブルなチューナー搭載モデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM / 重低音 / DOLBY B / リモコン

WM-EX70のシンセサイザーチューナー内蔵モデル。特徴は価格で、これまでのチューナー内蔵モデルよりも安い価格設定だった。しかもチューナーはワールドワイド対応で、放送局のプリセットは、ワンタッチのオートメモリースキャンだった。



新品時価格:2万7000円 / 最大本体サイズ:108.8×76.5×26.3mm / 重量:195g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3.5時間(ガム型充電池使用)

1991 WM-EX85

海外対応の充電器を付属

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

WM-EX70と同等の機能を持つ本体だが、付属している充電器が『ワールド10分チャージャー』となる。これは100Vから240Vまで対応し、入力電圧の切り替えが不要のオートボルテージ対応のもの。プラグ変換アダプターも付属。



新品時価格:2万5000円 / 最大本体サイズ:106.4×74.7×23.3mm / 重量:150g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:2.5時間(ガム型充電池使用)

1991 WM-EX90

英会話学習に最適な機能を満載

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ウォークマンを卒業した人のための大人感覚のウォークマンというコンセプトからウォークマンO.B.と名付けられたモデル。デスクトップでの使用を意識した薄型モデルで、操作系は前面に集中。英会話学習に便利な区間リピート機能やテープカウンター、キュー&レビューなどが装備されていた。脱着できる電池ボックスは単三2本タイプで、充電池との併用で17.5時間のロングプレイが可能。



新品時価格:3万2000円 / 最大本体サイズ:154.2×19.5×95.4mm / 重量:250g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×2本 / 電池持続時間:3.5時間(ガム型充電池使用)

1991 WM-FX85

チューナーも充電器も海外フル対応

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

WM-EX85のワールドワイドチューナー搭載モデル。つまり付属の充電器もチューナーも海外対応、ということでキャッチコピーは『海外フル対応ウォークマン』。もちろん10分急速充電やアラカルトヘッドフォンも採用していた。



新品時価格:3万2000円 / 最大本体サイズ:106.4×74.7×26.4mm / 重量:185g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3.5時間（ガム型充電池使用）

1991 WM-EX88

リモコンとヘッドフォンが別体に

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

WM-EX80で採用した液晶リモコンが『アラカルトヘッドフォン』対応となった。ホールドシャッターや曲の頭出し機能など、このあと標準的装備となる機能はひととおり搭載。再生中の音量を常にチェックする快適音量スイッチも採用。



新品時価格:2万2000円 / 最大本体サイズ:108.2×75.7×24.5mm / 重量:175g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3.5時間（ガム型充電池使用）

1991 WM-GX90

ワールドチューナー＋タイマー録音

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

『ウォークマンO.B.』WM-EX90のワールドワイドチューナー搭載モデル。大型液晶ディスプレイを搭載していて、なんとチューナーからのタイマー録音も可能。英会話番組を録音しておいて区間リピートを使って学習、というのも可能だった。



新品時価格:4万6000円 / 最大本体サイズ:154.2×19.9×95.4mm / 重量:315g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×2本 / 電池持続時間:3.5時間（ガム型充電池使用）

1991 WM-WX88

ワイヤレスレシーバーは防滴仕様

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ワイヤレスレシーバーとヘッドフォンは防滴仕様となっているため、本体を濡れないバッグの中などに入れておけば、雨やプールサイドなどで使うことも可能。また本体を別売りのスポーツバック（防滴仕様）に収納すれば本体は濡れない。



新品時価格:4万円 / 最大本体サイズ:110.3×82.7×29.1mm / 重量:195g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:2時間（ガム型充電池使用）

1991 WM-EX77

斬新なカラーバリエーションが楽しい

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン





『才色兼備』というコピーが付いたモデルで、プラムピンク、ミントグリーン、ラベンダーブルーなど花の名前が付けられたカラーリングが特徴。またフライホイールの慣性モーメントやモーターの安定性など基本的な部分を解析し、新設計された新しいアンチローリングメカも採用されていた。音質を犠牲にしない音漏れ軽減機構や音漏れ減少ヘッドフォンなど音漏れ問題にも対処。

新品時価格:1万9500円 / 最大本体サイズ:108.2×75.7×24.5mm / 重量:175g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3.5時間（ガム型充電池使用）

1991 WM-FX77

ワールドワイドツインチューナー搭載

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

WM-EX77のワールドワイドチューナー搭載モデルだが、これまでのモデルと違うのはチューナーがふたつ搭載されていること。それぞれ『HOMEエリア』と『TRAVELエリア』として設定でき、旅行先のプリセットと普段のプリセットを切替えられた。



新品時価格:2万9000円 / 最大本体サイズ:108.2×75.7×27.9mm / 重量:180g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3.5時間（ガム型充電池使用）

1991 WM-SX77

頑強な造りと防水性能のアウトドアモデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

1986年のWM-F107以来久々のアウトドア仕様のウォークマン。しかもキャビネットは厚さ4.0mmの樹脂、リッドは1.0mmのアルミダイカストと頑丈さ、耐衝撃性も売り。本体とリモコンは防沫仕様、ヘッドフォンは防滴仕様となっていた。



新品時価格:2万9000円 / 最大本体サイズ:113.8×89.8×30.5mm / 重量:245g / 電源:ガム型充電池または単二乾電池×1本 / 電池持続時間:3.5時間（ガム型充電池使用）

1992 WM-DX100

コンパクトなタフボディに高音質を凝縮

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B/C / リモコン



圧倒的な高音質で数多くのファンを持つウォークマン・プロフェショナル。その末弟ともいうべきモデルがこのWM-DX100。あくまで通常の多機能ウォークマンと同様に選曲機構（AMS）やオートテープセレクター、ヘッドフォンが換えられるリモコン（アラカルトヘッドフォン）など便利な機能はそのままに音質を追求したモデル。メカは他のプロフェッショナルモデルと違いD.D.（ディスクドライブ）は採用されないもののPLL（Phase Locked Loop）でモーターを制御。そのモーターも、扁平モーターではなく制御しやすい円筒形モーターを採用と、使い勝手を犠牲にしない範囲でも高音質機となっている。もちろんオートリバースも搭載。なお外装は1ミリ厚のアルミボディ。センターロック式のカセット蓋も採用され耐久性にも優れる。

新品時価格:2万9000円 / 最大本体サイズ:79.7×110.2×29.1mm / 重量:235g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:2時間（ガム型充電池使用）

1992 WM-EX66

ホールドダイヤルがアクセント

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ビビッドなボディカラー展開のベーシックモデル。円形に配置された操作スイッチの中心にある円盤を回転させることでホールドモードとなる。低価格ながらアラカルトヘッドフォンに対応したリモコンは前後1曲の頭出し操作も可能だ。



新品時価格:1万7500円 / 最大本体サイズ:108.2×75.7×25.4mm / 重量:170g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3.5時間（ガム型充電池使用

1992 WM-EX78

EX77のクリスピーカラー・バージョン

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ホールドシャッター付きモデルのWM-EX77の限定クリスピーカラーバージョン。写真の2モデルの他、レッド（シャッターはパープル）、グリーン（シャッターはイエロー）の計4色があった。リモコンもボディと同じコーディネート。



新品時価格:1万9500円 / 最大本体サイズ:108.2×75.7×24.5mm / 重量:175g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3.5時間（ガム型充電池使用）

1992 WM-EX707

ホールドダイヤルに液晶リモコンを採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ホールドダイヤルを採用。リモコンには液晶画面で動作状況が一目瞭然。『WALKMAN』のロゴが走行の状態によって点滅するギミックや曲の頭出しも可能。またテープガイドがヘッド両側に付く『EXスタビライザーヘッド』を採用している。



新品時価格:2万9000円 / 最大本体サイズ:108.2×75.7×25.4mm / 重量:170g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3.5時間（ガム型充電池使用）

1992 WM-RX77

光るレコーディングリモコン採用

メタル再生 / 録再オートリバース / 充電池対応 / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

録音機能を突き詰めたウォークマン。最大の特徴は『光るレコーディングリモコン』の採用。スライド式録音スイッチ、『REC』『FWD』『REV』と録音状況やテープの裏表などもリモコンで確認できる。小型ステレオマイクも付属。



新品時価格:3万2000円 / 最大本体サイズ:107.6×78.7×26.3mm / 重量:200g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:2.5時間（ガム型充電池使用）

1992 WM-FX505

AMステレオ対応2バンドチューナー採用

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ワールドワイド対応のシンセサイザーチューナーを搭載。しかもウォークマン・シリーズで初となるAMステレオ放送対応で、価格2万4000円のリーズナブル仕様。フルボタンリモコンやホールドシャッターなどの基本機能も充実。



新品時価格:2万4000円 / 最大本体サイズ:114.5×80.7×31.8mm / 重量:230g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:10.5時間（アルカリ電池使用）

1992 WM-EX909

キャプスタンを減らし長時間再生を実現

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

キャプスタンひとつにすることで省力を達成した『デュアルヘッドメカ』を搭載。大容量のニッケル水素充電池の採用で充電池だけで7.5時間、アルカリ単三電池との併用で22時間の再生時間を達成。愛称は『スタミナウォークマン』。



新品時価格:2万5000円 / 最大本体サイズ:107.3×76.4×26mm / 重量:170g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:7.5時間（ガム型充電池使用）

1992 WM-FX909

海外対応ツインチューナー付き"スタミナ"

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / ブランクスキップ / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

『スタミナウォークマン』WM-EX909にワールドワイド・ツインチューナーを搭載。本体はもちろん、液晶付きリモコンでも操作可能になった。ニッケル水素ガム型充電池NH-9WHだけで7.5時間、アルカリ単三電池との併用で20時間の再生が可能。



新品時価格:3万2000円 / 最大本体サイズ:107.3×76.4×29.6mm / 重量:170g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:7.5時間（ガム型充電池使用）

1992 WM-FX707

海外対応ツインチューナーで帰国時も便利

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ワールドワイドのツインチューナーを搭載。『HOMEエリア』と『TRAVELエリア』の使い分けで旅行・出張が多い人には便利な仕様。『曲探しリモコン』『ブランクスキップ』『アラカルトヘッドフォン』など最新機能も装備した。



新品時価格:2万7000円 / 最大本体サイズ:108.2×75.7×27.9mm / 重量:180g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3.5時間（ガム型充電池使用）

1992 WM-WX808

38MHzのハイバンド採用のワイヤレス

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

従来の『ワイヤレスウォークマン』はFM放送とあまり変わらない75MHz前後で音声信号を送信していたが、ハイバンドワイヤレスでは電波障害を受けにくい238MHz前後を使用。ワイヤレスレシーバーは使いやすいカードタイプを採用。



新品時価格:3万6000円 / 最大本体サイズ:77.4×108.1×31mm / 重量:185g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:2.5時間（ガム型充電池使用）

1992 WM-GX77

海外でのビジネスも視野に入れたモデル

メタル再生 / 録再オートリバース / 充電池対応 / FM/AM TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ワールドワイドチューナーを内蔵した録音機能付きウォークマン。リモコンは誤操作しにくいスライド式の録音スイッチを採用。本体はスライド&プッシュ式でさらに確実。小型のステレオマイク（スタンド付き）も付属している。



新品時価格:3万9800円 / 最大本体サイズ:105.8×75.5×29.2mm / 重量:210g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:2.5時間（ガム型充電池使用）

1993 WM-EX99R

ICリピート機能搭載の英会話ウォークマン

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / DOLBY B / リモコン

初めてICリピートを搭載した『ICリピートウォークマン』。聞きたい部分を繰り返し聞けるよう、4秒、8秒、16秒の3段階でICに音声を記録。テープを巻き戻すことなくリピートできる機能だ。再生スピードも+10%、-15%が選べた。



新品時価格:2万9000円 / 最大本体サイズ:108.8×33.1×76.1mm / 重量:210g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3.5時間（ガム型充電池使用）

1993 WM-EX606

ツインヘッドフォンジャック搭載

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

リモコン対応の5極ジャックのほかにヘッドフォン専用のジャックを装備。ふたり同時に音楽を聴くことができた。ホールドダイヤルは円形から半円形に進化。解除するとダイヤルの一部がボディから飛び出し、ロックの確実性が高まった。



新品時価格:1万7500円 / 最大本体サイズ:78.2×107.6×24.7mm / 重量:175g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3.5時間（ガム型充電池使用）

1993 WM-EX777

機能満載のベーシックモデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ラベンダーブルーなど花の名前がつけられたカラフルなボディカラーが特徴（ブラック以外）。またウォークマンが頑なに搭載しなかった曲の頭出し機能を、ベーシックモデルながら搭載。ホールドシャッターも採用した。



新品時価格:1万9500円 / 最大本体サイズ:107.5×78×25mm / 重量:180g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3.5時間（ガム型充電池使用）

1993 WM-EX555

カラオケ用「曲おぼえ1曲リピート機能」

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

好きな曲をエンドレスでリピートできる『曲おぼえ1曲リピート』機能がついた。当時若者の間ではカラオケ屋でコンパというのが普通だったのだ。曲探し、ブランクスキップなど多彩なプレイがリモコンで操作できたベーシックモデル。



新品時価格:1万5000円 / 最大本体サイズ:107.4×76×23.4mm / 重量:185g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3.5時間（ガム型充電池使用）

1993 WM-EX808 / EX808HG

アルミ・マグネシウム合金の薄丈夫ボディ

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

マグネシウム配合高強度アルミボディとダブルロック方式を採用。わずか20.3ミリと薄型ボディにもかかわらず耐久性、頑丈さを併せ持ったモデル。曲の頭出し機構やブランクスキップなど便利な機能も満載だった。また絡みにくいコードを採用した『ハイグレ』ヘッドフォンを付属。WM-EX808HGは美しくキズがつきにくいクロムメッキボディとなっていた。

新品時価格:2万2000円（EX808）、2万3000円（EX808HG） / 最大本体サイズ:108.7×77.5×20.3mm / 重量:165g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:6時間（ガム型充電池使用）



1993 WM-EX999

単三、ガム充電池併用で25時間再生

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

デュアルヘッドの省電力メカと大容量ニッケル水素充電池の採用で8.5時間の再生が可能。さらに乾電池との併用で最大25時間もの長時間再生が可能だった。ボディはフタと本体の密着度を上げるためバリアリング&2ポイントロック機構を採用し、内部へのホコリ等の侵入を防止した。愛称は『ボディーガードウォークマン』。曲おぼえ1曲リピートなど便利機能も採用。

新品時価格:2万5000円 / 最大本体サイズ:108.8×77.9×23.1mm / 重量:180g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:8.5時間（ガム型充電池使用）



1993 WM-FX808

AMステレオ対応の薄丈夫ウォークマン

リモコン

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B

『薄丈夫ウォークマン』WM-EX808に3バンドチューナーを内蔵したモデル。マグネシウム配合高強度アルミ合金&ダブルロック方式で23.8mmの薄さはチューナー付きウォークマンで最薄。またチューナーはAMステレオと新エリアコールに対応。



新品時価格:2万9000円 / 最大本体サイズ:108.7×77.5×23.8mm / 重量:185g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:5.5時間（ガム型充電池使用）

1993 WM-FX777

エリアコール式ワールドチューナー採用

リモコン

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B

『シンプル薄丈夫ウォークマン』WM-EX777にワールドチューナーを搭載したモデル。このワールドチューナーには地域名と番号を選ぶだけで簡単選局が可能な『新エリアコール』を採用。絡みにくいコードの『ハイグレ』ヘッドフォンも付属。



新品時価格:2万5800円 / 最大本体サイズ:76.4×107.3×29.6mm / 重量:187g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3.5時間（ガム型充電池使用）

1993 M-GX707

AMステレオもエアチェック可能

メタル再生 / 録再オートリバース / FM/AM TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

型番的にはWM-FX707の録音機能付きのように思えるがじつはFX707よりも半世代進歩している。チューナーはAMステレオ対応の新エリアコール対応版の新スペック。録音ボタン独立のホールドシャッター&ホールドスイッチを採用。



新品時価格:3万9800円 / 最大本体サイズ:108.2×79.9×29.4mm / 重量:210g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:4.5時間（ガム型充電池使用）

1993 WM-FX999

25時間再生+チューナー内蔵の頑丈ボディ

リモコン

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B

『ボディーガードウォークマン』WM-EX999に3バンドチューナーを内蔵したモデル。チューナーはAMステレオと新エリアコールに対応したワールドチューナー。曲おぼえ1曲リピートなど多彩な機能と使いやすい曲探し液晶リモコンを採用。



新品時価格:3万2000円 / 最大本体サイズ:108.8×77.9×25.8mm / 重量:200g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:8.5時間（ガム型充電池使用）

1994 WM-EX666

11倍高速曲探し&キュートデザイン

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

機能・性能はWM-EX511とほぼ同じだが（充電池の持続時間が若干長い）、最大の違いはデザインとカラーコーディネート。ヘッドフォンとリモコンをボディ同色としたうえ、生成りのポーチを付属。若い女性をターゲットにしていた。



新品時価格:1万7500円 / 最大本体サイズ:107.4×77.8×23.3mm / 重量:170g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:4時間（ガム型充電池使用）

1993 WM-RX707

レコーディング液晶リモコンを初採用

メタル再生 / 録再オートリバース / 充電池対応 / 録音 / DOLBY B / リモコン

WM-RX707もEX707/FX707よりも半世代後に当たるモデルで、EX707の録音機能追加モデルというよりはGX707のチューナー省略モデルといった方が正確。大容量ニッケル水素充電池付属でEX707/FX707に比べ、再生時間も長くなっている。



新品時価格:2万9800円 / 最大本体サイズ:108.2×79.9×29.4mm / 重量:210g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:4.5時間（ガム型充電池使用）

1994 WM-EX511

基本機能充実の新世代ベーシック

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

20.3mmの極薄ボディ、定価1万4000円という低価格ながら、11倍高速曲探し（この時期他社のポータブルカセットプレーヤーがサーチの速さを売りにしたのに対抗）、充電池とアルカリ乾電池併用で12.5時間再生と性能、機能は充実。



新品時価格:1万4000円 / 最大本体サイズ:108.4×77.2×20.3mm / 重量:175g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3.5時間（ガム型充電池使用）

1994 WM-WX777

リモコンで電源もコントロール可能

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ノイズに強いハイバンドワイヤレスを採用。本体はブラックながらワイヤレスレシーバーはサンドブラック/ターキッシュブルー/ピンキーバイオレットの3色。またワイヤレスレシーバーから電源のON/OFFもコントロール可能になった。



新品時価格:2万3500円 / 最大本体サイズ:77.7×108.7×26.1mm / 重量:185g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:2.5時間（ガム型充電池使用）

1994 WM-FX811

全国1押し局探しチューナーを内蔵

リモコン

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B

ホールドシャッターがついた分、WM-EX511よりも上級な外観だが、機能的にはEX511にチューナーを搭載したモデル。21.5mmのボディ薄はチューナー付きで業界最薄（当時）。チューナーは全国1押し局探し機能が搭載されていた。



新品時価格:2万3500円 / 最大本体サイズ:108.4×77.2×21.5mm / 重量:180g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:5時間（ガム型充電池使用）

1995 WM-EX811

液晶リモコン付き薄丈夫ウォークマン

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

19.5mmとついに2cmを切る薄さを達成したが、マグネシウム配合高強度アルミ合金を採用した『薄丈夫』仕様。薄型のホールドシャッターが高級感を漂わせる。付属の液晶リモコンは『アラカルトヘッドフォンシステム』を採用。



新品時価格:1万7500円 / 最大本体サイズ:108.4×77.8×20mm / 重量:180g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:5時間（ガム型充電池使用）

1994 WM-EX1 / EX1HG

15年の集大成モデルでワンプッシュイジェクトが斬新

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン







ウォークマン誕生15周年モデル。充電池だけで12時間、アルカリ電池との併用で36時間もの再生を可能とした。ボディはワンプッシュでカセットが飛び出すワンプッシュ・イジェクトを採用。素材はマグネシウム配合高強度アルミ合金の薄くても頑丈なボディ。曲探しは25倍速と高速なうえ前後9曲まで可能。さらにイントロだけを再生していくミュージックスキャンも備えた。

新品時価格:2万2000円（EX1）、2万3500円（EX1HG） / 最大本体サイズ:79.7×111.8×21.1mm / 重量:184g（EX1） / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:12時間（ガム型充電池使用）

1995 WM-EX911

リモコンもヘッドフォンもすっきり収納

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / DOLBY B/C / リモコン

D字型をした部分がワイヤードリモコンとなり、本体から引き出せる。またヘッドフォンはそのリモコンから引き出し、いずれも収納時は巻き取れる、という仕組み。ケーブルは細いが丈夫な高強力ポリアリレート繊維で補強されている。



新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:108.4×77.2×27.6mm / 重量:190g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:5時間(ガム型充電池使用)

1995 WM-GX711

テープもエアチェックも生録もOK

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

GXシリーズはチューナー付き録音可能モデルだが以前のGX707に比べると、AMステレオでなくなったり『新エリアコール』ではなく『エリアコール』になっていたりと、チューナーは世代が遡った。その代わり7000円近く安くなっていた。



新品時価格:3万3000円 / 最大本体サイズ:108.2×79.9×29.2mm / 重量:210g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:3時間(ガム型充電池使用)

1995 WM-EJ95

Jリーグ14チームのデザインを用意

メタル再生 / 再生オートリバース / 重低音

これまで高性能、高品質、小型化を追求したきたウォークマンが新しい可能性を示したモデル。大柄のボディはバックル式のロックとラバーパッキングで防水性能を備える。電池は単三2本を使用。充電池には対応しない。リモコンも非対応と割り切ったスペックだが、定価8000円という低価格。すでにMDが普及しつつあった頃でもあり、カセットプレイヤーの未来を予見させるモデルだった。

新品時価格:8000円 / 最大本体サイズ:102.5×119×47.5mm / 重量:265g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:7時間(アルカリ電池使用)



1995 WM-EX622

超小型リモコン付きベーシック

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

新小型リモコン付きのベーシックウォークマン。ついにベーシックは1万3000円の低価格まで安くなったが、前後3曲のうち聴きたい曲をサーチできる曲探しなど機能は充実。また充電池だけで5時間、アルカリ電池併用で21時間の再生時間を達成。



新品時価格:1万3000円 / 最大本体サイズ:108.5×79.6×22.7mm / 重量:160g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:5時間(ガム型充電池使用)

1995 WM-EX2

アルカリ+充電池で50時間再生を達成

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

『15年ウォークマン』WM-EX1の進化モデルがこのWM-EX2。といってもデザインのほかは、スペック的に変わったのは電池持続時間。充電池とアルカリ乾電池の併用で、50時間連続再生を達成。ニックネームは『新スタミナウォークマン』。

新品時価格:2万1000円 / 最大本体サイズ:80.8×111.3×20.5mm / 重量:175g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:16時間(ガム型充電池使用)



1995 WM-FX822

大型液晶にタイマーアラームも搭載

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

本体に大型液晶画面を搭載したチューナー付きモデル。操作系も本体に大型スイッチが配置されていて、非常に使いやすくデザインされている。またタイマーアラーム(乗り越し防止タイマー)が採用されていて、60分まで10分単位で設定できる。

新品時価格:2万2000円 / 最大本体サイズ:78.6×108.5×23.0mm / 重量:170g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:5時間(ガム型充電池使用)



1995 WM-FX2

スタミナ48時間再生のチューナー内蔵モデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

WM-EX2に全国1押し局探しが可能な高性能チューナーを搭載している。チューナーはFMの感度もアップしたワールドチューナー。なおチューナーの操作は液晶リモコンでも可能だが、この液晶パネルは蓄光式で暗い場所でもしばらくは明るく光る。

新品時価格:3万1000円 / 最大本体サイズ:80.8×111.3×23.4mm / 重量:200g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:15時間(ガム型充電池使用)



1995 WM-GX312

スピーカー内蔵の超小型ラジカセ

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / 録音 / 重低音

2バンドチューナーを内蔵した録再ウォークマン。オートリバースやメタル対応は再生時のみ。ドルビーNRも非搭載、リモコンも非対応となるが、スピーカーを内蔵し小型ステレオマイクも付属するなど、ちいさなラジカセとして使うことができる。

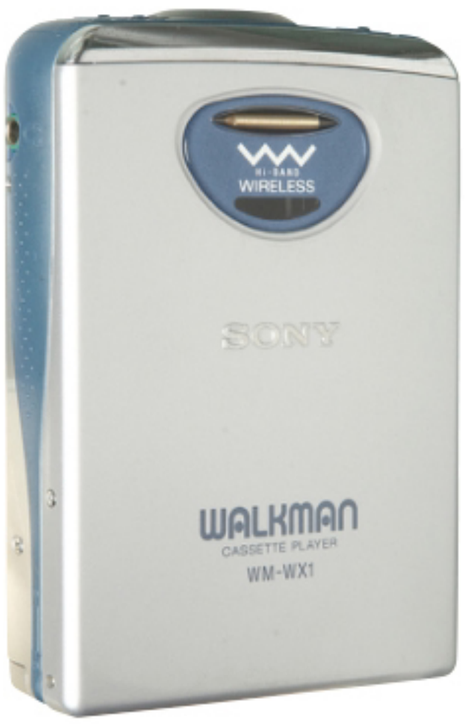


新品時価格:1万2000円 / 最大本体サイズ:93×119.9×36.5mm / 重量:240g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:6時間(アルカリ電池使用)

1995 WM-WX1

コード巻き取り式レシーバー採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / プランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン



WM-EX1系のワンプッシュイジェクトを採用したハイバンド・ワイヤレスウォークマン。最大の特徴はコード巻き取り式のワイヤレスレシーバー。ネックストラップ付きで首から下げておけばすっきり収納できる。充電池でも7時間再生の省電力。

新品時価格:2万7000円 / 最大本体サイズ:81.1×112.1×23.8mm / 重量:195g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:7時間(ガム型充電池使用)

1996 WM-EX633

新世代ベーシックもスタミナに進化

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / プランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

新小型リモコン付きのベーシックウォークマン。ついにベーシックは1万3000円の低価格まで安くなったが、前後3曲のうち聴きたい曲をサーチできる曲探しなど機能は充実。また充電池だけで5時間、アルカリ電池併用で21時間の再生時間を達成。



新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:78.6×108.6×21.5mm / 重量:170g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:9時間(ガム型充電池使用)

1996 WM-EQ2

iMacより早かったスケルトンボディ

メタル再生 / 再生オートリバース

ウォークマンをオーディオ製品ではなく『雑貨』としてとらえた新しいコンセプトのモデル。性能は当時として最小限のものだが、「持ってみたい」と思わせるデザインで、販路もオーディオショップや家電小売店ではなく『ソニプラ』のような雑貨のセレクトショップが主力だった。ちなみにスケルトンが流行する前の製品で、時代を先取りしていたモデルと言える。

新品時価格:8000円 / 最大本体サイズ:97.5×131×40.1mm / 重量:185g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:20時間(アルカリ電池使用)



1996 WM-FX833

大型液晶のチューナーも重低音対応

リモコン / メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / プランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B

WM-FX822の進化版。外観の違いはボタンの形状が丸から四角になった程度だが、中身はけっこう変わっている。重低音は2段階『MEGA BASS』と『GROOVE』を搭載。曲探しは14倍から15倍に、電池持続時間は最大21時間から40時間と倍増。



新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:78.6×108.6×23.4mm / 重量:170g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間9時間(ガム型充電池使用)

1996 WM-EX922

ヘッドフォン本体にリモコンを内蔵

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / プランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

上辺が丸く弧を描いているが、この部分にインナーイヤーヘッドフォンを収納を収納できる『コード巻き取りウォークマン』だ。しかもヘッドフォン本体に音量も含めた『耳もとリモコン』を内蔵していて、使いやすさは劇的に進化。



新品時価格:1万7500円 / 本体サイズ:78.9×124.4×25.9mm / 重量:210g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:6時間(ガム型充電池使用)

1996 WM-RX822

生録対応コンデンサーマイク付属

リモコン

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 録音 / 重低音 / DOLBY B

ウォークマン史上最多機能モデルであるWM-GX822からチューナーを外したモデル。使いやすいシャトルダイヤル、ELバックライト付き液晶リモコンやテープ再生スピードコントロール、録再リバースなどの機能はそのまま採用されている。



新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:108.9×78.6×25.3mm / 重量:195g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:6時間(ガム型充電池使用)

1996 WM-GX822

超多機能チューナー内蔵録再モデル

DOLBY B / リモコン

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM TV / 録音 / 重低音

チューナー&録音機能付きウォークマンだが、その多機能は類を見ない。タイマー録音、ICリピート、テープスピードコントロール(+30～-20%)、シャトルダイヤル(テープスピードやチューニング)など。最大21時間再生のスタミナモデル。



新品時価格:3万7000円 / 最大本体サイズ:108.2×79.9×29.4mm / 重量:210g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:4.5時間(ガム型充電池使用

1997 WM-EQ3

闇で光る2代目"ビーンズ"

メタル再生 / 再生オートリバース

カジュアルスタイルのウォークマンとして人気となった『ビーンズ』はファッションアイテム的な進化を遂げた。機能は大きく変えずカラーリング等で新しさを演出。2代目となるWM-EQ3ではボディに蓄光材を使用。暗闇で光った。



新品時価格:8000円 / 最大本体サイズ:97.5×131×40.1mm / 重量:185g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:20時間(アルカリ電池使用)

1996 WM-GX622

エアチェック対応のベーシックモデル

リモコン

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / 充電池対応 / FM/AM / 録音 / 重低音 / DOLBY B

2バンドのシンセサイザーチューナーを内蔵した録音対応のお手軽モデル。リモコンヘッドフォン、ワンポイントステレオマイク付属。生録もエアチェックも1台で楽しめる。機能も14倍速の3曲曲探し、最大20時間の連続再生など充実。



新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:108.9×79.5×26.1mm / 重量:170g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:5.0時間(ガム型充電池使用)

1997 WM-EX5

ハーフミラーの"美・ウォークマン"

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 重低音 / DOLBY B / リモコン

『新感覚ミラーフェース』と呼ばれるハーフミラータイプのリッドを採用。機能たけでなくデザイン・素材・スタイルにこだわった『美・ウォークマン』。大型液晶リモコン採用。充電池とアルカリ乾電池の併用で62時間再生を実現。



新品時価格:オープン / 本体サイズ:79×111.7×22.8mm / 重量:170g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間22時間(ガム型充電池使用)

1997 WM-EX3

EX2の進化版は重低音対応に

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 重低音 / DOLBY B / リモコン

『スタミナウォークマン』の進化モデル。最大52時間の連続再生と36倍の前後9曲曲探しと機能・性能は充実。さらに『MEGA BASS』とそのパワーアップ版『GROOVE』、高域が落ちた古いテープを修正する『REVIVE』の3エフェクトを搭載。



新品時価格:オープン / 本体サイズ:79×111.7×21.5mm / 重量:175g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:12時間(ガム型充電池使用)

1997 WM-EX655

"エックスプレス"で耐衝撃性アップ

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

それまでもタフなボディを持つウォークマンはあったが、素材を奢る方向で耐衝撃性をアップする傾向が強かった。また今でこそ素材だけでなく形状で応力を分散される技術も盛んだが、プレスの形状でボディの堅牢さを増すという当時としては新しい思想を取り入れたモデルだった。その耐衝撃性能は前モデルEX633比でなんと2.8倍。美しさと堅牢さを兼ね備えたウォークマンだった。

新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:108.9×80.0×21.3mm / 重量:175g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:9時間(ガム型充電池使用)



1997 WM-FX5

チューナー搭載"美・ウォークマン"

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ワールドワイドのシンセサイザーチューナーを内蔵した『美・ウォークマン』のチューナー・モデル。3つのサウンド・エフェクトや全国ボタンひと押しで今いる地域の受信可能局をプリセットする機能（ASPボタン）を搭載している。

新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:79.0×111.7×25.0mm / 重量:190g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間22時間（ガム型充電池使用）



1997 WM-EX7

ジョグレバーリモコンを採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 重低音 / DOLBY B / リモコン

主力モデルEXシリーズの進化版。円形の液晶ディスプレイの周りに配置された操作ボタンとジョグレバーで、片手で使いやすいリモコンを採用。また、アルカリ電池と充電池の併用で、なんと86時間の連続再生を可能にした。

新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:112.2×80.2×21.5mm / 重量:206g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:34時間（ガム型充電池使用）



1997 WM-GX322

ステレオスピーカー内蔵"ラジカセ"

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / 録音 / 重低音

コンセプトは“ラジカセ感覚のウォークマン”。110mW+110mWのステレオスピーカーを内蔵し、まさにコンパクトなラジカセ。生録もエアチェックもでき、再生時はオートリバースや再生スピード調整機能（+25〜-20%）も搭載している。

新品時価格:1万2000円 / 最大本体サイズ:116.0×89.0×39.0mm / 重量:240g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:22時間（アルカリ電池使用）



1997 WM-FX855

FX833がスタミナ対応モデルに進化

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

WM-FX822からFX833、そしてこのFX855へと進化。デザインはけっこう変わり、シャープな印象。ボディ構造も手が入れられ、ダブルロックになった。また『アラカルトヘッドフォン』も採用している。全国1押し局探しも搭載している。

新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:108.7×80.0×23.5mm / 重量:170g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間10時間（ガム型充電池使用）



1997 WM-MV1

新世代カジュアルは男性向け

メタル再生 / 再生オートリバース / 重低音 / DOLBY B

音楽を持ち歩くというスタイルは必須のものになっていたが、すでにウォークマンがステイタスだった時代は終わっていた。自分のライフスタイルに合ったモデルを求める若者のためのカジュアルモデルがこのWM-MV1。これまでのカジュアルモデルは女性が好む雑貨テイストが多かったが、MA-1に似合いそうなメタルボディのMV1は男性ターゲットだった。

新品時価格:9800円 / 本体サイズ:114.6×87.4×33mm / 重量:245g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間22時間（アルカリ電池使用）



1997 WM-WE7

真のワイヤレス・ウォークマン

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

このまでのワイヤレスウォークマンではワイヤレスレシーバーからイヤーレシーバーはコードでつながっていたが、WM-WE7ではリモコン一体型のヘッドセットとなり、コードはまったく存在しなくなった。レシーバーは単四とガム型充電池両対応。

新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:79.0×112.2×24.7mm / 重量:179g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間8時間（ガム型充電池使用）



1997 WM-WE1

ワイヤレスのベーシックモデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ハイバンドのワイヤレスウォークマンのベーシックモデル。最大の特徴はその価格。ワイヤレスレシーバーは巻き取り式でなく、コードを自分で巻きつけるタイプながら、貴本機能はすべて備えて、定価2万円。本体は最大30時間の長時間再生が可能。

新品時価格:2万円 / 本体サイズ:79×112.2×24.7mm / 重量:179g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間8時間（ガム型充電池使用）



1998 WM-EQ5 / EQ7 / EQ7WP

ビーンズ・ウォークマン増殖

メタル再生　再生オートリバース

スケルトンボディ、蓄光ボディと新しいテイストを提案してきたビーンズ・ウォークマン。可愛さを強調したEQ5につづいてラバーコーティングボディを採用したEQ7が登場。ボディは2トーンとされインパクトのあるルックス。ボディとカラーマッチした大きなラバーストラップも付属していた。

新品時価格:8000円（EQ7）、8500円（EQ5）　/ 最大本体サイズ:131.0×97.5×40.1mm / 重量:155g（電池含まず）　/ 電源:単三乾電池×2本　/ 電池持続時間:20時間（アルカリ電池使用）



1998 WM-EQ9

ビーンズにスピーカーが付いた

メタル再生　再生オートリバース

ウォークマンにカジュアル・スタイルを提案し、広く支持されていた『ビーンズ』の最終モデルがこのWM-EQ9。これまではデザイン、カラーの変更だけだったが、EQ9ではスピーカーで聴く、という提案を盛り込んだ。メッシュの窓も新しい。

新品時価格:9000円 / 最大本体サイズ:131.0×97.5×40.1mm / 重量:190g（電池含まず）　/ 電源:単三乾電池×2本　/ 電池持続時間:20時間（アルカリ電池使用）



1997 WM-EK1

ネックバンドヘッドフォン採用

メタル再生　再生オートリバース　DOLBY B　リモコン

ウォークマンはもちろん、ラジカセ、ラジオなどにもカジュアルモデルを展開するプロジェクト『PUNK.Ⅱ（パン.ツー）プロジェクト』がスタート。その中の“widdit”というクールな男性向けモデルのひとつがこのWM-EK1だった。

新品時価格:オープン / 本体サイズ:115.5×83.5×32.5mm / 重量:135g / 電源:単三乾電池×2本　/ 電池持続時間24時間（アルカリ電池使用）



1998 WM-EX9

歴代最薄の100時間ウォークマン

メタル再生　再生オートリバース　9曲頭出し　ブランクスキップ　充電池対応　重低音　DOLBY B　リモコン



ウォークマンの王道、EXシリーズの進化系がこのWM-EX9。薄型のメカデッキ『Fメカ』を採用することで、ウォークマン史上最薄の17.4mm（最薄部）を達成。充電池とアルカリ乾電池の併用時の連続再生時間はついに100時間に達した。

新品時価格:オープン / 本体サイズ:77.7×108×19.6mm / 重量:165g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本　/ 電池持続時間40時間（ガム型充電池使用）

1998 WM-GX312

ベーシックモデルも50時間再生に

メタル再生　再生オートリバース　9曲頭出し　ブランクスキップ　充電池対応　重低音　DOLBY B　リモコン

独特のプレスボディで個性を主張したベーシック・ウォークマンWM-EX655は、WM-EX677にに進化した（WM-EX666はすでに使われていたためか、型番は飛んだ）。一転すっきりとしたデザインを採用し、連続再生時間も充電池と乾電池併用で50時間に。

新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:109.0×77.7×21.4mm / 重量:140g（電池含まず）　/ 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本　/ 電池持続時間:12時間（ガム型充電池使用）



1998 WM-FK2

リモコン単体でラジオとして使える

メタル再生　再生オートリバース　FM/AM　重低音　DOLBY B　リモコン

キーホルダー型の円型リモコンを採用。じつはこのリモコン、2バンドのラジオを内蔵していて、単体でラジオとして使うことも可能だった。WM-Ek1と同様にインナーイヤー・ヘッドフォンではなく、ネックバンドタイプのヘッドフォンを付属。

新品時価格:オープン / 本体サイズ:115.5×83.5×32.5mm / 重量:135g / 電源:単三乾電池×2本（本体）　/ 電池持続時間24時間（アルカリ電池使用）



1999 WM-EX20

20周年記念のステンレスモデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン



ボディのもっとも薄い部分で16.9mmと歴代最薄を誇るウォークマンのプレステージモデル。ボディはなんとステンレス製で薄くても丈夫なボディを実現した。また重低音のMEGA BASSにサラウンド効果をプラスしたサウンド・エフェクト、MEGA BASS SURROUNDを搭載し、臨場感のある立体的なサウンドが楽しめるようになった。リモコンはワンボタンで、大きな液晶表示はLEDバックライトが備わっていた。

新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:78.7×108.6×18.7mm / 重量:180g(電池含まず) / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:40時間(ガム型充電池使用)

1998 WM-GX677

エアチェクもオートリバース可能

メタル再生 / 録再オートリバース / 9曲頭出し / 充電池対応 / FM/AM / DOLBY B / リモコン

チューナー付き録再リバース機の頂点を極めたWM-GX822のお手軽版として登場。ただし省略されたのはICリピート程度で、逆に曲探しは前後9曲(GX822は3曲)、『GROOVE』や『REVIVE』対応エフェクト(同『MEGA BASS』のみ)などは充実。



新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:108.4×77.7×23.8mm / 重量:150g(電池含まず) / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:8.5時間(ガム型充電池使用)

1999 WM-EK3

"widdit"シリーズ最終形

メタル再生 / 再生オートリバース / 重低音 / FM/AM / DOLBY B / リモコン

“widdit”のニューモデルはカムフラージュ柄(キーホルダー型リモコンはブラック)が登場。他にスケルトンブルーもあり。同時に登場したクリアスケルトンのWM-FK5はリモコンにラジオを内蔵。リモコンと本体はカールコードで結ばれた。



新品時価格:9000円 / 最大本体サイズ:115.5×83.5×32.5mm / 重量:135g(電池含まず) / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:24時間(アルカリ電池使用)

1999 WM-EX900

EX9後継モデルは78時間再生に

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

WM-EX9の後継モデルではあるが、付属のガム型充電池がNH-14WM(ニッケル水素)からNC-6WM(ニッカド)に変更され、連続再生時間は短くなってしまった(最大78時間)。リモコンもWM-EX20に似たLEDバックライト付きのワンボタン型となった。



新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:77.7×108.0×19.6mm / 重量:140g(電池含まず) / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:18時間(ガム型充電池使用)

1999 WM-EX600

液晶リモコンの新世代ベーシック

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

『ベーシック・ウォークマン』WM-EX677の進化版。液晶表示付きのワンボタンリモコンを搭載した。デザインはEX677を継承しつつ、シャープなイメージに。その他、電池の持続時間や主な機能は、EX677から変わった部分はほぼない。



新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:77.7×109.1×21.4mm / 重量:140g(電池含まず) / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:12.0時間(ガム型充電池使用)

1999 WM-FX877

チューナー内蔵再生専用モデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM TV / 録音 / DOLBY B / リモコン

デザインとしてはWM-GX677の録音機能を省略したモデルだが、A-B区間リピートは省略され、代わりに『曲おぼえ1曲リピート』が付くなど、語学学習用のウォークマンという色付けは薄くなっている。またリモコンのバックライトも省かれる。



新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:108.9×77.7×23.9mm / 重量:145g(電池含まず) / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:10時間(ガム型充電池使用

1999 WM-FK5

ブラックライトで光るスケルトンボディ

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / 重低音 / DOLBY B / リモコン

FK2の新バージョンはブラックライトに反応し光るスケルトンボディを採用。本体にキーホルダーリモコンをカールコードで接続し、ネックバンド式ヘッドホンで聴くスタイル。リモコンは2バンドチューナーを内蔵し、それだけでも使用可能。



新品時価格:オープン / 本体サイズ:115.5×83.5×32.5mm / 重量:135g / 電源:単三乾電池×2本(本体) / 電池持続時間24時間(アルカリ電池使用)

1999 WM-WE01

技術の限界に挑戦したフルワイヤレス

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン



ワイヤレスウォークマンの最終進化型。レシーバーはコードでつながれた左右の本体のみ。ちょうど最近のBluetoothイヤホンのような形状。リモコンもワイヤレスで大きめのコインといった形状。本体とレシーバー間の音楽データの通信は230MHzのVHF帯だが円偏波方式でテレビ放送の影響は受けないよう工夫されていた。まさに時代を先取りしたモデルだ。



新品時価格:2万3500円 / 本体サイズ:77.7×109.1×23.3mm / 重量:165g / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間8時間(ガム型充電池使用)

1999 WM-GX323

2倍録音モードを搭載したチューナー内蔵機

再生オートリバース / FM/AM / 録音

GX322の進化版だが、メタル再生は非対応。低音増強も省略された。その代わりに2倍録音モード、つまりテープスピードを半分にすることで60分テープに120分の録音が可能となる。テープスピードコントロール(+20～-15%)はそのまま搭載。



新品時価格:1万2000円 / 最大本体サイズ:116.0×89.0×39.0mm / 重量:190g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:22時間(アルカリ電池使用)

2000 WM-EX610

新ロゴ時代のベーシックモデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

WM-EX600の後継モデル。新ロゴを含め、デザインは一新された。ボディのスイッチは独特の配置だが、すべてのボタンが形状、大きさが違うためブラインドタッチが可能だった。またスイッチがロゴの形になったスペシャルモデルWM-EX615も同時発売。



新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:77.1×108.6×20.6mm / 重量:160g(電池含まず) / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:16時間(ガム型充電池使用)

2000 WM-FX200

デジタルチューナー付きのシンプルモデル

メタル再生 / FM/AM TV / 重低音

『シンプルライン』と呼ばれたシリーズのデジタルチューナー付きモデル。ワンウェイモデルでドルビーNRは非搭載。メタル再生には対応し、オートテープセレクタも備える。3バンドチューナーを内蔵し、合計22局のプリセットが可能。



新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:91.4×115.0×34.0mm / 重量:145g(電池含まず) / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:25時間(アルカリ電池使用)

2000 WM-EX910

EX610の上級機でバックライト付

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

WM-EX610の上位モデルだが、内容的にはさらに上級モデルのWM-EX2000の廉価モデル。デザインはほぼEX2000を継承。『MEGA SURROUND』、A/B面お知らせ機能は省略。リモコンのバックライトはEX610にはないが、EX910には付いている。



新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:76.3×108.4×17.6mm / 重量:140g(電池含まず) / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:20時間(ガム型充電池使用)

2000 WM-EX2000

高音質モデルの最終進化版

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

高音質ウォークマンの最終モデル。OFCの巻線を使ったヘッド、真鍮製フライホイールを採用しワウフラを改善……といったウォークマンらしいアプローチがあった。また、乾電池ボックスは付属されず、充電池専用モデルとなった。



新品時価格:オープン / 本体サイズ:78.3×109.4×21.9mm / 重量:175g / 電源:ガム型充電池 / 電池持続時間50時間

2000 WM-EX921

充電池専用のベーシックモデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン



WM-EX910の後継モデル。つまりこの時のリモコン付きテープ再生専用機の上位モデルということになる。単三電池対応は省略されているが、ドルビーNR・Bや前後9曲頭出し、ブランクスキップ等が備わったチューナー無しモデルとしては最後の高機能機ということになる。またバックライトリモコンが付属したのもテープ再生専用機ではこのEX921が最後。いよいよウォークマンの終焉が近づいた。

新品時価格:オープン / 本体サイズ:78.2×111.9×22.2mm / 重量:174g / 電源:ガム型充電池 / 電池持続時間45時間

2000 WM-GX200

チューナー&スピーカー内蔵録再機

メタル再生 / FM/AM / 録音 / 重低音

『シンプルライン』シリーズの2バンドチューナー内蔵の録再機。機能を絞りポップなデザインで女性ユーザーを狙う。テープ走行はワンウェイ。2ウェイスピーカー（モノラル）を内蔵しているため、小型ラジカセとしても使用できる。



新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:88.8×118.6×42.3mm / 重量:195g（電池含まず） / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:24時間（アルカリ電池使用）

2000 WM-GX688

多機能GX677のマイナーチェンジ版

メタル再生 / 再生オートリバース / 重低音 / DOLBY B / リモコン

WM-GX677の後継モデル。大きな変更点はボディのデザインだが、リモコンもバックライト付きのジョグリモコンから、普通のリモコンへと変更された。またキュー&レビュー的に使うことができる『押しただけサーチ』を搭載した。



新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:108.4×77.7×23.4mm / 重量:148g（電池含まず） / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:8.5時間（ガム型充電池使用）

2001 WM-GX400

2倍録音はそのままチューナーはデジタル化

録再オートリバース / FM/AM TV / 録音

GX323の進化版だが、テープスピードコントロール（+20～-15%）は省略された。ただしテープスピードを半分にして録音時間を2倍にする2倍録音モードは継続採用。またアナログだったチューナーもデジタル化され、より使いやすくなった。



新品時価格:1万2000円 / 最大本体サイズ:113.0×87.0×40.0mm / 重量:190g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:24時間（アルカリ電池使用）

2001 WM-EX621

語学学習対応スイングレバー採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / リモコン

ソニーの直販で7980円で販売されていたというから、ベーシック・モデルというよりもカジュアル・モデルに近い。また、語学学習に便利な『スイングレバー』によるキュー&レビューが可能だったことを考えると、用途が変わってきたのがわかる。



新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:77.1×108.0×20.5mm / 重量:158g（電池含まず） / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:14時間（ガム型充電池使用）

2002 WM-FX888

スタンドチャージャー対応

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

チューナー内蔵の再生専用モデルWM-FX877の後継モデル。本体の機能としてはほとんど変更がなく、ほぼデザインが変わったのみ。ただし、スタンドチャージャー対応になったのと、ジョグリモコンがバックライトの通常デザインのリモコンになった。



新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:108.4×77.7×23.0mm / 重量:160g（電池含まず） / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:22.0時間（ガム型充電池使用）

2002 WM-EX631

スイングレバーにスピードコントロールも

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / リモコン

EX621の後継機。語学学習に便利な『スイングレバー』によるキュー&レビューに加え、+20～-15%のテープスピードコントロールも搭載した。また充電スタンドも付属し、より使いやすくなった。EX921と違い単三電池にも外付けで対応。



新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:77.1×108.0×20.5mm / 重量:158g（電池含まず） / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:14時間（ガム型充電池使用）

[日本で販売されたウォークマン]

発売年	型式	掲載ページ
1979	TPS-L2	125
1981	WM-2	125
	WM-3	126
1982	WM-7	126
	WM-D6	126
	WM-DD	126
	WM-F2	126
	WM-R2	126
1983	WM-3EX	126
	WM-F5	127
	WM-20	127
	WM-F20	127
1984	WM-17	127
	WM-D6C	127
	WM-DC2	128
	WM-F15	128
	WM-30	128
	WM-40	128
	WM-DDⅡ	128
	WM-F30	128
	WM-R15	128
1985	WM-55	129
	WM-F65	129
	WM-F85	129
	WM-W800	129
	WM-101	129
	WM-50	129
	WM-75	129
	WM-D3	130
	WM-F101	130
	WM-F55	130
	WM-F75	130
	WM-R55	130
1986	WM-F107	130
	WM-F202	130
	DD-100	131
	WM-102	—
	WM-104	131
	WM-109	131
	WM-60	131
	WM-F102	—
	WM-F57	131
	WM-F60	131
	WM-R202	—
1987	WM-51	131
	WM-F109	132
	WM-103	132
	WM-501	132
	WM-503	132
	WM-504	132
	WM-F203	—
	WM-F501	132
	WM-F502	132
	WM-F51	—
1988	WM-509	133
	WM-52	133
	WM-F509	—
	WM-150	133
	WM-505	133
	WM-550C	133
	WM-701C	133
	WM-F404	134
	WM-F52	—
	WM-F550C	134
	WM-F701C	134
1989	WM-170	134
	WM-171	134
	WM-172	134
	WM-506	134
	WM-607	134
	WM-609	135
	WM-F180	135
	WM-F606	135
1990	WM-702	135
	WM-703C	135
	WM-DD9	135
	WM-F181	135
	WM-F702	136
	WM-F707	136
	WM-R707	136
	WM-190	136
	WM-507	136
	WM-600	136
	WM-805	136
	WM-F507	137
1991	WM-EX60	137
	WM-EX70	137
	WM-EX80	137
	WM-EX85	137
	WM-EX90	137
	WM-FX70	137
	WM-FX85	138
	WM-EX77	138
	WM-EX88	138
	WM-FX77	138
	WM-GX90	138
	WM-SX77	138
	WM-WX88	138
1992	WM-DX100	139
	WM-EX66	139
	WM-EX78	139
	WM-RX77	139
	WM-EX707	139
	WM-EX909	139
	WM-FX505	139
	WM-FX707	140
	WM-FX909	140
	WM-GX77	140
	WM-WX808	140
1993	WM-EX606	140
	WM-EX99R	140
	WM-EX555	140
	WM-EX777	140
	WM-EX808	141
	WM-EX808HG	141
	WM-EX999	141
	WM-FX777	141
	WM-FX808	141
	WM-FX999	141
	WM-GX707	141
	WM-RX707	142
1994	WM-EX666	142
	WM-WX777	142
	WM-EX1	142
	WM-EX1HG	142
	WM-EX511	142
	WM-FX1	—
	WM-FX811	142
1995	WM-EX811	142
	WM-EX911	143
	WM-GX711	143
	WM-EJ95	143
	WM-EX2	143
	WM-EX622	143
	WM-FX2	143
	WM-FX822	143
	WM-GX312	144
	WM-WX1	144
1996	WM-EQ2	144
	WM-EX633	144
	WM-EX641（EX642）	—
	WM-EX922	144
	WM-FX833	144
	WM-GX822	145
	WM-RX822	145
1997	WM-GX622	145
	WM-EQ3	145
	WM-EX3	145
	WM-EX5	145
	WM-EX655	145
	WM-EX7	146
	WM-FS1	—
	WM-FX5	146
	WM-FX855	146
	WM-GX322	146
	WM-GX655	—
	WM-MV1	146
	WM-WE1	146
	WM-WE7	146
1998	WM-EK1	147
	WM-EQ5	147
	WM-EQ7	147
	WM-EQ9	147
	WM-EX677	147
	WM-EX9	147
	WM-FK2	147
	WM-GX677	148
1999	WM-EK3	148
	WM-EQ7WP	147
	WM-EX20	148
	WM-EX600	148
	WM-EX900	148
	WM-FK5	148
	WM-FX877	148
	WM-GX323	149
	WM-WE01	149
2000	WM-EX2000	149
	WM-EX610	149
	WM-EX615	149
	WM-EX910	149
	WM-FX200	149
	WM-GX200	150
	WM-GX688	150
2001	WM-EX621	150
	WM-EX921	150
	WM-GX400	150
2002	WM-EX631	150
	WM-FX202	151
	WM-FX888	150
2003	WM-GX202	151
	WM-GX788	151

2002 WM-FX202

本体は植物原料プラスティック製

FM/AM　重低音



WM-FX200の後継機で3バンドチューナー内蔵モデル。本体にはトウモロコシなどから作られるポリ乳酸をベースとしたプラスチックを採用。このプラスチックは生分解性があり、廃棄後は微生物や酵素により徐々に分解され、最終的には二酸化炭素と水と無機質となる。ボディカラーは3色。2010年4月に最後のウォークマンが販売されたが、それがこのFX202だった。そうした意味ではウォークマンの歴史を見届けたモデルと言えるだろう。

新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:92.0×116.6×37.8mm / 重量:174g（電池含まず） / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:25時間（アルカリ電池使用）

2002 WM-GX202

チューナー&スピーカー内蔵録再機

メタル再生　FM/AM　録音　重低音



2バンドチューナー内蔵の録再機GX200の後継モデル。GX200はモノラルながら2ウェイのモニタースピーカーを内蔵していたが本機ではツィーターを省略。代わりにフラットマイクを内蔵し、マイクを繋がなくても生録が可能になった。

新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:88.8×118.6×42.3mm / 重量:195g（電池含まず） / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:24時間（アルカリ電池使用）

2003 WM-GX788

実質的に最後の高性能ウォークマン

メタル再生　録再オートリバース　9曲頭出し　充電池対応　FM/AM TV　録音　重低音　リモコン



オートテープセレクター、前後9曲頭出し、録再オートリバース、3バンドチューナー、そしてリモコンと従来のウォークマンが培った多機能に加え、語学対応のキュー&レビュー、スピードコントロールまで備えた最後の高性能ウォークマン。

新品時価格:オープン / 最大本体サイズ:77.1×108.0×20.5mm / 重量:158g（電池含まず） / 電源:ガム型充電池または単三乾電池×1本 / 電池持続時間:14時間（ガム型充電池使用）









1979
SONY TPS-L2

『WALKMAN』という名前はもちろん和製英語。初代ウォークマンTPS-L2が日本で発売されたあと、海外でも展開することになったのだが、この時にソニー・オブ・アメリカでは「WALKMANでは意味が分からない」ということから独自に『SOUND ABOUT』という名称で販売された。ところがイギリスでは米国英語で付けられた名前には反発があったのでこちらも独自に『STOW AWAY』として販売。さらにオーストラリアでは『FREE STYLE』というネーミングに。だがウォークマンがヒットするにつれ、日本を訪れた外国人がお土産にウォークマンを買っていくケースが増え、世界中で『WALKMAN』が認知され始めた。しかも英語圏以外では『WALKMAN』という名称の方が馴染みやすいということもわかり、盛田昭夫氏の会長命令で世界中で『WALKMAN』に統一された。やがて『WALKMAN』は1981年にフランスの辞書『プチ・ラ・ルース』に、1986年にはイギリスの『オックスフォード・イングリッシュ・ディクショナリー』に掲載されるに至り、世界標準の言葉となったのだ。

飲み物になったウォークマン

ウォークマンがヒットするにしたがって、ウォークマンのネーミングは様々なものに使われるようになった。ソニー自身がカセットテープや乾電池にウォークマンのネーミングを使うのは理解出来るが、そのうち小中学生がウォークマンを憧れのアイテムとして認知するに至り、文具や雑貨、果ては清涼飲料水までウォークマンのロゴが付けば売れるようになった。





SONY®

ステレオカセットプレーヤー TPS-L2

WALKM

取扱説明書

お買い上げいただきありがとうございます。
この製品の機能を充分に生かして正しくお使いいただく
ご使用前にこの説明書をよくお読みください。
お読みになったあとは大切に保管し、
わからないことや不具合が生じたときにもう一度ご覧く
きっとお役に立ちます。

OPERATING INSTRUCTIONS page

Before operating the set, please read this manual thor
This manual should be retained for future reference.



©1980 by Sony Corporation

SONY®

TPS-L2

¥33,000

3-785-008-01

SONY®（ご販売店控①）

ソニー音響製品保証登録カード

製名	カセットプレーヤー TPS-L2	
お買上日	年 月 日	
お客様	ご住所	電話
	お名前	ふりがな

ご販売店様へのお願い
この保証書は、ご販売店様が所定事項を
発するものですから、必らずご記入の上
くださるようお願いいたします。
○①は貴店の控としてご利用ください。

NY®

お買上店	住所・店名・電話 印

SONY

サービス窓口のしおり



●取扱説明書、保証書などと一緒に保管しましょう
●住所、電話番号等都合により変更になる場合がございま

SONY®

VALUABLE INFORMATION
for Getting Sony International Warranty Service

SONY
IWS
LIMITED
INTERNATIONAL WARRANTY SYSTEMS

3-794-906-11 (8) Printed in Japan, January 1980

CassetteBoy

カセットボーイ物語



1980 TP-S30

世界初の録音できるヘッドホンステレオ

メタル再生　録音

1980年6月21日発売。1979年7月にソニーがウォークマン1号機、TPS-L2を発売してから1年足らずで発売にこぎつけたヘッドフォンステレオとしては史上2機種目であり、録音機能付きとしては初のモデルである。国内のみならず海外でも大ヒット。なお型番は『HS』ではなくテープレコーダーと同じ『TP』となっている。

1978年、ソニーが発売したウォークマンは、若者を中心に爆発的に浸透していった。もちろん他のメーカーもソニーの成功を手をこまねいて見ていたわけではない。次々とウォークマン追撃の新製品を市場投入するのだが、その一番手となったのがアイワだった。常にカセット業界をリードしてきたアイワは、単なるソニーの後追いではなく、独自のアイデアと技術を盛り込んだカセットプレーヤーを次々と発表。多機能ながらウォークマンより安い価格設定で、常に若者の味方だった。

今回はアイワOBのご協力により、1978年からアイワがソニーに吸収される前年2001年までのカセットボーイを紹介していこう。

取材協力・結城直樹

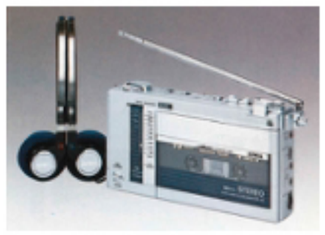
※スペック中『本体サイズ』は最大外形寸法、『重量』は電池を含んだ重さです。また『電池持続時間』はカセットテープ再生時のものとなります。
この特集は『ステレオ時代 Vol.8』の同タイトルの記事に加筆修正し、再編集したものです。

1981 CS-J1

アイワらしいエアチェックモデル

メタル再生
FM/AM
録音

アイワらしく超小型ラジカセといったコンセプトで、FMチューナーを内蔵した録再モデル。モノラルマイクも内蔵していた。ちなみに型番の『CS』はラジカセと同じ。



新品時価格:4万2800円 / 本体サイズ:155.5×81×29.9mm / 重量:約430g / 電源:単三乾電池×3本 / 電池持続時間:約8時間（アルカリ電池使用）

1981 HS-F1

ワンポイントステレオマイクを内蔵

メタル録再

ワンポイントステレオマイクを内蔵（TP-S30はモノラルマイク）しステレオ生録を可能にしたモデル。メタル録再に対応。付属ヘッドフォンは折りたたみ式。



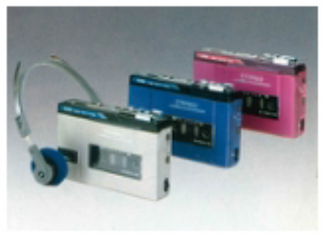
新品時価格:3万6800円 / 本体サイズ:139.9×80.8×26.3mm / 重量:約365g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約6時間（アルカリ電池使用）

1981 HS-P1

アイワ30周年記念モデル

メタル再生

TP-S30をベースによりヘッドフォンステレオの機能に特化した再生専用モデル。ふたつのヘッドフォンジャックを持ち、メタルテープ再生にも対応していた。



新品時価格:2万8800円 / 本体サイズ:139.9×80.8×27.3mm / 重量:約345g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約8時間（アルカリ電池使用）

1982 HS-J2

2バンドチューナーを内蔵

メタル再生
再生オートリバース
FM/AM
DOLBY B

2バンドチューナー内蔵の録音できるヘッドホンステレオ。FMステレオワイドバンド/AMチューナー内蔵。オートリバースは再生のみ対応している。



新品時価格:4万2800円 / 本体サイズ:146.5×81.5×32.5mm / 重量:約440g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約5時間（アルカリ電池使用）

1982 HS-F2

ワンポイントステレオマイク付属

メタル録再
再生オートリバース
充電池対応
DOLBY B

着脱&ワイヤード式2ウェイのワンポイントステレオマイク付属の録再モデル。1986年の映画『アイアン・イーグル』に登場。



新品時価格:3万6800円 / 本体サイズ:109×80×28.8mm / 重量:約325g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約5時間（アルカリ電池使用）

1982 HS-P2X

ヘッドフォン型ラジオを付属

メタル再生
再生オートリバース
FM/AM
DOLBY B

付属のコードを使うとヘッドフォンとしても使える折りたたみ式ヘッドフォン型ラジオ『スカイプレイ』を付属した再生専用機。本体はHS-P2と同様。



新品時価格:2万9800円 / 本体サイズ:109×80×28.8mm / 重量:約320g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約5.5時間（アルカリ電池使用）

1983 HS-P3

オートリバースの廉価モデル

メタル再生
再生オートリバース
DOLBY B

スペックはHS-P2同様ながら3000円のプライスダウンに成功した。ボディは若干だがHS-P2より大きくなったものの重量は5グラム軽量化されている。



新品時価格:2万6800円 / 本体サイズ:110.5×83×29.8mm / 重量:約315g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約7時間（アルカリ電池使用）

1983 HS-P3X

ワイヤレスリスニングに対応

メタル再生
再生オートリバース
FM
DOLBY B

本体にFMトランスミッターを内蔵。付属のヘッドフォン型ラジオ『スカイプレイ』のFM受信機能でワイヤレスリスニングが可能。時代を先取りしたモデル。



新品時価格:3万9800円 / 本体サイズ:110.5×83×29.8mm / 重量:約325g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約7時間（アルカリ電池使用）

1982 HS-P2

世界初のオートリバースヘッドフォンステレオ

メタル再生
再生オートリバース
DOLBY B



1982年5月21日発売の『カセットボーイ』第2世代機は、ヘッドフォンステレオでは世界初となるオートリバース機構を採用していた。ヒットモデルのソニー・ウォークマンⅡより小さいボディのオートリバース機は世界的に大ヒット。『カセットボーイ』の名を一躍有名にした。ノイズリダクション搭載、メタル再生にも対応していた。

新品時価格:2万9800円 / 本体サイズ:109×80×28.8mm / 重量:約320g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約5.5時間（アルカリ電池使用）

1983 HS-J11

ドッキングできるスピーカーを付属

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / DOLBY B

本体にひとつのスピーカーを内蔵。ドッキングできるスピーカーと合わせステレオラジカセにも、またスピーカーを離し、セパレートステレオにもなる。



新品時価格:3万9800円 / 本体サイズ:162（合体時213）×82.5×35mm / 重量:約535（合体時670）g / 電源:単三乾電池×3本 / 電池持続時間:約4.5時間（アルカリ電池使用）

1983 HS-P6

チューナーパックを付属

メタル再生 / FM/AM / DOLBY B

カセットの代わりにチューナーパックを装着すればラジオも聞ける。また『カセットボーイ』初のドルビーNR内蔵。ボディは25.2mmという薄さ。



新品時価格:2万8800円 / 本体サイズ:109.5×81.5×25.2mm / 重量:約215g / 電源:単四乾電池×2本 / 電池持続時間:約5時間（アルカリ電池使用）

1983 HS-P5

10色のボディバリエーション

ワンウェイの廉価モデルながら10色のボディバリエーションと23.8mmという薄型ボディでヒット。重量も230gと最小・最軽量を実現している。



新品時価格:2万4900円 / 本体サイズ:108×80×23.8mm / 重量:約230g / 電源:単四乾電池×2本 / 電池持続時間:約5時間（アルカリ電池使用）

1984 HS-R7

チューナー内蔵オートリバース

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / FM/AM / DOLBY B

FM/AMチューナーを内蔵。チューナーパック不要でラジオも楽しめる。ドルビーNR、メタル再生に対応。単3電池モデルで長時間再生が可能。



新品時価格:3万3800円 / 本体サイズ:81.3×117.5×30.7mm / 重量:約320g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約7.5時間（アルカリ電池使用）

1984 HS-U7

チューナーパック付きオートリバース

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / FM/AM / DOLBY B

FM/AM2バンドのチューナーパックを付属していて、ラジオが楽しめるオートリバース機。ドルビーNR、メタル再生に対応。



新品時価格:3万2800円 / 本体サイズ:81.7×113.5×25.6mm / 重量:約265g / 電源:単四乾電池×2本 / 電池持続時間:約3時間（アルカリ電池使用）

1984 HS-F7

メタルテープの録再に対応

メタル録再 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / 充電池対応 / DOLBY B

脱着式ワンポイントステレオマイクを内蔵し、メタルテープでの録音に対応した録再モデル。ドルビーNR、オートリバースは再生時のみ対応している。



新品時価格:3万2000円 / 本体サイズ:83.3×114.3×24.7mm / 重量:約282g / 電源:単四乾電池×2本 / 電池持続時間:約3時間（アルカリ電池使用）

1984 HS-J7

エアチェック対応多機能モデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / FM/AM / DOLBY B

FM/AM2バンドのチューナーを内蔵した録再モデル。メタルテープでの録再に対応。ドルビーNR、オートリバースは再生時のみ。単3電池モデル。



新品時価格:3万6800円 / 本体サイズ:82.5×117.5×30.7mm / 重量:約320g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約7.5時間（アルカリ電池使用）

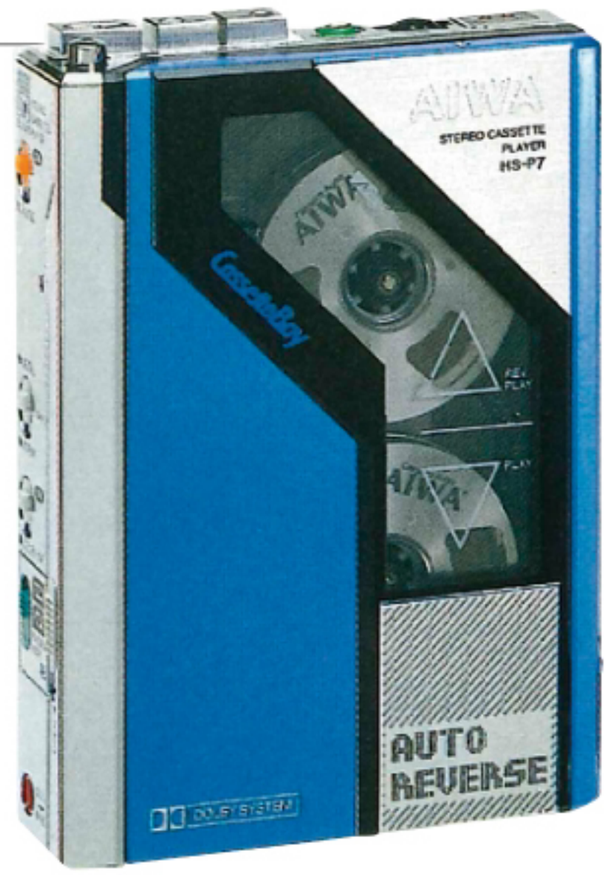
1984 HS-P7

マーティが愛用した最も有名なカセットボーイ

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / DOLBY B

映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー』で使われ一躍有名になったモデル。『カセットボーイ』としては第3世代となる。わずか23.8mm（本体寸法）の薄型ボディながらメタル再生に対応、ドルビーNR内蔵。もちろんオートリバース機でさらに曲の頭出し機能『ミュージックセンサー』も搭載していた。このモデルから『カセットボーイ』は多機能化する。

新品時価格:2万6800円 / 本体サイズ:81.7×113.5×24.7mm / 重量:約275g / 電源:単四乾電池×2本 / 電池持続時間:約3時間（アルカリ電池使用）





1984 HS-P55

2万円を切った戦略モデル

ワンウェイでメタル再生&ドルビーNR非対応。ミュージックセンサーも非搭載の超小型の基本モデルながら1万8800円と初めて2万円を切ったモデル。



新品時価格:1万8800円 / 本体サイズ:81×108×25.4mm / 重量:約230g / 電源:単四乾電池×2本 / 電池持続時間:約4時間（アルカリ電池使用）

カセットボーイ物語

1985 HS-G8

5バンドグライコを搭載

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / DOLBY B / リモコン



フルロジック機HS-P8のグライコ搭載モデル。5バンドのグライコで好みの音質に細かく設定できる。基本機能はHS-P8同様。



新品時価格:2万8900円 / 本体サイズ:82×108.9×27.9mm / 重量:約260g / 電源:単四乾電池×2本 / 電池持続時間:約2.5時間（アルカリ電池使用）

1985 HS-P8

フルロジックコントロールを採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / DOLBY B / リモコン



フルロジックコントロールを採用。リモコンを使用しない時には、リモコンジャックをヘッドフォンジャックとして使える。



新品時価格:2万6900円 / 本体サイズ:82×108.9×26.2mm / 重量:約260g / 電源:単四乾電池×2本 / 電池持続時間:約2.5時間（アルカリ電池使用）

1985 HS-U7V

VHF対応3バンドチューナーパック付属

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / FM/AM/TV / DOLBY B



FM/AMに加えVHFのテレビ音声も受信可能な3バンドのチューナーパックを付属しているオートリバース機。ドルビーNR、メタル再生に対応。



新品時価格:2万8800円 / 本体サイズ:109.5×81.5×25.2mm / 重量:約215g / 電源:単四乾電池×2本 / 電池持続時間:約5時間（アルカリ電池使用）

1985 HS-J8

3バンドチューナーを内蔵した録再モデル



メタル録再 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / FM/AM TV / 録音 / 重低音 / リモコン

フルロジック機の3バンドチューナー搭載モデルHS-R8に録音機能を搭載したモデル。VHFのテレビ音声まで楽しめる内蔵3バンドチューナーからのエアチェックに加え、内蔵コンデンサーマイク（モノラル）からの生録も本体のみで可能となっている。また電池は単3×2本で長時間録再にも対応している。リモコンでの録音操作も可能だ。



新品時価格:3万7900円 / 本体サイズ:82×115.5×30.9mm / 重量:約300g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約7.5時間（アルカリ電池使用）

1985 HS-R8

3バンドチューナーを内蔵

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / FM/AM TV / DOLBY B / リモコン

フルロジック機の3バンドチューナー搭載モデル。ミュージックセンサー他多機能再生に加え、VHFのテレビ音声まで楽しめる。単3電池モデル。



新品時価格:2万8900円 / 本体サイズ:82×115.5×30.9mm / 重量:約300g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約7.5時間（アルカリ電池使用）

1985 HS-R60

チューナー内蔵オートリバース機

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / DOLBY B



FM/AMの2バンドチューナーを内蔵したオートリバース再生専用機。メタル対応、ドルビーNRなど基本機能は搭載しながら2万円という低価格を実現。

新品時価格:2万円 / 本体サイズ:90.5×115.8×33.7mm / 重量:約320g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約3.5時間（アルカリ電池使用）

1985 HS-P77

HS-P7の廉価モデル

メタル再生 / 再生オートリバース / DOLBY B



HS-P7はメカスイッチながらミュージックセンサーまで搭載した多機能機だったが、P77はミュージックセンサー非搭載。その代わり大幅に値下げした。



新品時価格:2万1900円 / 本体サイズ:81.7×113.5×27.1mm / 重量:約260g / 電源:単四乾電池×2本 / 電池持続時間:約3時間（アルカリ電池使用）

1985 HS-P55A

HS-P55のスキンチェンジ

1984年登場の廉価モデル、HS-P55のデザイン変更モデル。付属ヘッドフォンが変更になった以外、本体スペックに変更はなし。従来どおり5色バリエーション。



新品時価格:1万8800円 / 本体サイズ:81×108×25.4mm / 重量:約230g / 電源:単四乾電池×2本 / 電池持続時間:約4時間（アルカリ電池使用）

1986 HS-R9

HS-G9のチューナー搭載モデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM/TV / DOLBY B



充電池対応の5バンドグライコ搭載モデルHS-G9にTV/FM/AMの3バンドチューナーを内蔵したモデル。



新品時価格:3万2800円 / 本体サイズ:80.2×113.5×27.7mm / 重量:約260g / 電源:単四乾電池または単四型ニッカド充電池×2本 / 電池持続時間:約2時間（ニッカド充電池使用）

1986 HS-G9

HS-P9のグライコ搭載モデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / DOLBY B



単4型のニッカド電池と充電対応のACアダプターを付属したHS-P9の5バンドグライコ搭載モデル。充実の基本機能に加え、好みの音作りが可能。



新品時価格:2万5800円 / 本体サイズ:77.7×107.2×26.2mm / 重量:約230g / 電源:単四乾電池または単四型ニッカド充電池×2本 / 電池持続時間:約2時間（ニッカド充電池使用）

1986 HS-P9

アイワ初の充電池対応モデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / DOLBY B



単4型のニッカド電池と充電対応のACアダプターを付属した『カセットボーイ』初の充電池対応モデル。本体で充電するため充電中も使用可能。



新品時価格:2万2000円 / 本体サイズ:77.7×107.2×25.4mm / 重量:約225g / 電源:単四乾電池または単四型ニッカド充電池×2本 / 電池持続時間:約2時間（ニッカド充電池使用）

1986 HS-G50

ワンウェイのエントリーモデル

4バンドグライコを搭載した最廉価モデル。ドルビーNR、メタル再生非対応。オートリバース非搭載ながら1万6500円という低価格を実現した。



新品時価格:1万6500円 / 本体サイズ:80.8×109.7×27.7mm / 重量:約230g / 電源:単四乾電池×2本 / 電池持続時間:約4.5時間（アルカリ電池使用）

1986 HS-J9

録再オートリバース機能を搭載

メタル録再 / 録再オートリバース / 充電池対応 / FM/AM/TV / 録音 / DOLBY B



3バンドチューナーを搭載した録再機。これまでオートリバースは再生時のみだったが、ついに録再リバースに対応した。



新品時価格:3万6800円 / 本体サイズ:80.2×113.5×27.7mm / 重量:約270g / 電源:単四乾電池または単四型ニッカド充電池×2本 / 電池持続時間:約2時間（ニッカド充電池使用）

1986 HS-UV9

業界初のUHF/VHF対応機

メタル再生 / 再生オートリバース / 録音 / FM/AM/TV / DOLBY B



TV(U/V) 音多/FM/AMの4バンドチューナーを内蔵した再生専用機。単4型充電池に対応している。



新品時価格:3万7800円 / 本体サイズ:77.7×107.2×27.3mm / 重量:約240g / 電源:単四乾電池または単四型ニッカド充電池×2本 / 電池持続時間:約2時間（ニッカド充電池使用）

1987 HS-PX10

新世代カセットボーイの幕開け

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / 充電池対応 / DOLBY B/C / リモコン

鉛充電池を採用した新世代機。フルロジックメカでミュージックセンサーも復活。またアイワでは初となるドルビーC搭載。ヘッドフォンの途中にリモコンも装備。



新品時価格:2万9800円 / 本体サイズ:75.3×116.2×25.8mm / 重量:約214g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用）

1987 HS-P10

充電池に対応したエントリーモデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 重低音 / 充電池対応

4バンドグライコを内蔵。ドルビーNR、メタル再生にも対応したオートリバース再生専用機。単4型ニッカド充電池にも対応している（付属）。



新品時価格:2万2000円 / 本体サイズ:78.7×107.2×26.9mm / 重量:約220g / 電源:単四乾電池または単四型ニッカド充電池×2本 / 電池持続時間:約2時間（ニッカド充電池使用）

1986 HS-J80

エアチェック対応録再モデル

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM/TV / 録音

VHF音声多重に対応した3バンドチューナーを内蔵。またエレクトリックコンデンサーマイク（モノラル）を内蔵した録再モデル。再生オートリバース。



新品時価格:2万7800円 / 本体サイズ:84.2×117×33.6mm / 重量:約285g / 電源:単四乾電池×2本 / 電池持続時間:約5.5時間（アルカリ電池使用）

1987 HS-G35

ついに1万円を切ったカセットボーイ

メタル再生 / 再生オートリバース

最大の特徴はついに1万円を切った価格。シンガポールのジュロン工場で作られ、カセットボーイの海外生産モデルの上陸は初。3バンドグライコ搭載。



新品時価格:9800円 / 本体サイズ:90.5×117.3×35.5mm / 重量:約325g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約3.5時間（アルカリ乾電池使用）

1987 HS-J10

3バンドチューナー+録再リバース

メタル録再 / 録再オートリバース / 充電池対応 / FM/AM/TV / 録音 / DOLBY B

ガム型鉛充電池は60分充電で2時間再生が可能。VHF/FM/AMの3バンドチューナーを搭載した録再リバース機。ワンポイントステレオマイクを内蔵した。



新品時価格:3万7800円 / 本体サイズ:79.5×119.3×30.3mm / 重量:約280g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用）

1987 HS-R10

ガム型鉛充電池の第1号機

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM/TV / DOLBY B

HS-J10とともにガム型鉛充電池が採用された1号機（1987年2月発売）。VHF/FM/AMの3バンドチューナーを搭載。メカスイッチのためリモコンは非対応。



新品時価格:3万2800円 / 本体サイズ:79.5×119.3×30.3mm / 重量:約265g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用）

1988 HS-PX20

高音質HXヘッドを採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

フルロジックメカ搭載。ドルビーC+HXヘッドで高音質を実現した。リモコン付きの重低音GTヘッドフォンを付属。ミュージックセンサーも採用した。



新品時価格:2万9800円 / 本体サイズ:75.3×116.2×25.3mm / 重量:約239g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2.5時間（ガム型鉛充電池使用30分充電時）

1988 HS-P20

充電池+乾電池併用で12時間再生

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B

充電池+アルカリ乾電池の併用で最長12時間の再生を実現。重低音DSL回路を内蔵し、OFF/MIN/MAXの切り替えが可能。



新品時価格:1万8800円 / 本体サイズ:78.2×117.5×23.8mm / 重量:約215g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約4時間（ガム型鉛充電池使用1時間充電時）

1988 HS-PL10

30分充電で3時間再生を実現

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ガム型鉛充電池は30分充電で3時間再生が可能。リモコン付きヘッドフォンでテープコントロールやボリューム調整も可能に。重低音DSL回路を採用。



新品時価格:2万4800円 / 本体サイズ:75.7×117.8×24mm / 重量:約208g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約4時間（ガム型鉛充電池使用1時間充電時）

1988 HS-G34

スーパーバスサウンドのベーシック

メタル再生 / 再生オートリバース / 重低音

エントリーモデルながらスーパーバスサウンドシステムを搭載しクラスを超えた重低音を再生する。メタル対応のオートリバース再生専用機。



新品時価格:9800円 / 本体サイズ:91.5×117.5×37.2mm / 重量:約280g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約3.5時間（アルカリ乾電池使用）

1988 HS-PL30

電池交換時期を音で知らせる

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

テープのディレクション、電池の交換時期を音で知らせるアクティブ・オペレーション・システムを搭載。15分充電で3時間再生が可能となった。



新品時価格:2万4800円 / 本体サイズ:74.3×108.3×26.3mm / 重量:約195g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約3時間（ガム型鉛充電池使用15分充電時）

1988 HS-PC20

ドルビーC搭載の音質重視モデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / DOLBY B/C

ドルビーCを搭載したベーシックモデル。充電池+アルカリ乾電池の併用で最長12時間の再生が可能。オートリバース、メタル対応等基本機能は充実。



新品時価格:2万9800円 / 本体サイズ:75.3×116.2×25.3mm / 重量:約239g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約3時間（ガム型鉛充電池使用30分充電時）

1988 HS-R20

シンセチューナー内蔵の充電池モデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM/TV / DOLBY B

15局プリセットの3バンドシンセサイザーチューナーを内蔵。ガム型充電池とアルカリ乾電池の併用で12時間再生も可能に。ドルビーNR、メタル再生対応。



新品時価格:3万2800円 / 本体サイズ:79.8×116.1×29mm / 重量:約240g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約3時間（ガム型鉛充電池使用30分充電時）

1988 HS-R15

簡単選局シンセチューナー内蔵

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM/TV / DOLBY B

HS-JX10から始まったシンセサイザチューナーを搭載したハイCP再生専用機。FM/AMに加えVHF音声にも対応している。ドルビーNR、メタル対応。



新品時価格:2万2000円 / 本体サイズ:85.3×120×35.2mm / 重量:約285g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約4時間（アルカリ乾電池使用）

1988 HS-G39

3バンド搭載のハイCP機

メタル再生 / 再生オートリバース

ベーシック機だが3バンドグライコを搭載し、好みの音作りが可能となっている。オートリバース機構搭載、メタルテープ対応と基本機能は充実。



新品時価格:9800円 / 本体サイズ:90.5×117.3×35.5mm / 重量:約290g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約3.5時間（アルカリ乾電池使用）

1988 HS-J15

シンセチューナー内蔵の録再機

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM/TV / 録音 / DOLBY B

ハイCPを実現した15局プリセット3バンドシンセチューナー搭載の録再機。再生オートリバース。モノラルマイクを内蔵し、生録も本体のみで可能。



新品時価格:2万4800円 / 本体サイズ:85×120×35.2mm / 重量:約295g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約4時間（アルカリ乾電池使用）

1988 HS-JX10

高級感あふれる大型液晶表示

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM/TV / 録音 / DOLBY B / リモコン

3バンドシンセチューナー搭載、録再機。フルロジックコントロール。業界初のラジオチューニング、テープ操作。音量調整まで含めたフルリモコンを採用。



新品時価格:4万3800円 / 本体サイズ:77.3×115.2×28.9mm / 重量:約260g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用30分充電時）

1988 HS-RL30

『音知らせ』搭載のチューナーモデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM/TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

テープのA面・B面によってピッ、ピー、ピッピッなどシグナル音で操作状態がわかる『音知らせ』を採用。チューナーは通常のアナログタイプ。



新品時価格:3万2000円 / 本体サイズ:74.3×108.3×28mm / 重量:約－g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約3時間（ガム型鉛充電池使用15分充電時）

1989 HS-P30

シンプルながら機能は充実

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM/TV / DOLBY B

15分充電、重低音DSL、ドルビーNR、メタルテープ対応など基本機能充実の再生専用オートリバース機。ヘッドフォンは重低音『バイプホン』を付属。



新品時価格:1万6900円 / 本体サイズ:79×109.5×24.5mm / 重量:約230g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約3時間（ガム型鉛充電池使用15分充電時）

1988 HS-J85

チューナー内蔵の録再ハイCP機

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM/TV / DOLBY B

オートリバース、ドルビーNR、メタル対応はいずれも再生時のみの対応ながら、エアチェックだけでなく内蔵モノラルマイクで生録にも対応している。



新品時価格:2万4800円 / 本体サイズ:84.2×118×35.6mm / 重量:約285g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約3.5時間（アルカリ乾電池使用）

1988 HS-J20

シンセチューナーと充電池に対応

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM/TV / 録音 / DOLBY B

3バンドシンセチューナー搭載の録再機。15局プリセットが可能。また専用充電池にも対応し、30分充電で2.5時間再生が可能。ステレオマイクを付属。



新品時価格:3万6500円 / 本体サイズ:79.8×116.1×28.8mm / 重量:約245g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2.5時間（ガム型鉛充電池使用30分充電時）

1989 HS-PL50

BBEを初搭載した再生専用機

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

BBE（バーカス・ベリー・エレクトロニクス）は低域でマスクされた高域を際立たせるエフェクト。もともとギター用だが、オーディオ用として初採用。



新品時価格:2万5000円 / 本体サイズ:108.1×74.3×25.5mm / 重量:約190g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1989 HS-PL35

フルリモコンのベーシックモデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ベーシックモデルながら15分充電、重低音DSL、フルリモコンなどの機能を搭載。スキップリバースやリワインドオートプレイなど便利な機能も。



新品時価格:2万1100円 / 本体サイズ:74.3×108.3×25.0mm / 重量:約195g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約3時間（ガム型鉛充電池使用15分充電時）

1989 HS-PX30

高音質アモルファスHXヘッド

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

アモルファスHXヘッド、ダブルアジマス機構に加えパラメトリックDSL、ドルビーCの採用など、音質重視の再生専用モデル。フルリモコン付きヘッドフォン。



新品時価格:2万6500円 / 本体サイズ:75×107.5×26.5mm / 重量:約210g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2.5時間（ガム型鉛充電池使用15分充電時）

1989 HS-RX30

ワールドワイド・シンセチューナー搭載

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM/TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

HS-JX30に続きワールドワイド・シンセサイザチューナーを搭載。フルリモコン採用の再生専用モデル。デュアルクロック、スリープタイマーも装備した。



新品時価格:3万3000円 / 本体サイズ:108×77.5×28.5mm / 重量:約240g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2.5時間（ガム型鉛充電池使用15分充電時）

1989 HS-F50

電子カウンターを装備した録再機

メタル再生 / 録再オートリバース / 充電池対応 / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

電子カウンター&クロック機能を装備し、ビジネスユース（メモ録）にも使いやすい録再機。脱着式のスピーカーも付属。



新品時価格:2万9800円 / 本体サイズ:107.5×77.4×27.6mm / 重量:約230g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1989 HS-G30

ドルビー対応のベーシック

メタル再生 / 再生オートリバース / DOLBY B

オートリバース、ドルビーNR、メタル対応と一通りのスペックを備えたベーシックモデル。スーパーバスサウンドとトーンコントロールも可能。



新品時価格:9800円 / 本体サイズ:114.5×88.5×32mm / 重量:約240g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約3.5時間（アルカリ乾電池使用）

1989 HS-JL30

ワンタッチスピーカー付き

メタル再生 / 録再オートリバース / 充電池対応 / FM/AM/TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

3バンドチューナーを内蔵した録再リバース機。ワイヤードステレオマイクが付属となり、生録にも対応。またアンプ内蔵のワンタッチスピーカーも付属。



新品時価格:3万5000円 / 本体サイズ:77.5×108.5×28.5mm / 重量:約220g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用15分充電時）

1989 HS-JX30

業界初のワールドワイドシンセチューナー

メタル再生 / 録再オートリバース / 充電池対応 / FM/AM/TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ワールドワイドシンセチューナーはTV（VHF音多）/FM/AMの3バンド。AMは9/10kHzステップ対応。録再リバースでマイク内蔵リモコン付き。



新品時価格:3万9400円 / 本体サイズ:77.5×108.5×29.5mm / 重量:約245g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用15分充電時）

1989 HS-RL50

BBE搭載のチューナー内蔵機

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM/TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

HS-PL50と同時にBBEを初搭載したチューナー内蔵機。アモルファスHXヘッドやDSLも搭載するなど音質を重視。



新品時価格:3万3000円 / 本体サイズ:108.1×74.3×29.6mm / 重量:約220g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1990 HS-PL55

1.0μナローギャップHXヘッド採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

1.0μナローギャップHXヘッドで再生に特化した仕様。『50』シリーズ同様、スリムで堅牢なボディを採用。また6色のボディを用意した。



新品時価格:1万7500円 / 本体サイズ:107.5×77.5×21.5mm / 重量:約170g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1990 HS-P50

機能充実のハイCP機

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

10分充電、リモコン付きヘッドフォン、DSL、オートリバース、ドルビーNRと本当に必要な機能を充実させたハイCPモデル。HXヘッドで高音質。



新品時価格:1万5800円 / 本体サイズ:107.5×79×24mm / 重量:約205g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1989 HS-WR35

トランスミッター内蔵のワイヤレス

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM / 重低音 / DOLBY B

1983年のHS-P3X以来となるFMトランスミッター内蔵モデル。FMラジオを兼ねたレシーバーを使いワイヤレスリスニングも楽しめる。



新品時価格:2万7500円 / 本体サイズ:109.5×79.5×26mm / 重量:約220g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間（本体）:約3時間（ガム型鉛充電池使用15分充電時）

1990 HS-EX50

カセットボーイ10周年記念の限定モデル

メタル再生 / 録再オートリバース / 充電池対応 / FM/AM TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

アイワ初のヘッドホンステレオTP-S30を発売したのが1980年6月21日、その10周年を記念した特別モデルがHS-EX50である。発売はTP-S30からぴったり10年後の1990年6月21日だった。最上級モデルのHS-JX50をベースにキャビネットを豪華なゴールド仕上げとし、高音質・高機能をフル装備したデラックス版限定モデルである。本機は5000台の限定販売だった。なお1991年にもコールド仕上げの限定モデルHS-EX3000が発売されたが、カセットボーイの限定モデルはこの2機種のみである。



新品時価格:4万6800円 / 本体サイズ:108×77.5×29mm / 重量:約245g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1990 HS-RX50

10周年記念モデルシリーズ誕生

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM / 重低音 / DOLBY B / リモコン

『50』シリーズはカセットボーイ10周年記念モデル。スリム&タフネスボディを持つアドバンスド・ワールドワイドシンセチューナー採用。



新品時価格:3万3000円 / 本体サイズ:107.5×77.5×21.5mm / 重量:約170g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1990 HS-JX50

タイマー録音機能付きの録再機

メタル再生 / 録再オートリバース / 充電池対応 / FM/AM/TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

タイマー録音機能付き、アドバンスド・ワールドワイドシンセチューナー内蔵の録再オートリバース機なので、長時間のエアチェックも可能。



新品時価格:3万9800円 / 本体サイズ:108×77.5×29mm / 重量:約245g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1991 HS-PX1000

堅牢極めた世界初のチタンキャビネット

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B/C / リモコン

カセットボーイ史上最高級の再生専用機。最大の特徴はタフネスを極めたチタンキャビネット。大型マルチディスプレイは6バンドのスペアナ表示対応。音楽ジャンルポジション、ミュージックセンサー、AIサウンドガード、アモルファスHXヘッド、BBEなど、アイワの持っている技術を詰め込んだ。ワールドチャージャーも付属。



新品時価格:4万円 / 本体サイズ:107.5×76.2×27.2mm / 重量:約225g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1990 HS-JL50

スピーカー付属のラジオ付き録再機

メタル再生 / 録再オートリバース / 充電池対応 / FM/AM/TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

TV（VHF）/ FM/AMの3バンドアナログチューナー録再機。BBE搭載。ワンタッチスピーカーとワイヤード・ステレオマイクも付属されている。



新品時価格:3万6000円 / 本体サイズ:108×77.5×29.9mm / 重量:約245g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1991 HS-PL70

ファッショナブル&タフネス

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

『50シリーズ』から受け継いだスリム&タフネスボディをファッショナブルにシェイプ。1.0μナローギャップHXヘッドなど音質にもこだわった。



新品時価格:2万2000円 / 本体サイズ:107.8×77.5×23.2mm / 重量:約175g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1991 HS-PX70

世界初のボイスナビゲーション

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

女性の声で動作を知らせるボイスナビゲーションを世界初搭載。また電池残量を3色のLEDで知らせる充電残量シグナルなど新機能が搭載された、多機能再生機。



新品時価格:2万2500円 / 本体サイズ:107.9×77.7×21.6mm / 重量:約165g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約1.5時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1991 HS-PX50

高音質のハイクラス・カセットボーイ

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

アモルファスHXヘッドやドルビーC、3相全波モーターなど高音質を追求した再生専用機。一方、音漏れ低減イヤーパッドなど、新しい社会問題にも対応。



新品時価格:2万5000円 / 本体サイズ:107.6×74.3×24.2mm / 重量:約195g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1991 HS-P25

低価格ながらオートリバース

メタル再生 / 再生オートリバース / 重低音 / DOLBY B

7800円とこれまでにない価格帯ながら、オートリバース、ドルビーNR、テープセレクターを搭載し、出力も20+20mWと大出力となっている。



新品時価格:7800円 / 本体サイズ:117.6×89.2×29.8mm / 重量:約215g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約3時間（アルカリ乾電池使用時）

1991 HS-PL77

音漏れ防止機構を装備

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

音のレベルに合わせて自動的に働く音漏れ防止回路（AIサウンドガード）を搭載した再生専用機。3色LED電池残量表示も世界初採用。ワールドチャージャー。



新品時価格:1万9800円 / 本体サイズ:107.9×77.7×20.9mm / 重量:約165g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約1.5時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1991 HS-P75

スリムなベーシックモデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

頑丈なアルミ製のカセット蓋を採用。フルリモコンや10分急速充電といった基本スペックを備える。またHXヘッド、DSLなど音質にもこだわり。



新品時価格:1万6800円 / 本体サイズ:107.9×77.7×21.0mm / 重量:約165g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約1.5時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1991 HS-RX70

エリアステーションを採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM/TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

全国7都市と新幹線の放送局を記憶しているエアステーション・ワールドワイドチューナーを搭載。ボイスナビゲーションも装備。



新品時価格:3万6500円 / 本体サイズ:107×76.2×27.2mm / 重量:約210g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1991 HS-P15

ワンウェイ再生専用機

メタル再生 / 重低音

ワンウェイ、NRなしと最低限の機能だけを備えたベーシックモデル。とはいえテープセレクターと重低音スーパーバスはしっかり備えている。



新品時価格:5500円 / 本体サイズ:117.6×89.2×30.2mm / 重量:約175g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約4時間（アルカリ乾電池使用時）

1991 HS-P22

もっとも廉価なオートリバース機

メタル再生 / 再生オートリバース / 重低音 / DOLBY B

HS-P25にDSLの代わりにスーパーバスを搭載。P25よりも1000円安い価格設定とした超ハイCP機。ドルビーNR、テープセレクターも備える。



新品時価格:6800円 / 本体サイズ:117.6×89.2×30.2mm / 重量:約205g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約6時間（アルカリ乾電池使用時）

1991 HS-T75

BBE+DSLのハイCPオートリバース

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / 重低音 / DOLBY B

ベーシックグレードながら、ワールドシンセチューナーにオートリバース、ドルビーNR、重低音DSLを搭載。さらにBBEも採用されたハイCP機。



新品時価格:1万5800円 / 本体サイズ:92.2×120.7×37.7mm / 重量:約280g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約8時間（アルカリ乾電池使用時）

1991 HS-RL75

ワールドシンセチューナーのハイCP機

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM/TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

HS-RL70同様、ワールドクロック機能を持ったワールドワイドシンセチューナーを内蔵。オートプリセットは省略されているものの大幅にプライスダウン。



新品時価格:2万2500円 / 本体サイズ:107.5×79×27.9mm / 重量:約240g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1991 HS-RL70

フルリモコン+ワールドシンセチューナー

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM/TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ワールドクロック機能、ワールドワイドシンセチューナーを内蔵。10局×3バンドのオートプリセット機能。フルリモコン付きヘッドフォン。



新品時価格:2万8800円 / 本体サイズ:107.8×77.5×25.9mm / 重量:約215g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1991 HS-JX70

世界初のボイスナビゲーション搭載

メタル再生 / 録再オートリバース / FM/AM/TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B/C / リモコン

ワールドワイドシンセチューナー内蔵の録再オートリバース機。ボイスナビゲーションシステムを世界で初めて搭載した。ステレオタイピンマイク付属。



新品時価格:4万3000円 / 本体サイズ:107×76.2×27.2mm / 重量:約220g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約1.5時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1991 HS-T50

HS-T60のドルビーNR省略版

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / 重低音

超ハイCPモデルHS-T60の姉妹機で、違いはドルビーNRが省略されていることだけ。ワールドワイドシンセチューナーは5+5局のプリセット付き。



新品時価格:1万3500円 / 本体サイズ:92.5×121×38mm / 重量:約280g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約8時間（アルカリ乾電池使用時）

1991 HS-T60

スーパーバス付きハイCPオートリバース

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / 重低音 / DOLBY B

HS-T75からDSLとBBEを省略し、重低音スーパーバスとトーンコントロールを装備した超ハイCPモデル。出力も20+20mWと大出力。



新品時価格:1万4500円 / 本体サイズ:92.5×121×38mm / 重量:約280g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約8時間（アルカリ乾電池使用時）

1991 HS-J55

ワールドシンセチューナー付録再機

メタル再生 / 録再オートリバース / FM/AM/TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B

ワールドシンセチューナーを搭載した録再機で、再生時はオートリバース。BBE+DSL+HXヘッド採用で音質重視。ワイヤードステレオマイクも付属。



新品時価格:3万3000円 / 本体サイズ:79.5×116.8×29.4mm / 重量:約270g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用15分充電時）

1991 HS-J50

ワイヤードステレオマイク付属

メタル再生 / 録再オートリバース / FM/AM/TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B

アナログチューナーを搭載した録再機。再生時のみオートリバースだが、ワイヤードステレオマイクを付属していてステレオ生録が楽しめる。



新品時価格:2万5000円 / 本体サイズ:117.6×79.5×29.4mm / 重量:約260g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用15分充電時）

1991 HS-JL70

ワールドシンセ搭載の万能モデル

メタル再生 / 録再オートリバース / FM/AM/TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ワールドワイドシンセチューナー内蔵の録再オートリバース機。AIサウンドカード、オートテープセレクターなど最新機能も満載の万能モデル。



新品時価格:3万6500円 / 本体サイズ:107.5×76.2×26.5mm / 重量:約215g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約1.5時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1991 HS-J370

アナログチューナー付きハイCP録再機

メタル再生 / 録再オートリバース / FM/AM/TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B

HS-J470のワールドワイドシンセチューナーをアナログチューナーに換装したモデル。再生時はオートリバース、ドルビーNR、トーンコントロールも可能。



新品時価格:1万5800円 / 本体サイズ:92.2×120.7×37.5mm / 重量:約280g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約5.5時間（アルカリ乾電池使用時）

1991 HS-J470

シンセチューナー付きハイCP録再機

メタル再生 / 録再オートリバース / FM/AM/TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B

HS-T60に録音機能を追加した超ハイCPモデル。オートリバースは再生時のみながら、ワンポイントステレオマイク付属でステレオ録音が可能。



新品時価格:1万5800円 / 本体サイズ:92.2×120.7×37.5mm / 重量:約280g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約5.5時間（アルカリ乾電池使用時）

1991 HS-J75

モニタースピーカー内蔵録再機

メタル再生 / 録再オートリバース / FM/AM/TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B

ワールドシンセチューナーを搭載した録再機で、ワイヤードステレオマイク付属。内容確認に便利なモニタースピーカーを装備しているのが特徴。



新品時価格:3万円 / 本体サイズ:76×106.1×24.3mm / 重量:約225g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約1.5時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1992 HS-PX820

フロントホールドスイッチで誤動作防止

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ミュージックセンサー、ブランクスキップ、音楽ジャンルポジションも搭載した多機能モデル。フロントホールドスイッチ採用。



新品時価格:1万8500円 / 本体サイズ:107.7×78.2×25.2mm / 重量:約165g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約1.5時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1992 HS-PX910

充電残量が見える液晶リモコン

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

液晶リモコン採用で様々な情報を表示。ミュージックセンサーを搭載。さらにブランクスキップも採用している多機能モデル。



新品時価格:2万2500円 / 本体サイズ:108.7×76.7×24mm / 重量:約170g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約1.5時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1991 HS-WR70

トランスミッター内蔵ワイヤレス

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / DOLBY B / リモコン

トランスミッター内蔵の本体から、ワールドシンセチューナーを搭載したレシーバーで受けるワイヤレスモデル。本体は外部入力のトランスミッターとしても使用可。



新品時価格:3万6500円 / 本体サイズ:107.8×77.5×25.8mm / 重量:約190g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1992 HS-RD1

水や衝撃に強いラジカルシェル

メタル再生 / 再生オートリバース

ラジカルシェル（防滴型ケース）を付属。濡れた手や手袋のままで操作できる大型操作ボタンを採用している。オートリバースの再生専用機。



新品時価格:1万1500円 / 本体サイズ:133×109.2×58.2mm（シェル使用時） / 重量:約350g（シェル使用時） / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約6時間（アルカリ乾電池使用時）

1992 HS-PX610

基本機能重視の再生専用機

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

頑丈なセンターロック機構、使いやすいホールドスイッチに加え、フルリモコン、『音知らせ機能』、オートテープセレクターなど便利な機能も満載。



新品時価格:1万6000円 / 本体サイズ:107.9×77.7×22.5mm / 重量:約165g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約1.5時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1992 HS-PX72

充電残量表示付リモコン採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

リモコンは充電残量表示機能付き。ミュージックセンサー、音楽ジャンルポジションも搭載。ただしブランクスキップは非搭載。



新品時価格:1万6500円 / 本体サイズ:107.7×78.2×25.2mm / 重量:約160g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約1.5時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1992 HS-JX929

AMステレオ対応の最上級機

メタル再生 / 録再オートリバース / 充電池対応 / FM/AM/TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B/C / リモコン

TV（VHF）/FM（ワイド）/AM（ステレオ）ワールドワイドシンセチューナー内蔵の録再リバース機。



新品時価格:4万5000円 / 本体サイズ:107×76.2×27.2mm / 重量:約225g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約1.5時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1992 HS-RX626

プリセット付AMステレオ対応

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM/TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

TV（VHF）/FM（ワイド）/AM（ステレオ）ワールドワイドシンセチューナー内蔵。プリセットは30局までメモリー。ワールドクロックも内蔵。



新品時価格:2万3500円 / 本体サイズ:107.5×79×28.6mm / 重量:約240g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1992 HS-RX727

AMステレオ対応シンセチューナー

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM/TV / DOLBY B / リモコン

本体は3色LED充電残量表示機能付き。TV（VHF）/FM（ワイド）/AM（ステレオ）ワールドワイドシンセチューナー（エアステーション付）を搭載している。



新品時価格:2万9000円 / 本体サイズ:107.5×78×27mm / 重量:約205g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約1.5時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1992 HS-RD10

ラジカルシェル付属のワイヤレス

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM

ラジカルシェル（防滴型ケース）を付属。本体はトランスミッターを内蔵し、2バンドチューナー内蔵のワイヤレスヘッドフォンで受信することができる。



新品時価格:1万8000円 / 本体サイズ:133×109.2×58.2mm（シェル使用時） / 重量:約350g（シェル使用時） / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約6時間（アルカリ乾電池使用時）

1992 HS-WR25

FMも聴けるお手軽ワイヤレス

メタル再生 / 再生オートリバース / FM / 重低音 / DOLBY B

本体はトランスミッター内蔵のオートリバース再生機。本体に直接ヘッドフォンを接続でき、レシーバーはFMラジオとして単体でも使える。



新品時価格:1万8000円 / 本体サイズ:117.6×89.2×33mm / 重量:約165g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約6時間（アルカリ乾電池使用時）

1992 HS-JX828

AMステレオ対応録再リバース機

メタル再生 / 録再オートリバース / 1曲頭出し / 充電池対応 / FM/AM/TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

TV（VHF）/FM（ワイド）/AM（ステレオ）ワールドワイドシンセチューナー内蔵の録再リバース機。



新品時価格:3万4000円 / 本体サイズ:107.3×76.8×27.6mm / 重量:約225g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約1.5時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1993 HS-PS200

新しいハイCPシリーズ

メタル再生 / 重低音

ICリピート（4秒/8秒切り替え）を搭載し、語学学習などの繰り返し再生に最適。なお『PS』シリーズはプラスティック製メカを採用したハイCPシリーズ。



新品時価格:9800円 / 本体サイズ:114.2×90.4×37.7mm / 重量:約190g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約8時間（アルカリ乾電池使用時）

1993 HS-PX630

満充電で7時間の長時間再生

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ガム型鉛充電池を採用し、4時間の満充電時で7時間の再生が可能（10分充電3時間再生）。3段階充電残量シグナル、フルリモコン、スーパーバス装備。



新品時価格:1万4500円 / 本体サイズ:107.5×78.4×26.9mm / 重量:約175g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約3時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1993 HS-PX930

フルパルプモールド・パッケージ採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

FF/REWを50%スピードアップした『高速頭だし』を搭載。充電池をニッケル水素に変更。製品パッケージを環境にやさしいフルパルプモールドとした。



新品時価格:2万3000円 / 本体サイズ107.7×78.2×27mm / 重量:約177g / 電源:単三乾電池×1本またはガム型ニッケル水素充電池 / 電池持続時間:約6.5時間（ガム型ニッケル水素充電池使用45分充電時）

1993 HS-RS535

AMステレオの乾電池専用機

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM

アナログながらFM/AM（ステレオ）の2バンドチューナーを搭載。オートリバース、テープセレクターと基本機能を搭載した乾電池専用モデル。



新品時価格:1万1500円 / 本体サイズ:120.4×89.7×37mm / 重量:約203g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約8時間（アルカリ乾電池使用時）

1993 HS-RX636

7時間の長時間再生とAMステレオ

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM/TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ガム型鉛充電池は最長7時間の再生が可能。内蔵のワールドワイドシンセチューナーはエアステーション付でAMステレオにも対応している。



新品時価格:2万2500円 / 本体サイズ:108.5×79.1×29.6mm / 重量:約210g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約3時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1993 HS-PS150

ついに5000円を採用切ったCP機

メタル再生 / 重低音

スーパーバス、テープセレクターを搭載したハイCPモデル。ワンウェイの再生専用機だが、なんと4500円という低価格を実現した。出力は総合40mW。



新品時価格:4500円 / 本体サイズ:114.2×90.3×31.5mm / 重量:約175g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約7時間（アルカリ乾電池使用時）

1994 HS-PX730

ワンフィンガーオペレーション

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

本体とリモコンでブラインドタッチが容易になったワンフィンガーオペレーションを採用。周囲の音に合わせる自動音量調節『オートボリューム』も。



新品時価格:1万5800円 / 本体サイズ:109.2×79.8×24.5mm / 重量:約180g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1994 HS-PX830

4色のピュアカラーボディ

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

質感の高い『ピュアカラーボディ』を採用。『快速サーチ』（前後3曲頭出し&ブランクスキップ）も採用した。



新品時価格:1万9000円 / 本体サイズ:109.2×79.1×24.5mm / 重量:約177g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1993 HS-JS350

チューナー付ハイCP録再機

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / 録音 / 重低音

ワンポイントステレオマイクを付属し、内蔵チューナーのエアチェックも生録もステレオでの録音が可能。再生時オートリバースも搭載している。



新品時価格:1万2500円 / 本体サイズ:87.3×120.7×34.7mm / 重量:約280g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約9.5時間（アルカリ乾電池使用時）

1994 HS-RX737

リモコンで周波数を確認

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM/TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

液晶表示付きのリモコンを採用。ラジオ受信時にはリモコンで周波数も確認できる。『快速サーチ』も搭載した。



新品時価格:2万8000円 / 本体サイズ:109.1×79.1×26.7mm / 重量:約196g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1994 HS-PS160

最低価格を更新したCP機

メタル再生 / 重低音

機能やスペックはHS-PS150とほぼ同じで、デザインを丸みを帯びたカタチにリファイン。PS150に比べ、さらに1000円のプライスダウン。スーパーバス付き。



新品時価格:3500円 / 本体サイズ:114.2×90.4×37.7mm / 重量:約190g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約13.5時間（アルカリ乾電池使用時）

1994 HS-PX530

丈夫で美しいピュアカラー

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

充電池とアルカリ乾電池の併用で20時間もの長時間連続再生が可能になっている。丈夫で美しい仕上げのピュアカラーボディはレッド、ブルー、ブラックの3色。



新品時価格:1万2000円 / 本体サイズ:109×78.7×25.1mm / 重量:約172g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1994 HS-RS250

最低価格を更新したCP機

FM/AM / 重低音

機能やスペックはHS-PS150とほぼ同じで、デザインを丸みを帯びたカタチにリファイン。PS150に比べ、さらに1000円のプライスダウン。スーパーバス付き。



新品時価格:オープン / 本体サイズ:92.9×125.6×39.2mm / 重量:約215g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約8時間（アルカリ乾電池使用時）

1994 HS-RX616

ハイCPのチューナー内蔵モデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / 充電池対応 / FM/AM/TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ワールドシンセチューナー搭載のハイCPモデル。電池ボックス式が多かったが、本機は単4も充電池も本体内蔵式。



新品時価格:1万9000円 / 本体サイズ:108.6×78.9×30mm / 重量:約203g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1994 HS-RX656

ラジオ付きワンフィンガーオペレーション

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / 充電池対応 / FM/AM/TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

本体とリモコンでブラインドタッチが容易になったワンフィンガーオペレーションを採用したチューナー内蔵モデル。



新品時価格:2万2800円 / 本体サイズ:108.1×79.7×27.3mm / 重量:約225g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1994 HS-JS360

ラジオ付きハイCP録再機

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / 録音 / 重低音

アナログチューナーを内蔵した録再機のベーシックモデル。ステレオワンポイントマイクを付属しているため、ビジネスや稽古事にも使えるハイCP機となっている。



新品時価格:1万1000円 / 本体サイズ:92.9×119×37.8mm / 重量:約202g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約19時間（アルカリ乾電池使用時）

1994 HS-JS550

充電池対応のラジオ付き録再機

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM/TV / 録音

2バンドのワールドワイドシンセチューナーを内蔵した録再機のベーシックモデル。オートリバースは再生時のみ。ステレオマイクを付属しステレオ生録にも対応。



新品時価格:2万9800円 / 本体サイズ:109.4×78.5×32.2mm / 重量:約230g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約1.5時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1994 HS-JX838

ピュアカラーのラジオ付き録再機

メタル再生 / 録再オートリバース / 3曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM/TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ワールドシンセチューナーを搭載した録再リバース機。『快速サーチ』、『オートボリューム』、ワンフィンガーオペレーション採用。



新品時価格:2万9800円 / 本体サイズ:109.5×79×28.3mm / 重量:約225g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1995 HS-PX540

シックなデザインのハイCP再生機

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

HS-PX550のデザイン違いの姉妹機。デザインはややポップなPX550に比べ、シックなデザインになっており、カラーもブラックのみ。



新品時価格:オープン / 本体サイズ:109×79.3×20.2mm / 重量:約172g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1995 HS-PX550

充実機能のハイCP再生機

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

充電池と乾電池の併用で最長17時間もの長時間再生が可能。ミュージックセンサー、スーパーバス、電池残量シグナルなども採用。



新品時価格:オープン / 本体サイズ:109×79.3×20.2mm / 重量:約172g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1995 HS-PX750

新世代ニッケル水素充電池を採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / プランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

アイワの充電池は殆どが鉛充電池だったが、単3×1本で動作するシステムに変更されたことでニッケル水素充電池に。



新品時価格:1万7800円 / 本体サイズ112×80×20.7mm / 重量:約190g / 電源:単三乾電池×1本またはガム型ニッケル水素充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型ニッケル水素充電池使用5分充電時）

1995 HS-RX650

楽々選局のオートエリアステーション

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / 充電池対応 / FM/AM/TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

HS-PX550にオートエリアステーション搭載のワールドワイドシンセチューナーを内蔵したモデル。最長17時間再生。



新品時価格:オープン / 本体サイズ:108.3×78.8×22mm / 重量:約197g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1995 HS-RX850

最長40時間連続再生が可能に

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / プランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM/TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

本体に収めるニッケル水素充電池とボックスで装着される単3電池の併用で、最長40時間の再生が可能に。



新品時価格:2万5800円 / 本体サイズ110.9×80.3×23.7mm / 重量:約200g / 電源:単三乾電池×1本またはガム型ニッケル水素充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型ニッケル水素充電池使用5分充電時）

1995 HS-PS180

オートリバースを搭載したCP機

メタル再生 / 再生オートリバース / 重低音

カセットボーイのエントリーモデル『PS』シリーズのオートリバースモデル。機能は最低限に絞り込まれているが、テープセレクターやスーパーバスは搭載されている。



新品時価格:オープン/ 本体サイズ:92×114×32.5mm / 重量:約175g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約8時間（アルカリ乾電池使用時）

1995 HS-RS280

チューナー付きオートリバースCP機

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM

アナログの2バンドチューナーを内蔵。ハイCP機だが、テープセレクターとオートリバースを搭載している。スーパーバスも搭載し、最低限の機能はカバー。



新品時価格:オープン/ 本体サイズ:90×119.7×38mm / 重量:約211g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約8時間（アルカリ乾電池使用時）

1995 HS-RS350

チューナー+スピーカー付きCP機

メタル再生 / FM/AM / 重低音

アナログの2バンドチューナーを内蔵したリーズナブルなハイCPモデル。再生専用だがモニタースピーカー内蔵でラジカセ的にも使える。ワンウェイ機。



新品時価格:オープン/ 本体サイズ:125.6×92.9×39.4mm / 重量:約245g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約8時間（アルカリ乾電池使用時）

1995 HS-RS460

シンセチューナー付きのハイCP機

メタル再生 / FM/AM / 重低音

18局プリセットが可能なワールドワイドシンセチューナーを内蔵したワンウェイ機。6つの時刻が記憶できるワールドクロック機能、重低音スーパーバス付き。



新品時価格:オープン/ 本体サイズ:117.9×93×39.6mm / 重量:約229g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約6時間（アルカリ乾電池使用時）

1995 HS-JS560

単3型充電池も使用可能

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM/TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ワールドワイドシンセチューナー、ドルビーNRを搭載し、リモコン付きヘッドフォンを付属した録再リバース機。充電池は単3型。



新品時価格:オープン/ 本体サイズ108.6×78.9×30mm / 重量:約225g / 電源:単三乾電池×2本または単三型充電池×2本 / 電池持続時間:約30時間（アルカリ乾電池使用時）

1995 HS-JX950

録音が途切れないクイックリバース

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / プランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM/TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ワールドシンセチューナーを搭載した録再リバース機だが、本機は『クイックリバース』を採用。



新品時価格:オープン / 本体サイズ:108.3×78.8×24.5mm / 重量:約221g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2.5時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1995 HS-RS260

ワンウェイのチューナー付きCP機

メタル再生 / FM/AM / 重低音

HS-RS280のワンウェイモデル、あるいはRS350のスピーカー無しモデル。この頃になるとヘッドフォンステレオは低価格モデルが主流になってきたのがわかる。



新品時価格:オープン/ 本体サイズ:93×116.9×37.4mm / 重量:約206g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約8時間（アルカリ乾電池使用時）

1996 HS-PS100

もっともベーシックなカセットボーイ

歴代『PS』シリーズの中でももっともシンプルなモデル。オートリバースはもちろん、テープセレクターやドルビーNR、スーパーバスも搭載していない。



新品時価格:オープン/ 本体サイズ:92.5×116.8×33.0mm / 重量:約140g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約16時間（アルカリ乾電池使用時）

1996 HS-PX370

5色のリーズナブル多機能機

メタル再生 / 録再オートリバース / 5曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ブランクスキップ、1曲リピートなど多彩なカセット再生機能を備え、カラフルな5色のボディを揃えた、ハイCP機。



新品時価格:9800円/ 本体サイズ:109.5×79.8×23.6mm / 重量:約157g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約1.5時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1996 HS-PX570

ニッカド充電池を採用した多機能再生機

メタル再生 / 録再オートリバース / 充電池対応 / FM/AM/TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

最長40時間の再生が可能。前後3曲のミュージックセンサーやブランクスキップ、1曲リピートなどの機能も充実している。



新品時価格:オープン / 本体サイズ:111.9×80.9×21.3mm / 重量:約177g / 電源:単三乾電池×1本またはニッカド充電池 / 電池持続時間:約9時間（ニッカド充電池使用2時間充電時）

1996 HS-RS210

アナログチューナー付きベーシック

FM/AM

HS-PS100にアナログチューナーを搭載したモデル。極めてシンプルな構成で、オートリバースやテープセレクター、ドルビーNRも非搭載となっている。



新品時価格:オープン/ 本体サイズ:92.5×117.3×35.6mm / 重量:約161g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約16時間（アルカリ乾電池使用時）

1996 HS-RS360

チューナー+スピーカー付きCP機

メタル再生 / FM/AM / 重低音

アナログの2バンドチューナーを内蔵したリーズナブルなハイCPモデル、HS-RS350の後継モデル。モニタースピーカー内蔵のワンウェイ再生専用機。



新品時価格:オープン/ 本体サイズ:93×117.6×38.5mm / 重量:約210g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約14時間（アルカリ乾電池使用時）

1996 HS-RX660

シンセチューナー搭載の多機能再生機

メタル再生 / 再生オートリバース / 5曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM/TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

最長36時間の再生。前後5曲のミュージックセンサーやブランクスキップ、またオートエリアステーションも装備している。



新品時価格:オープン / 本体サイズ:110.7×81.5×24mm / 重量:約191g / 電源:単三乾電池×1本またはニッカド充電池 / 電池持続時間:約7時間（ニッカド充電池使用2時間充電時）

1997 HS-PX580

携帯の着信を電子音で知らせる

メタル再生 / 再生オートリバース / 5曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

『ピッチ携帯番』は携帯電話やPHSの着信をヘッドフォンから電子音で知らせる機能。20倍の高速サーチも搭載している。



新品時価格:オープン / 本体サイズ:109.4×78.5×20.5mm / 重量:約169g / 電源:単三乾電池×1本またはニッカド充電池 / 電池持続時間:約9時間（ニッカド充電池使用2時間充電時）

1997 HS-PX770

最長60時間再生と光るリモコン

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

60時間の長時間再生が可能に。バックライト付き液晶リモコンを採用。ミュージックセンサーは前後9曲に。



新品時価格:オープン / 本体サイズ111.3×81.2×20.4mm / 重量:約188g / 電源:単三乾電池×1本またはガム型ニッケル水素充電池 / 電池持続時間:約2時間（ガム型ニッケル水素充電池使用5分充電時）

1996 HS-JS570

リーズナブルな録再リバース

メタル再生 / 録再オートリバース / 充電池対応 / FM/AM/TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ケースなしで乾電池も本体に収納可能なコンパチ設計。オートエリアステーション付きワールドシンセチューナーを搭載。



新品時価格:オープン/ 本体サイズ:109.3×79.5×29.7mm / 重量:約219g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2.5時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1997 HS-RX680

シンセチューナー付き『ピッチ携帯番』

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM/TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

HS-PX580にワールドシンセチューナーを搭載したモデル。『ピッチ携帯番』も搭載。光る液晶リモコンを採用。



新品時価格:オープン / 本体サイズ:109.4×79.7×21.8mm / 重量:約180g / 電源:単三乾電池×1本またはニッカド充電池 / 電池持続時間:約10時間（ニッカド充電池使用2時間充電時）

1997 HS-F900

チューナーなしの録再リバース

メタル再生 / 録再オートリバース / 5曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

クイックリバース録音に対応。光るリモコンにはテープカウンター機能がある。『会議』『ライブ』の録音モード切り替え付き。



新品時価格:オープン/ 本体サイズ:108.9×80.3×25mm / 重量:約205g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約2.5時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1997 HS-PS190

ハイCPリバース機がさらに進化

メタル再生 / 再生オートリバース / 重低音

『PS』シリーズのオートリバースモデル、HS-PS180の後継モデル。機能は最低限に絞り込まれているが、テープセレクターやスーパーバスは搭載。電池持続時間は飛躍的に伸びている。



新品時価格:オープン/ 本体サイズ:114×86.4×32.7mm / 重量:約172g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約22時間（アルカリ乾電池使用時）

1997 HS-JX970

多機能ジョグダイヤルを装備

メタル再生 / 録再オートリバース / 9曲頭出し / 充電池対応 / FM/AM/TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

録再オートリバース機。デジタルカウンターは本体とリモコンに表示。43地域+JRの一発オートエリアも搭載している。



新品時価格:2万2800円 / 本体サイズ:109.1×79.5×25.1mm / 重量:約188g / 電源:単三乾電池×1本またはニッカド充電池 / 電池持続時間:約9時間（ニッカド充電池使用2時間充電時）

1997 HS-RS300

ラジオ付きハイCPリバース機

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / 重低音

2バンド・アナログチューナー付き再生専用リバース機。テープセレクターや音楽ジャンルポジション（ジャズ/ロック/ポップス/クラシック）を採用している。



新品時価格:オープン/ 本体サイズ:86.7×117×33.3mm / 重量:約200g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約22時間（アルカリ乾電池使用時）

1997 HS-RX470

20時間連続再生のラジオ付モデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 5曲頭出し / プランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM / 重低音 / DOLBY B / リモコン

充電池とアルカリ電池の併用で20時間連続再生が可能。オートエリアステーション付きシンセチューナー内蔵再生専用リバース機。



新品時価格:オープン/ 本体サイズ:109.4×79.6×26.7mm / 重量:約172g / 電源:単四乾電池×2本またはガム型鉛充電池 / 電池持続時間:約1.5時間（ガム型鉛充電池使用10分充電時）

1998 HS-RX480

ラジオ付きオートリバース再生機

メタル再生 / 再生オートリバース / 5曲頭出し / プランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM / 重低音 / リモコン

43地域+JRの一発オートエリアも搭載した2バンドシンセチューナーを内蔵。前後5曲のミュージックセンサーも装備。



新品時価格:1万2800円 / 本体サイズ:109.4×79×27.1mm / 重量:約166g / 電源:単三乾電池×1本またはニッカド充電池 / 電池持続時間:約9時間（ニッカド充電池使用2時間充電時）

1998 HS-PS001

キュートな3色のシースルーボディ

ワンウェイの再生専用機、HS-PS100のシースルーボディ版ともいうべきベーシックモデル。色はトランスホワイト/トランスブルー/トランスピンクの3色。



新品時価格:オープン/ 本体サイズ:116.8×92.5×33.8mm / 重量:約157g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約16時間（アルカリ乾電池使用時）

1998 HS-PX380

丈夫で美しいアルミボディを採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / プランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / リモコン

充電池とアルカリ電池の併用で20時間連続再生が可能。オートエリアステーション付きシンセチューナー内蔵再生専用リバース機。プランクスキップも搭載。



新品時価格:9500円 / 本体サイズ:109.6×79.3×23.9mm / 重量:約156g / 電源:単三乾電池×1本またはニッカド充電池 / 電池持続時間:約9時間（ニッカド充電池使用2時間充電時）

1999 HS-PX390

リモコン付き再生専用機の中級機

メタル再生 / 再生オートリバース / 5曲頭出し / プランクスキップ / 充電池対応 / リモコン

ヘッドフォン脱着式リモコンを採用。付属充電池とアルカリ乾電池の併用で40時間連続再生。その他5曲ミュージックセンサーやプランクスキップも搭載。



新品時価格:8800円 / 本体サイズ:80.1×110.2×24.1mm / 重量:約164g / 電源:単三乾電池×1本またはニッカド充電池 / 電池持続時間:約9時間（ニッカド充電池使用2時間充電時）

1999 HS-PX590

おしゃれなペンダントリモコンを採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / プランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / リモコン

首から下げたり胸につけることができるペンダントリモコンを採用。付属充電池とアルカリ乾電池の併用で50時間連続再生が可能に。多彩な再生機能も装備した。



新品時価格:1万1500円 / 本体サイズ:80×112.9×18.9mm / 重量:約158g / 電源:単三乾電池×1本またはニッカド充電池 / 電池持続時間:約12時間（ニッカド充電池使用2時間充電時）

1998 HS-JS380

ステレオスピーカー内蔵

メタル再生 / 録再オートリバース / FM/AM / 録音 / 重低音

2バンドチューナー付き録再リバース機でステレオスピーカーも内蔵している、ミニラジカセ的コンセプト。モノラルマイクを内蔵。ステレオマイクも付属している。



新品時価格:1万1800円/ 本体サイズ:115.4×90.7×38.5mm / 重量:約241g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約5時間（アルカリ乾電池使用時）

1999 HS-PS007

リモコン付きベーシックモデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 重低音

化粧瓶をイメージしたというフロスティブルーのボディと、カラーコーディネートされたヘッドフォンが付属。オートリバース、スーパーバス、テープセレクター搭載。



新品時価格:5800円/ 本体サイズ:92.5×121.6×34.2mm / 重量:約216g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約30時間（アルカリ乾電池使用時）

1999 HS-PS120

ベーシックモデルPS100の後継機

もっともシンプルなワンウェイ再生専用機、HS-PS100の後継機。ただし出力は20+20mWから15+15mWに若干下っている。機能は最低限に抑えられている。



新品時価格:オープン/ 本体サイズ:116.5×90.6×32mm / 重量:約183g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約14時間（アルカリ乾電池使用時）

1999 HS-PX290

リモコン付きベーシックモデル

メタル再生 / 再生オートリバース / リモコン

乾電池専用モデルながらヘッドフォン脱着式リモコンを採用。オートリバース、テープセレクター搭載。アルカリ乾電池の使用で30時間の長時間再生が可能。



新品時価格:6500円/ 本体サイズ:112.9×81.2×32.8mm / 重量:約187g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約30時間（アルカリ乾電池使用時）

2000 HS-PS002

色のスケルトンボディを採用したヒットモデル

重低音

ポータブルCDやMDプレーヤーが登場、普及したこのころ、カセットプレーヤーのメインボリュームは低価格帯となっていた。ユーザーは若者や学生が多く、音質よりは手軽さが重視されていた。その流れに沿ったのがこのPS001に始まるシリーズだった。とくにPS002はワンウェイのベーシックだが販売価格が安かったためかヒットした。



品時価格:オープン/ 本体サイズ:116.4×86.5×32.3mm / 重量:約183g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約18時間（アルカリ乾電池使用時）

1999 HS-RX490

ラジオ付きオートリバース再生機

メタル再生 / 再生オートリバース / 5曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM / 重低音 / リモコン

43地域+JRの一発オートエリアステーションを搭載した2バンドシンセチューナー。1曲リピート、ブランクスキップも装備。



新品時価格:1万1800円 / 本体サイズ:110.4×80.2×26.6mm / 重量:約178g / 電源:単三乾電池×1本またはニッカド充電池 / 電池持続時間:約9時間（ニッカド充電池使用2時間充電時）

2000 HS-JXM2000

マルチジョグを搭載した多機能機

メタル再生 / 録再オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM / 録音 / 重低音 / リモコン

43地域+JRの一発オートエリアステーションを搭載した2バンドシンセチューナーを内蔵した録再リバース機。前後9曲のミュージックセンサーも装備。



新品時価格:2万2000円 / 本体サイズ:79.7×108.5×20.7mm / 重量:約170g / 電源:単三乾電池×1本またはニッカド充電池 / 電池持続時間:約10時間（ニッカド充電池使用2時間充電時）

1999 HS-JS790

ラジオ付き録再オートリバース機

メタル再生 / 録再オートリバース / FM/AM / 録音 / リモコン

20局オートプリセットの2バンドシンセチューナー搭載の録再リバース機。ヘッドフォン脱着式リモコンやワンポイントステレオマイクも装備している。



新品時価格:1万4500円/ 本体サイズ:112.9×81.2×33.8mm / 重量:約187g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約25時間（アルカリ乾電池使用時）

1999 HS-RS220

ラジオ付きベーシックRS210の後継

FM/AM

HS-RS210の後継モデル。ラジオ付きワンウェイで、オートリバースやテープセレクターは非搭載。メカはスペックからPS120と共通と思われる。



新品時価格:オープン/ 本体サイズ:116.5×90.6×34.2mm / 重量:約206g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約14時間（アルカリ乾電池使用時）

2001 HS-PX300

スタイリッシュなハイCP機

メタル再生 / 再生オートリバース / 5曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / リモコン

充電池とアルカリ電池の併用で55時間連続再生が可能。ヘッドフォン脱着式のフルリモコン付属。ミュージックセンサーは前後5曲。ブランクスキップも。



新品時価格:オープン / 本体サイズ80×112.9×18.9mm / 重量:約158g / 電源:単三乾電池×1本またはニッカド充電池 / 電池持続時間:約13時間（ニッカド充電池使用2時間充電時）

2001 HS-PX717

スタイリッシュなデザインに機能満載

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / リモコン

充電池とアルカリ電池の併用で55時間連続再生が可能となった再生専用機。ヘッドフォン脱着式の光る液晶リモコン付属。ミュージックセンサーは前後9曲。



新品時価格:9800円 / 本体サイズ80×112.9×18.9mm / 重量:約158g / 電源:単三乾電池×1本またはニッカド充電池 / 電池持続時間:約13時間（ニッカド充電池使用2時間充電時）

2001 HS-PX737

最薄部17.5mmの超薄型ボディ

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / 録音 / 重低音 / リモコン

再生専用モデル。充電池はアイワ製と互換性のあるソニー製のニッカド充電池が付属された。充電スタンドに置くだけで充電できるなど便利な機能が満載。



新品時価格:9800円 / 本体サイズ:75.7×108.8×18.4mm / 重量:約154g / 電源:単三乾電池×1本またはニッカド充電池 / 電池持続時間:約20時間（ニッカド充電池使用2時間充電時）

2001 HS-RX500

ワールドシンセチューナー搭載モデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 5曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM / 重低音 / リモコン

充電池とアルカリ電池の併用で55時間連続再生。ヘッドフォン脱着式のフルリモコン付属のワールドシンセチューナー搭載機。オートエリアステーションも装備。



新品時価格:オープン / 本体サイズ79.3×110×22.9mm / 重量:約170g / 電源:単三乾電池×1本またはニッカド充電池 / 電池持続時間:約13時間（ニッカド充電池使用2時間充電時）

2001 HS-PS008

スケルトンボディのオートリバース機

メタル再生 / 再生オートリバース / 重低音 / リモコン

カラーバリエーションは4色のスケルトンボディとやや落ち着いたシルバーボディの5色。オートリバース、リモコン、テープセレクターなど基本機能も充実している。



新品時価格:オープン/ 本体サイズ:116.4×84×29.3mm / 重量:約160g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約24時間（アルカリ乾電池使用時）

2001 HS-PS130

ベーシックモデルの最終型

シンプルなワンウェイ再生専用機、HS-PS100の流れを組むベーシックモデル。スペックはほぼHS-PS120に準じる。機能を削ぎ落とした潔さ。



新品時価格:オープン/ 本体サイズ:116.5×88×33.5mm / 重量:約175g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約14時間（アルカリ乾電池使用時）

2003 HS-PS003

ソニー製となったカセットボーイ

アイワがソニーに吸収された後に登場した『カセットボーイ』の末裔。ホワイト、ピンク、ブルー、グリーン、オレンジの5色がラインナップされている。

新品時価格:オープン/ 本体サイズ:116.5×89.5×33.5mm / 重量:約148g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約18時間（アルカリ乾電池使用時）



2001 HS-RS230

ラジオ付きベーシックモデル

FM/AM

シンプルなワンウェイ再生専用機HS-PS130にアナログチューナーを搭載したモデル。RS220の後継モデルとなり、チューナー付きベーシックの最終進化系。



新品時価格:オープン/ 本体サイズ:116.5×88×33.5mm / 重量:約175g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約14時間（アルカリ乾電池使用時）

2001 HS-JS450

ミニラジカセとして使える録再機

メタル再生　録再オートリバース　録音　重低音

総合出力900mWのステレオスピーカーを内蔵したミニラジカセモデル。シンセチューナーと録再リバースを搭載している。また長時間録音の2倍録音モードも備える。



新品時価格:1万1500円/ 本体サイズ:115.4×90.5×37.2mm / 重量:約271g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約22時間（アルカリ乾電池使用時）

2001 HS-RS320

シンセチューナー付きベーシック

FM/AM TV　重低音

6個のプリセットボタンを備えたTV/FM/AM3バンドシンセチューナーを搭載。ビニール製の携帯ポーチ型パッケージで、そのままケースとして使用できる。

新品時価格:5000円/ 本体サイズ:111.3×83×29mm / 重量:約167g / 電源:単三乾電池×2本 / 電池持続時間:約24時間（アルカリ乾電池使用時）





[日本で発売されたカセットボーイ]

発売年	型式	掲載ページ
1980	TP-S30	154
1981	HS-P1	155
	HS-F1	155
	CS-J1	155
1982	HS-P2	155
	HS-P2X	155
	HS-F2	155
	HS-J2	155
1983	HS-P3	155
	HS-P3X	155
	HS-P5	156
	HS-P6	156
	HS-J11	156
1984	HS-P7	156
	HS-F7	156
	HS-U7	156
	HS-R7	156
	HS-J7	156
	HS-P55	156
1985	HS-U7V	157
	HS-P8	157
	HS-G8	157
	HS-R8	157
	HS-J8	157
	HS-P55A	157
	HS-P77	157
	HS-R60	157
1986	HS-P9	157
	HS-G9	157
	HS-R9	157
	HS-UV9	158
	HS-J9	158
	HS-G50	158
	HS-J80	158
1987	HS-P10	158
	HS-PX10	158
	HS-R10	158
	HS-J10	158
	HS-G35	158
1988	HS-PL10	158
	HS-P20	158
	HS-PX20	158
	HS-PC20	159
	HS-PL30	159
	HS-G34	159
	HS-G39	159
	HS-R15	159
	HS-R20	159
	HS-RL30	159
	HS-JX10	159
	HS-J15	159
	HS-J20	159
	HS-J85	159
1989	HS-P30	159
	HS-PX30	160
	HS-PL35	160
	HS-PL50	160
	HS-G30	160
	HS-F50	160
	HS-RX30	160
	HS-RL50	160
	HS-JX30	160
	HS-JL30	160
	HS-WR35	160
1990	HS-P50	160
	HS-PL55	160
	HS-RX50	161
	HS-JX50	161
	HS-EX50	161
	HS-JL50	161
1991	HS-PX1000	161
	HS-PX50	161
	HS-PX70	161
	HS-PL70	161
	HS-P75	162
	HS-PL77	162
	HS-P25	162
	HS-P22	162
	HS-P15	162
	HS-RX70	162
	HS-RL70	162
	HS-RL75	162
	HS-T75	162
	HS-T60	162
	HS-T50	162
	HS-JX70	162
	HS-JL70	163
	HS-J50	163
	HS-J55	163
	HS-J75	163
	HS-J470	163
	HS-J370	163
	HS-WR70	163
	HS-EX3000	—
1992	HS-PX910	163
	HS-PX820	163
	HS-PX720	163
	HS-PX610	163
	HS-RD1	163
	HS-RX727	164
	HS-RX626	164
	HS-JX929	164
	HS-JX828	164
	HS-WR25	164
	HS-RD10	164
1993	HS-PX930	164
	HS-PX630	164
	HS-PS200	164
	HS-PS150	164
	HS-RX636	164
	HS-RS535	164
	HS-JS350	165
1994	HS-PX830	165
	HS-PX730	165
	HS-PX530	165
	HS-PS160	165
	HS-RX737	165
	HS-RX656	165
	HS-RX616	165
	HS-RS250	165
	HS-JX838	165
	HS-JS550	165
	HS-JS360	165
1995	HS-PX750	166
	HS-PX550	166
	HS-PX540	166
	HS-PS180	166
	HS-RX850	166
	HS-RX650	166
	HS-RS460	166
	HS-RS350	166
	HS-RS280	166
	HS-RS260	166
	HS-JX950	166
	HS-JS560	166
1996	HS-PX570	167
	HS-PX370	167
	HS-PS100	167
	HS-RX660	167
	HS-RS360	167
	HS-RS210	167
	HS-JS570	167
1997	HS-PX770	167
	HS-PX580	167
	HS-PS190	167
	HS-F900	167
	HS-RX680	167
	HS-RX470	168
	HS-RS300	168
	HS-JX970	168
1998	HS-PX380	168
	HS-PS001	168
	HS-RX480	168
	HS-JS380	168
1999	HS-PX590	168
	HS-PX390	168
	HS-PX290	168
	HS-PS120	168
	HS-PS007	168
	HS-RX490	169
	HS-RS220	169
	HS-JS790	169
2000	HS-PS002	169
	HS-JXM2000	169
2001	HS-PX737	169
	HS-PX717	169
	HS-PX300	169
	HS-PS130	169
	HS-PS008	169
	HS-RX500	169
	HS-RS320	170
	HS-RS230	170
	HS-JS450	170
2003	HS-P003	170

1990 AIWA HS-EX50



カセットボーイ誕生10周年記念モデル、HS-EX50。1モデル数万台という生産台数が普通だった当時のヘッドフォンステレオにあって、限定5000台の希少さがどれほどのものか想像に難くない。キャリングケース、マイク、リモコンなどフルセットが豪華な化粧箱に収められ販売されていた。経年変化で金メッキが荒れているが、完品である。

GO way JUMP

ナショナル　ヘッドフォンステレオ史

とくに北米でウォークマンと熾烈なシェア争いを繰り広げたナショナル（パナソニック）のヘッドフォンステレオ群。だがナショナルの戦略は独特で、一貫したペットネームを持たず、『One More』『Way』『GO』そして『Jump』とさまざまなペットネームが乱立した。とくに『Way』から『Jump』に至ってはコンセプトにも違いがなく、1989年に『Sシリーズ』が登場してからペットネームも消滅してしまった。そうしたことから、ウォークマンやカセットボーイに比べやや影の薄いナショナルのヘッドフォンステレオだが、末期まで新しいコンセプトと充実のラインナップでカセットファンを支えたことは記憶しておくべきだろう。

資料協力・ビデオ工房トパーズ（中村雅哉）



1981 RS-J3

**ヘッドフォンに
プラスアルファの楽しみ方**

再生専用のステレオカセットプレーヤーというコンセプトはライバルと同様だが、ペットネームの『One More』が示すところは、本体に備えられたラインアウトのピンプラグで手持ちのステレオに接続できること。ダビングの送り出しにも使えるというのが新しかった。本体にマイクも備えられるが、これは初代ウォークマンと同じくトーク機能用。外の音をマイクで拾い、ヘッドフォンから出力するためだ。

新品時価格::2万9800円 / 本体サイズ:158×98.5×38mm / 重量:580g / 電源:単三×4本 / 電池持続時間:5.5時間（アルカリ電池使用）

※モデル登場年はカタログ掲載をベースに記載しているため、実際の発売とは違う場合があります。
※この特集は『ステレオ時代 Vol.10』の同名の特集を増補・再編集したものです。

1982 RQ-J6

ステレオマイク内蔵の録再機

録音

2代目One Moreはステレオマイクを内蔵した録再機で生録に対応。One Moreらしくラインアウトを装備しており、手持ちのシステムに組み込める。

新品時価格:3万5000円 / 本体サイズ:98.5×158×38mm / 重量:約600g / 電源:単三×4本 / 電池持続時間:6時間（アルカリ電池使用）



1982 RQ-J9

初代Wayからメタル対応

メタル再生

ワンウェイの再生専用というベーシックモデルだが2万4900円という手頃な価格と3色展開で時代を先取りした。



新品時価格::2万4900円 / 本体サイズ:88×138×27.1mm / 重量:約370g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約8時間（アルカリ電池使用）

1982 RQ-SJ1

高級感のあるボディデザイン

メタル再生　リモコン

当時、世界最小最軽量を実現したワールドWayシリーズ。シルバーにブルーのアクセントは、前面スイッチとともに先進性を演出している。

新品時価格:2万9800円 / 本体サイズ:75×108×28mm / 重量:約262g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:13時間（アルカリ電池使用）



1982 RX-1960

チューナー内蔵で録再可能なミニラジカセ

メタル録再　FM/AM　録音

プチスピーカー付属（2本）でラジカセ的な使い方ができるポータブルオーディオ。メタルテープは録再対応。ステレオマイク内蔵で、本体で生録も可能。

新品時価格3万9800円 / 本体サイズ:−×−×−mm / 重量:−g / 電源:− / 電池持続時間:−



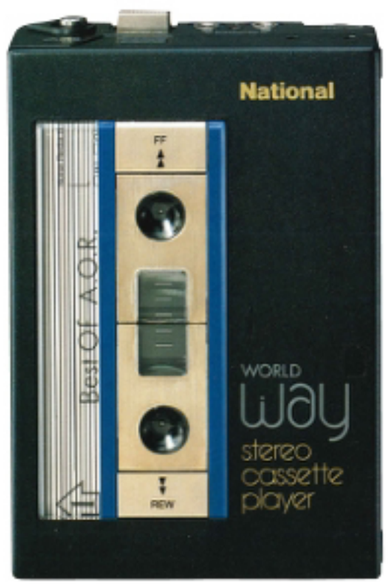
1982 RQ-KJ1

コンサバなデザインを採用

メタル再生　リモコン

ワールドWayシリーズ。前面スイッチを採用しつつ、コンサバなデザインを採用。SJ1、WJ1、KJ1はメカニズムは共通しつつキャラを分けた戦略だった。

新品時価格:2万9800円 / 本体サイズ:75×108×28mm / 重量:約262g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:13時間（アルカリ電池使用）



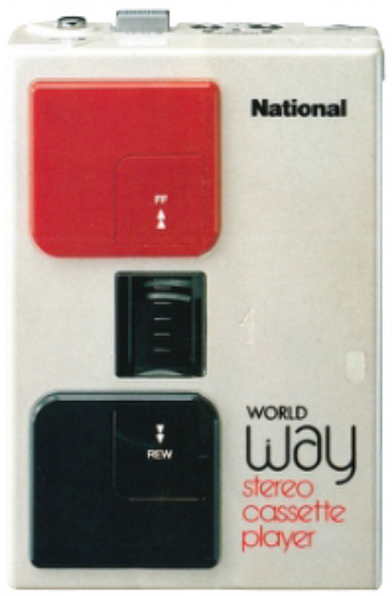
1982 RQ-WJ1

カラフルに前面スイッチを強調

メタル再生　リモコン

ワールドWayシリーズはワンウェイの再生専用機。リール軸に仕込まれたスイッチを前面から操作する。WJ1はカラフルなナショナルらしいデザイン。

新品時価格:2万9800円 / 本体サイズ:75×108×28mm / 重量:約262g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:13時間（アルカリ電池使用）



1983 RQ-J2

5色展開のベーシックモデル

メタル再生

ワールドWayシリーズのベーシックモデル。インサイドフォン採用でボディは5色展開。メタル再生にも対応。

新品時価格:2万1800円 / 本体サイズ:75×108×30.5mm / 重量:約280g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:5時間（マンガン電池使用）



1982 RQ-J36

Wayもステレオマイク内蔵

メタル再生　録音

RQ-J6とほぼ同じスペックながら、価格は1万円ダウンというハイCP機。ライン出力は装備されておらず、ステレオ録再のベーシック機という位置づけ。

新品時価格:2万5000円 / 本体サイズ:95.5×147.5×36mm / 重量:約516g / 電源:単三×4本 / 電池持続時間:4.5時間（アルカリ電池使用）



1984 RQ-J7

オートリバースのエントリー機

再生オートリバース



オートリバースを搭載した再生専用機で、余計な機能を付けず基本に徹した。ペットネームは付けられていない。

新品時価格:ー円 / 本体サイズ:83.9×112.5×35.9mm / 重量:約270g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約3.5時間（録音時）

1983 RQ-R1

ナショナル初のオートリバース

メタル再生　再生オートリバース　DOLBY B

全面がスケルトンのリッドに、ワールドWayの特徴でもある前面スイッチを配した、ナショナル初のオートリバース機。ドルビーNRも搭載していた。



新品時価格:3万4800円 / 本体サイズ:ー×ー×ーmm / 重量:ーg / 電源:ー / 電池持続時間:ー時間

1983 RQ-R2

ファッショナブルなオートリバース

メタル再生　再生オートリバース

テニスウェアを連想させる、白基調のボディに赤、緑、青のタイポグラフィがいかにも80年代らしい。オートリバースを搭載したベーシックモデル。



新品時価格:2万8800円 / 本体サイズ:79×108×29mm / 重量:約288g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約4時間（マンガン電池使用）

1984 RX-1920

スピーカー内蔵の小型ラジカセ

FM/AM　録音



4cmのモニタースピーカーを内蔵した、2バンドチューナー内蔵の小型ラジカセ。モノラル&ワンウェイ機。

新品時価格:2万600円 / 本体サイズ:82×121.3×42.2mm / 重量:約350g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約3時間（マンガン電池使用）

1984 RX-S30

その日の気分で着せ替え可能

メタル再生　再生オートリバース　FM/AM



リッド部分はカードが差し替えられるようになっている。ワンウェイ再生専用機。メタル対応。2バンドチューナーを内蔵。

新品時価格:2万2800円 / 本体サイズ:82×120×39mm / 重量:約320g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約5.5時間（アルカリ電池使用）

1984 RQ-V1

ワンポイントマイク付属

メタル再生　再生オートリバース　録音



録再機で再生オートリバースを搭載。マルチコネクタを装備し、別売りのチューナーパックをつなぐこともできる。ワンポイントステレオマイクを付属。

新品時価格:3万6800円 / 本体サイズ:81.5×118.5×34.1mm / 重量:約333g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約4時間（マンガン電池使用）

1984 RX-S40

DDでワウフラわずか0.05%

メタル再生　FM/AM　DOLBY B



モーター軸がそのままキャプスタンとなるブラシレスのダイレクトドライブモーターを採用。チューナーも内蔵。インサイドホンモデルはRX-S40A。



新品時価格:2万9900円 / 本体サイズ:82×111×24.8mm（カセット装着時） / 重量:約230g / 電源:単四乾電池×2本 / 電池持続時間:約7時間（アルカリ電池使用）

1984 RX-S45

防水ケースでビーチでも

メタル再生　録音　FM/AM

RX-S40に防水ケースが付属されたモデル。また付属のインサイドホンも防水使用（当時の『防雨型』相当）。



新品時価格:3万4800円 / 本体サイズ:82×111×24.8mm（カセット装着時） / 重量:約230g / 電源:単四乾電池×2本 / 電池持続時間:約7時間（アルカリ電池使用）

1983 RX-S70

アモルファスヘッドの高級機

メタル録再　再生オートリバース　FM/AM　録音　リモコン

再生時オートリバース、録再メタル対応の高級機。バイノーラル録音ができるマイク内蔵ヘッドフォンを付属。FM/AMチューナーも内蔵。



新品時価格:4万2800円 / 本体サイズ:83.9×113×34.9mm / 重量:約382g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約7.6時間（録音時、アルカリ電池使用）

1985 RQ-JA5

パステルトーンもラインナップ

メタル再生　再生オートリバース　DOLBY B

オートリバースの再生専用機。カセット型のインサイドホン収納ケースが付属していて、本体に格納して持ち歩くことができる。

新品時価格:2万5800円 / 本体サイズ:76.2×109×22.7mm / 重量:約209g / 電源:単四乾電池×2本 / 電池持続時間:約6.5時間（アルカリ電池使用）



1984 RX-S35

オートリバース&チューナー内蔵

メタル再生　再生オートリバース　DOLBY B

オートリバースの再生専用機。チューナー内蔵でドルビーNR、メタルテープ対応と、当時の基本スペックを備える。

新品時価格:2万4800円 / 本体サイズ:84.5×114.5×34.5mm / 重量:約300g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約3.5時間



1985 RX-S41

前面操作の録再モデル

メタル再生　FM/AM　録音　DOLBY B

ダイレクトドライブモーターを採用した録再機。ステレオワンポイントマイクで高音質録音が可能となっている。

新品時価格:3万2800円 / 本体サイズ:82.5×114×27.3mm / 重量:約275g / 電源:単四乾電池×2本 / 電池持続時間:約6時間（アルカリ電池使用）



1985 RX-SA10

小型ボディのオートリバース

メタル再生　再生オートリバース　FM/AM　DOLBY B

2バンドチューナー内蔵のリバース機だが、重量はわずか約220g。ドルビーNRもメタルにも対応。電源は単四使用。

新品時価格:3万2000円 / 本体サイズ:76.2×111×22.7mm / 重量:約209g / 電源:単四乾電池×2本 / 電池持続時間:約6.5時間（アルカリ電池使用）



1986 RQ-JA100

充電池対応の再生専用機

メタル再生　再生オートリバース　充電池対応　DOLBY B

ナショナル初の充電池対応モデル。4時間充電5.5時間再生が可能。ただし電池の使用は別売りアダプタが必要だった。

新品時価格:2万7800円 / 本体サイズ:69.8×110×17.5mm / 重量:約260g / 電源:充電池パック（付属） / 電池持続時間:約5.5時間（付属充電池パック使用）



1985 RQ-J8

安価なオートリバース機

再生オートリバース

オートリバースの再生専用機。基本機能以外は備えていないが、1万4800円という価格設定が魅力だ。

新品時価格:1万4800円 / 本体サイズ:82.5×112×35.2mm / 重量:約275g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約7時間（アルカリ電池使用）



1986 RQ-JA65

新しいエントリーモデル

再生オートリバース

ノーマル再生専用機ながら、オートリバースを内蔵していて低価格。RQ-J8のリプレイスモデルだが『jump』のサブネーム付き。

新品時価格:1万2900円 / 本体サイズ:82×110×32.9mm / 重量:約260g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約7時間（アルカリ電池使用）



1986 RQ-JA2

グライコ内蔵リバース機

メタル再生　再生オートリバース　DOLBY B

5バンドグライコとカラフルなカラーバリエーションが特徴。しかもオートリバース、ドルビー、メタル対応で低価格が売り。

新品時価格:2万2000円 / 本体サイズ:78.5×112×27.1mm / 重量:約248g / 電源:単四乾電池×2本 / 電池持続時間:約6.5時間（アルカリ電池使用）



1986 RQ-JA6

3点プリセットイコライザ搭載

メタル再生 / 再生オートリバース / 重低音 / DOLBY B

『自然な音』『低音を強調』『高音を強調』の3点プリセットイコライザで好みの音が楽しめた。再生専用リバース機。



新品時価格:2万6000円 / 本体サイズ:76.2×109×25.2mm / 重量:約222g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約6.5時間（アルカリ電池使用）

1986 RQ-JA3

第一世代jumpの基本形

メタル再生 / 再生オートリバース

jumpといえばこのモデル。基本機能のみの再生専用機だが、単四使用モデルでスリム。カラーも5色と豊富に揃う。



新品時価格:2万円 / 本体サイズ:76.9×111.5×27.5mm / 重量:約227g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約6.5時間（アルカリ電池使用）

1986 RQ-SA15

グライコ&チューナー内蔵

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM TV / DOLBY B

RQ-JA2の3バンドチューナー内蔵モデル。オートリバース、ドルビー、メタル再生に対応。3色のカラーバリエーション。

新品時価格:3万3000円 / 本体サイズ:78.5×112×27.1mm / 重量:約268g / 電源:単四乾電池×2本 / 電池持続時間:約6.5時間（アルカリ電池使用）



1986 RQ-SA200

3バンドチューナーの充電モデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM TV / DOLBY B

音声多重TV音声チューナー（アナログ放送）を内蔵した、充電池対応モデル。再生専用、オートリバース機で機能は充実。



新品時価格:3万8000円 / 本体サイズ:70.5×110.6×23mm / 重量:約295g / 電源:充電池パック（付属） / 電池持続時間:約5.5時間（付属充電池パック使用）

1986 RQ-SR20

チューナー内蔵録再機

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM TV / 録音 / DOLBY B

3バンドチューナーを内蔵した録再モデルだが、オートリバース、ドルビーNR、メタル対応はいずれも再生時のみ有効。



新品時価格:3万6000円 / 本体サイズ:78.3×113×28.8mm / 重量:約260g / 電源:単四乾電池×2本 / 電池持続時間:約6時間（アルカリ電池使用）

1986 RQ-SA14

チューナー内蔵再生専用機

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM TV / DOLBY B

第二世代jumpはチューナー、グライコの有り無しで構成。本機はチューナーのみ内蔵モデル。ドルビー、メタル再生も対応。



新品時価格:3万1000円 / 本体サイズ:78.5×112×27.1mm / 重量:約260g / 電源:単四乾電池×2本 / 電池持続時間:約6.5時間（アルカリ電池使用）

1986 RQ-JR4

メモ録も得意な録再機

メタル再生 / 再生オートリバース / 録音 / DOLBY B

ステレオマイクを内蔵し、『ハッキリ遠近録』が可能なメモ録対応モデル。録再オートリバース。再生時はドルビーにも対応。



新品時価格:3万2800円 / 本体サイズ:78.7×116×29.9mm / 重量:約280g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約9時間（アルカリ電池使用）

1986 RX-HD10

ウォークマン対抗のWデッキ

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM TV / 録音 / DOLBY B

ソニーWM-W800に対抗したダブルデッキモデル。W800が両デッキワンウェイに対し、こちらはオートリバースデッキも搭載。



新品時価格:4万6000円 / 本体サイズ:82.1×128.7×39.5mm / 重量:約260g / 電源:単四乾電池×2本 / 電池持続時間:約6時間（マンガン電池使用）

ナショナル ヘッドフォンステレオ史

1986 RX-SA75

ナショナルらしい色使い

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM TV / DOLBY B

大柄なボディながらリーズナブルな価格と、まるで80年代の女の子向き家電のような色使いが特徴。3バンドチューナー内蔵。



新品時価格:2万1800円 / 本体サイズ:82×119.5×34.5mm / 重量:約280g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約7時間（アルカリ電池使用）

1985 RX-SA11

チューナー内蔵の第一世代機

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / DOLBY B

楕円のウインドウが特徴の初代jumpの2バンドチューナー内蔵モデル。オートリバース、ドルビーNR、メタル再生対応。





新品時価格:3万円 / 本体サイズ:76.2×111×25.2mm / 重量:約237g / 電源:単四乾電池×2本 / 電池持続時間:約6.5時間（アルカリ電池使用）

1987 RQ-JA170

XBS重低音再生を搭載

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B

美しくスリムなボディを持つ新世代機。充電池に対応し、2時間充電で3時間再生を可能とした。本体にはXBS重低音回路を組み込み、さらに2ウェイのDDインサイドホンを付属。



新品時価格:3万2800円 / 本体サイズ:-×-×-mm / 重量:約-g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3時間（付属充電池使用）

1986 RX-SR24

エアチェックもメモ録も

メタル再生 / 録再オートリバース / FM/AM TV / 録音 / DOLBY B

ステレオマイクと3バンドチューナーを内蔵し、録再リバースも搭載。長時間エアチェック&メモ録も得意な万能機。





新品時価格:4万円 / 本体サイズ:78.7×116×32.2mm / 重量:約290g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約9時間（アルカリ電池使用）

1987 RQ-SA270

XBS搭載のチューナーモデル

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / FM/AM/TV / 重低音 / DOLBY B

フルロジック+リバース+3バンドチューナーのRQ-SA250に重低音再生XBSを搭載したモデル。インサイドホンはDDタイプ。



新品時価格:4万1800円 / 本体サイズ:73.1×114.4×26.6mm / 重量:約228g / 電源:単三×1本、充電池（付属） / 電池持続時間:約3時間（付属充電池使用）

1987 RQ-SA250

チューナー内蔵の充電モデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM/TV / DOLBY B

フルロジックコントロール+リバースでかつ3バンドチューナーを内蔵したモデル。充電池は2時間充電で3時間再生。



新品時価格:3万5000円 / 本体サイズ:73.1×114.4×25.4mm / 重量:約212g / 電源:単三×1本、充電池（付属） / 電池持続時間:約3時間（付属充電池使用）

1987 RQ-JA150

カセットケースサイズ+充電池

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / DOLBY B

ジャストカセットケースサイズでありながらフルロジックコントロール+リバース。充電池+充電器も付属していた。



新品時価格:2万6000円 / 本体サイズ:73.1×114.4×21.9mm / 重量:約204g / 電源:単三×1本、充電池（付属） / 電池持続時間:約3時間（付属充電池使用）

1988 RQ-P515

3モードXBSとドルビーC搭載

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / FM/AM/TV / 重低音 / DOLBY B



曲に合わせて選べる3モードの重低音回路XBSを内蔵。さらにドルビーCを搭載し、高音質バランロード・インサイドホンを付属するなど音質に特化したモデル。

新品時価格:2万3800円 / 本体サイズ:-×-×-mm / 重量:-g / 電源:単三×1本、充電池（付属） / 電池持続時間:-時間

1988 RQ-JA160

ワンフル・リモコンとXBS

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ワンフル・リモコンの再生専用機。重低音再生XBS（Extra Bass System）を搭載した。海外電圧に対応した充電器を付属。



新品時価格:2万7500円 / 本体サイズ:72.8×106.6×2.37mm / 重量:約200g / 電源:単三×1本、充電池（付属） / 電池持続時間:約4時間（付属充電池使用）

1988 RQ-JA155

ワンフル・リモコンを採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / DOLBY B / リモコン

ワンボタンでテープコントロールができるワンフル・リモコンを採用した再生専用機。2時間充電で3.5時間再生が可能だった。



新品時価格:2万1800円 / 本体サイズ:75.7×115.9×24.3mm / 重量:約192g / 電源:単三×1本、充電池（付属） / 電池持続時間:約3.5時間（付属充電池使用）

1988 RX-SR550

フルロジック録再リバース

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM/TV / 録音 / DOLBY B / リモコン

ワンポイントステレオマイクを付属。録再リバース対応で長時間録音が可能。3バンドチューナーも内蔵し、エアチェックもOK。



新品時価格:3万9800円 / 本体サイズ:73.1×120.9×26.5mm / 重量:約222g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:一時間

1988 RX-SA79

XBSと3バンドグライコ搭載

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM / DOLBY B / リモコン

フルロジックコントロールではないのでリモコンは非対応ながら、充実した高音質再生が可能。ドルビーNRも対応。



新品時価格:2万7500円 / 本体サイズ:85.6×116.2×30.6mm / 重量:約253g / 電源:単三×1本、充電池（付属） / 電池持続時間:約3.5時間（付属充電池使用）

1988 RQ-SA255

ワンフルリモコンを採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / DOLBY B / リモコン

ワンフル・リモコンを採用。3バンドチューナーも内蔵している。充電池は2時間急速充電でも4時間の再生が可能。



新品時価格:3万2800円 / 本体サイズ:75.7×115.9×26.9mm / 重量:約205g / 電源:単三×1本、充電池（付属） / 電池持続時間:約4時間（付属充電池使用）

1989 RQ-P580

ワイヤレスヘッドフォンステレオ

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B/C

コンパクトなレシーバーを使ったワイヤレスリスニングに対応。ドルビーB/C NR、3モードXBSにも対応。





新品時価格:3万200円 / 本体サイズ:75.9×106.0×25.6mm / 本体重量:約189g / 電源:単三×1本、充電池（本体、レシーバー） / 電池持続時間:約4時間（付属充電池使用）

1989 RQ-S3

流麗なフォルムの『Sタイプ』

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン



『Sタイプ』は15～20kHzの再生が可能、オートテープセレクタなど充実の機能を誇るが、本機はラウンドシルエットも特徴。



新品時価格:1万9000円 / 本体サイズ:74.4×107.3×20.6mm / 重量:約150g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3.5時間（付属充電池使用）

1989 RQ-S1

高音質『Sタイプ』が登場

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン



ファインギャップヘッドなど高音質設計が盛り込まれた『Sタイプ』シリーズが登場。本機はもっともコンパクトなモデル。



新品時価格:1万9000円 / 本体サイズ:71.9×107.2×19.4mm / 重量:約145g / 電源:単三×1本、充電池（付属） / 電池持続時間:約3.5時間（付属充電池使用）

1989 RQ-P300

カセットブックに対応

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音

音楽はもちろんカセットブックに対応するために音質切り替えや早聞き、リピート再生も可能。充電池・乾電池併用で13時間再生。



新品時価格:1万3700円 / 本体サイズ:79.6×107.5×27.0mm / 重量:約146g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3.8時間（付属充電池使用）

1989 RQ-S5

ドルビーC NRにも対応

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B/C / リモコン

高音質の『Sタイプ』のなかでもさらにハイファイ志向の高い本機は、ドルビーC NRの再生にも対応していた。



新品時価格:2万3500円 / 本体サイズ:74.4×107.3×20.6mm / 重量:約150g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3時間（付属充電池使用）

1989 RQ-S5V

デジタルチューナー内蔵

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B/C / リモコン

21局までメモリーできる3バンドデジタルチューナーを内蔵。通勤・通学時に乗り越しを防止するタイマー（アラーム）も。



新品時価格:2万9800円 / 本体サイズ:73.4×107.3×24.4mm / 重量:約184g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3時間（付属充電池使用）



1989 RQ-S7R

コンパクトな録再モデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ワンポイントステレオマイクを付属した生録、メモ録対応モデル。再生時は25%早聞き、10%遅聞きにも対応する。



新品時価格:2万7000円 / 本体サイズ:73.4×107.3×21.9mm / 重量:約167g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3時間（付属充電池使用）

1990 RQ-S4

ピクチャーディスプレイ採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

テープ専用機。動作状況や各種設定、電池状況などを大型液晶のピクチャーディスプレイに表示。時計やアラーム機能も。

新品時価格:2万1500円 / 本体サイズ:75.2×107.3×22.5mm / 重量:約196g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3.3時間（付属充電池使用）



1989 RQ-S7F

チューナー付き録再リバース

メタル再生 / 録再オートリバース / 充電池対応 / FM/AM TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

3バンドデジタルチューナーを内蔵した録再リバース機。ワンポイントステレオマイクも付属し、長時間生録にも対応。

新品時価格:3万4800円 / 本体サイズ:73.4×107.3×24.4mm / 重量:約184g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3時間（付属充電池使用）



1990 RQ-S65

ハイグレードな再生専用機

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B/C / リモコン

見えるリモコンの再生専用機RQ-S45のハイグレード版。ファインギャップ・アモルファスヘッドで21kHzまで再生する。

新品時価格:2万5500円 / 本体サイズ:74.5×107.6×21.9mm / 重量:約153g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3時間（付属充電池使用）



1990 RQ-S8

ハード&タフ設計の再生専用機

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

耐衝撃ABS樹脂の外殻の内側に大型の衝撃吸収エラストマーを貼り付けた2柔構造ボディ。中身は『Sタイプ』の高音質。

新品時価格:2万5500円 / 本体サイズ:80.4×112.7×31.5mm / 重量:約192g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3.5時間（付属充電池使用）



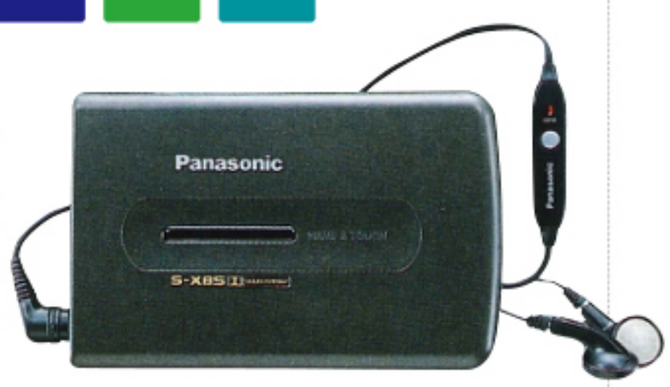
1991 RQ-S88

薄型ハード&タフ設計

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

耐衝撃ABSのシャシーにエラストマーを効果的に配置した薄型ボディ。バッテリーは単三か充電池を内蔵できる。

新品時価格:2万5500円 / 本体サイズ:80.0×123.2×26.7mm / 重量:約192g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3.2時間（付属充電池使用）



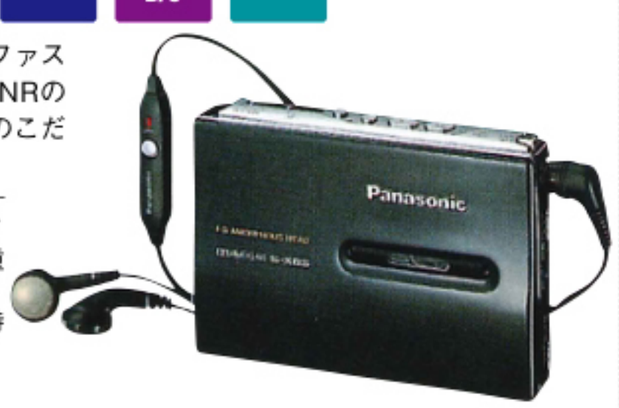
1990 RQ-S55

こだわりの高音質モデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B/C / リモコン

ファインギャップ・アモルファスヘッドに加え、ドルビーB/C NRの搭載、S-XBSなど音質面でのこだわりが多い再生専用機。

新品時価格:ー円 / 本体サイズ:74.4×107.2×18.3mm / 重量:約149g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約2.7時間（付属充電池使用）



1991 RQ-S45

見えるリモコンを採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

リモコンに液晶ディスプレイを内蔵。動作状況が手元で確認できる。FGアモルファスヘッドで高音質再生が可能なテープ専用機。

新品時価格:2万1500円 / 本体サイズ:74.5×107.6×21.9mm / 重量:約153g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3.2時間（付属充電池使用）



1989 RQ-J30

二世代目カセットブック対応

充電池対応 / 重低音 / DOLBY B

早聞き機能などでカセットブック対応したRQ-P300の後継機。早聞きでも人の声が聞き取りやすい音質で再生。

新品時価格:1万800円 / 本体サイズ:77.6×105.8×27.7mm / 重量:約154g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3.8時間（付属充電池使用）



1991 RQ-S35

ツインローターモーター採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

モーター音の静かなツインローターモーターを採用したテープ専用機。サラウンド技術を応用した臨場感あるライブポジションや新ICを使った新S-XBS、新・電車ポジション、騒音下でも聞きやすい街角ポジションなどを備える。



新品時価格:1万9000円 / 本体サイズ:75.4×107.2×21.5mm / 重量:約155g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3.7時間（付属充電池使用）

1990 RQ-J40F

低価格チューナー付録再リバース

メタル再生 / 録再オートリバース / 充電池対応 / FM/AM TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

3バンドチューナーを内蔵しエアチェックも可能な録再リバース機。ワンポイントステレオマイクも内蔵し生録も可能。



新品時価格:2万4500円 / 本体サイズ:79.4×111.7×29.5mm / 重量:約207g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約4時間（付属充電池使用）

1991 RQ-S55V

海外対応チューナー&充電器

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

7大都市&新幹線の97放送局を予め内蔵したニューエリアバンク対応のデジタルチューナーを内蔵。電車ポジション等も備える。



新品時価格:3万2000円 / 本体サイズ:74.4×107.2×24.3mm / 重量:約183g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約2.7時間（付属充電池使用）

1992 RQ-S60

音符が流れる音見えリモコン

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

音符が流れてテープの走行状態を知らせる音見えリモコンを採用。アルカリ電池と充電池の併用で15時間再生が可能。



新品時価格:一円 / 本体サイズ:76.1×107.4×20.4mm / 重量:約153g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3.9時間（付属充電池使用）

1991 RQ-S15

ビビッドな5色展開

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

テープ再生専用機。『Sタイプ』のエントリー的な位置づけ。とはいえ音漏れの少ない電車ポジション、重低音XBSなど当時求められていた機能に加え、オートテープセレクタなど一歩上の機能も。鮮やかなカラー展開も特徴。



新品時価格:1万6000円 / 本体サイズ:74.8×107.3×20.8mm / 重量:約147g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3時間（付属充電池使用）

1991 RQ-S35V

海外対応チューナー搭載

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

高音質設計のRQ-S35に海外でも聴けるワイドFMを含む3バンドデジタルチューナーを内蔵。ライブポジションなども装備。



新品時価格:2万7800円 / 本体サイズ:75.9×106.9×26.2mm / 重量:約184g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3.4時間（付属充電池使用）

1992 RQ-S70

テープ装着が楽なderuカセ

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

リッドを開けると自動的にカセットハーフが本体から飛び出すderuカセ1号機。曲の頭出し機能も搭載したテープ再生専用機。



新品時価格:2万1500円 / 本体サイズ:78.5×109.5×23.4mm / 重量:約181g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約4.5時間(付属充電池使用)

1992 RQ-S60V

局見えリモコンを付属

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

チューナー使用中は受信している周波数をリモコンのディスプレイに表示する局見えリモコンを採用。海外対応チューナー付き。



新品時価格:3万2000円 / 本体サイズ:76.1×107.4×25.3mm / 重量:約175g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3.4時間(付属充電池使用)

1991 RQ-S75F

チューナー搭載の静音モデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

静音性に優れたツインローターモーターを採用した、海外対応チューナー内蔵録再モデル。海外対応の充電器も付属。



新品時価格:3万7500円 / 本体サイズ:74.7×107.2×26.8mm / 重量:約202g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3時間(付属充電池使用)

1992 RQ-S40

制振機構のシェルロック

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

クルマのドアロックのようにしっかり閉まるシェルロックで、テープの振動を押さえ込む。テープ再生専用モデル。



新品時価格:1万9500円 / 本体サイズ:76.8×107.9×20.3mm / 重量:約160g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3.8時間(付属充電池使用)

1992 RQ-S85

ワイヤレスリモコンを採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

deruカセ構造を採用したテープ再生専用機。リモコンはワイヤレス操作ができるポケットリモコンを採用している。



新品時価格:2万3500円 / 本体サイズ:78.5×109.5×23.4mm / 重量:約185g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3.4時間(付属充電池使用)

1992 RQ-S20

2フェイスデザイン

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

ベーシックなテープ再生専用機。ボディカラーはブラックのほか、カラフルなブルーとピンクのマリンカラー。



新品時価格:一円 / 本体サイズ:76.0×108.5×23.4mm / 重量:約149g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3.7時間(付属充電池使用)

1992 RQ-S80

高音質ヘッドを採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B/C / リモコン

12ラミネーテッドコア・ヘッドを採用した高音質モデル。ドルビーCNRも搭載。ボディは二重塗装で美しく輝く。



新品時価格:2万5500円 / 本体サイズ:76.1×107.4×20.4mm / 重量:約153g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3.2時間(付属充電池使用)

1992 RQ-S40V

シンセチューナー付きで最薄

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン



シンセサイザーチューナー付きとしては発売当時世界最薄だった。ボディはシェルロック&テープスタビライザー採用。

新品時価格:2万9800円 / 本体サイズ:77.0×108.2×23.9mm / 重量:約177g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3.3時間(付属充電池使用)

1992 RQ-S90R

シェルロックの録再モデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン



シェルロック&テープスタビライザーでテープががっちり押さえ込む。ワンポイントステレオマイク付属の録再モデル。

新品時価格:2万9800円 / 本体サイズ:78.4×108.2×25.2mm / 重量:約180g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3.3時間(付属充電池使用)

1993 RQ-S25

シェルロックのベーシック

メタル再生 / 再生オートリバース / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン



テープ再生専用モデル。1mm厚のリッドと肉厚リンクアングルで耐久性もアップ。新デザインのすっきりリモコン採用。

新品時価格:1万6000円 / 本体サイズ:78.4×108.5×24.3mm / 重量:約164g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3時間40分(付属充電池使用)

1992 RQ-S90F

チューナー付き録再多機能機

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / 充電池対応 / FM/AM TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン



チューナー内蔵の録再モデルながら厚さ25.2mmの薄型ボディ。しかも前後1曲頭出し機能TPSも搭載している。

新品時価格:3万7500円 / 本体サイズ:78.4×108.2×25.2mm / 重量:約185g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約3.3時間(付属充電池使用)

1994 RQ-S75H

ニッケル水素充電池採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン



長時間再生が可能なニッケル水素充電池を採用したテープ再生専用機。ボディは金属の質感を活かしたクリスタルプレート。

新品時価格:2万5500円 / 本体サイズ:79.4×109.5×24.5mm / 重量:約182g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約7時間(付属充電池使用)

1994 RQ-S95

コバンザメ・リモコン搭載

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン



本体裏側に格納できるワイヤレスのコバンザメ・リモコンが新しい。S-XBSのポジションもリモコンで切り替え可能。

新品時価格:2万3500円 / 本体サイズ:79.4×109.5×26.2mm / 重量:約186g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約4時間(付属充電池使用)

1994 RQ-S50V

大型マルチ液晶ディスプレイ

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン



チューナー付きモデルとして当時最薄の22.4mm。本体には大型液晶ディスプレイを内蔵し、動作状況も見やすい。

新品時価格:一円 / 本体サイズ:78.4×108.8×22.4mm / 重量:約184g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約4時間(付属充電池使用)

1994 RQ-S75

おまかせホールドを採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン



指でボタンに触れることで解除されるおまかせホールドを採用。また新形状耳にぴったりフィットするインサイドホンを付属。

新品時価格:2万1500円 / 本体サイズ:79.4×109.5×24.5mm / 重量:約182g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約5時間(付属充電池使用)

1994 RQ-A175

チューナー内蔵録再モデル

再生オートリバース / FM/AM / 録音

チューナー内蔵の録再モデルのエントリーモデル。リバースは再生のみ。ワンポイントステレオマイクも付属。

新品時価格:1万5800円 / 本体サイズ:95.5×124.5×40.1mm / 重量:約301g / 電源:単三×2本、充電池 / 電池持続時間:約11時間（アルカリ乾電池使用）



1994 RQ-S70V

AMステレオ対応チューナー

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

薄型チューナー付きモデルRQ-S50VのAMステレオ対応モデル。前後3曲さるとびサーチやブランクスキップも搭載。

新品時価格:一円 / 本体サイズ:78.4×108.8×22.4mm / 重量:約185g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約4時間20分（付属充電池使用）



1994 RQ-S30

ぴったりホン付属のベーシック

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / 重低音 / DOLBY B / リモコン

サイズが9段階に調整できるぴったりホンを採用。大型ホールドキーで誤動作を防止。1曲頭出しTPSも備える。

新品時価格:1万5000円 / 本体サイズ:78.8×108.9×24.0mm / 重量:約165g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約4時間（付属充電池使用）



1994 RQ-SX3

TORUカセ&さるとびサーチ

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / ブランクスキップ / 重低音 / DOLBY B / リモコン

リッドが大きく開くためテープの出し入れが簡単なTORUカセ。また前後3曲の頭出しが可能なさるとびサーチを搭載。

新品時価格:1万9000円 / 本体サイズ:78.0×109.5×22.8mm / 重量:約184g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約5.5時間（付属充電池使用）



1994 RQ-SX5V

バイブレーションサウンド

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / ブランクスキップ / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

迫力の重低音が楽しめるバイブレーションサウンドを搭載。3バンドチューナー内蔵。ニッケル水素充電池を付属。

新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:78.5×109.2×24.7mm / 重量:約193g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約8時間（付属充電池使用）



1994 RQ-SX1V

オートエリアバンクを搭載

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / ブランクスキップ / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

地域名を選べばその場所で受信できる局がプリセットされるオートエリアバンクを搭載した3バンドチューナーを内蔵。

新品時価格:2万2800円 / 本体サイズ:78.0×109.2×23.7mm / 重量:約182g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約7時間（付属充電池使用）



1995 RQ-SX55

バイブレーションサウンド

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

充電池と乾電池の併用で最大45時間連続再生が可能。5分充電でも2時間再生。また曲頭出しは約32倍の高速サーチ。

新品時価格:1万9500円 / 本体サイズ:76.6×110.1×20.9mm / 重量:約181g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約16時間（付属充電池使用）



1995 RQ-V35

チューナー内蔵の廉価モデル

メタル再生 / FM/AM

ワンウェイのテープ再生と2バンドチューナーを内蔵した簡単操作のエントリーモデル。メタル再生にも対応している。

新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:91.5×120.9×36.2mm / 重量:約188g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約12時間（アルカリ乾電池使用）



1995 RQ-SX33

光るリモコンを付属

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン





ELバックライトで暗いところでも表示が確認できる光るリモコン。インサイドホンは抗菌素材を採用している。

新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:78.3×109.4×24.3mm / 重量:約188g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約6時間（付属充電池使用）

1995 RQ-SX11

光るリモコンを付属

メタル再生 / 再生オートリバース / 1曲頭出し / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン





テープの出し入れが簡単なderuカセ搭載のテープ再生専用機。インサイドホンは抗菌素材を採用している。前後1曲TPS。

新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:78.9×109.4×23.3mm / 重量:約184g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約4時間（付属充電池使用）

1995 RQ-SX22V

チューナー&光るリモコン

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン



ELバックライトの光るリモコン採用の3バンドチューナー内蔵モデル。3曲TPS、S-XBS、びったりホンなど多機能。

新品時価格:2万2800円 / 本体サイズ:79.0×109.2×23.9mm / 重量:約195g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約5時間（付属充電池使用）

1996 RQ-SX15

最大36時間再生が可能

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン





充電池とアルカリ電池の併用で約36時間再生が可能。3曲TPS、ブランクスキップなどテープ再生専用機らしく機能も充実。

新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:77.2×110.0×20.9mm / 重量:約160g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約9時間（付属充電池使用）

1994 RQ-DP7

dccプレーヤー1号機

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / 充電池対応 / DOLBY B / リモコン

アナログカセットプレーヤーとしても使えるdccプレーヤー。アナログ/dccは自動判別。アナログ時はドルビーBも対応。



新品時価格:5万9800円 / 本体サイズ:118.8×120.9×37.8mm / 重量:約490g / 電源:充電池（4.8V） / 電池持続時間:約2時間30分（付属充電池使用）

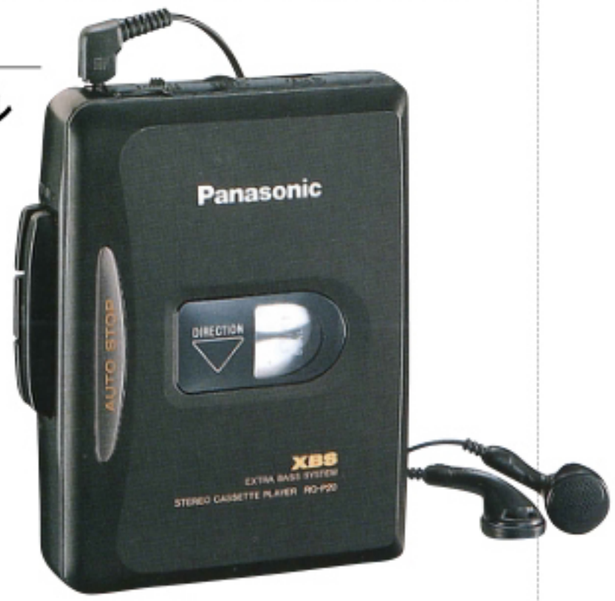
1995 RQ-P20

基本機能のみの廉価モデル

重低音

ワンウェイのテープ再生専用機。単三2本使用で、マンガン電池でも5時間30分再生。重低音XBSは搭載している。

新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:92.4×114.4×34.2mm / 重量:約301g / 電源:単三×2本、充電池 / 電池持続時間:約15時間（アルカリ乾電池使用）



1995 RQ-DR9

ポータブルdccレコーダー

メタル再生 / 再生オートリバース / DOLBY B / リモコン

光デジタルイン/アウト端子を装備したポータブルdccレコーダー。32～48kHzのサンプリングレートに対応。

新品時価格:4万9800円 / 本体サイズ:99.8×111.6×39.1mm / 重量:約420g / 電源:充電池（4.8V） / 電池持続時間:約3時間（付属充電池使用アナログ再生）



1996 RQ-SX60

最大65時間再生が可能に

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ
録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

充電池と乾電池の併用で65時間再生が可能なテープ再生専用機。光るリモコンは3色表示が可能になっている。



新品時価格:1万9500円 / 本体サイズ:76.8×109.7×21.3mm / 重量:約181g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約23時間(付属充電池使用)

1996 RQ-SX65V

リモコンに局名を表示

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ
充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

チューナー内蔵再生機。光るリモコンには周波数だけでなく放送局名も表示可能。充電池と乾電池の併用で52時間再生が可能。



新品時価格:2万7800円 / 本体サイズ:79.0×109.8×20.9mm / 重量:約186g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約17時間(付属充電池使用)

1996 RQ-SW20

タフネス&防水ボディで大ヒット

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM

大ヒットした『ショックウェーブ』1号機。2バンドチューナーを内蔵し、重低音を振動で伝えるVMSSを採用。青、黄は追加モデル。



新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:101.0×122.5×46.5mm / 重量:約298g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約10時間(アルカリ乾電池使用)

1996 RQ-SW44

ショックウェーブの新ライン

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / ブランクスキップ
充電池対応 / 重低音 / DOLBY B

鍛造加工ボディにバックルロック。重低音を振動にして肌に伝えるVMSSを搭載。さるとびサーチなど機能も充実。



新品時価格:1万7000円 / 本体サイズ:81.0×110.5×23.8mm / 重量:約191g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約10時間(付属充電池使用)

1996 RQ-SX40

バックルロックを採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ
充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

鍛造ボディにバックルロックというタフネス構造のテープ再生専用モデル。光るリモコンはヘッドホンが交換できるタイプ。



新品時価格:1万7000円 / 本体サイズ:80.3×110.5×23.8mm / 重量:約189g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約10時間(付属充電池使用)

1996 RQ-SX60V

クルピタ・ホールド採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応
FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン

円形のスライドシャッターが回転するホールド機構を備えたチューナー内蔵再生モデル。3色表示の新光るリモコンも装備。



新品時価格:2万5800円 / 本体サイズ:79.0×109.8×23.5mm / 重量:約209g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約24時間(付属充電池使用)

1996 RQ-SX70R

ゴク薄ボディの録再リバース

メタル再生 / 録再オートリバース / 3曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応
録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

録再リバース対応でわずか22.7mmのゴク薄サイズ。さらに録音も操作できる光るリモコンも装備している。



新品時価格:2万4800円 / 本体サイズ:81.0×110.2×22.7mm / 重量:約164g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約10時間(付属充電池使用)

1996 RQ-SW20 Limited Version

限定15000台のリミテッドV

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / 重低音



メカ部がうっすらと見えるスケルトンボディ。カラーリングは当時のゲレンデウェアの流行色でコーディネート。

新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:101.0×122.5×46.5mm / 重量:約298g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約10時間（アルカリ乾電池使用）

1996 RQ-SX25V

チューナー内蔵で最薄

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM TV / 重低音 / DOLBY B / リモコン



チューナー内蔵では当時最薄となる20.8mm。見えるリモコンはヘッドフォンジャックを備えたタイプを採用。

新品時価格:2万1500円 / 本体サイズ:79.0×109.8×20.8mm / 重量:約209g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約10時間（付属充電池使用）

1996 RQ-V40

チューナー&XBS内蔵のベーシック

メタル再生 / FM/AM / 重低音



ワンウェイのテープ再生と2バンドチューナーを内蔵。メタル再生にも対応し、重低音XBSも搭載したエントリー機。

新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:91.5×120.9×36.2mm / 重量:約188g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約12時間（アルカリ乾電池使用）

1996 RQ-SW5Z

SWのエントリーモデル

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / 重低音



タフネス&防水ボディは継承しつつ、チューナーはアナログタイプ、VMSSを省略し価格を抑えたエントリーSW。

新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:105.0×123.0×47.0mm / 重量:約292g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約10時間（アルカリ乾電池使用）

1996 RQ-A180

フロントマイクの録再機

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / 重低音



チューナー内蔵の録再機だが、フロントマイクに加えワンポイントステレオマイクも付属し、多彩な録音に対応。

新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:93.1×121.5×41.7mm / 重量:約234g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約11時間（アルカリ乾電池使用）

1996 RQ-SX70F

チューナー内蔵ゴク薄モデル

メタル再生 / 録再オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン



充電池とアルカリ電池の併用で36時間再生&20時間録音が可能。録音操作もできる光るリモコンは放送局も表示。

新品時価格:2万9800円 / 本体サイズ:81.0×110.2×22.6mm / 重量:約172g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約9時間（付属充電池使用）

1997 RQ-SW50

SW初のインサイドホン

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン



テープ再生専用のショックウェーブ。シリーズ初のインサイドホンモデル。鍛造メタルのタフボディだが非防水。

新品時価格:1万7000円 / 本体サイズ:113.7×85.5×25.4mm / 重量:約205g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約11時間（付属充電池使用）

1997 RQ-SX20

基本機能充実のベーシック

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン



テープ再生専用のベーシックモデルとはいえ、最大45時間再生、25倍サーチ、3曲TPSなど機能充実。もちろんリモコンも。

新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:77.2×110.0×21.3mm / 重量:約160g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約11時間（付属充電池使用）

1997 RQ-SX75

連続再生85時間&45倍サーチ

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

再生専用の中級機。前後9曲さるとびサーチは45倍速の高速版でアルカリ電池＋充電池で85時間の長時間再生も特徴。ホールドのON/OFFで色が変わるクルピカ・ホールドも搭載。



新品時価格:一円 / 本体サイズ:76.8×109.9×21.9mm / 重量:約171g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約31時間（付属充電池使用）

1997 RQ-SW55

SW50のVMSS対応版

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

鍛造メタルボディのSW50のVMSS対応オーバーヘッドホン付属モデル。ジョイント式の光るリモコン等は変わらず。



新品時価格:1万8000円 / 本体サイズ:113.7×85.5×25.4mm / 重量:約205g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約11時間（付属充電池使用）

1997 RQ-P35

円形ウインドウの基本機

メタル再生 / 重低音

ワンウェイのテープ再生専用機。この後の松下製ロープライスモデルはこのP35を基本として発展していく。XBS搭載。



新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:92.4×114.4×35.9mm / 重量:約168g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約14時間（アルカリ乾電池使用）

1997 RQ-SW70

進化した元祖SW

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / 重低音

ラバープロテクト、ツイストロック、ダブルリンクアングルなどタフボディがさらに進化したショックウェーブのトップモデル。



新品時価格:1万6500円 / 本体サイズ:102.5×123.5×46.0mm / 重量:約307g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約6時間（アルカリ乾電池使用）

1997 RQ-SX30V

チューナー内蔵再生専用機

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

タテ型フォルムを採用。実際に使うときにはタテ型の方がコントロールし易い。両面アルミボディ。オートエリアバンクも搭載。

新品時価格:2万1500円 / 本体サイズ:79.0×109.8×21.9mm / 重量:約169g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約11時間（付属充電池使用）

1997 RQ-V65

大型チューニングダイヤル採用

メタル再生 / FM/AM / 重低音

大型のアナログチューニングダイヤルを前面に配したチューナー内蔵のエントリーモデル。XBSも搭載している。



新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:92.8×116.4×38.4mm / 重量:約203g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約15時間（アルカリ乾電池使用）

1997 RQ-SW55V

SWメタルのチューナー付

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM / 重低音 / DOLBY B / リモコン

鍛造メタルボディのSWメタルシリーズ、SW55のシンセサイザーチューナー内蔵モデル。光るリモコンでも受信操作可。



新品時価格:2万3500円 / 本体サイズ:85.5×113.7×25.4mm / 重量:約213g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約11時間（付属充電池使用）

1998 RQ-SW77

SW最終進化型

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / プランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

アメリカからブームが逆上陸したSWの最終進化型。コミカルな表示の光るリモコン等エンタメ性が高い。テープ専用機。



新品時価格:1万7500円 / 本体サイズ:85.5×113.7×27.0mm / 重量:約212g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約15時間(付属充電池使用)

1998 RQ-SX85

トランクフォルムボディ採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / プランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

充電池と乾電池の併用で最長100時間の再生が可能なテープ再生専用機。頑丈なアルミ製のトランクフォルムボディ。



新品時価格:1万6500円 / 本体サイズ:80.6×110.5×22.7mm / 重量:約168g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約35時間(付属充電池使用)

1998 RQ-SX35

テープ再生専用の基本形

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

当時のラインナップの基本機。充電池と乾電池併用で最長65時間再生。バッテリー残量が分かるパワーチェッカー装備。



新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:78.3×110.3×21.6mm / 重量:約164g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約15時間(付属充電池使用)

1998 RQ-SW66V

タフ&テクノデザイン

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / 重低音

2バンドデジタルチューナー内蔵SWの進化型。本体の液晶にはVMSSに合わせ『脳みそ』のアニメーションが。

新品時価格:1万6500円 / 本体サイズ:102.1×117.7×41.6mm / 重量:約271g / 電源:単三×1本 / 電池持続時間:約22時間(アルカリ乾電池使用)



1998 RQ-SX55V

2バンド内蔵ベーシック機

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / プランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM / 重低音 / DOLBY B / リモコン

当時のラインナップの基本機。充電池と乾電池併用で最長65時間再生。バッテリー残量が分かるパワーチェッカー装備。



新品時価格:2万円 / 本体サイズ:81.8×110.3×23.1mm / 重量:約178g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約15時間(付属充電池使用)

1998 RQ-SX65F

2バンド内蔵の録再モデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / プランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

シンセチューナー内蔵した録再モデル。ただしオートリバースは再生時のみ。ワンポイントステレオマイクを付属している。



新品時価格:2万3500円 / 本体サイズ:81.8×110.3×23.1mm / 重量:約180g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約49時間(付属充電池使用)

1998 RQ-E30V

2バンド内蔵エントリー機

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / 重低音

シンセチューナー内蔵・再生専用のエントリーモデルだが、オートリバースは搭載。電源も1.5V駆動で使いやすい。



新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:85.5×113.7×27.0mm / 重量:約212g / 電源:単三×1本 / 電池持続時間:約22時間(アルカリ乾電池使用)

1999 RQ-SX30

基本優先の高品位ベーシック

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

4方向シーソースイッチや液晶なしのリモコンなどで基本機能・性能は落とさずコストダウン。使いやすい再生専用機。



新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:80.3×110.0×23.4mm / 重量:約163g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約12時間(付属充電池使用)

1999 RQ-SX50

新しいスタンダードモデル

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

斬新なデザインの操作パネルを備えた新しいスタンダードモデル。光る液晶付きリモコン。充電池・乾電池併用で最大72時間。



新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:80.3×110.0×22.2mm / 重量:約162g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約17時間(付属充電池使用)

1999 RQ-SX71

シンプルな流麗デザイン

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

再生専用機。シンプルで角のないデザインとやさしいボディカラーが新しい。新デザインの光るシースルーリモコンを採用。



新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:76.8×110.0×19.6mm / 重量:約155g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約18時間(付属充電池使用)

1999 RQ-SX91

スナップオープン採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

再生専用機。リッドが分割されていてロックを外すと上半分が開き、開いたところから手で全開にするスナップオープン。



新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:76.8×110.0×19.8mm / 重量:約163g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約40時間(付属充電池使用)

1999 RQ-SX80V

チューナー付きで最長72時間

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM / 重低音 / DOLBY B / リモコン

乾電池・充電池併用で最長72時間再生は、チューナー付きモデルとしては最長。2ウェイシェルロック、フラットリモコン。



新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:81.5×110.0×23.8mm / 重量:約151g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約17時間(付属充電池使用)

1999 RQ-SW09V

VMSSクリップヘッドホン

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / 重低音 / リモコン

メタルボディに2バンドデジタルチューナー内蔵SW。VMSSに対応したクリップタイプのヘッドホンを付属。



新品時価格:1万7500円 / 本体サイズ:81.9×116.8×29.7mm / 重量:約200g / 電源:単三×1本 / 電池持続時間:約28時間(アルカリ乾電池使用)

2000 RQ-P36

若者向けのエントリーモデル

重低音

RQ-P35の後継モデル的な型番だが、大阪松下らしくタイガースカラーのみのスペシャルモデルの意味合いが強い。メカニズム、スペックはむしろRQ-CW03に準じる。



新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:92.4×114.4×35.9mm / 重量:約168g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約16時間(アルカリ乾電池使用)

2000 RQ-SX72

スタンド式充電を採用

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

テープ再生専用機。本体から電池を取り出さず、スタンドに置くだけで充電が可能。スタンドは本体とカラーコーディネート。



新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:76.8×110.0×20.4mm / 重量:約155g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約40時間(付属充電池使用)

2000 RQ-CW03

若者向けのエントリーモデル

重低音

ワンウェイの再生専用機。愛称は『CHOT WAVE（チョットウェーブ）』松下は従来このクラスでもメタル対応だったが、非対応に。

新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:92.4×114.4×35.9mm / 重量:約168g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約16時間（アルカリ乾電池使用）



2001 RQ-SX97F

チューナー付き録再リバース

メタル再生 / 録再オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

3バンドチューナー内蔵で録再リバース。またスタンド式充電にも対応する多機能機。2倍録音で長時間録音も可能。



新品時価格:2万3500円 / 本体サイズ:77.2×110.0×23.0mm / 重量:約169g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約32時間（付属充電池使用）

2001 RQ-SX52

新しいデザインのベーシック

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

カラフルかつ上品なデザインのベーシックモデル。アルミボディはシェルロックも採用。テープ再生に必要な機能はすべて備える。



新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:76.8×110.0×20.7mm / 重量:約155g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約18時間（付属充電池使用）

2001 RQ-CW05

チョットウェーブ第2弾

再生オートリバース / 重低音

女性向きデザインを採用したチョットウェーブ。第二弾のCW05はオートリバース搭載。デザインは大人の女性でも違和感のない雑貨テイストを採用。



新品時価格:一円 / 本体サイズ:86.3×111.8×29.5mm / 重量:約181g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約24時間（アルカリ電池使用）

2001 RQ-SX73

最長110時間のロングプレイ

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / 充電池対応 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

クリップ付きの光るリモコンは赤色LEDで光る仕様。本体とリモコンのHOLD状態も液晶で確認できる。充電スタンドも付属。



新品時価格:一円 / 本体サイズ:75.0×108.8×18.8mm / 重量:約157g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約40時間（付属充電池使用）

2002 RQ-CW02

よりロングプレイが可能に

重低音

CW03の後継モデル。CW03が当時の廉価モデルのほぼ色違いだったのに比べ、丸みを帯びた専用ボディとなった。また電池持続時間は1.5倍に。



新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:87.8×115.7×31.5mm / 重量:約160g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約24時間（アルカリ乾電池使用）

2001 RQ-SX87V

光る液晶リモコンとチューナー搭載

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / FM/AM / 重低音 / DOLBY B / リモコン

クリップ付きの光るリモコン採用のチューナー内蔵機。テープ再生も多機能で前後9曲さるとびサーチとブランクコントロール（スキップ）を備える。



新品時価格:一円 / 本体サイズ:77.2×108.8×20.7mm / 重量:約168g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約33時間（付属充電池使用）

2003 RQ-SX46

ワンフィンガーリモコン採用

再生オートリバース / 3曲頭出し / 充電池対応 / 重低音 / リモコン

オートリバース再生専用機。ドルビー非搭載、メタル非対応ながら、プッシュボタン兼レバーだけで再生の基本操作は可能。前後3曲頭出しも備える。



新品時価格:一円 / 本体サイズ:77.1×108.8×20.4mm / 重量:約154g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約13.5時間（付属充電池使用）

2003 RQ-SX76

スピーカー内蔵充電スタンド付属

メタル再生 / 再生オートリバース / 9曲頭出し / ブランクスキップ / 充電池対応 / 重低音 / リモコン

カセットは語学学習用途が増えてきた時期で本機もA-B区間リピート機能を搭載。充電スタンドはスピーカーを内蔵しデスクトップで使うのにも適している。



新品時価格:一円 / 本体サイズ:75.0×108.0×19.0mm / 重量:約160g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約40時間（付属充電池使用）

2002 RQ-CR18V

よりロングプレイが可能に

メタル再生 / 再生オートリバース / FM/AM / 重低音

乾電池専用のチューナー搭載の再生用オートリバース機。デジタルシンセサイザーチューナーで選局も楽。各バンド10局ずつのプリセットも可能。



新品時価格:オープン価格 / 本体サイズ:82.9×112.0×29.2mm / 重量:約188g / 電源:単三×2本 / 電池持続時間:約25時間（アルカリ乾電池使用）

2005 RQ-SX59

カセット最後のヘッドフォンステレオ

メタル再生 / 再生オートリバース / 3曲頭出し / 充電池対応 / 重低音 / リモコン

充電池、オートリバース、リモコンといった従来からのヘッドフォンステレオの基本スペックを備えた最後のモデル。すでにポータブルプレーヤーの主役はMDからiPodなどに移行していた。



新品時価格:一円 / 本体サイズ:77.1×108.8×21.3mm / 重量:約156g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約18.5時間（付属充電池使用）

2003 RQ-SX93F

最後の多機能録再モデル

メタル再生 / 録再オートリバース / 9曲頭出し / 録音 / FM/AM TV / 録音 / 重低音 / DOLBY B / リモコン

3バンドチューナーを搭載した録再オートリバース機。光る液晶リモコンはチューナーの操作も可能。生録用ワンポイントマイク、充電ホルダーも付属していた。実質最後の多機能モデルとなった。



新品時価格:一円 / 本体サイズ:77.2×110.0×22.9mm / 重量:約176g / 電源:単三×1本、充電池 / 電池持続時間:約33時間（付属充電池使用）

[日本で発売された松下電器製ヘッドフォンステレオ]

発売年	型式	掲載ページ
1981	RS-J3	172
1982	RQ-J9	173
	RQ-J6	173
	RX-1960	173
	RQ-SJ1	173
	RQ-WJ1	173
	RQ-KJ1	173
	RQ-J36	173
1983	RQ-J2	173
	RQ-R2	174
	RQ-R1	174
	RX-S70	174
1984	RQ-J7	174
	RQ-V1	174
	RX-S30	174
	RX-S40	174
	RX-1920	174
	RX-S45	174
	RX-S35	175
1985	RQ-JA5	175
	RX-SA10	175
	RX-S40A	174
	RX-S41	175
	RQ-J8	175
1986	RQ-JA100	175
	RQ-JA2	175
	RQ-JA65	175
	RQ-JA3	176
	RQ-JA6	176
	RX-SA200	176
	RX-SA15	176
	RX-SA14	176
	RX-SR20	176
	RX-HD10	176
	RQ-JR4	176
	RX-SA11	177
	RX-SA75	177
	RX-SR24	177
1987	RQ-JA150	177
	RQ-JA170	177
	RX-SA250	177
	RX-SA270	177
1988	RQ-JA155	177
	RQ-JA160	177
	RQ-P505	–
	RQ-P515	177
	RQ-P525	–
	RX-SA255	178
	RX-SA79	178
	RQ-V505	–
	RX-SR550	178
1989	RQ-S1	178
	RQ-S3	178
	RQ-S5	178
	RQ-P300	178
	RQ-P580	178
	RQ-S7R	178
	RQ-S5V	178
	RQ-S7F	179
	RX-SA73	–
	RQ-A305	–
1990	RQ-S4	179
	RQ-S8	179
	RQ-S11	–
	RQ-S33	–
	RQ-S65	179
	RQ-S55	179
	RQ-S88	179
	RQ-J30	179
	RQ-S45	179
	RQ-J40F	180
	RQ-S55V	180
	RQ-S77F	–
1991	RQ-S35	180
	RQ-S15	180
	RQ-S60	180
	RQ-S35V	180
	RQ-S60V	181
	RQ-S75F	181
1992	RQ-S70	181
	RQ-S85	181
	RQ-S40	181
	RQ-S80	181
	RQ-S20	181
	RQ-S90R	182
	RQ-S40V	182
	RQ-S90F	182
1993	RQ-S25	182
	RQ-S95	182
	RQ-S75H	182
	RQ-S75	182
	RQ-S50	–
	RQ-P202	–
	RQ-S50V	182
	RQ-S70V	183
	RQ-A175	183
1994	RQ-SX3	183
	RQ-SX5	–
	RQ-SX7	–
	RQ-S30	183
	RQ-SX1V	183
	RQ-SX5V	183
	RQ-V35	183
	RQ-DP7	184
1995	RQ-SX55	183
	RQ-SX33	184
	RQ-SX11	184
	RQ-P20	184
	RQ-SX22V	184
	RQ-DR9	184
1996	RQ-SX15	184
	RQ-SX65V	185
	RQ-SW20	185
	RQ-SX60	185
	RQ-SX40	185
	RQ-SW44	185
	RQ-SX70R	185
	RQ-SX60V	185
	RQ-SX25V	186
	RQ-SW20 LV	186
	RQ-SW5Z	186
	RQ-V40	186
	RQ-SX70F	186
	RQ-A180	186
1997	RQ-SX20	186
	RQ-SW50	186
	RQ-SW55	187
	RQ-P35	187
	RQ-SX75	187
	RQ-SX30V	187
	RQ-SW70	187
	RQ-SW55V	187
	RQ-V65	187
1998	RQ-SX85	188
	RQ-SX35	188
	RQ-SW77	188
	RQ-SX55V	188
	RQ-SW66V	188
	RQ-E30V	188
	RQ-SX65F	188
1999	RQ-SX50	189
	RQ-SX30	189
	RQ-SX91	189
	RQ-SX71	189
	RQ-SW09V	189
	RQ-SX80V	189
2000	RQ-SX72	189
	RQ-SX41	–
	RQ-CW03	190
	RQ-P36	189
	RQ-A300	–
2001	RQ-SX73	190
	RQ-SX52	190
	RQ-SX97F	190
	RQ-CW05	190
	RQ-SX87V	190
2002	RQ-CW02	190
	RQ-SX53	–
	RQ-CR18V	191
2003	RQ-SX76	191
	RQ-SX46	191
	RQ-A320	–
2004	RQ-SX93F	191
2005	RQ-SX59	191

1998 Panasonic RQ-SW77

















1996年、すでにMDが流行し、カーステレオやポータブルプレイヤーのカセットからMDへの移行は始まっていた。そんなかアメリカでの流行を受け、日本に逆輸入されたのがパナソニックのショックウェーブだった。RQ-SW77はショックウェーブとしては後期のモデル。本来はVMSS対応ヘッドフォンが付属するが残念ながら欠品。

大人の休暇は自作スピーカーをたしなむべし

最近自作スピーカーがはやっているそうです。といっても昔のように必要に迫られてとか、長岡先生がお元気だったころのように「サブロク1枚で…」というのでもなく、自分のライフスタイルに合った大きさの手頃なスピーカーが主流のようです。そんなユーザーのために最近では小型スピーカーのエンクロージュアキットが通販で簡単に手に入ったりしますが、さらにお手軽なのが今回試したみたいな本の付録としてキットが付いているもの。付録といってもあきらかにキットがメインなのですが。

素材はMDF。いわゆる圧縮材ですが、最近のMDFは精度高いんですね。ほとんどソリもないし修正しなくてはいけないほどの隙間もできません。

途中重しを載せて接着剤が乾く時間を待ったりしましたが、それでも全部で2〜3時間。これにやはり別の本に付いていた付録のスピーカーを取り付けて完成！　ちょっと鳴らしてみます!?　おお！意外なスケール感！　正直低音は不足気味ですが、箱がけっこうカバーしてくれてます。すごく素直な音で「あれっ、スピーカーってコレでいいんじゃない」と思わせてしまう恐ろしい付録でした。年末の休みは塗装でもしてみようかな。



いきなり作るのではなくまずは熟読。構造を理解してから作るのが近道と知る。基本的にはそれほど難しくはないようだ。



いよいよ作り始めるが、木工用ボンドとできれば吸音材（同梱されているが少ない）は余分に用意しておいた方がよさそう。



これならできる特選スピーカーユニット
パイオニア編（音楽之友社）
3780円（税込み）

6cmと侮るなかれ。安定のフォステクスはもちろん良い音だが、このパイオニア・ユニットはなかなか切れが良い。低音は箱で補う。



スピーカー工作の基本&実例集
2017年版（音楽之友社）
4320円（税込み）

バックロードのキットはこれまでもあったが、QWT方式（共鳴管方式とも呼ばれる）のエンクロージュアキットが同梱されている。



接着剤を乾燥する時間を入れても、2〜3時間でここまで仕上がる。ただし素組なので見てくれはこのとおり。カスタマイズも楽しみだ。

編集後記

西尾維新風に書けば『120%趣味で書いた本です』となると思いますが、申し訳ございません、読む人の事はまったく考えずに作らせていただきました。ただただ、これまでステレオ時代を10冊作った時に集まったカセットとヘッドフォンステレオの資料を一冊にまとめてみたい、そんな思いだけで作った1冊です。まとめればステレオ時代1冊分くらいになるかな、と気軽に始めたものの、資料をまとめるうちにどんどんページが増えていき、ついに192ページまで増殖してしまいました。それでも全部収まらなかったのが痛恨の極みです。

さて最後のページになってしまいましたが、ここで言い訳をいくつか。まず『カセットテープ年鑑』がなぜ1971年から1993年なのか。1971年以前の資料が発見できなかったというのが主な理由です。制作途中でウェブサイト『懐かしのカセットテープ博物館』の館長、加藤様のご協力を得ることができ、もう少し時間があれば1971年以前のページを作ることもできたのですが、すでに『懐かしのカセットテープ博物館』の展示が充実しているのでご興味がある方はそちらをどうぞ。また1993年までなのも資料が不十分なため。なお価格表を掲載しましたが、こちらはまだ不完全な部分がたくさんあると思います。系統立った資料がないため、様々な雑誌記事や広告からデータを拾って作ったのですが、メーカーにも資料がないため誤記などの検証ができないのです。こちらについては今後、加藤様と資料を持ち寄って協力しつつ完成に近づけて行く予定です。ある程度めどが立ちましたら『懐かしのカセットテープ博物館』および、今後発刊される本があれば紹介していきたいと考えています。もし誤りを発見された方、検証可能な資料をお持ちの方はぜひご連絡ください。ご連絡はsg@neko.co.jpまでメールお願いいたします。

（澤村）

NEKO MOOK 2646

STEREO GENERATION ステレオ時代 特別編集

カセットテープ
コンプリートブック
CASSETTE TAPE COMPLETE BOOK



STAFF

発行人　中西一雄
編集人　澤村 信

スペシャル
アドバイザー　牧野茂雄

資料協力
（敬称略）　加藤邦裕
谷口修平
中村雅哉
松本鋼一
結城直樹
『懐かしのカセットテープ博物館』（http://compactcassettes.jp/）
『ビデオ工房トパーズ』（http://www.video-koubou-topaz.jp/）

撮影　近藤浩之
澤田和久
山田芳朗
宮越孝政
横澤靖宏

デザイン　瀧上徳和（mph）

広告部　藤原隆史
本田和央
村川卓司

営業部　菊田智博
阿左美太郎
戸羽康夫
飛鳥孝徳

製作管理部　鈴木大樹
岡田浩樹
北原由香

